(財)八尾市文化財調査研究会報告13

八尾市埋蔵文化財発掘調査概要

昭和61年度

I　萱振(かやふり)A遺跡(第1次調査)
II　老原(おいばら)遺跡(第2次調査)
III　東郷(とうごう)遺跡(第20次調査)

1987年

(財)八尾市文化財調査研究会

（財）八尾市文化財調査研究会報告１３　正　誤　表

頁	行	誤	正
序	4	とうり	とおり
１４１	１８	瓦等	瓦当
老原遺跡 例　言	１０	とうり	とおり

八尾市埋蔵文化財発掘調査概要

昭和61年度

I　萱振(かやふり)A遺跡(第1次調査)

II　老原(おいはら)遺跡(第2次調査)

III　東郷(とうごう)遺跡(第20次調査)

1987年

(財)八尾市文化財調査研究会

はしがき

本市は河内平野の南部に位置し、市域内に先人が残した貴重な文化遺産が数多く存在しており、これらの文化財を開発による破壊から守り、後世に永く伝承させることを我々の大きな責務と認識し、昭和39年に制定された市民憲章に「文化財を大切にしましょう」の条文を設けて保護保存の徹底をはかってきたところであります。

今回、昭和59年度に実施しました萱振A遺跡（第1次調査）と昭和60年度に実施しました老原遺跡（第2次調査）、東郷遺跡（第20次調査）の調査が完了し、その成果は本市の政治、文化の歴史を研究する上で重要な資料になるものと確信して報告書をまとめました。

本書が学問の発展と文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査に対して協力いただきました関係機関皆様に対して心から厚くお礼申し上げます。

昭和62年9月

財団法人　八尾市文化財調査研究会

理事長　福　島　　孝

序

1、本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が昭和59年度・60年度に実施した発掘調査成果の概要報告を集録したもので、内業整理および本書作成業務は各現地調査終了後に着手し、昭和62年3月31日をもって終了した。

1、本書に収録した概要報告は、下記の目次のとうりである。

1、本書の構成・編集は原田昌則・成海佳子が行い、文責等は各例言に明示した。

1、本書掲載の地図は、大阪府八尾市市役所発行の2,500分の1（昭和57年11月1日発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（昭和61年4月1日改訂）をもとに作成した。

1、本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海水面である。

1、本書で用いた方位は、磁北を示している。

1、遺構は下記の略号で表わした。

溝……SD　井戸……SE　土坑……SK　小穴……SP　方形周溝墓……SX

1、実測図の縮尺は、遺構は20分の1・40分の1・50分の1・100分の1を基調とし、遺物は大きいものは6分の1、他は4分の1に統一した。

1、遺物実測図は、断面の表示によって以下のように分類した。

弥生土器・土師器・瓦器・木製品……白　須恵器・陶器・磁器……黒　瓦・石製品……斜線

1、各調査に際しては、写真・実測図の他にカラースライドも多数作成している。市民の方々が広く利用されることを希望する。

目　　次

八尾市埋蔵文化財分布図

はしがき

序

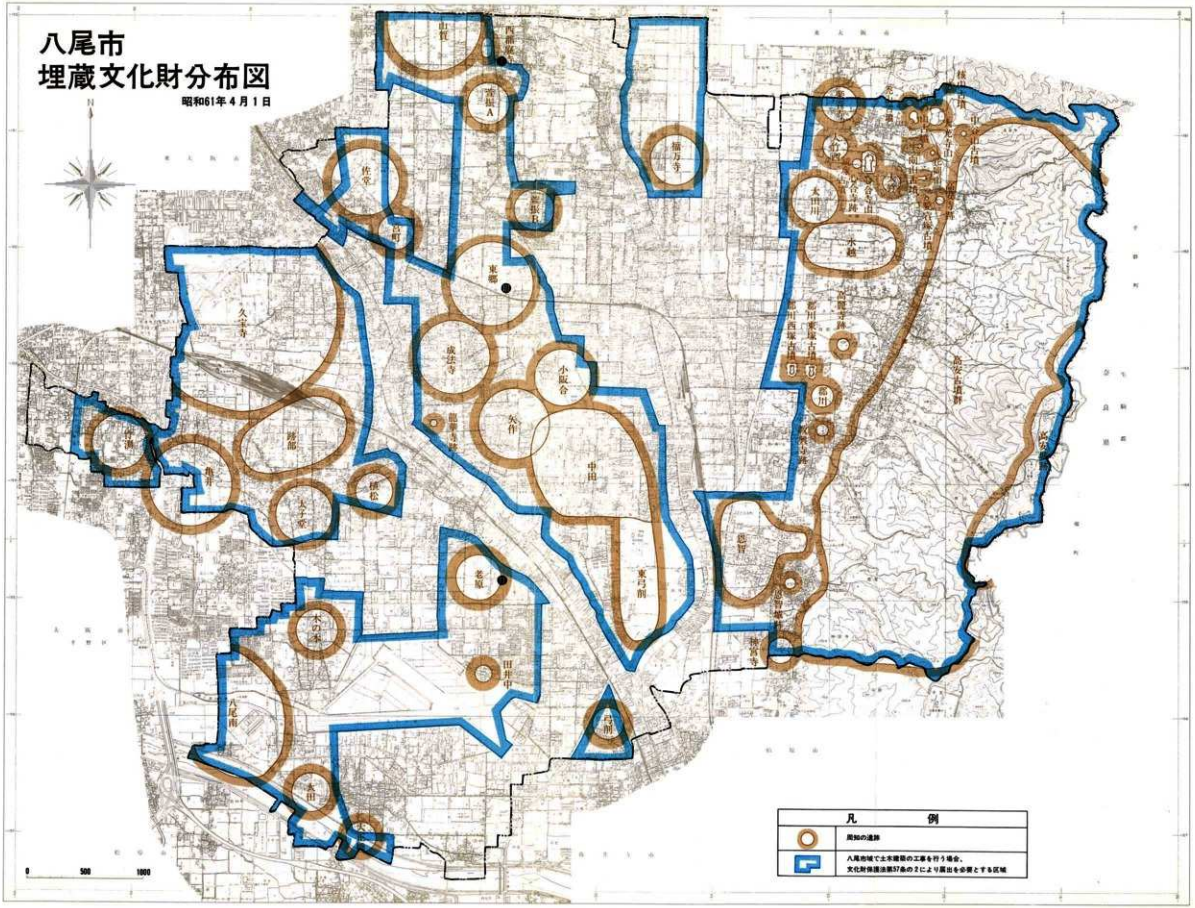
Ⅰ　萱振（かやふり）A遺跡（第1次調査）発掘調査概要報告……1

Ⅱ　老原（おいはら）遺跡（第2次調査）発掘調査概要報告……155

Ⅲ　東郷（とうごう）遺跡（第20次調査）発掘調査概要報告……247

八尾市
埋蔵文化財分布図

昭和61年4月1日



Ⅰ　萱振（かやふり）A遺跡（第1次調査）発掘調査概要報告

SE－6断面（西から）最下段の曲物に墨書を有する。

例　　言

1、本書は、八尾市幸町1丁目76番地他で実施した店舗付改良住宅建設に伴う発掘調査の概要報告である。

1、本書で報告する萱振(かやふり)A遺跡（第1次調査）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市改良事業室から委託を受けて実施したものである。

1、現地調査は昭和59年11月13日から昭和59年12月24日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は226㎡を測る。なお、調査においては相松隆・麻田優・上村義浩・中野慶太・萩原剛良・前田芳嗣・森山憲一が参加した。

1、内業整理は、現地調査終了後実施し昭和62年3月31日に完了した。

1、本書作成に関わる業務は、遺物実測―相松隆・麻田優・駒沢敦・中野慶太・西町達也、図面レイアウト―原田・駒沢敦、図面トレース―成海佳子、遺物写真撮影―原田・成海、浄書―亀村ゆかり・山内千恵子・中西隆子が行った。

1、本書の執筆は主に原田が担当したが、第4章出土遺物観察表と第5章2については駒沢敦が担当した。

1、全体の編集は原田が行った。

1、本書作成にあたっては、以下の諸氏の御指導、御協力を受けた。

墨書解読―綾村宏・鬼頭清明・橋本義則（奈良国立文化財研究所）、墨書の赤外線写真―松田隆嗣（〔財〕元興寺文化財研究所）、中世の遺物―橋本久和（高槻市教育委員会）・福田英人・広瀬雅信（大阪府教育委員会）、曽我恭子（〔財〕東大阪市文化財協会）、（敬称略順不同）

本 文 目 次

巻頭図版　井戸ＳＥ－６断面

第１章　調査に至る経過…… 1

第２章　地理・歴史的環境…… 2

第３章　調査概要…… 6
　第１節　調査の目的と方法…… 6
　第２節　基本層序…… 6
　第３節　調査の経過…… 7
　　１）検出遺構…… 9
　　２）出土遺物…… 56

第４章　出土遺物観察表…… 57

第５章　遺構・遺物の検討…… 119
　１．瓦器椀について…… 119
　２．西郡廃寺について…… 141

第６章　まとめ…… 153

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図…… 1
第２図　天神社…… 6
第３図　基本層序模式図…… 7
第４図　調査区設定図および地区割図…… 8
第５図　蓮華文軒丸瓦実測図…… 9
第６図　第１調査面検出遺構平面図…… 10
第７図　ＳＥ－１上層平面図…… 11
第８図　ＳＥ－１平断面図…… 12
第９図　ＳＥ　１出土遺物実測図…… 13
第10図　ＳＫ－５平断面図…… 14
第11図　ＳＫ－６平断面図…… 14
第12図　ＳＫ－１・ＳＫ－２・ＳＫ　３・ＳＫ－５・ＳＫ－６出土遺物実測図…… 15
第13図　ＳＰ－７・ＳＰ－８・ＳＰ－12出土遺物実測図…… 16
第14図　ＳＥ－２平断面図…… 16
第15図　第２調査面検出遺構平面図…… 17
第16図　ＳＥ－２出土遺物実測図…… 18
第17図　ＳＥ－３平断面図…… 19
第18図　ＳＥ－４平断面図…… 19
第19図　ＳＥ－４出土遺物実測図…… 19
第20図　ＳＫ－８平断面図…… 20
第21図　ＳＫ－７平断面図…… 21
第22図　ＳＫ　７出土遺物実測図…… 22
第23図　ＳＫ－８出土遺物実測図…… 23
第24図　ＳＤ－２出土遺物実測図…… 24
第25図　ＳＤ－３出土遺物実測図…… 25
第26図　ＳＤ－４出土遺物実測図…… 26
第27図　ＳＰ－26出土遺物実測図…… 26
第28図　第３調査面検出遺構平面図…… 28
第29図　ＳＥ－５平断面図…… 29

第30図　ＳＥ－５出土遺物実測図１……30
第31図　ＳＥ　５出土遺物実測図２……31
第32図　ＳＥ－７平断面図……32
第33図　ＳＥ－６平断面図……33
第34図　ＳＥ－６出土遺物実測図……34
第35図　ＳＥ－７第１層出土遺物実測図……35
第36図　ＳＥ　７第４層出土遺物実測図……36
第37図　ＳＥ－８出土遺物実測図……36
第38図　ＳＥ－９平断面図……37
第39図　ＳＥ－９出土遺物実測図……38
第40図　ＳＫ－10平断面図……39
第41図　ＳＫ－10出土遺物実測図１……40
第42図　ＳＫ－10出土遺物実測図２……41
第43図　ＳＫ－10出土遺物実測図３……42
第44図　ＳＫ－10出土遺物実測図４……43
第45図　ＳＤ－８・ＳＤ－９・ＳＤ－11・ＳＤ　12出土遺物実測図……44
第46図　ＳＰ－82平断面図……45
第47図　ＳＰ－82出土遺物実測図……46
第48図　第３調査面ＳＰ出土遺物実測図……47
第49図　第Ⅳ層出土遺物実測図１……48
第50図　第Ⅳ層出土遺物実測図２……49
第51図　第Ⅳ層出土遺物実測図３……50
第52図　第Ⅳ層出土遺物実測図４……51
第53図　第Ⅳ層出土遺物実測図５……52
第54図　第Ⅲ層出土遺物実測図１……53
第55図　第Ⅲ層出土遺物実測図２……54
第56図　第Ⅲ層出土遺物実測図３……55
第57図　第Ⅲ層出土遺物実測図４……56
第58図　八尾南遺跡（第１次調査）ＳＫ－10出土遺物実測図……125
第59図　矢作遺跡ＳＤ－14出土遺物実測図……127
第60図　福万寺遺跡ＳＥ－11出土遺物実測図……129
第61図　福万寺遺跡ＳＥ－13・ＳＫ　９出土遺物実測図……130

第62図　調査地および既往調査地位置図…… 142

表　目　次

第1表　瓦器椀編年対比表…… 123
第2表　八尾市域出土瓦器椀編年試案Ⅰ…… 133・134
第3表　八尾市域出土瓦器椀編年試案Ⅱ…… 135・136
第4表　天武十二年に連姓に改姓された伴造の一覧…… 145
第5表　瓦器椀から見た各遺溝の存続時期…… 154

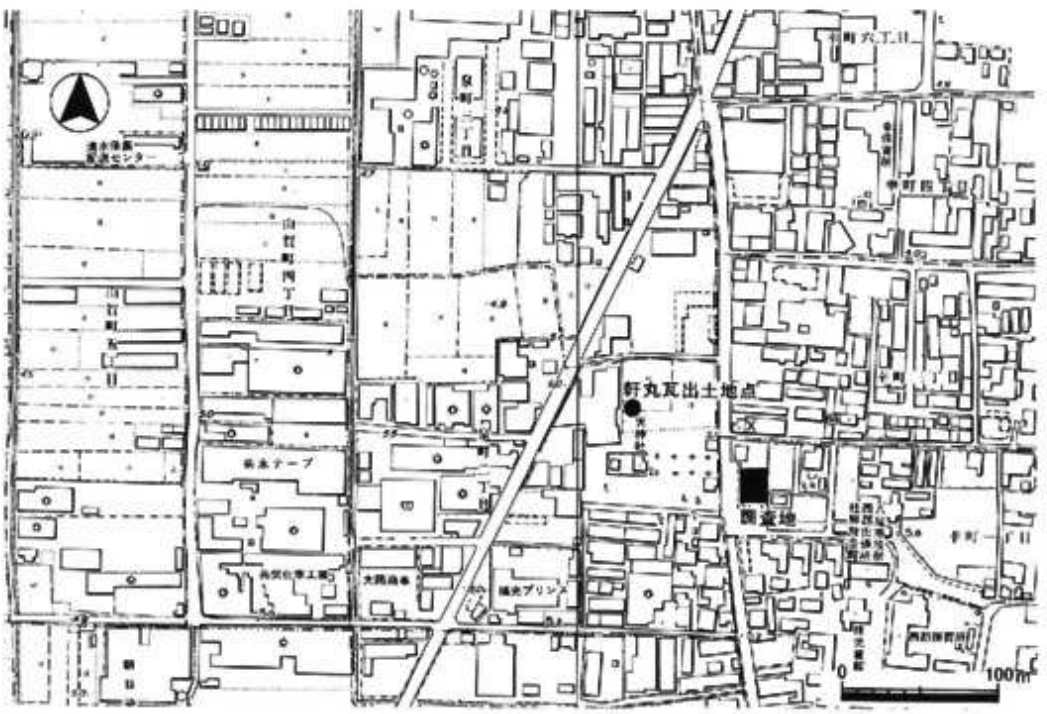
図　版　目　次

図版　一　第1調査面全景
図版　二　ＳＥ－1上層遺物出土状況
　　同　上　完掘
図版　三　第2調査面全景
図版　四　ＳＥ－3・ＳＥ－4
　　ＳＥ－2・ＳＫ－7・ＳＫ－8
図版　五　第3調査面全景
図版　六　ＳＥ－5
　　同　上　断面
図版　七　ＳＥ－6
　　同　上　断面
図版　八　ＳＥ－7
　　ＳＥ－8
図版　九　ＳＥ－9
　　ＳＫ－10
図版一〇　ＳＢ－1
　　ＳＰ－82
図版一一　ＳＥ－1出土遺物
図版一二　ＳＥ－2・ＳＥ－4出土遺物
図版一三　ＳＫ－7・ＳＫ－8・ＳＤ－3出土遺物

図版一四　ＳＥ－５・ＳＥ－６出土遺物
図版一五　ＳＥ－６曲物・同墨書
図版一六　ＳＥ－７上層出土遺物
図版一七　ＳＥ　７下層出土遺物
図版一八　ＳＥ－９・ＳＫ－10出土遺物
図版一九　ＳＫ－10・ＳＤ－11出土遺物
図版二〇　第Ⅳ層出土遺物
図版二一　第Ⅳ層出土遺物
図版二二　第Ⅳ層出土遺物
図版二三　第Ⅲ層出土遺物

第1章　調査に至る経過

昭和59年9月、八尾市改良事業室より八尾市幸町1丁目76番地他において、店舗付改良住宅を建設するため、埋蔵文化財の有無について八尾市教育委員会に照会があった。文化財室では、当該地が奈良時代の寺院址と推定される西郡廃寺に隣接していることや、付近の下水道工事の立会調査で遺物包含層の存在を確認していることから、文化財保護法第57条の3に基づく通知が必要であると判断し、昭和59年9月20日付で通知を受理した。これに伴い協議を行った結果、同年10月11日に文化財保護法第98条の2に基づき試掘調査を実施することが、両者間で合意された。同日、改良事業室立会の上で八尾市教育委員会が試掘調査を実施したところ、表土下0.6m以下に土師器・須恵器を包含する層が認められ、さらに表土下1.6m前後付近で弥生時代後期に比定される土器の集積が認められた。この結果、付近一帯に遺跡が存在することが判明したため、八尾市文化財保存に係る事務取扱い要綱に基づき、全面発掘調査が必要である旨の内容を改良事業室に指示した。ただし、調査の対象は建物予定地部分に限定し、既存家屋の取壊し期間の制約のため、建物予定地南部から21m分は（財）八尾市文化財調査研究会が全面発掘調査を実施し、その調査結果に基づき、北部の残りを八尾市教育委員会が調査を実施するという変則的な方法が取られた。



第1図　調査地周辺図

第２章　地理・歴史的環境

萱振Ａ遺跡は八尾市萱振町５丁目・７丁目・泉町１丁目・２丁目・幸町１丁目・桂町１丁目・２丁目に所在する弥生時代中期から近世に至る複合遺跡である。萱振Ａ遺跡の位置する八尾市北部は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川に画された河内平野の中央部に当る。

河内平野の形成過程については、梶山彦太郎・市原実両氏の論文があり、後氷期の古大阪平野の時代から大阪平野Ⅱの時代に至るまで、九つの時代の推移が示されている。[註1]一方、発掘調査においては、鋼矢板を使用する調査法の導入により、沖積地深部の発掘が可能となり多面に亘る生活面の追求や古地形の復元が容易となってきた。さらに、地質学や花粉分析・珪藻分析・動植物遺体同定等の自然科学分野との相互研究の進展により、河内平野の形成過程と古環境の変化が明らかになってきている。ここでは、近畿自動車道大阪線建設に伴う発掘調査および近年の発掘調査で蓄積された調査成果を基にして、萱振Ａ遺跡周辺の遺跡の推移を考えてみたい。

この地域で人類の足跡が認められるようになるのは縄文時代晩期である。珪藻分析によれば淡水産の珪藻の出現率が増加し、海水産の珪藻が急速に減少することが指摘されており、[註2]河内湾の淡水化が進み河内潟に移行する時期で、陸地化しているとはいえ沼沢地状の不安定な環境下にあったことが推定できる。山賀遺跡では、人間と鹿の足跡が確認されており、[註3]平野部中央で人間と野性動物との接点を見いだすことができる。さらに、山賀遺跡で検出された筌や河川に打ち込まれた杭、[註4]新家遺跡で検出されたセタシジミ[註5]等は当時の河川漁撈の具体的な一面を示す資料と考えられる。ただ、この時期一部に汽水の影響を受けた土層が珪藻分析によって認められており、[註6]近辺に照葉樹林が存在した可能性が少いものとされていることから、狩猟・採集を生業として生活を維持する縄文社会にあっては、定住する条件を満たさない不安定な土地であったことが窺える。このことから、この時期のこの付近一帯は生駒西麓に拠点を置く集団の活動範囲の一点として捉えることができよう。

続く弥生時代前期（畿内第Ⅰ様式中段階）には、水稲耕作を一早く受容した集団が平野部中央への進出と定住を可能にした。当時の汀線は瓜生堂遺跡付近であったとされており、河内潟に注ぐ河川によって形成された自然堤防の微高地に居住区・墓域が設けられ、居住区に近い湿地帯に水田が作られていた。

美園遺跡[註7]では竪穴住居14棟・掘立柱建物４棟が検出されている他、山賀遺跡[註8]でも掘立柱建物が19棟以上検出されており、居住形態を異にする集団がこの時期に存在していたことが明らかになった。美園遺跡では、居住区を構成する竪穴住居が数棟単位ごとのまとまりがあるとされ

ており、血縁的な単位集団の結合により農業共同体を形成していたことが理解できる。墓は、美園遺跡で木棺墓・土壙墓が検出されている。この時期の水田は、山賀遺跡・友井東遺跡で検出されている。[註9] なお、山賀遺跡で検出された堤を伴う何条もの溝は、水田の灌漑水利の他堤防の役割を果しており、[註10] 初期水稲耕作時における水利管理の一端を知るうえで重要である。

続く中期初頭（畿内第Ⅱ様式）においては、前期より継続して集落が営まれている山賀遺跡の他は、瓜生堂遺跡・美園遺跡では前期の遺構が自然河川の氾濫に伴う堆積で埋没し、この時期集落の活動を停止している。これらの事実は瓜生堂遺跡の珪藻分析の結果が示しているように、[註11] 一時的な海進に関連して起きた気候変化等に左右された結果の一つであると考えざるを得ない。このことは、不安定な基盤に基づく水田経営を生業とした社会にとっては死を意味するほどの大きな打撃であったことが、この付近で検出された前期新段階と中期初頭の土器の出土量の数値変化からも明らかである。なお、この時期山賀遺跡では、新たな墓制として方形周溝墓が導入されるのを始めとして、水口を完備した水田が出現しており、墓制に対する意識の変化や水田経営技術の進展が見られる。

再びこの付近で活発に集落が営まれるのは、畿内第Ⅲ様式に入ってからである。この時期には前代から続く山賀遺跡の他、瓜生堂・巨摩廃寺遺跡・美園遺跡が出現している。[註12] 特に瓜生堂遺跡では南側の巨摩廃寺遺跡を合わせて拠点的な大集落が形成されており、集落の拡大に伴って水田、墓域の規模が増大している。これらの事柄は、水田経営を基盤とする地縁関係の集団が結合した結果にほかならないものと考えられる。したがって、瓜生堂2号方形周溝墓のような大型の墓の出現は、これらの地縁的階級社会の結合体を管理し得た首長階層がこの時期に存在していたことを裏付ける資料と言えよう。萱振A遺跡では、弥生時代中期の水田が検出されており、この時期に集落が存在していたことが窺える。

弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式）には、山賀遺跡・瓜生堂遺跡の他、若江北遺跡・友井東遺跡で集落が出現している。[註13] しかし、中期末葉から後期になると瓜生堂遺跡・巨摩廃寺遺跡周辺では河川の氾濫に伴う厚い砂礫層の存在が認められており、この時期、たえず洪水の危機にさらされるような不安定な環境であったことが窺える。これに符合した現象として、周辺の遺跡は規模を縮小する傾向で、洪水のたびに集落を移動せざるを得ない状況であったと推定できる。この時期の集落は、山賀遺跡・萱振A遺跡・友井東遺跡で検出されている。

古墳時代前期（庄内式期・布留式期）になると自然環境の安定によって、再びこの地域一帯で活発に集落が営まれるようになる。この時期の集落は、西岩田遺跡・瓜生堂遺跡・若江北遺跡・山賀遺跡・萱振A遺跡・美園遺跡・友井遺跡で検出されている。[註14][註15]

古墳時代中期・後期には新家遺跡・西岩田遺跡・巨摩廃寺遺跡・萱振A遺跡・友井東遺跡で

集落が確認されている程度で、この付近一帯の中期・後期の集落は前期に比べて規模・数ともに減少していることが指摘できる。一方、前期末から中期初頭には萱振A遺跡・美園遺跡で方墳が検出されている他、中期末から後期中葉にかけては巨摩廃寺遺跡・山賀遺跡・友井東遺跡で小型の方墳が造営されている。特に、中期末から後期中葉に比定される古墳は、生駒西麓で群集墳が形成される時期と一部符合しており、両者の古墳の内容を比較するうえで貴重な資料と言えよう。

飛鳥時代・奈良時代の集落は、西岩田遺跡・瓜生堂遺跡・萱振A遺跡・友井東遺跡で検出されている。美園遺跡では、7世紀後半には方画地割に則った水田が構築されており、付近一帯はこの時期を境として条里に規制された水田開発が活発になる。なお、花粉分析においてもアカガシ亜属が減少しマツの花粉が増加していることが指摘されており、活発な開発に伴って周辺の森林破壊が進行したことが植物相の変化をみても明らかである。大化の改新による国郡制の施行以降、当地域は若江郡に属している。若江郡内の古代寺院としては、若江寺[註16]・西郡廃寺[註17]が知られている。西郡廃寺については、今回の調査で軒丸瓦・軒平瓦を確認しており、創建時期や寺域を推定するうえで一助になろう。

平安時代以降、当調査地周辺は醍醐寺の管理する若江荘に組み入れられていた。平安時代の集落は若江遺跡・若江北遺跡・山賀遺跡・萱振A遺跡・美園遺跡で検出されているが、時期的には平安時代後期以降に比定されるものが多い。続く鎌倉時代の集落は、山賀遺跡・若江遺跡・萱振A遺跡・美園遺跡・友井東遺跡で検出されており、前代から継続して集落が営まれているものがほとんどである。南北朝・室町時代になると、萱振城・若江城の平城が築かれる。この時期を契機として中世末期に至るまで戦乱の渦中にあったようで、この地域一帯の集落は移動せざるを得ない状況であったと考えられる。付近一帯の発掘調査においても室町時代前期以降の集落が水田遺構をのぞけば激減することが指摘でき、若江城の周辺で確認された集落のように[註18]、城郭を中心とした村落形態に変化したものと考えざるを得ない。

江戸時代中期の宝永元年（1704）には、大和川の付替があり、これ以降綿花の栽培が活発になったようで、山賀遺跡等ではこれらの事実を物語るように掻き揚げ田が検出されている。

註1　梶山彦太郎・市原実　「大阪平野の発達史－C^{14}年代データからみた」『地質学論集』7　1972

註2　安田喜憲　「瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析Ⅱ」『瓜生堂』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター　1980

註3　(財) 大阪文化財センター　『山賀（その4）』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1983

註4　大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター　『山賀（その5・6）』近畿自動車道天理～吹

川線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1986
註5　（財）大阪文化財センター　『新家（その2）』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1984
註6　前掲註2
註7　（財）大阪文化財センター　『美園』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1985
註8　（財）大阪文化財センター　『山賀（その3）』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1984
註9　（財）大阪文化財センター　『友井東（その1）』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1984
註10　（財）大阪文化財センター　『山賀（その2）』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1983
註11　中野武登　「瓜生堂遺跡堆積土の珪藻分析」『瓜生堂遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会
註12　（財）大阪文化財センター　『巨摩・若江北（その2）』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1984
註13　（財）大阪文化財センター　『若江北』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1983
註14　大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター　『西岩田』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1983
註15　広瀬雅信　「堂振遺跡調査速報」『八尾市文化財紀要Ⅰ』八尾市教育委員会　1984
註16　藤井直正　『東大阪の歴史』松籟社　1983
註17　西岡三四郎　「上代の伝説と信仰」『八尾市史』八尾市役所　1958
註18　東大阪市遺跡保護調査会　『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ遺構編』1982
（財）東大阪市文化財協会　『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ遺物編』1983

第3章　調査概要

第1節　調査の目的と方法

八尾市教育委員会文化財室から（財）八尾市文化財調査研究会へ提出された発掘調査の仕様書によれば、事前の試掘調査では古墳時代から奈良時代の遺物包含層と弥生時代後期の遺物包含層の存在が明示されていた。とくに前者に関しては、第1章で一部ふれた西郡廃寺に符合する時期の遺物を含んでおり、調査において寺院に関連する遺構が検出される可能性が想起された。そこで、これらの遺構の検出に備えて、西郡廃寺推定地の中核をなすものと考えられる天神社を中心として、周辺の地形実測図を作成した。一方、後者に関しても当調査地周辺においては新知見であり、周辺に存在する同時期の遺構との関連を知るうえでその調査成果が注目された。このような事前の試掘内容をふまえて、調査では現地表下0.6～0.7ｍまでは機械掘削を行い盛土および旧表土を排除し、以下は土層薬理に沿って順次人力掘削を実施し、現地表下1.6ｍに至るまで精緻な調査に努めた。

調査区の地区割については、南北軸を磁北に一致させて調査区を二分する方法を取った。東西軸は南北軸に直交する形で4区に区分した。一区画の単位は5ｍ四方で、東西方向は西から1・2とし、南北方向は南からA・B・C・Dで表した。各地区の表示には、数字とアルファベットの組合せで、1A区・1B区……と付称し区別した。

第2図　天神社（東から）

第2節　基本層序

調査区の東部で近代の撹乱が認められた以外は、良好な形で土層を観察することができた。第0層から第Ⅲ層にかけては比較的安定した層相を示すが、第Ⅳ層以下は調査区の南西から北東方向に走る埋没河道の影響でやや不規則な土層堆積を示す。ここでは普遍的に存在した8層を基本土層とした。

第0層：盛土。層厚10～40cm。南部へ行くに従って層厚が漸増している。地表面の標高は5.50～5.70ｍで南へ下っている。

第1層：茶色砂質土。旧表土。層厚10～40cm。

第Ⅱ層：灰茶色砂質土。層厚10～20cm。粗砂を多量に含む土層である。調査区南部では普遍的に存在するが北部では欠如している。無遺物層である。

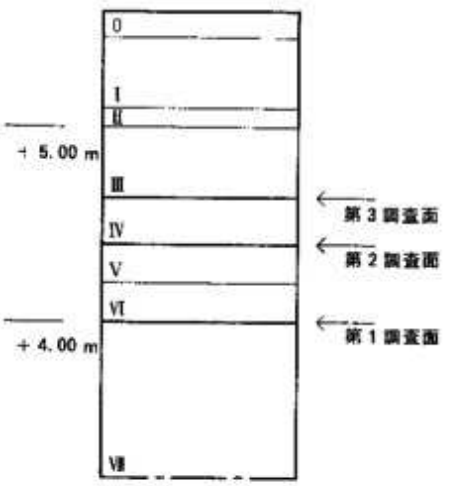
第Ⅲ層：黒茶色の色調で土質には砂質土・シルトの２種がある。層厚10～40cm。ほぼ水平に堆積する土層で調査区全域に広がっている。層中より奈良時代から中世末期に比定される土器類が多量に出土している。

第Ⅳ層：淡灰～黄灰色の色調で土質は東部のシルト混粘質土と西部の砂質土に二分される。層厚40～60cm。古墳時代の遺物を少量包含する。この層上面を第３調査面とした。

第Ⅴ層：灰黄～灰褐色の色調で土質にはシルトと砂質土の２種がある。層厚10～20cm。基本的にはシルトを基調とするが、北部と西部は砂質土が優勢な層相である。古墳時代前期の遺物を包含するが量は少ない。この層上面を第２調査面とした。

第Ⅵ層：灰色～灰褐色の色調で土質はシルト混粘質土。層厚10～30cm。

第Ⅶ層：青灰色～茶褐色の色調で土質にはシルトと砂がある。砂は弥生時代後期以前に埋没した自然河道の流路部分の土質で中砂～粗砂を主体としている。層厚80cm以上。この層上面を第１調査面とした。

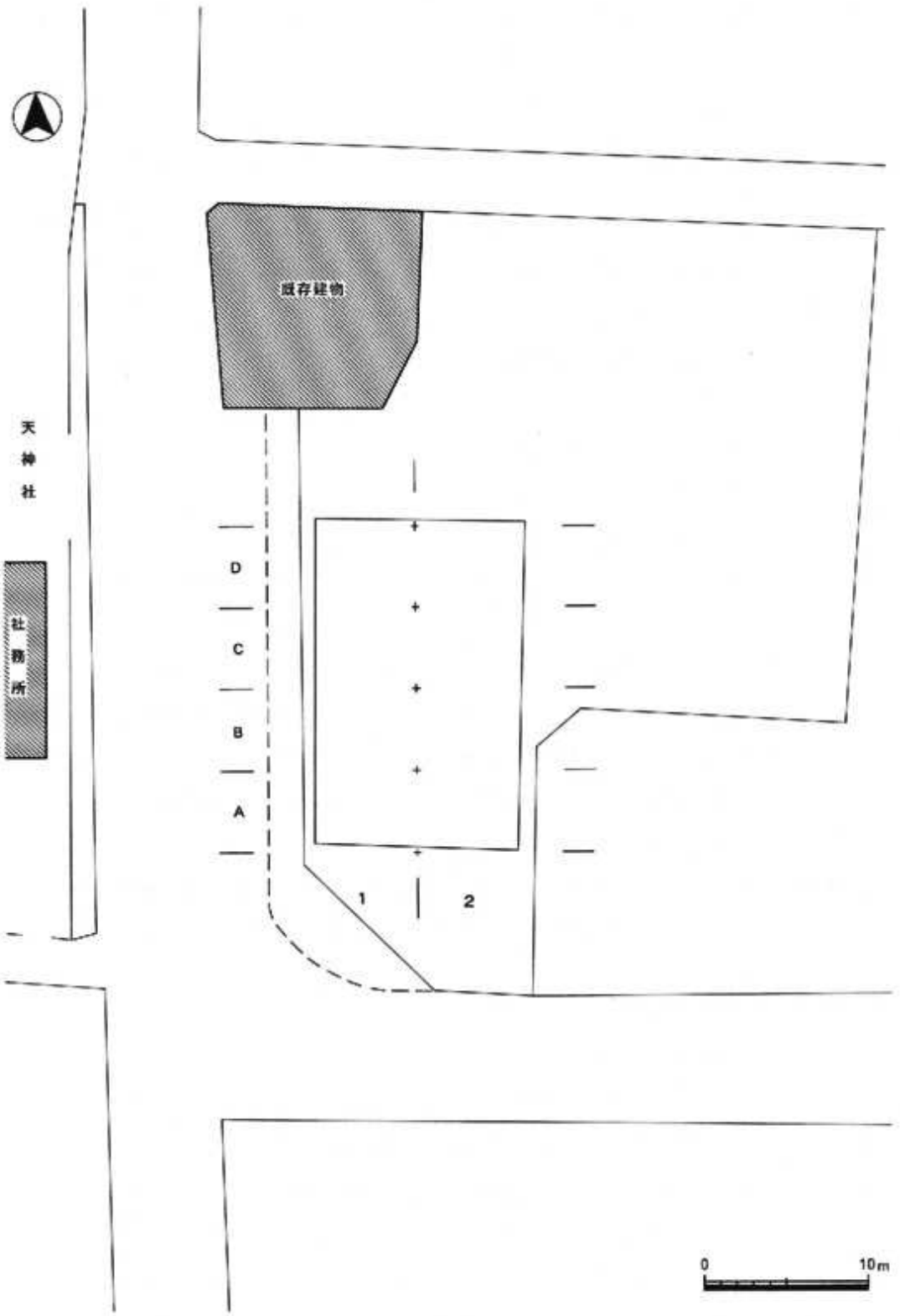


Ⅰ	茶　色	砂質
Ⅱ	灰茶色	砂質
Ⅲ	黒茶色	砂質・シルト
Ⅳ	淡灰～黄灰色	シルト混粘質・砂質
Ⅴ	灰黄～灰褐色	シルト・砂質
Ⅵ	灰色～灰褐色	シルト混粘質・粗砂
Ⅶ	青灰～茶褐色	シルト・粗砂

第３図　基本層序模式図

第３節　調査の経過

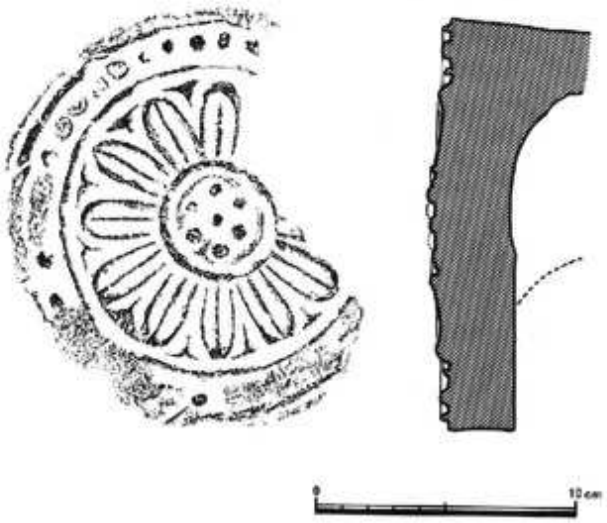
昭和59年11月13日より現地調査を実施した。店舗建築予定地に合わせて調査区を設定し、機械掘削を行うとともに、周辺の地形図を作成する目的で平板実測を開始した。11月７日、調査地西側に位置する天神社北側の水田を実測中、水田の所有者である村上末次氏より、同水田の南西部で農事用井戸掘削時に屋瓦が出土した旨の報告を受けた。その際出土した屋瓦を拝見させていただいたところ、その中に細弁十二葉蓮華文軒丸瓦が含まれていることが確認できた。この軒丸瓦は、西郡廃寺推定範囲内で初めて瓦頭文様が確認されたもので、西郡廃寺の創建時期や寺域を推定するうえで重要な資料を提供してくれた。このような内容が事前に判明したた



第4図　調査区設定図および地区割図

め、特に寺院に関連する遺構の検出に注意をはらって調査を実施した。

まず、現地表下0.6～0.7ｍまでを機械により掘削したところ、包含層である第Ⅲ層黒茶色砂質土が一面に広がっていた。この土層は層厚10～40cmを測るもので、層中には奈良時代から中世末期に比定される多種多様な遺物が混在していた。この層を取り除いた第Ⅳ層上面で鎌倉時代前期～中期に比定される井戸５基・土坑２基・溝８条・小穴53個を検出した（**第３調査面**）。さらに、0.2ｍ下部に存在する第Ⅴ層上面で古墳時代中期～鎌倉時代前期に比定される井戸３基・土坑２基・溝３条・小穴32個を検出した（**第２調査面**）。なお、この遺溝面で西郡廃寺の創建時期に符合すると思われる時期の土坑１基を検出している。第２調査面より約0.3ｍ下部の第Ⅶ層上面で弥生時代後期に比定される井戸１基・土坑６基・溝１条・小穴12個を検出した（**第１調査面**）。



第５図　連華文軒丸瓦実測図

以上のように、当調査地は弥生時代後期から鎌倉時代後期に至る複合遺跡であることが判明した。以下、各調査面ごとに概観する。

１）検出遺溝

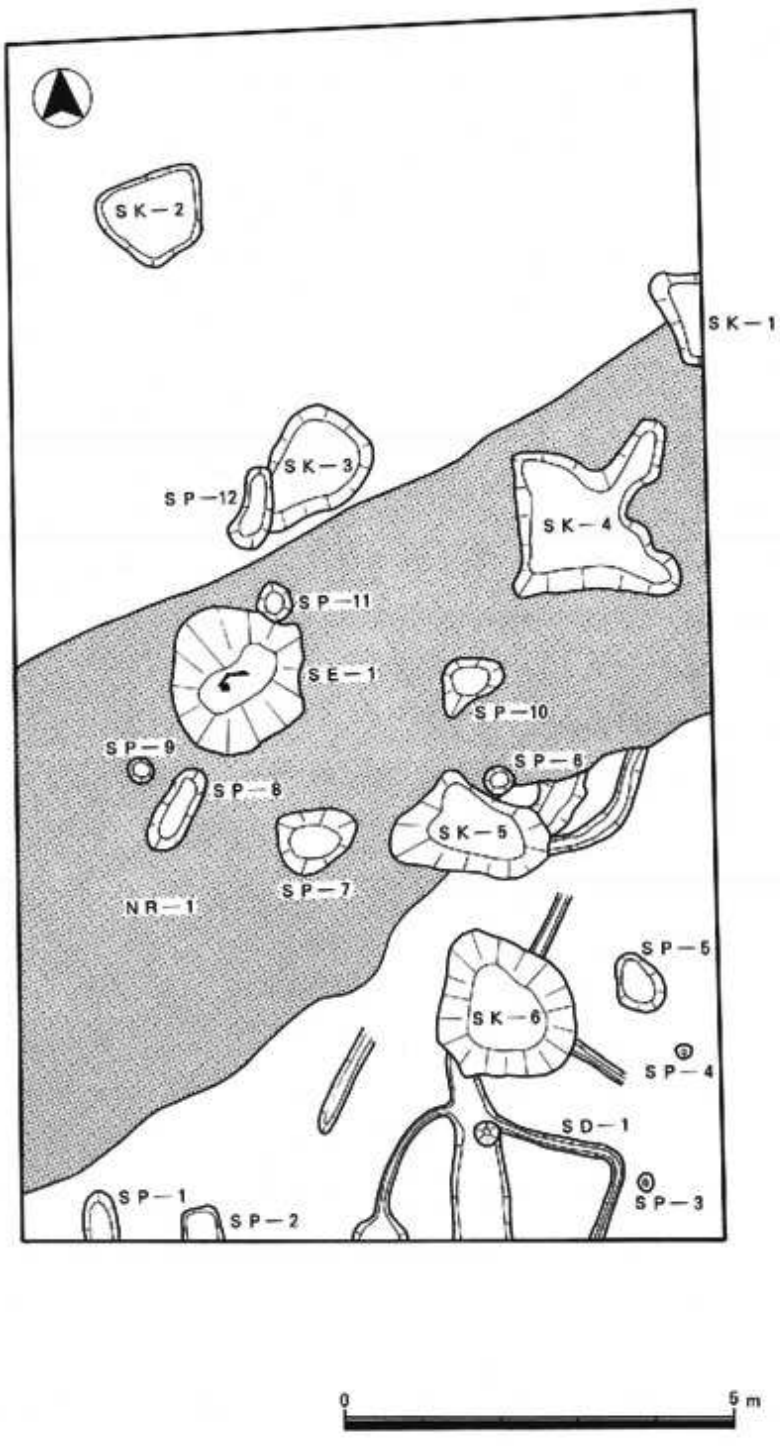
＜第１調査面＞

現地表下1.7ｍ（標高＋4.0ｍ）付近に存在する第Ⅶ層上面を調査対象面とした。調査の結果、埋没した自然河道１条（**ＮＲ－１**）・井戸１基（**ＳＥ－１**）・土坑６基（**ＳＫ－１～ＳＫ－６**）・溝１条（**ＳＤ－１**）・小穴12個（**ＳＰ－１～ＳＰ12**）を検出した。自然河道以外の遺構はすべて弥生時代後期に比定できるもので、自然河道が完全に埋没した後に構築されている。したがって遺構構築面の土層は、自然河道内の堆積土層である粗砂層と自然河道両岸を構成する茶褐色シルト層に区別できる。

自然河道（ＮＲ）

ＮＲ－１

調査区の南西から北東方向に伸びる河道跡である。検出部の上面幅は東端で６ｍ、西端で８ｍを測る。深さを確認するために一部を掘削したが、湧水が多大なため、１３ｍ付近で掘削を中止した。なお、井戸**ＳＥ－１**、土坑**ＳＫ－４・ＳＫ－５**が河道上面を構築面にしている。

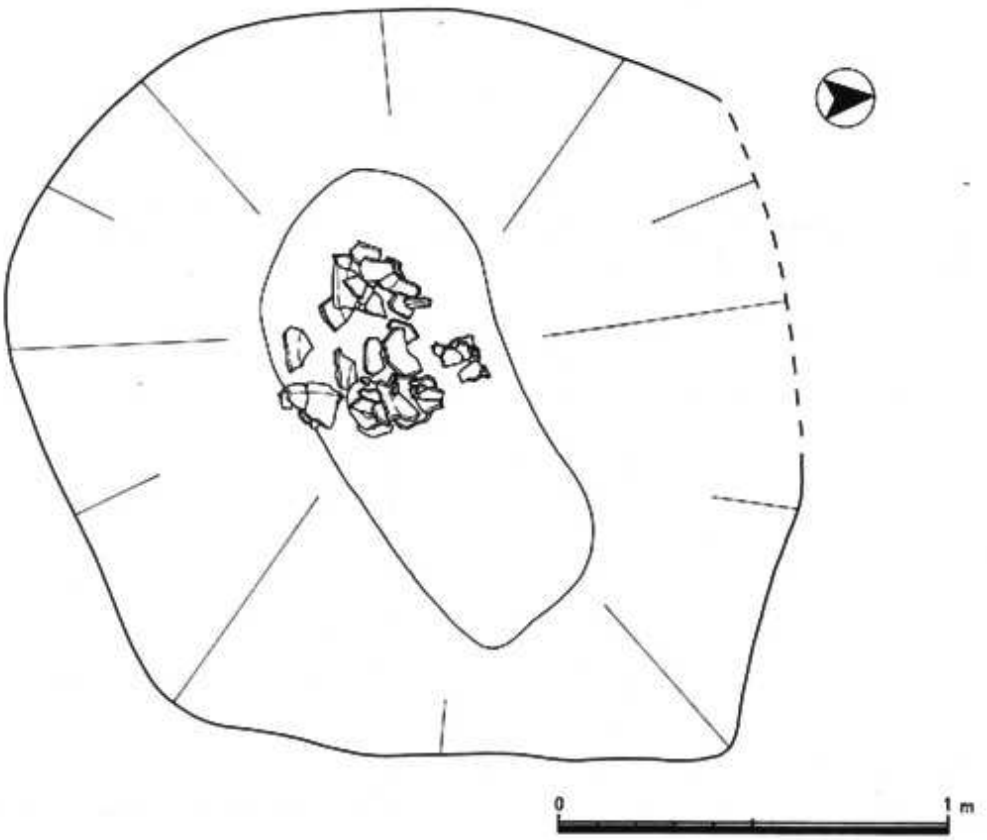


第6図　第1調査面検出遺構平面図

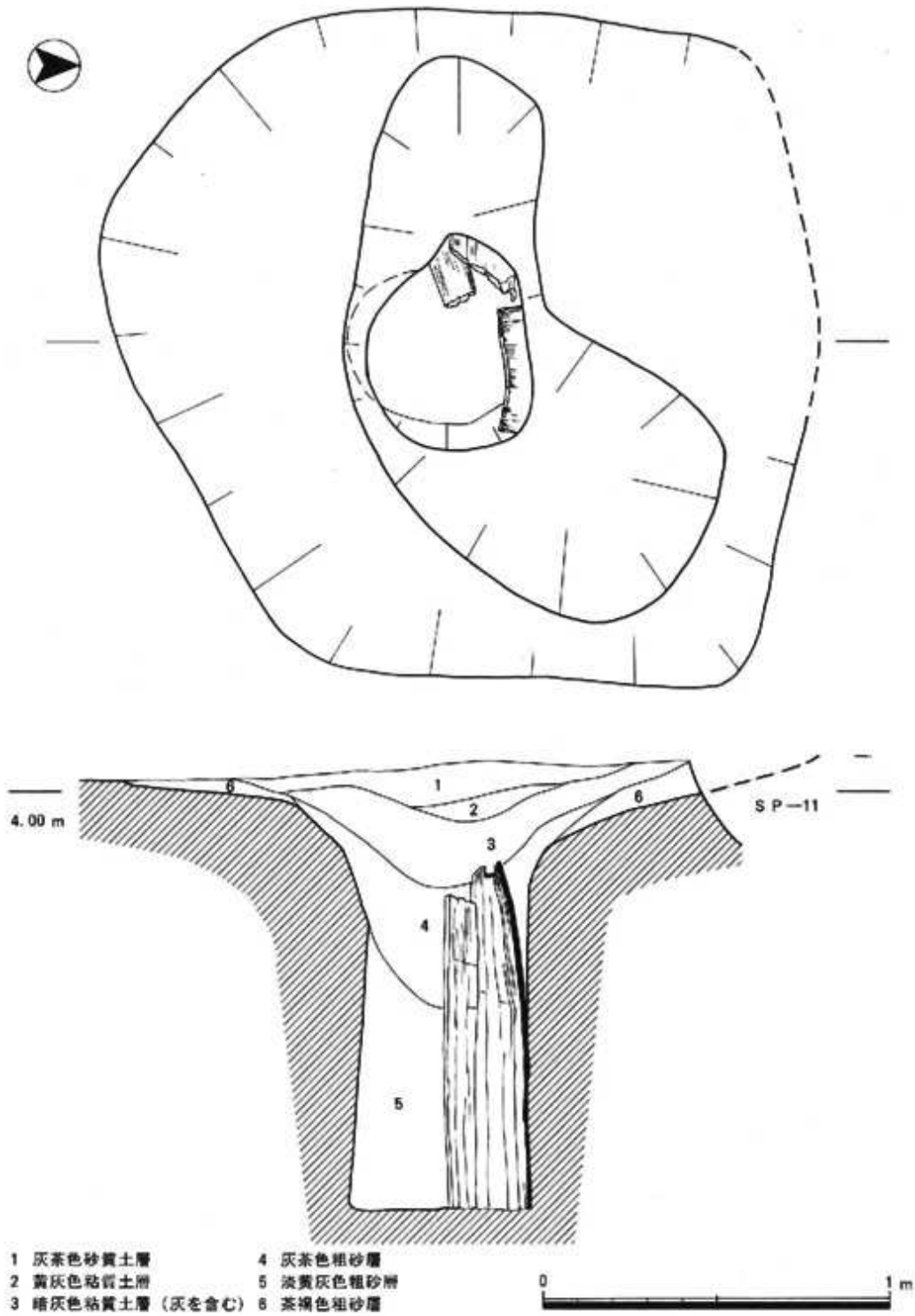
井戸（SE）

SE－1

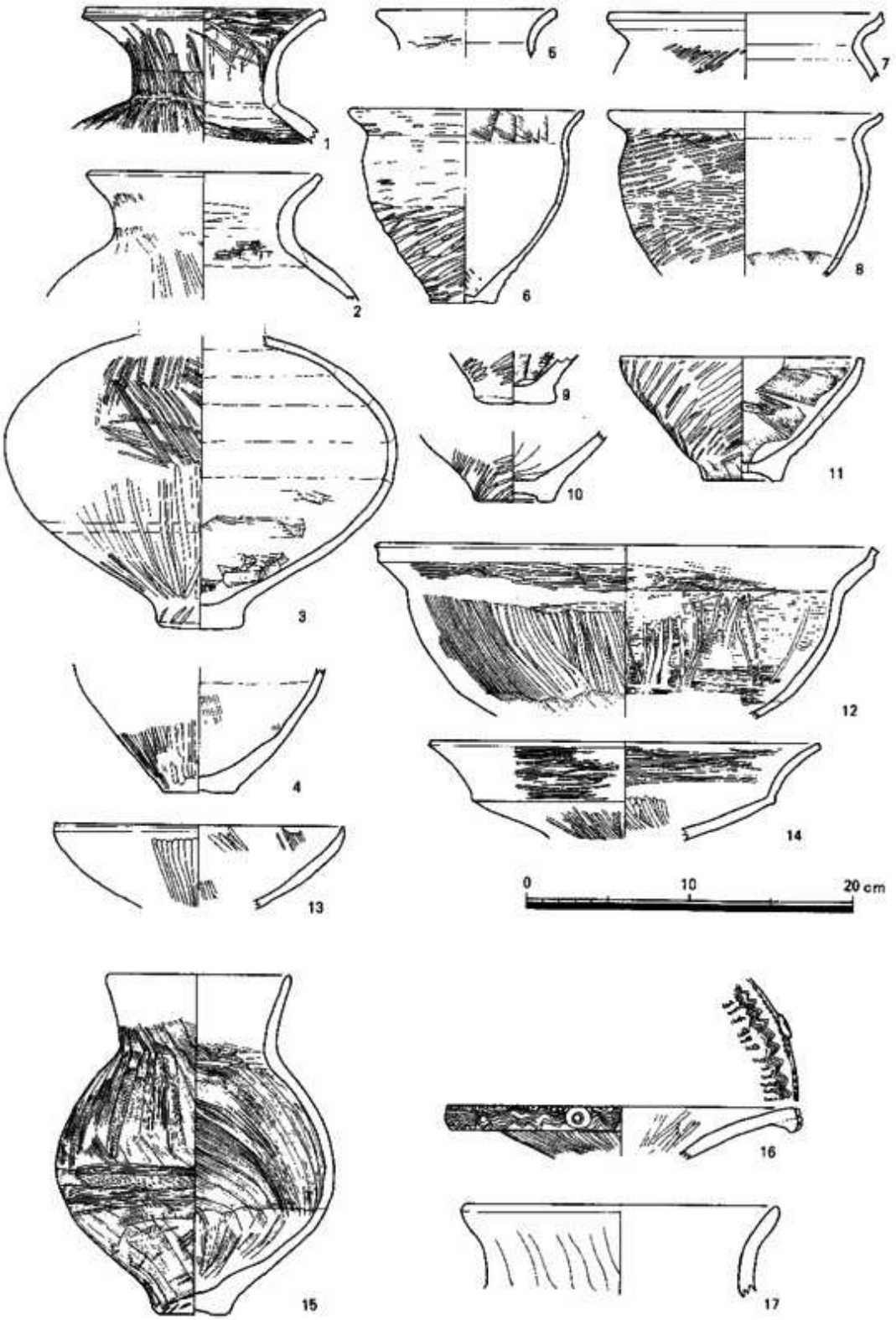
埋没自然河道NR－1上面の灰色粗砂を構築面としている。上面円形を呈する掘形内に、巨木の側部の材を寄せ組み式に縦位に立てて井戸側とするもので、上面径1.65m・底部径1.28m・深さ1.49mを測る。井戸側は完存せず、北部に1枚（幅0.36m・長さ1.0m・厚さ2～3cm）・西部に2枚（0.24m・1.0m・2～3cm、0.1m・0.9m・2～3cm）が「く」の字状に遺存していたが、土圧のためか上部は内側へ傾斜していた。北部井戸側の下方には側縁に沿って1cm角の枘穴が上下に2箇所穿たれており、この穴に角材等を挿入して井戸側を固定したものと推定されるが、調査時においてはそれらを確認し得なかった。井戸内部には、第1層灰茶色砂質土・第2層黄灰色粘質土・第3層暗灰色粘質土・第4層灰茶色粗砂・第5層淡黄灰色粗砂・第6層茶褐色粗砂が堆積している。遺物は第3層から弥生時代後期に比定される壺（1～5）・甕（6～10）・鉢（11・12）・高杯（13・14）・器台等が出土した他、第5層からも同時期の壺（15～17）が出土している。



第7図　SE－1上層平面図


4.00 m
SP—11
1
2
3
4
5
6
1 灰茶色砂質土層
2 黄灰色粘質土層
3 暗灰色粘質土層（灰を含む）
4 灰茶色粗砂層
5 淡黄灰色粗砂層
6 茶褐色粗砂層
0
1 m

第8図　SE—1平断面図



第9図　SE－1出土遺物実測図

土坑（SK）

SK－1

調査区の東端で検出したため全容は不明であるが、検出部で南北1.4mを測る。内部には黒灰色砂質土が堆積しており、弥生時代後期に比定される壺（29・30）・甕（23）・高杯（32）が出土している。

SK－2

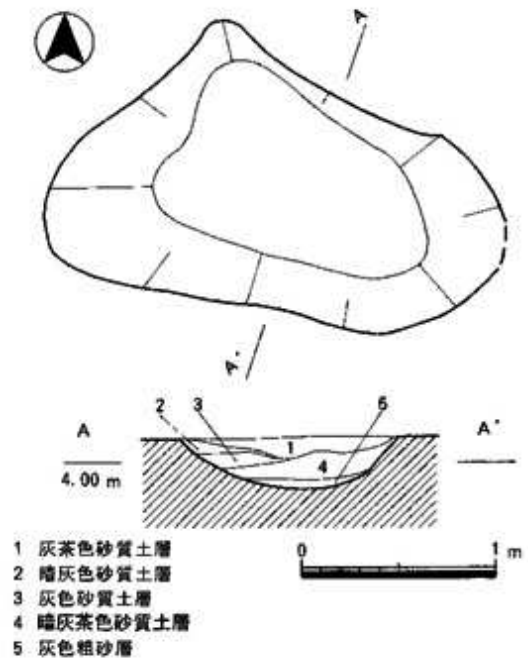
調査区の北西部で検出した。上面台形を呈する土坑で、東西1.55m・南北1.4m・深さ0.08m前後を測る。内部には灰色シルトが堆積しており、層中から弥生時代後期に比定される壺（20）等が出土している。

SK－3

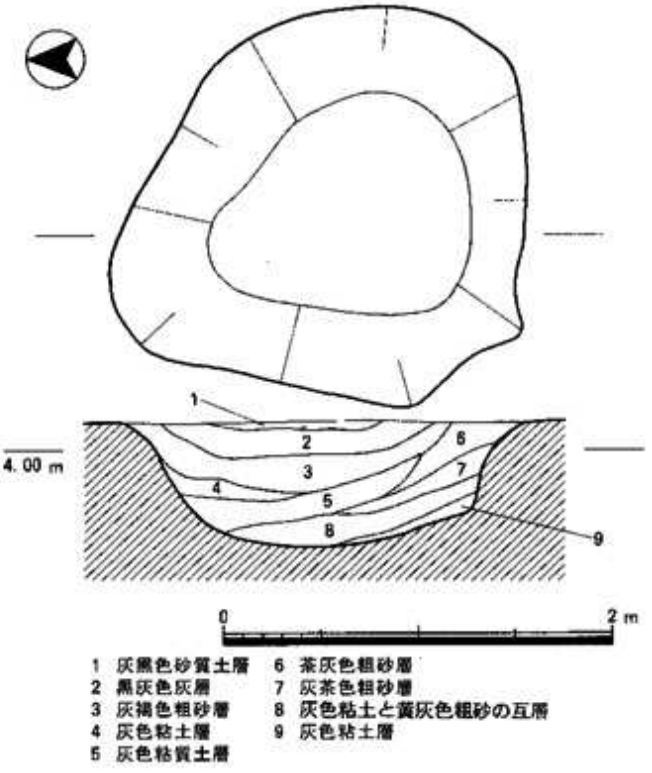
上面楕円形を呈する土坑で、東西1.55m・南北1.5m・深さ0.28mを測る。内部には灰色シルト1層が堆積しており、層中から弥生時代後期に比定される壺（31）・甕（21）等が出土している。

SK－4

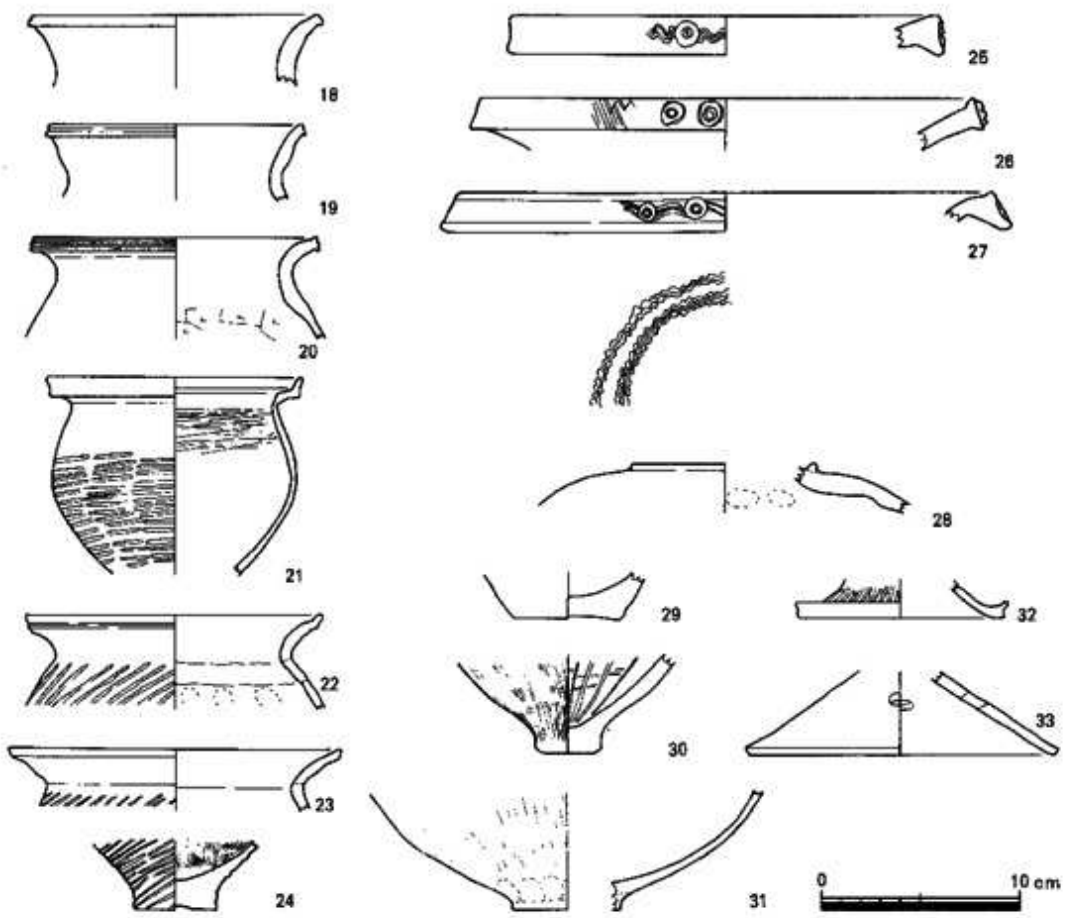
自然河道NR－1の上面を構築面とする土坑である。上面の形状は不定形を呈し、東西2.4m・南北2.1m・深さ0.2m前後を測る。内部は黒褐色粗砂1層で充填されており、層中から弥生時代後期に比定される土器の小破片が少量出土している。



第10図　SK－5平断面図



第11図　SK－6平断面図



第12図　SK－1（23・29・30・32）・SK－2（20）・
SK－3（21・31）・SK－5（24・26・33）・
SK－6（18・19・22・25・27・28）出土遺物実測図

SK－5

土坑SK－4と同様、自然河道NR－1上面を構築面としている。上面の形状は東西に長い楕円形を呈するもので、東西2.28m・南北1.64m・深さ0.28mを測る。内部堆積土は、上層から灰茶色砂質土・暗灰色砂質土・灰色砂質土・暗灰茶色砂質土・灰色粗砂からなる。層中からは弥生時代後期に比定される壷（26）・甕（24）・高杯（33）等が出土している。

SK－6

調査区の南部で検出した。上面の形状は円形を呈する土坑で、東西2.0m・南北2.05m・深さ0.68mを測る。内部堆積土は、上層から灰黒色砂質土・黒灰色灰・灰褐色粗砂・灰色粘土・灰色粘質土・茶灰色粗砂・灰茶色粗砂・灰色粘土と黄灰色粗砂の互層・灰色粘土からなる。層中からは弥生時代後期に比定される壷（18・19・25・27・28）・甕（22）等が出土している。

溝（SD）

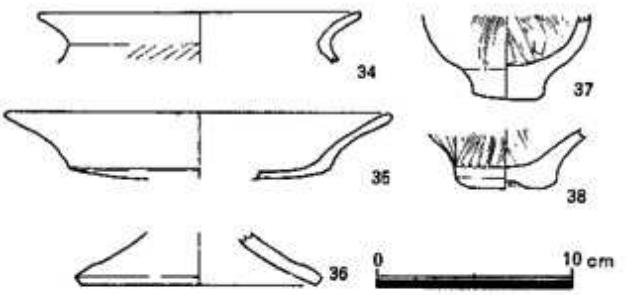
SD－1

調査区南部で検出した。検出部分では方形に廻る溝状遺構であるが、南部は調査区外に至るため、全容は不明である。幅0.14～0.18ｍ・深さ0.03ｍ前後を測る。溝内は黒灰色砂質土１層で充填されており、内部から弥生式土器の細片が１点出土したが、器種は不明である。

なお、平面の形状や周辺で検出した弥生時代後期に比定される遺構群との関係から、竪穴住居の周溝である可能性が指摘できるが、住居床面に該当する部分に汚れがほとんど認められず、ここでは溝とした。

小穴（SP）

12個の小穴（SP－1～SP－12）を検出した。小穴の構築位置は、自然河道NR－1上面（SP－6～SP－12）および調査区南部（SP－1～SP－5）に限定されている。上面の形状は、円形・楕円形・不定形の３種に区別できる。規模は、上面幅0.1～1.0ｍ・深さ0.06～0.2ｍを測る。内部堆積土は、SP－1～SP－5が黒灰色砂質土、SP－6～SP－12が黒褐色砂質土である。遺物はすべて弥生時代後期のもので、SP－3から甕、SP－7から壺・甕（34）・高杯（36）、SP－8から高杯（35）・SP－12から壺（37・38）が出土している。

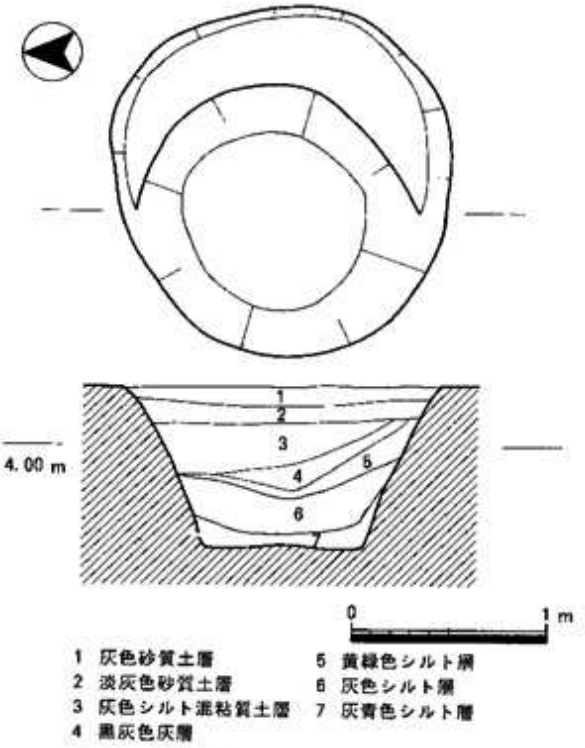


第13図　SP－7（34・36）・SP－8（35）・SP－12（37・38）出土遺物実測図

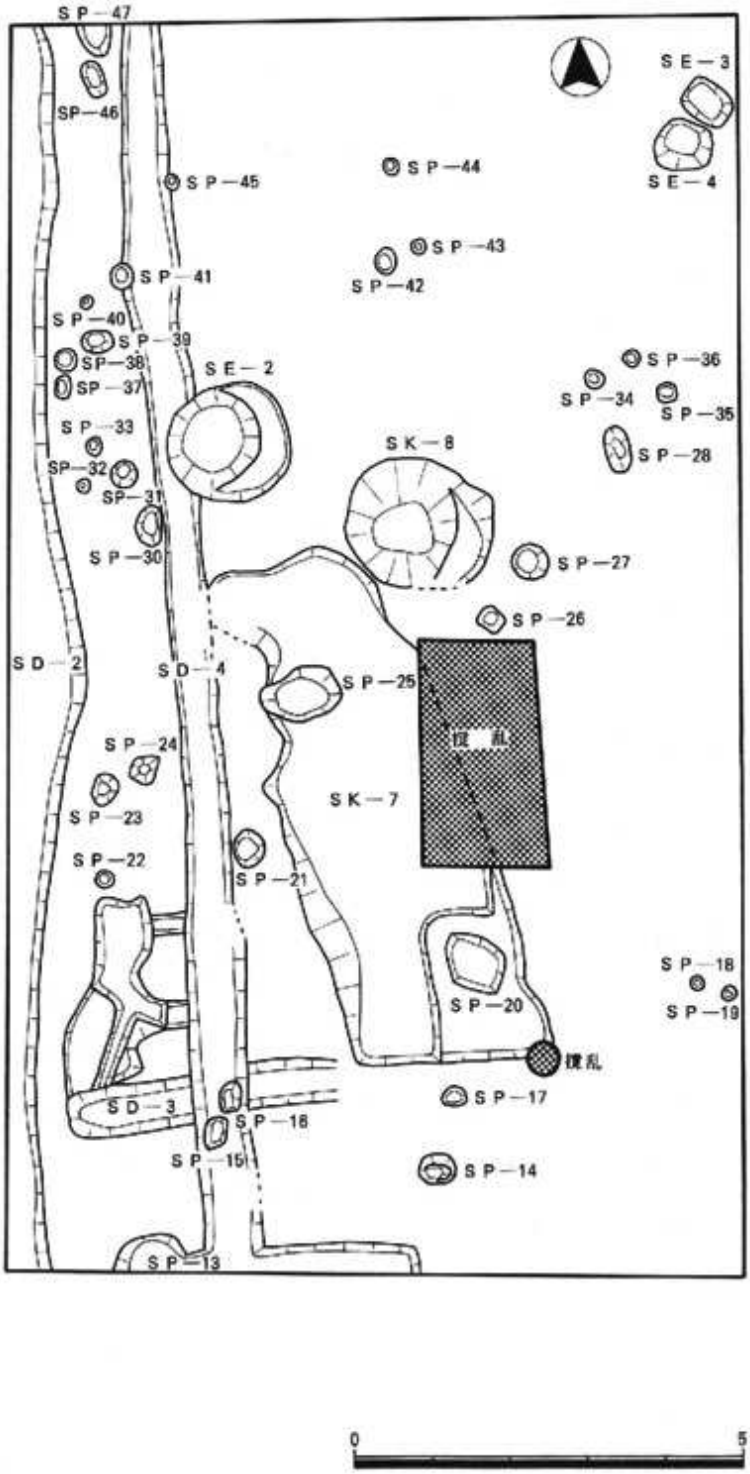
＜第２調査面＞

現地表下1.3～1.4ｍ（標高＋4.20～4.40ｍ）付近に存在する第Ⅴ層上面を調査対象面とした。

調査の結果、古墳時代中期～鎌倉時代前期に比定される井戸３基（SE－2～SE－4）・土坑２基（SK－7・SK－8）・溝３条（SD－2～SD－4）・小穴34個（SP－13～SP－47）を検出した。



第14図　SE－2平断面図



第15図　第２調査面検出遺構平面図

井戸（SE）

SE－2

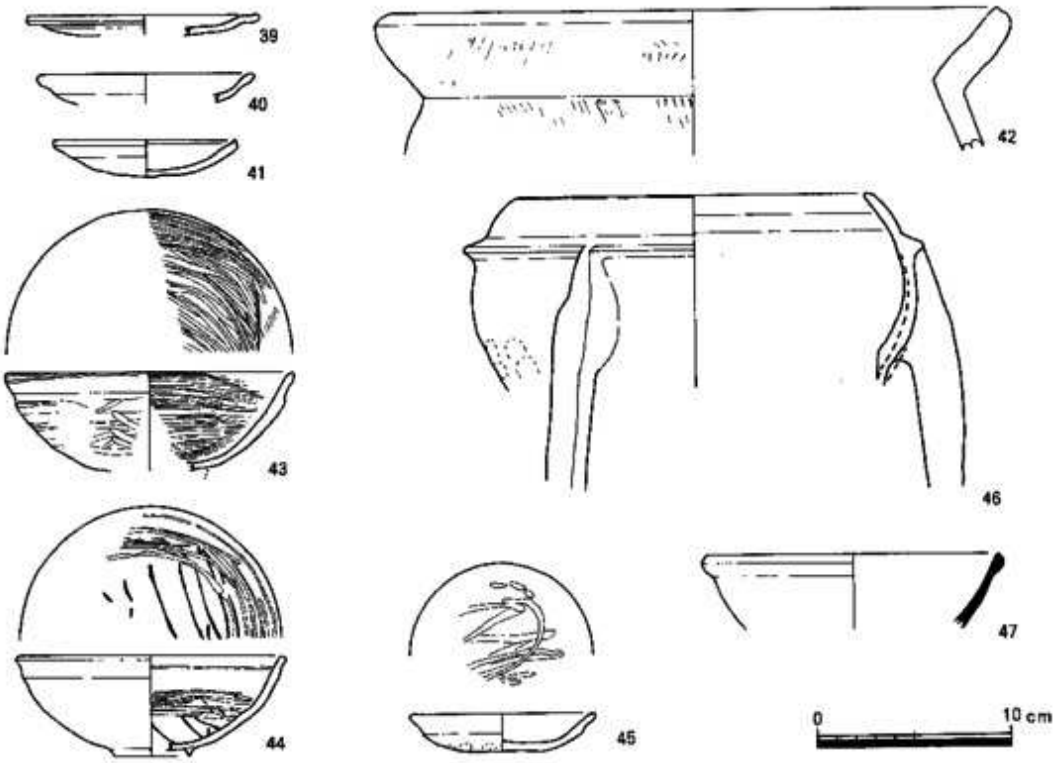
１C地区で検出した素掘り井戸で、上面円形を呈し、東部に三日月状のテラスを有する。東西径1.8ｍ・南北径1.65ｍ・深さ0.8ｍを測る。断面の形状は逆台形を呈しており、内部には、上層から第１層灰色砂質土・第２層淡灰色砂質土・第３層灰色シルト混粘質土・第４層黒灰色灰・第５層黄緑色シルト・第６層灰色シルト・第７層灰青色シルトが堆積している。なお、第７層は包水層で、調査中湧水が認められた。

遺物は主に第４層から、土師器小皿（39～41）・鍋（42）、瓦器椀（43・44）・小皿（45）、瓦質土器足釜（46）、屋瓦、中国製磁器（47）等が出土している。出土遺物からみて、概ね鎌倉時代中期に比定される遺構と推定されよう。

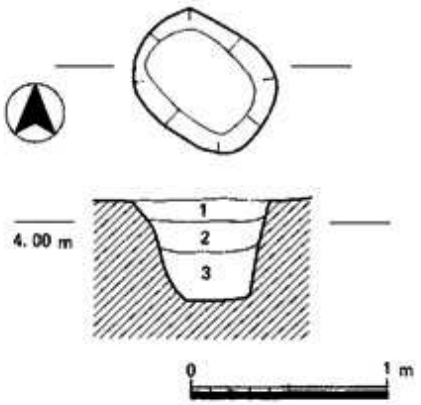
SE－3

調査区北東隅で検出した。上面楕円形を呈する素掘り井戸で、長径0.75ｍ・短径0.58ｍ・深さ0.52ｍを測る。断面の形状は逆台形を呈し、内部には、上層から第１層灰色砂質土・第２層灰色シルト混粘土・第３層灰色シルトと青灰色シルトの互層が堆積している。なお、井戸底は包水層である青灰色シルトに達しているが、湧水はわずかであった。

遺物は、第３層から小型の曲物容器１点が出土している。

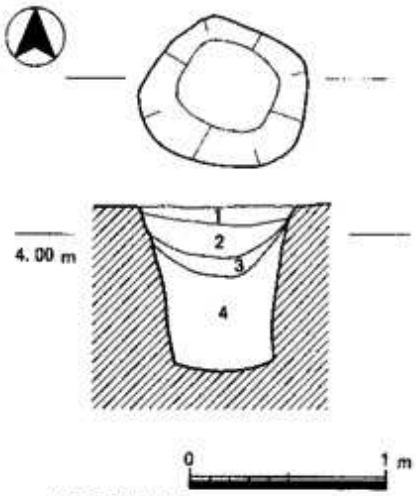


第16図　SE－2出土遺物実測図



1　灰色砂質土層
2　灰色シルト混粘土層
3　灰色シルトと青灰色シルトの互層

第17図　SE－3平断面図



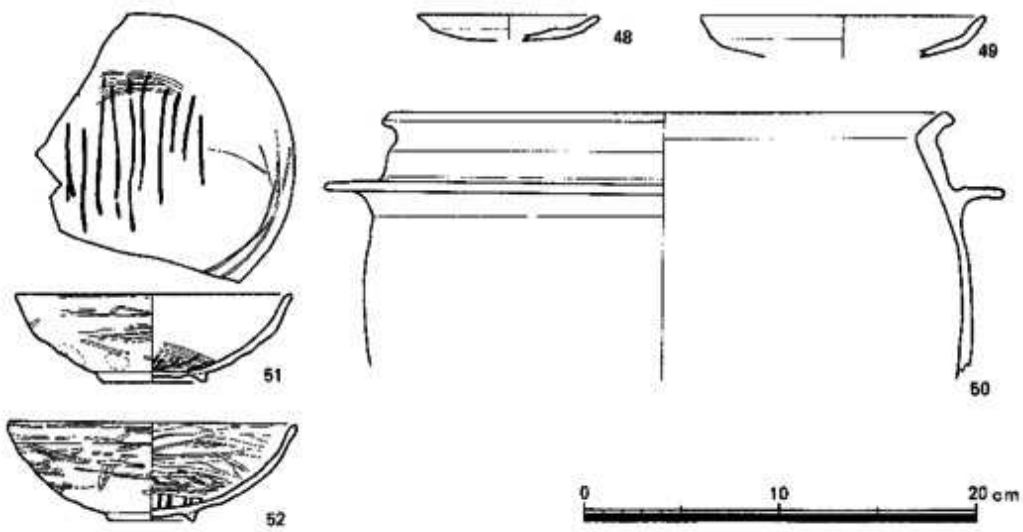
1　灰色砂質土層
2　灰色シルトと青灰色シルトの互層
3　黒灰色灰層（遺物を含む）
4　灰色シルト混粘土と青灰色シルトの互層

第18図　SE－4平断面図

SE－4

井戸SE－3の南に位置する。上面円形を呈する素掘り井戸で、東西径0.86m・南北径0.78m・深さ0.86mを測る。内部には、上層から第1層灰色砂質土・第2層灰色シルトと青灰色シルトの互層・第3層黒灰色灰・第4層灰色シルト混粘土と青灰色シルトの互層が堆積しており、井戸底は包水層である青灰色シルト層に達している。

遺物は、第3層から土師器小皿（48）・中皿（49）・土釜（50）、瓦器椀（51・52）、屋瓦等が少量出土している。

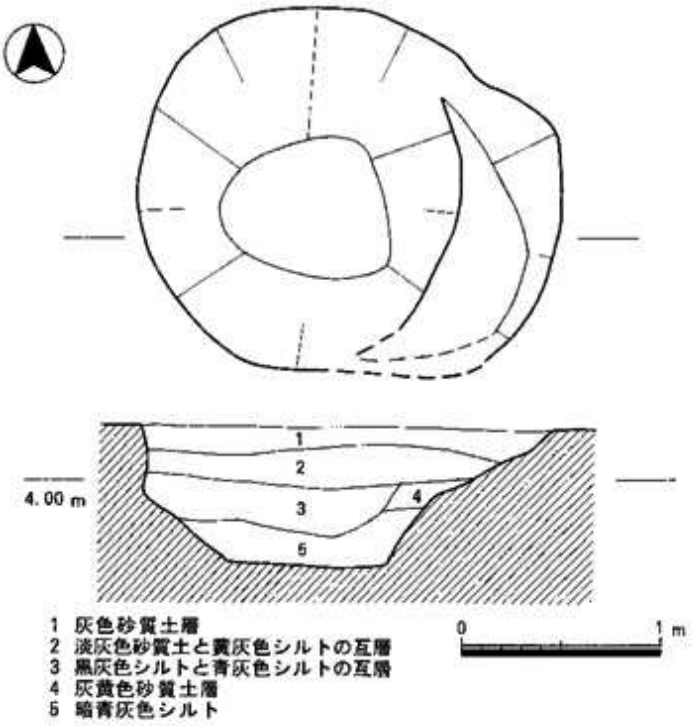


第19図　SE－4出土遺物実測図

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－７

調査区南部で検出した土坑で、北西隅には井戸ＳＥ－９が、南東部には小穴ＳＰ－20が構築され、東側の一部・南東隅は近世に攪乱を受けている。上面の形状は南北に長い方形を呈し、東西2.9ｍ・南北7.4ｍ・深さ0.05～0.35ｍを測る。また、南東隅の東西1.4ｍ・南北2.1ｍの範囲には0.15ｍ程度の高まりを有し、北西部には東西径1.1ｍ・南北径0.8ｍ・深さ0.3ｍを測るＳＰ－25の窪みを伴う。内部堆積土は灰色砂質土と灰褐色粗砂の２層からなり、双方から古墳時代末期に比定される土師器杯（53～59）・高杯（64）・甕（60・61）・土釜（62・63）、須恵器杯蓋（69～73）・杯身（74～77）・壺（65～68）等が多量に出土している。



第20図　ＳＫ－８平断面図

ＳＫ－８

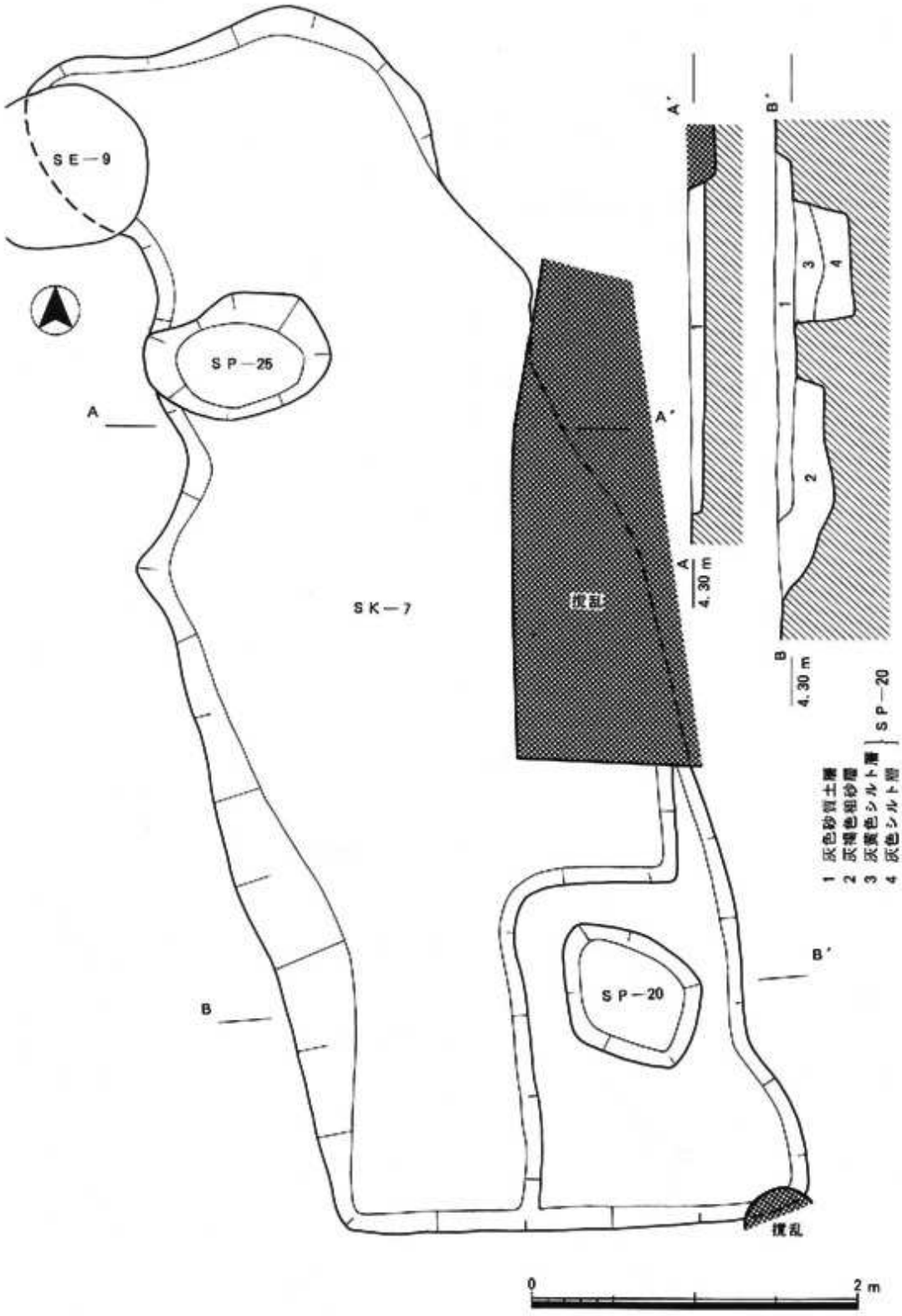
調査区中央部、土坑ＳＫ－７の北東で検出した。上面円形を呈する土坑で、南部は井戸ＳＥ－５によって切り込まれている。東西2.1ｍ・南北1.85ｍ・深さ0.7ｍを測る。断面の形状は逆台形を呈し、東肩に三日月形のテラスを有する。内部には、上層から第１層灰色砂質土・第２層淡灰色砂質土と黄灰色シルトの互層・第３層黒灰色シルトと青灰色シルトの互層、第４層灰黄色砂質土・第５層暗青灰色シルトがほぼ水平に堆積している。

遺物は、第１層から第４層の間で、土師器小皿（78～84）・中皿（85）・土釜（98・99）、瓦器椀（86～94）・小皿（95～97）、屋瓦等が多量に出土している。これらの遺物は、概ね平安時代末期に比定されるものである。

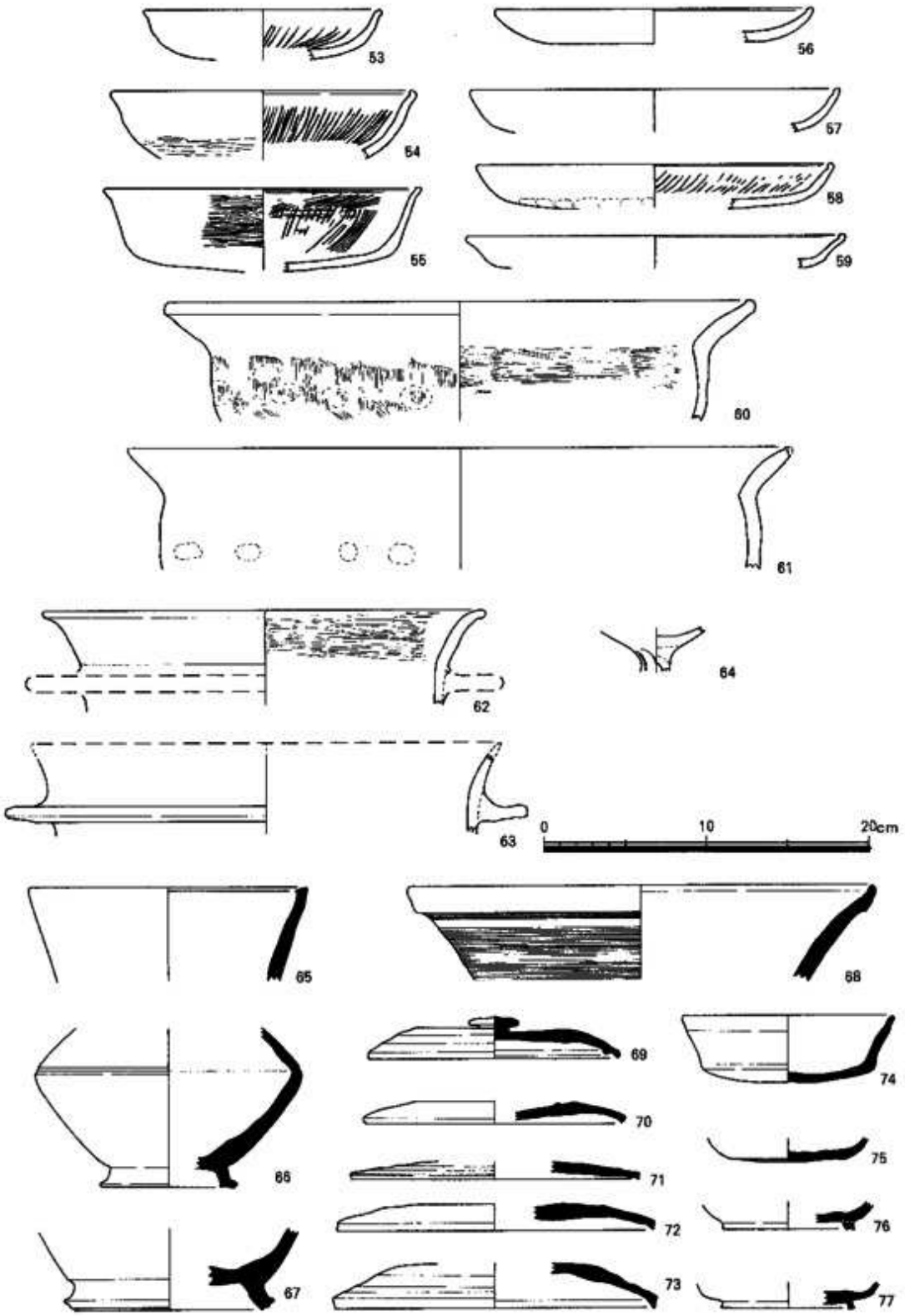
溝（ＳＤ）

ＳＤ－２

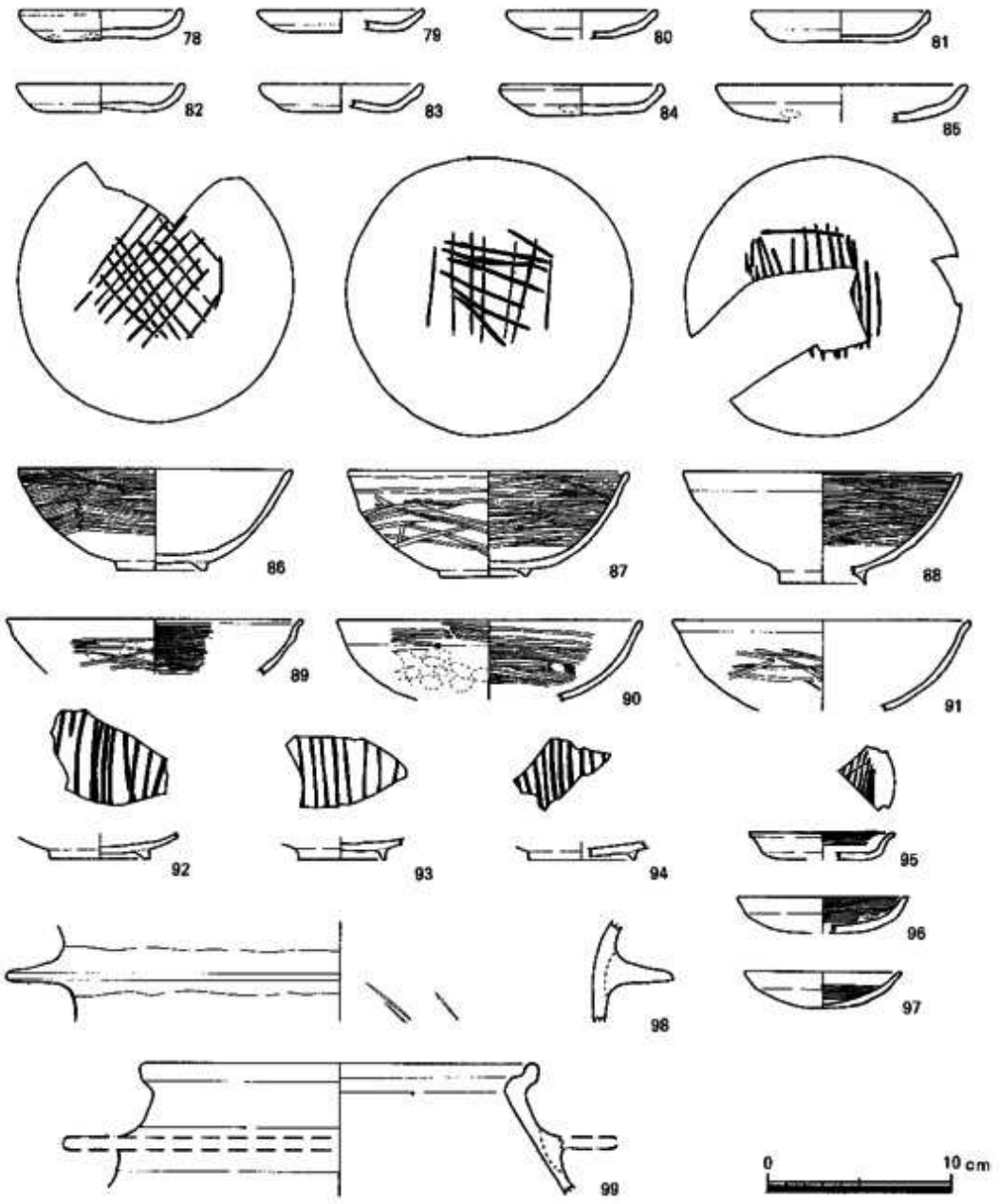
調査区西端に沿って南北方向に伸びる。溝の東肩部のみの検出であるため、数値等は不明である。内部から、土師器甕・高杯・甑・小皿・須恵器壺・こね鉢、瓦器椀、屋瓦（100～105）、中国製磁器碗（105・106）等が多量に出土しているが、すべて細片である。



第21図　SK－7平断面図



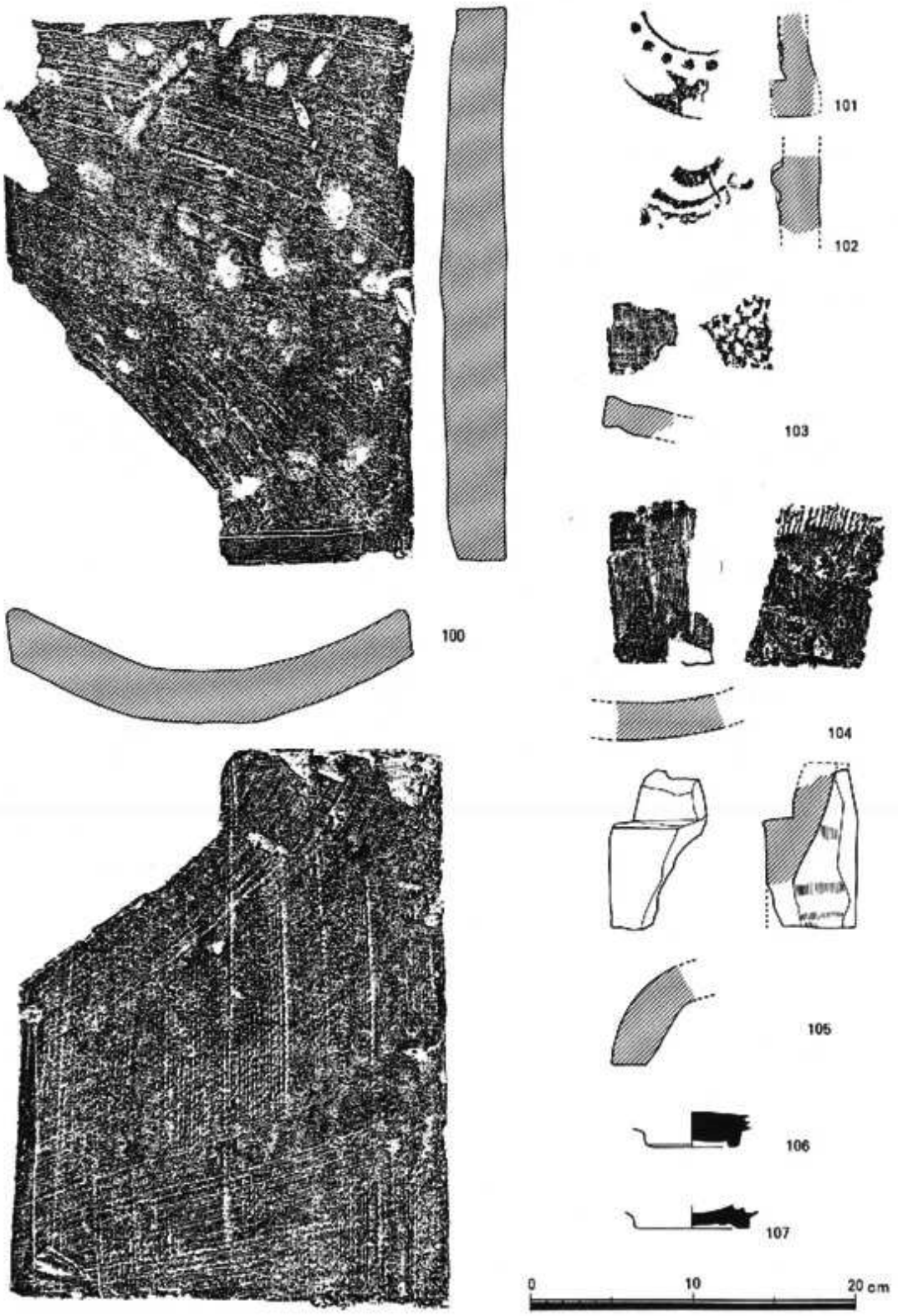
第22図　SK－7出土遺物実測図



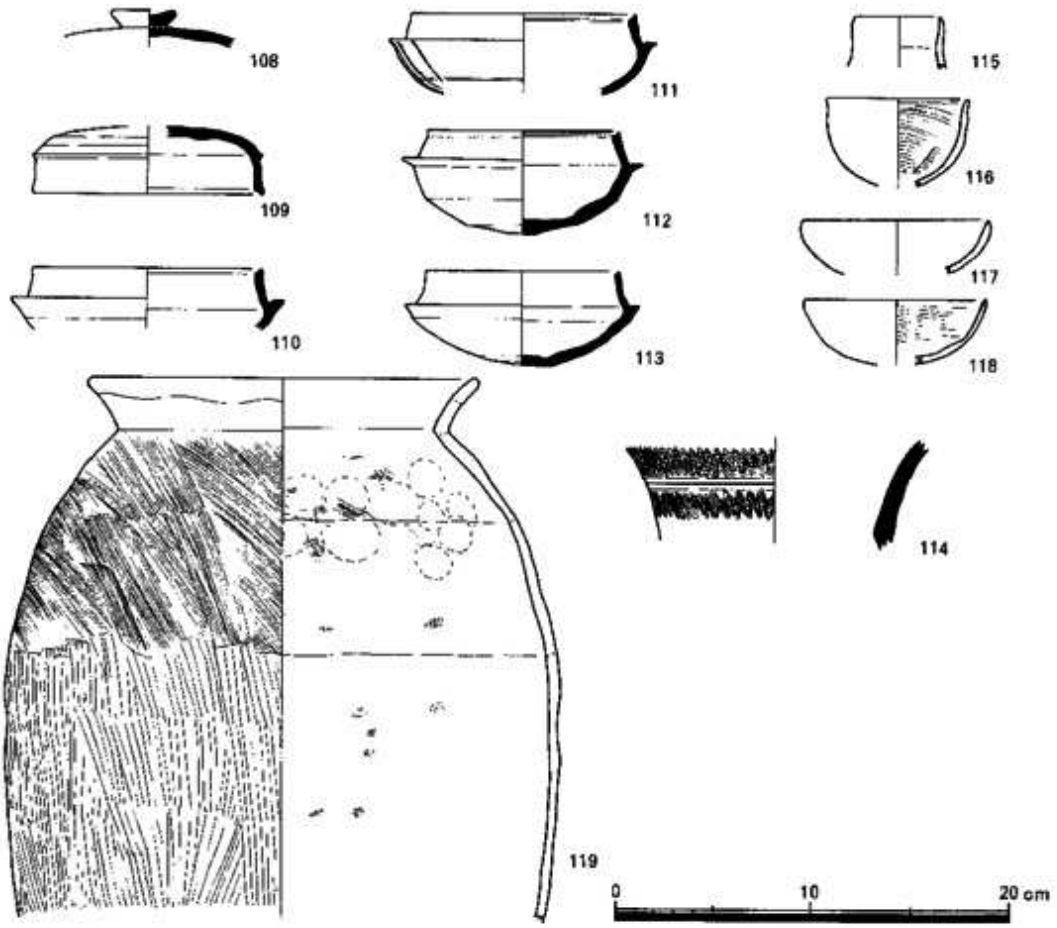
第23図　SK－8出土遺物実測図

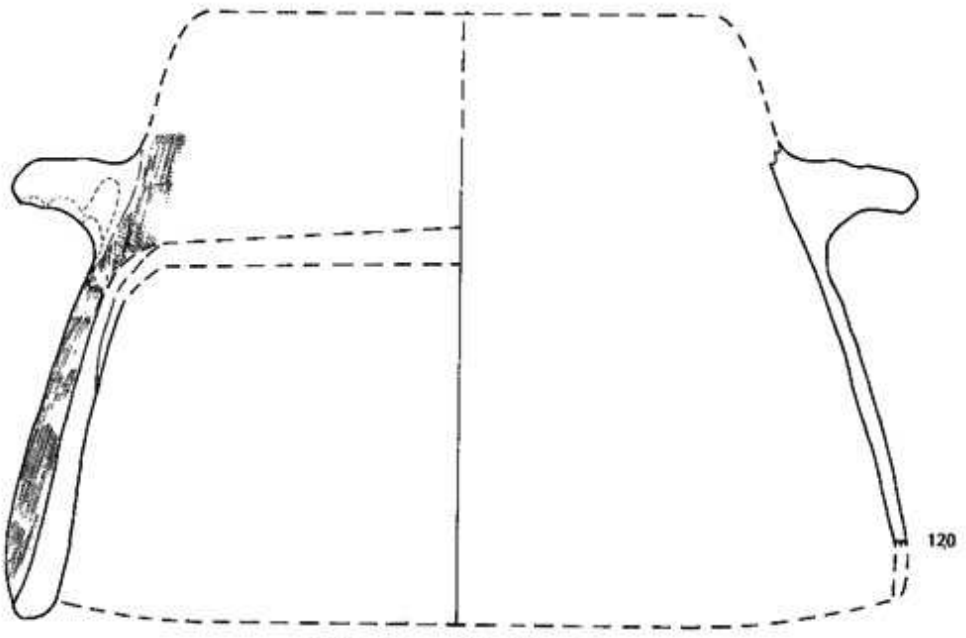
SD－3

調査区南部で検出した。東西に伸びる溝で、一部は溝SD－4によって切られている。検出長3.5m・幅0.65m前後・深さ0.13～0.2mを測る。内部から、土師器甕（119）・壷・高杯・鉢・竈（120）、須恵器杯蓋（108・109）・杯身（110～113）・壷（114）・高杯、製塩土器（115～118）等が出土している。

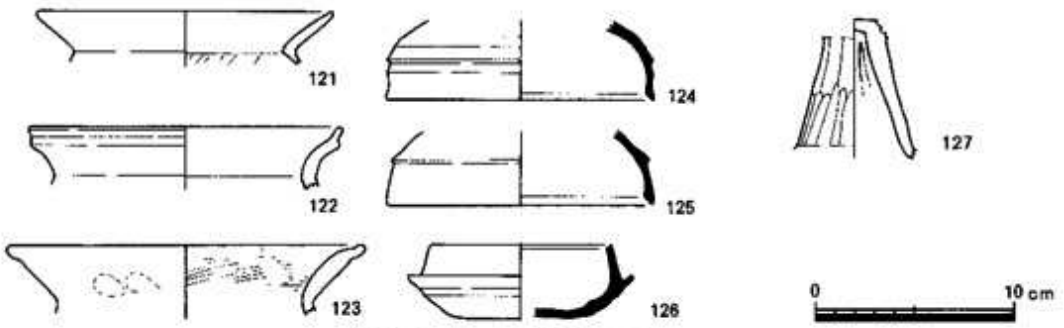


第24図　SD－2出土遺物実測図





第25図　SD－3出土遺物実測図



第26図　SD－4出土遺物実測図

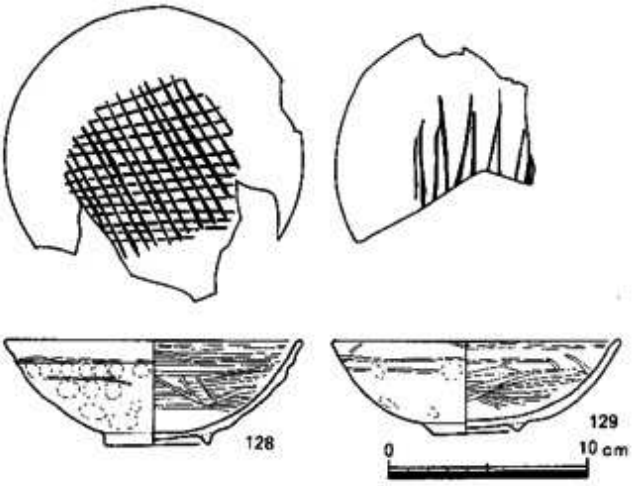
SD－4

調査区西部で検出した。南北方向に伸びる溝で、一部を井戸SE－2・SE－9に切られ、逆に溝SD－3を切っている。検出部数値で幅0.5～0.82m・深さ0.03～0.1mを測る。なお、溝底の南北の比高差が7cm前後であることから、南から北へ向う流路であったと推定される。断面の形状は逆台形を呈しており、内部は灰色砂質土1層で充填されている。遺物は、土師器甕（121～123）・高杯（127）・土釜、須恵器杯蓋（124・125）・杯身（126）・壺等の細片が少量出土している。

小穴（SP）

34個の小穴（SP－13～SP－47）を検出した。いずれも上面円形ないしは楕円形を呈するもので、上面幅0.1～0.6m・深さ0.05～0.25mを測る。これらの小穴は、出土遺物からみても古墳時代前期（庄内式期）・古墳時代中期・古墳時代後期・鎌倉時代前期の4時期に区別することが可能であるが、一時期ごとのまとまりとして捉えることは困難である。

SP－20・SP－21・SP－24・SP－27・SP－28・SP－30からは庄内甕を主とする古墳時代前期の遺物、SP－13からは古墳時代中期、SP－38からは古墳時代後期に比定される遺物、SP－14・SP－22・SP－26からは瓦器椀（128・129）を主とする鎌倉時代前期の遺物が出土している。なお、鎌倉時代前期のSP－14・SP－22・SP－26は、掘立柱建物を構成する柱穴の可能性が考えられる。



第27図　SP－26出土遺物実測図

＜第3調査面＞

現地表下0.8～1.0m（標高4.7～4.8m）付近を調査対象面とした。ただ、調査地の旧地形に起因するものか堆積土層は複雑であり、調査対象土層も東部では黄灰色シルト混粘質土、西部では灰褐色砂質土層に大別される。調査の結果、鎌倉時代前期～中期に比定される掘立柱建物1棟（SB－1）・井戸5基（SE－5～SE－9）・土坑2基（SK－9・SK－10）・溝8条（SD－5～SD－12）・小穴51個（SP－48～SP－98）を検出した。

第3調査面では小面積にもかかわらず、調査区北部で井戸5基、南部ではL字形に開掘された小溝群を検出した。これらの遺構配置からみて、南部は住居域、北部にはこの住居に附随した井戸・土坑が配され、一つの生活空間が作られていたことが窺える。また、南部で検出したL字形の小溝群は、排水機能とともに住居を区画する役割を果たしたものと推定できる。したがって、これらの小溝群は住居の建て替えに伴って移動・拡大したものと理解でき、調査区北部で5基の井戸が集中している事実は、これらの住居移動に関連した遺構として捉えることができる。なお、5基の井戸の存続時期は、概ね11世紀後半から13世紀末期に比定することが可能であることから、約200年にわたって同地点で同様の土地利用がなされていたことが窺える。

掘立柱建物（SB）

SB－1

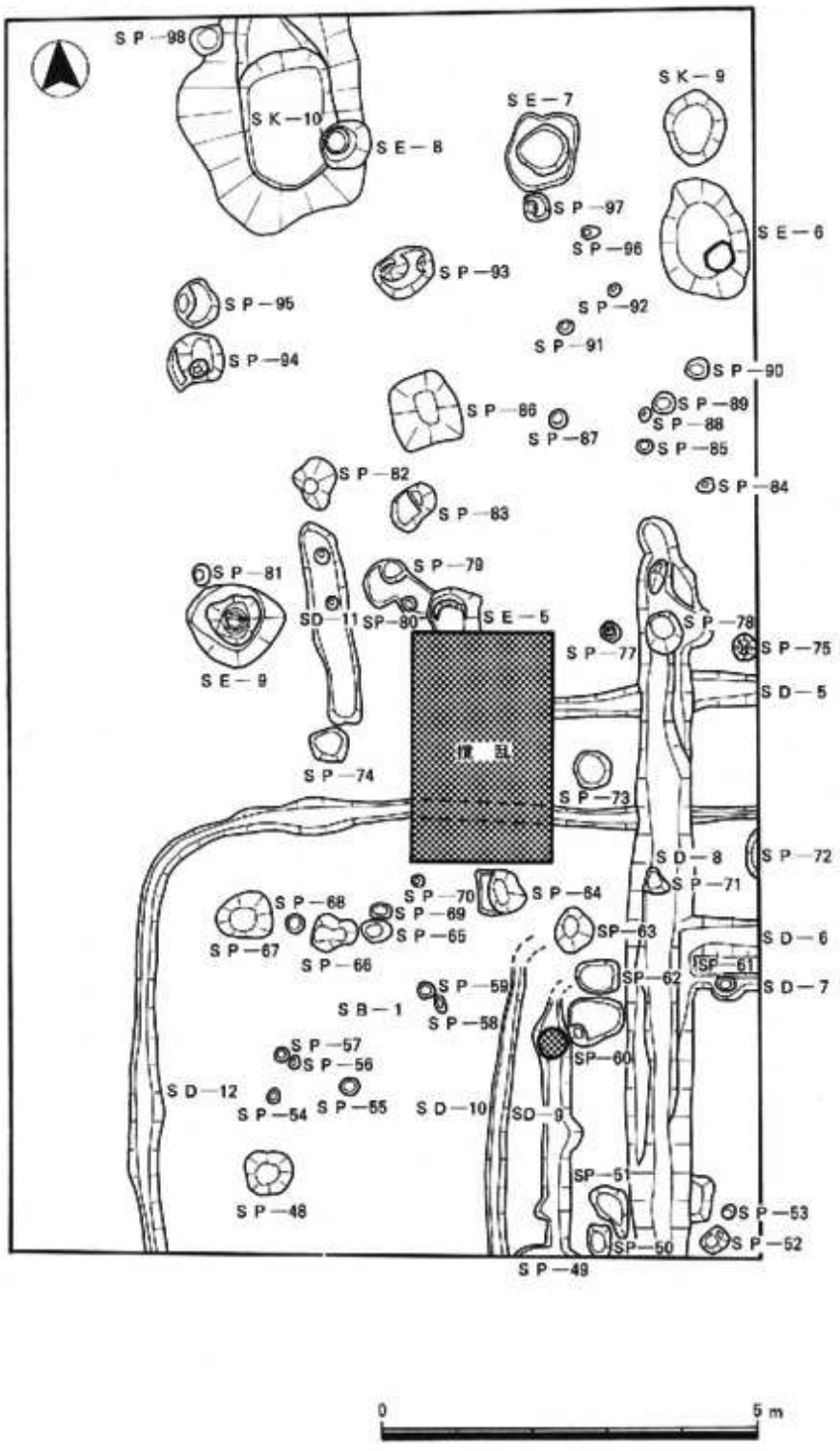
調査区南部で検出した。柱穴SP－48・SP－67・SP－64・SP－72で構成されている。東西2間・南北1間分を検出したが、南部および東部が調査区外のため、全体の規模や柱穴配置等の詳細は不明である。柱間は東西・南北方向ともに3.9mを測る。柱穴は、円形ないしは楕円形を呈しており、径0.5m前後・深さ0.05～0.74mを測る。なお、当遺構を囲繞する形で溝SD－12が存在しており、建物に附随した遺構と考えられる。

遺物は、SP－48から土師器小皿、瓦器椀・小皿（402）、SP－67から土師器小皿（394）・中皿（400）、瓦器椀（376・377・380）、SP－69から土師器小皿・土釜等が出土している。

井戸（SE）

SE－5

調査区中央で検出した。東西1.1m・南北0.8m・深さ0.95mを測る楕円形の掘形の中央に、曲物1段と土釜3段を積み上げて井戸側とする井戸である。最下段の曲物井戸側は径0.36m・高さ0.27mを測り、底部は自然河道NR－1の内部堆積に当たる褐色粗砂に達している。土釜井戸側の積み方は、まず曲物井戸側の上部に土釜（144）を水平に置き、その上に鍔部以上のみ遺存する土釜を倒立させて置き、その内側へ2段めの土釜（145）を正立させて挿入する。3段めの土釜（146）の設置も2段めと同様の方法で行われるが、2段めのように挿入せず、鍔裏面上に乗せている。この時上部を水平に保つため、鍔裏面と3段めの土釜の間に小石を詰



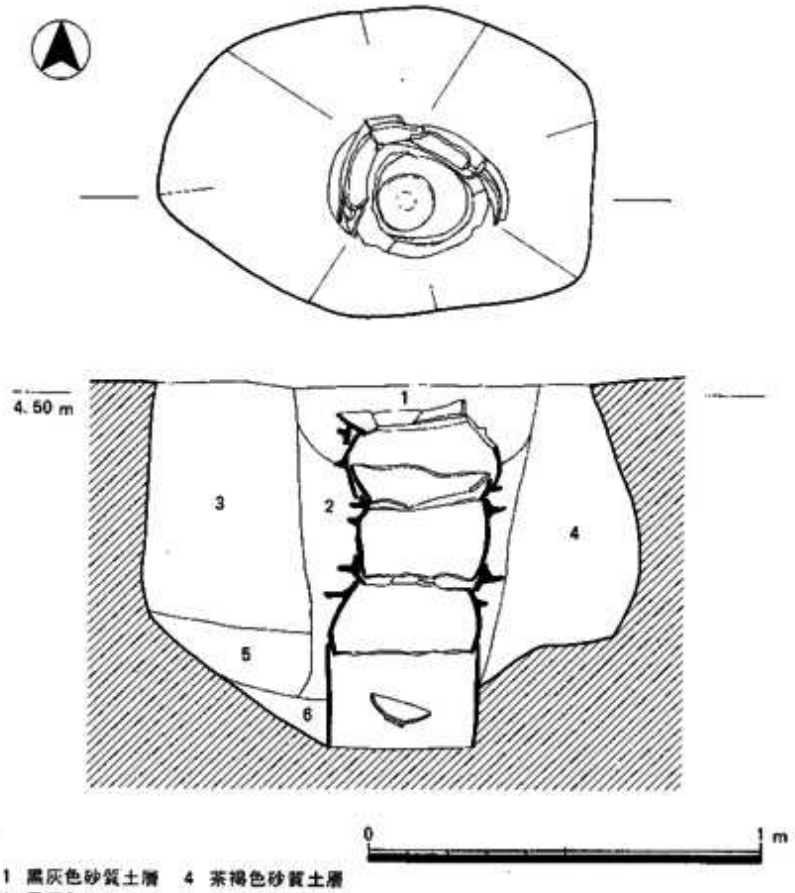
第28図　第３調査面検出遺構平面図

めている。井戸内および掘形内には、第1層黒灰色砂質土・第2層黒灰色シルト・第3層暗灰色シルト・第4層茶褐色砂質土・第5層灰黒色シルト・第6層褐色粗砂が堆積している。このうち第6層は、前述のように自然河道NR－1の内部堆積土に当たる。

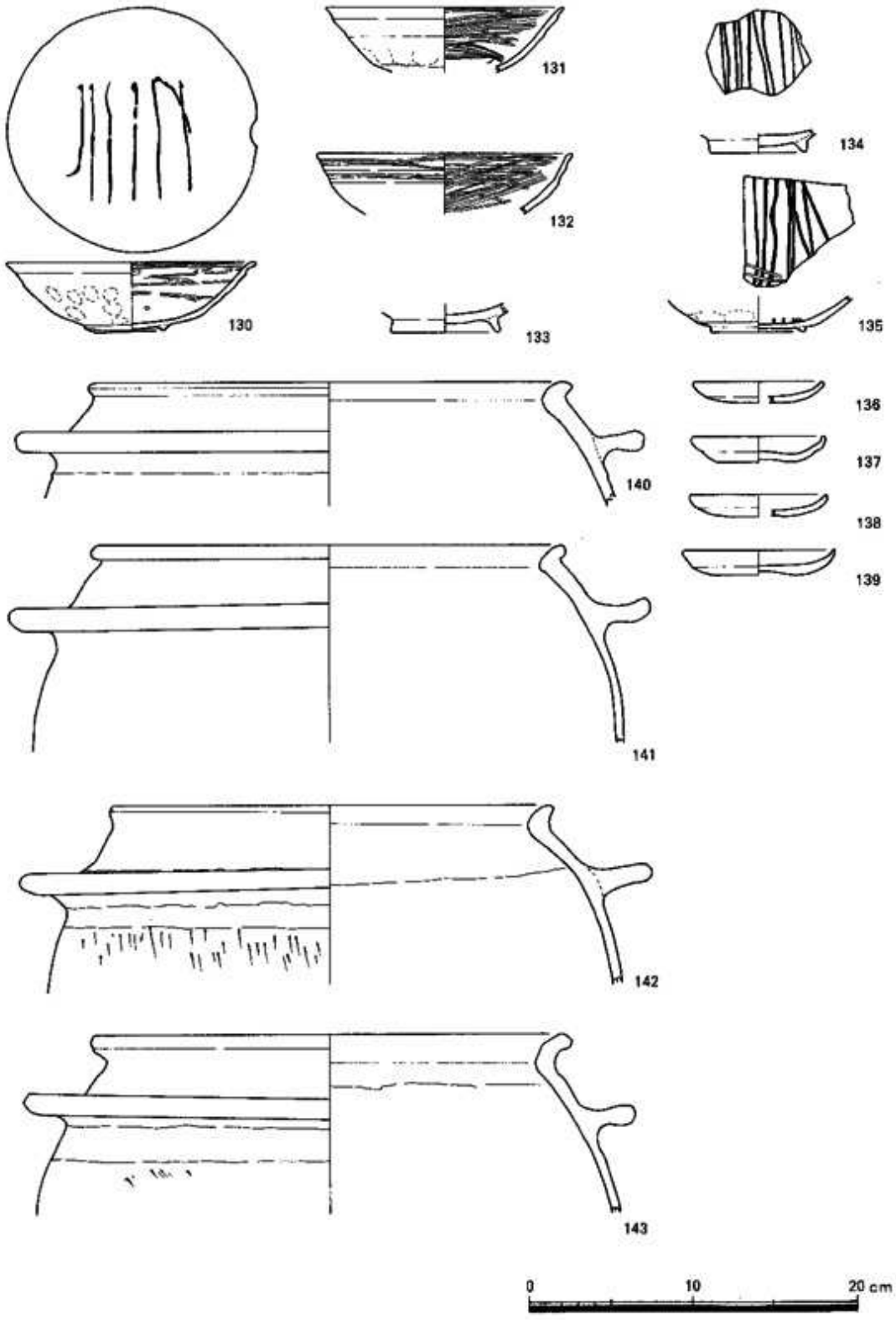
遺物は、井戸側に使用された曲物・土釜の他に、井戸内・掘形内から、黒色土器椀（133）、土師器小皿（136～139）・土釜（140～146）、須恵器、瓦器椀（130～132・134・135）、屋瓦等が多量に出土している。

SE－6

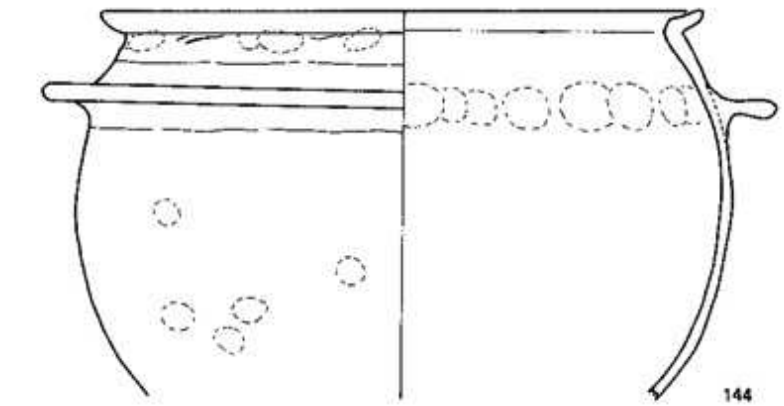
調査区北東部で検出した。2段の掘形を有する井戸である。上段の掘形は上面楕円形を呈するもので、東西1.25m・南北1.6m・深さ0.6～0.7mを測る。下段の掘形は上段掘形の南部に位置しており、上面円形を呈し、径0.7m・深さ0.6～0.7mを測る。その掘形の東部寄りに曲物を積み、井戸側としている。曲物井戸側は下から3段めまでは完存していたが、4段め

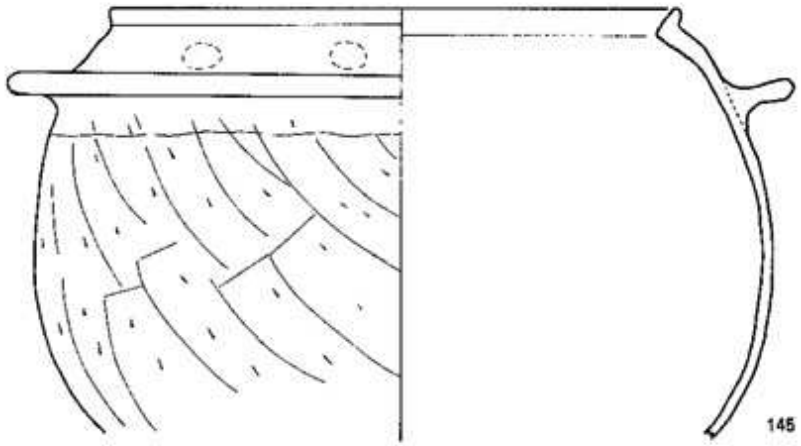


第29図　SE－5平断面図



第30図　SE－5出土遺物実測図1





第31図　SE－5出土遺物実測図2

は上部が欠損しており、遺存部分の高さは0.82mを測る。曲物井戸側の構築に際しては、下部から上部へ行くに従って径の大きい物を重ねており、曲物径は下部から順に30cm・36cm・40cm・42cmを測る。なお、最下段の曲物井戸側（165）の外面には墨書が認められた。井戸内・掘形内には、第1層暗灰色砂質土・第2層灰黄色シルト・第3層青灰色シルト・第4層灰色粗砂・第5層暗灰色シルト・第6層淡青灰色シルト・第7層灰色粘土と黄灰色砂質土の7層が堆積している。

遺物は、井戸内および掘形内から、土師器小皿（147～151）・土釜（164）、瓦器椀（152～158）・瓦器小皿（159・160）、須恵器鉢（161・162）、屋瓦（163）等が多量に出土している。

最下段の曲物井戸側に記されていた墨書の内容は、以下のとおりである。

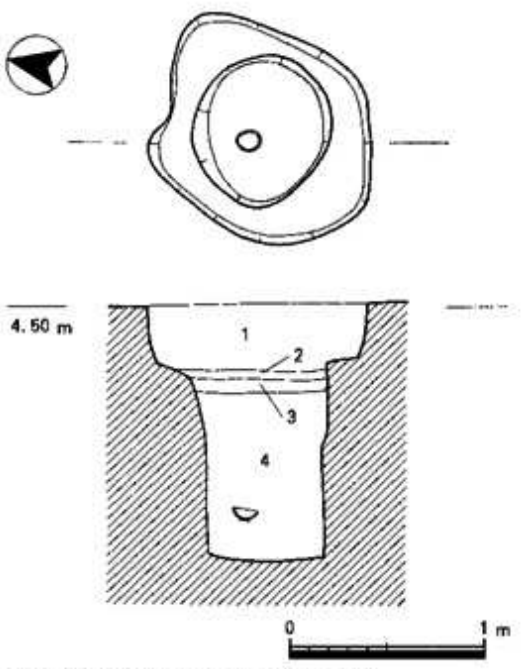
「行勝房斎カ」也保元三年十二月四日儲也」

以上の記述内容から、この曲物容器の本来の使用目的は2通りに解釈できよう。1）「斎」をトキと読めば、トキには仏家の食事に関連した事柄が推定されることから、行勝という名の僧侶が食事に使用した器、ないしは食器類を収めた容器。2）「斎」をサイと読めば、サイには神仏を祀るとき身体を清くたもつ意味があることから、僧行勝が禊を行うために使用した器。

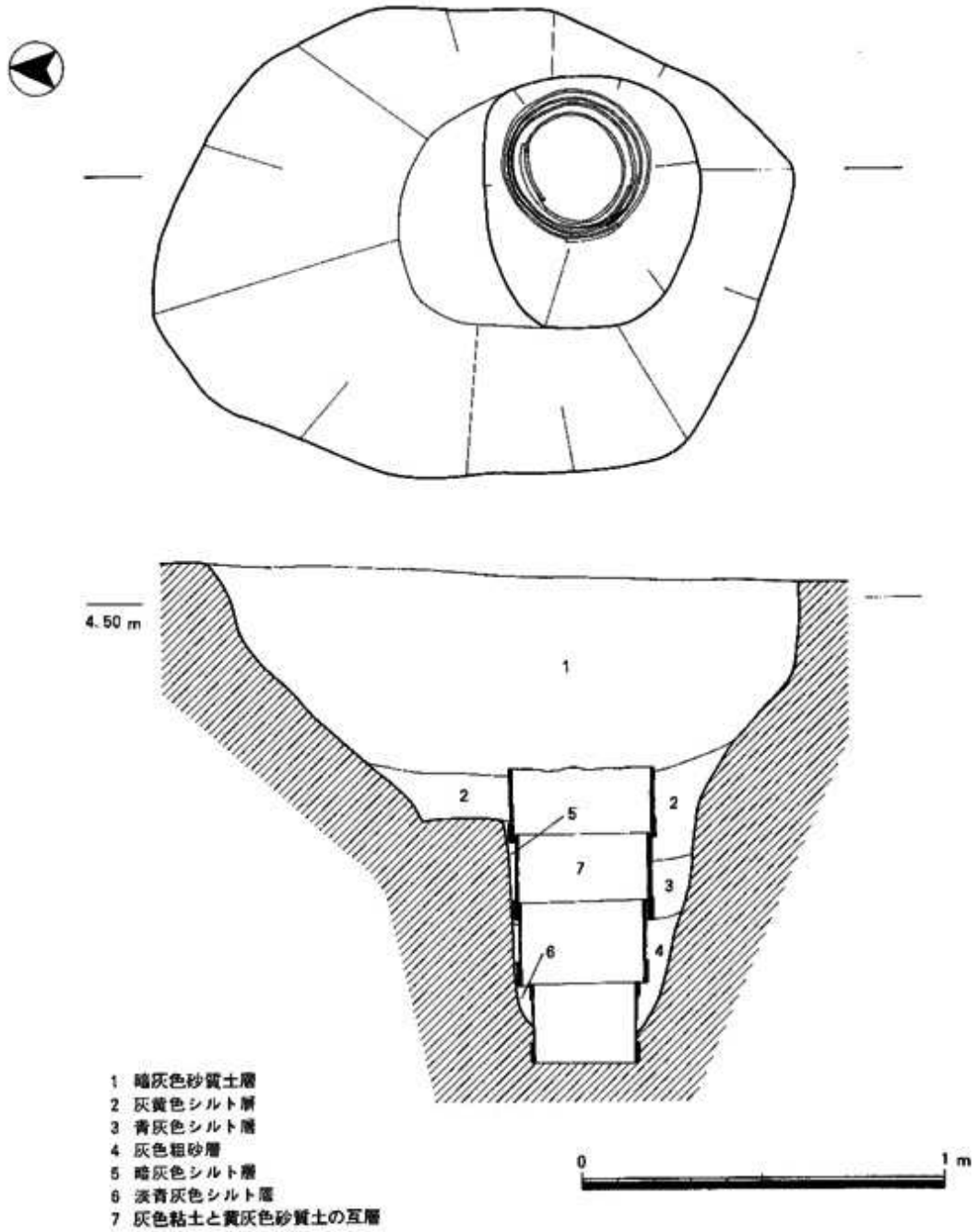
なお、保元三年は1158年に当たり、井戸内出土遺物とは約150年の時期差が認められることから、この曲物は長期間保存された後、井戸側として再利用されたものと理解できる。

SE－7

調査区北部で検出した。上面円形を呈する素掘り井戸である。2段の掘形を有するもので、上部径1.1m・下部径0.6m・深さ1.3mを測る。内部には、上層から第1層淡灰茶色砂質土・第2層淡灰色粘砂土・第3層灰色粘質シルト・第4層灰色粘質シルトと青灰色シルトの互層がほぼ水平に堆積している。井戸底は包水層である青灰色シルトに達しており、調査中湧水が認められた。



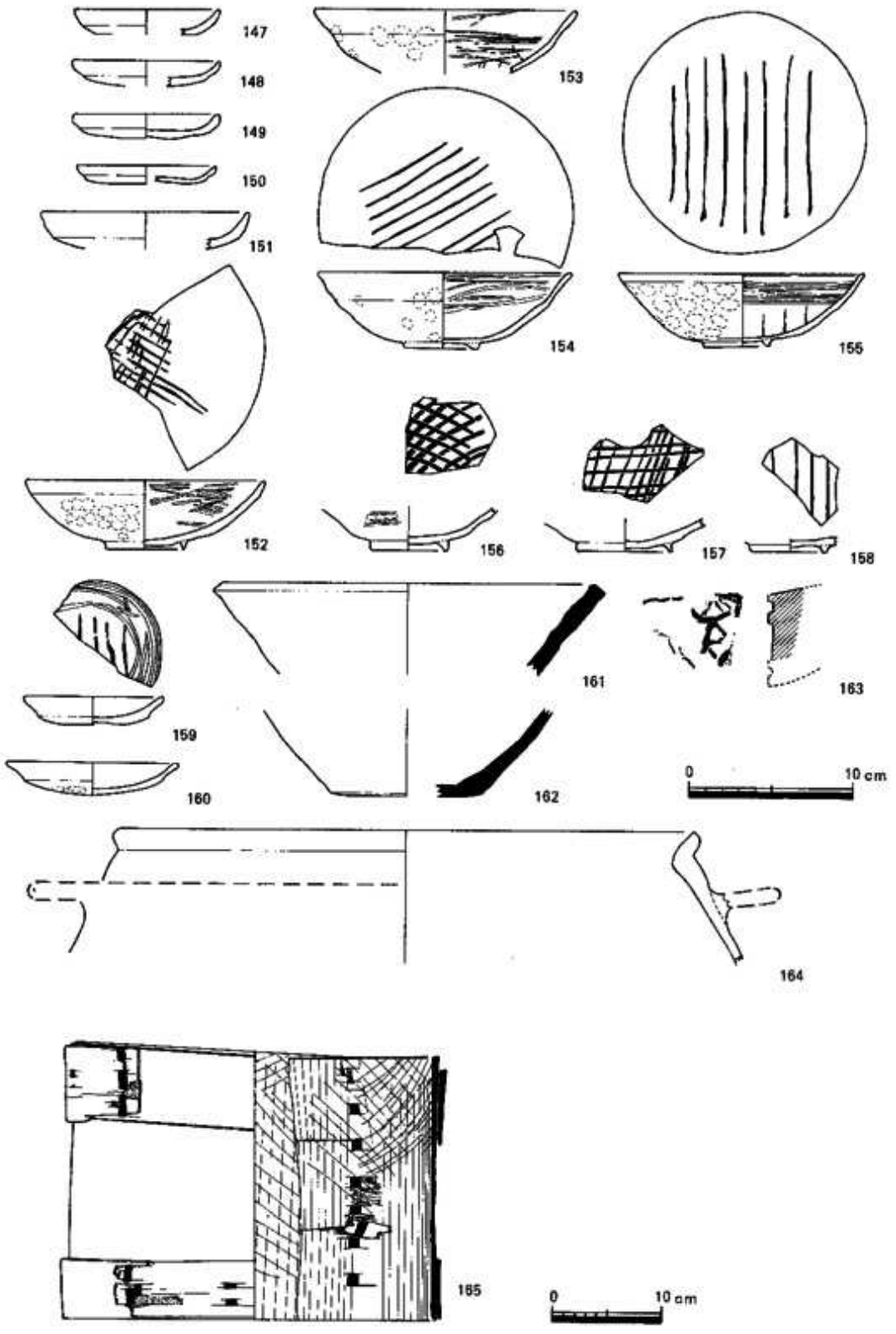
第32図　SE－7平断面図



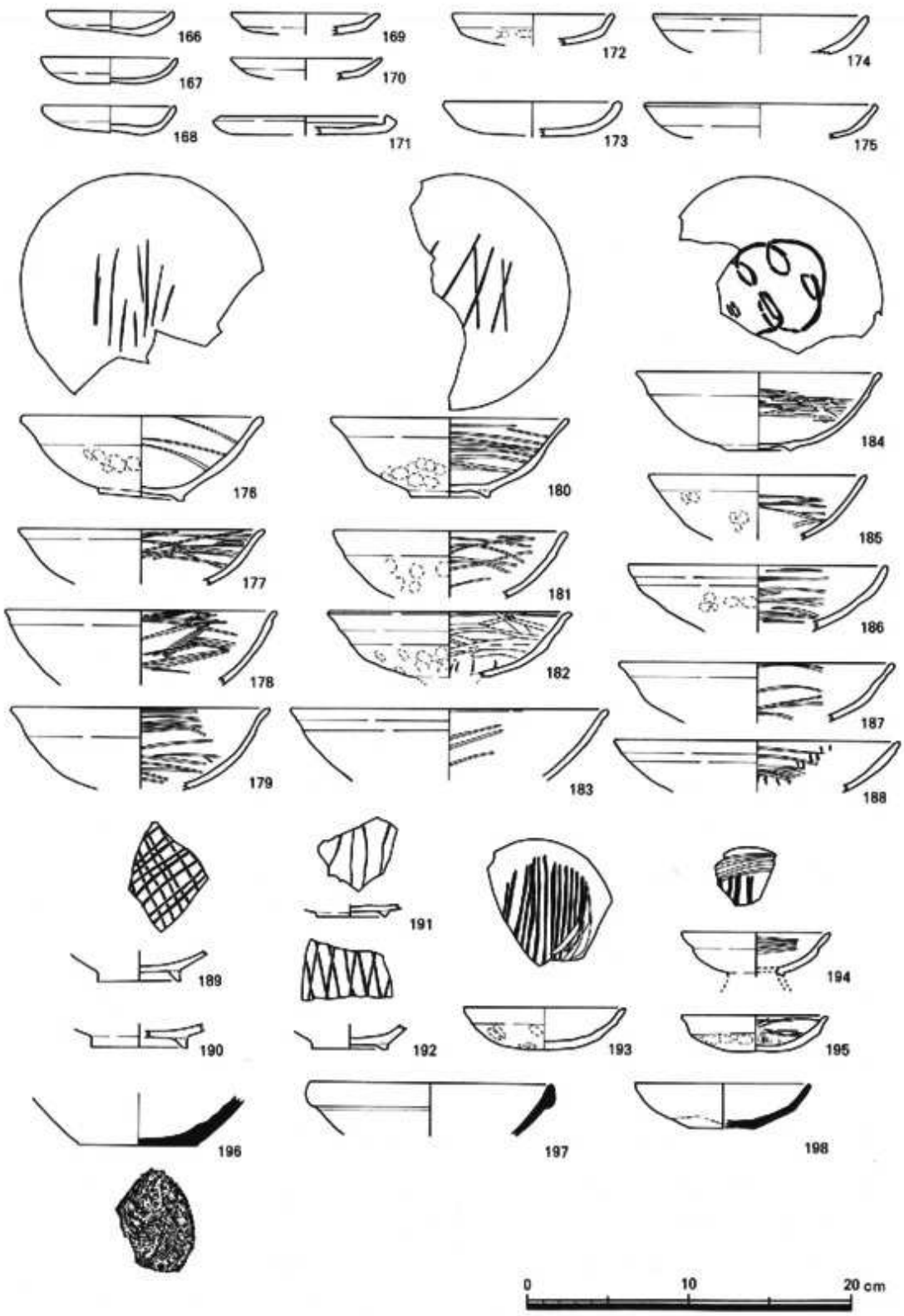
第33図　SE－6 平断面図

遺物は、第1層から土師器小皿（166～173）・中皿（174・175）、須恵器鉢（196）、瓦器椀（176～192）・小皿（193～195）、屋瓦、中国製磁器（197・198）等が出土し、第4層から土師器小皿（199～206）、瓦器椀（207～213）等が出土している。

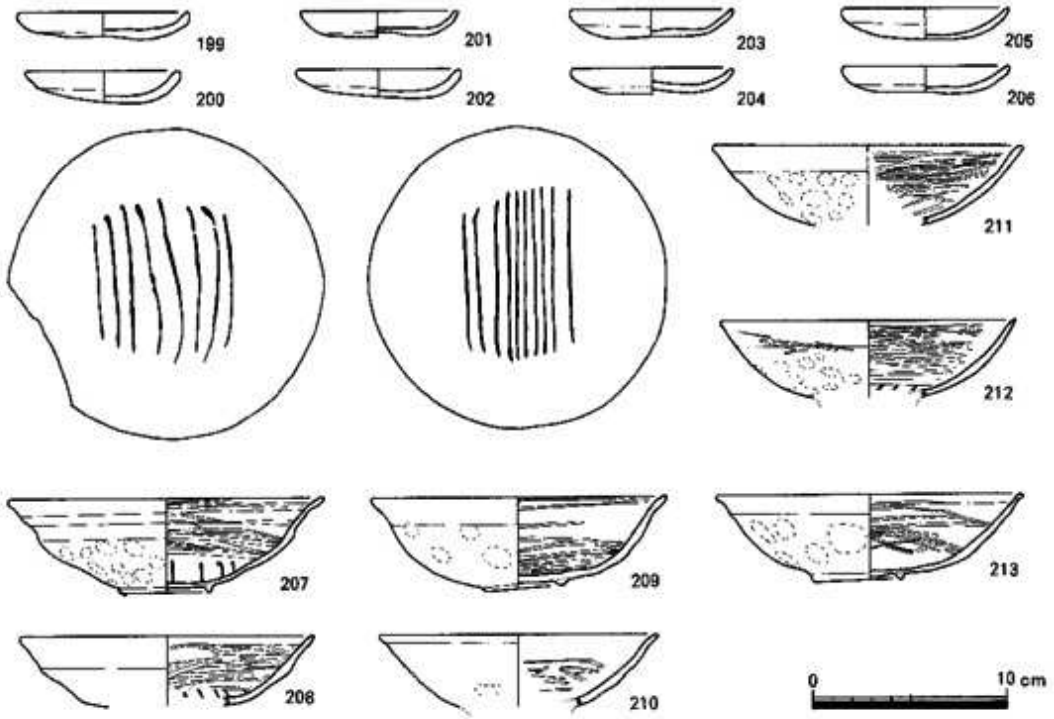
なお、ここでは一応素掘り井戸として捉えたが、内部の堆積状況等から推察すれば、曲物等の井戸側が存在していた可能性が高い。



第34図　SE－6出土遺物実測図



第35図　ＳＥ－７第１層出土遺物実測図



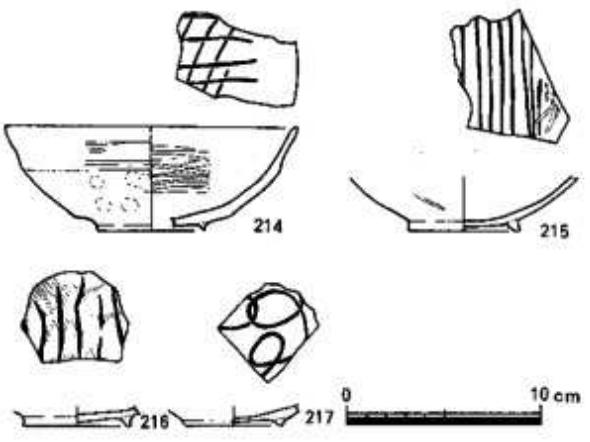
第36図　SE－7第4層出土遺物実測図

SE－8

調査区の北西部で検出した。土坑SK－10の東部を切り込んで構築されている曲物井戸である。上面の形状は楕円形を呈し、長径0.8m・短径0.7m・深さ0.8mを測る。曲物井戸側は最下の1段のみが遺存していた。掘形内には、上層から第8層茶灰色砂質土・第9層灰色粘土・第10層暗灰色シルト粘土の各層が堆積しており、井戸底は湧水層である青灰色シルトに達している。

遺物は、曲物井戸側内部から、瓦器椀（214～217）、屋瓦等の細片が少量出土している。

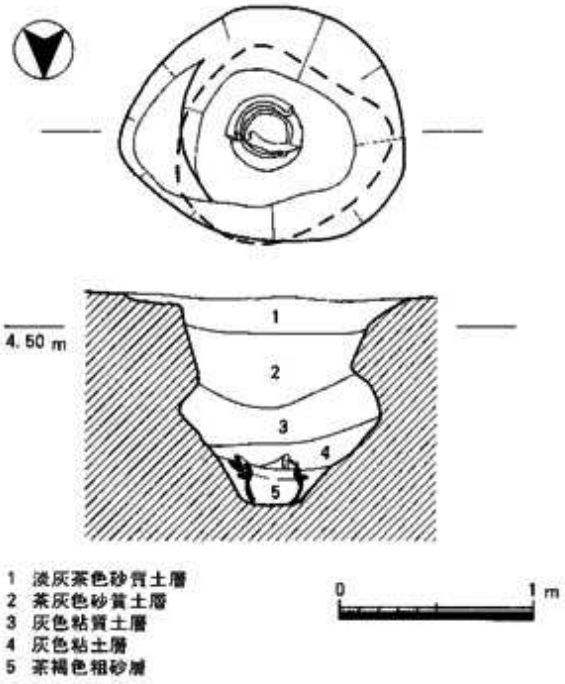
なお、SK－10との先後関係をSK－10内部の土層堆積状況から推察すれば、SK－10が第2層まで堆積した段階でSE－8が新たに掘削されたものと考えられる。またSE－8の使用時には、SK－10の上部窪地を含めて機能していたことが窺える。



第37図　SE－8出土遺物実測図

SE－9

調査区の中央部西寄りで検出した。長径1.44m・短径1.22m・深さ1.1mを測る楕円形の掘形中央に土釜井戸側を置く井戸である。土釜井戸側は最下の1段と、上段の破片のみが遺存しており、他は廃絶時に取り去られたものと推定される。なお、下部は袋状に広がっていることから、廃絶後の一定期間は湧水していたものと推定される。内部には、上層から第1層淡灰茶色砂質土・第2層茶灰色砂質土・第3層灰色粘質土・第4層灰色粘土・第5層茶褐色粗砂が堆積しており、このうち第5層は自然河道NR－1の内部堆積土に当たる。



第38図　SE－9平断面図

遺物は、第1層～第4層の各層から土師器小皿（218～223）・中皿（224～226）・土釜（233・234）、須恵器、瓦器椀（227～231）・小皿、中国製磁器、屋瓦等が多量に出土している。

土坑（SK）

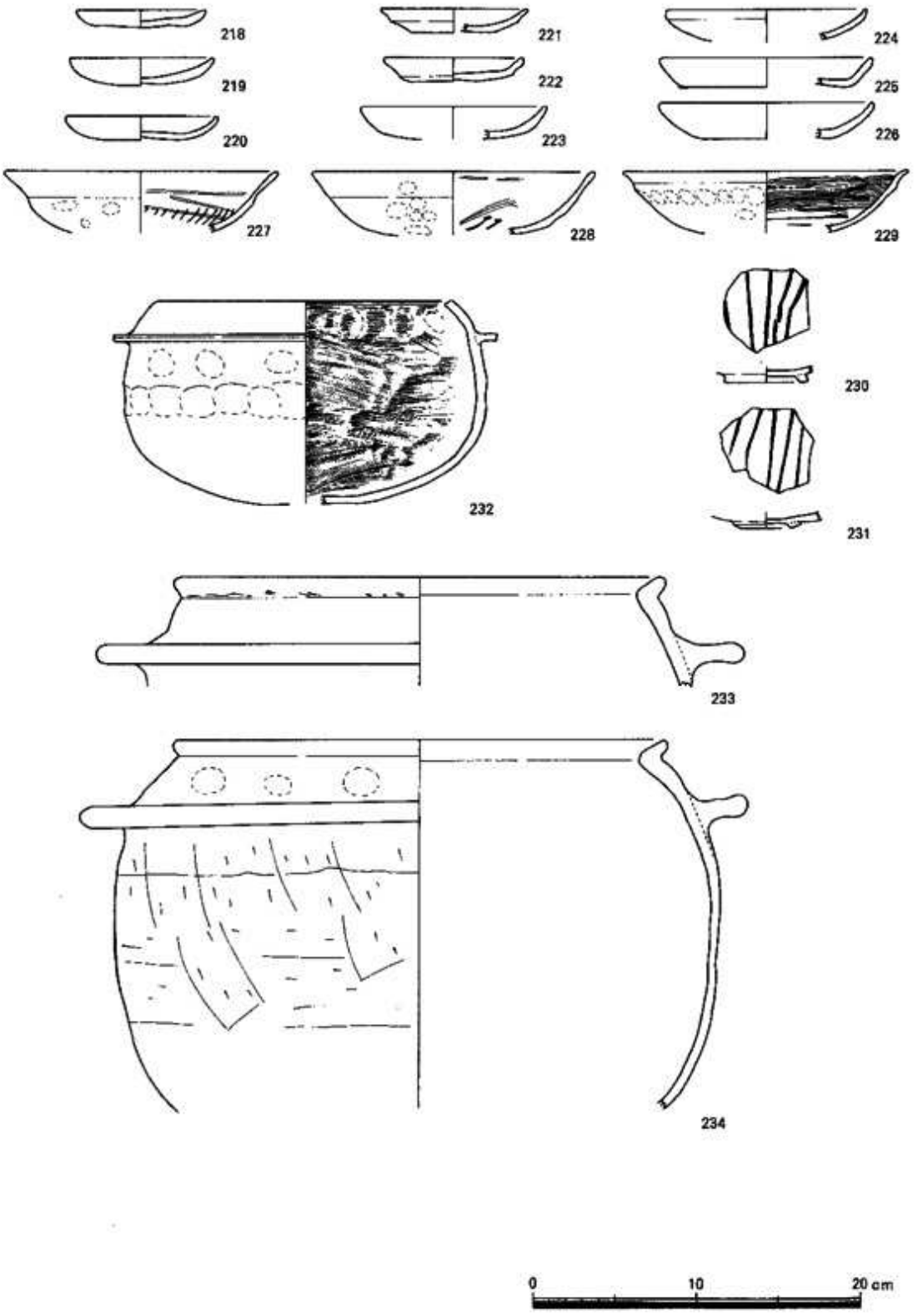
SK－9

調査区の北東部で検出した。上面楕円形を呈する土坑で、東西0.9m・南北1.12m・深さ0.32mを測る。断面の形状は擂鉢状で、内部には淡灰茶色砂質土1層のみが堆積していた。遺物は出土しなかった。

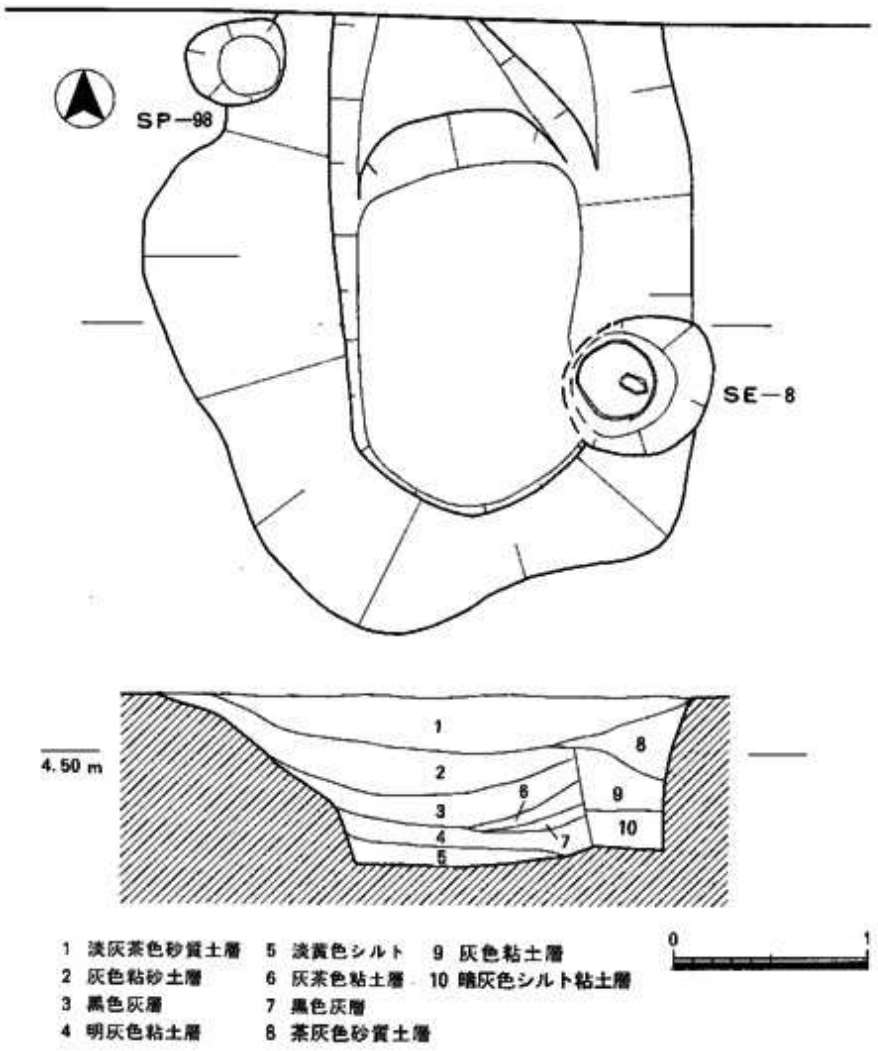
SK－10

調査区の北西部で検出した。上面は南北に長い楕円形を呈するもので、東部には井戸SE－8北東部にSP－98が構築されている。北部は調査区外へ至るため全容は不明であるが、検出部で東西1.4m・南北3.2m・深さ0.6～0.9mを測る。内部堆積土は、第1層淡灰茶色砂質土・第2層灰色粘砂・第3層黒色灰・第4層明灰色粘土・第5層淡黄色シルト・第6層灰茶色粘土・第7層黒色灰からなる。

遺物は主に第3層から、土師器杯（295）・椀（290）・小皿（235～279）・中皿（280～289・291～294）・鍋（296）・土釜（297）、須恵器鉢（298）、瓦器椀（299～324）、屋瓦（325～334）、中国製磁器等が多量に出土している。



第39図　SE－9出土遺物実測図



第40図　SK−10平断面図

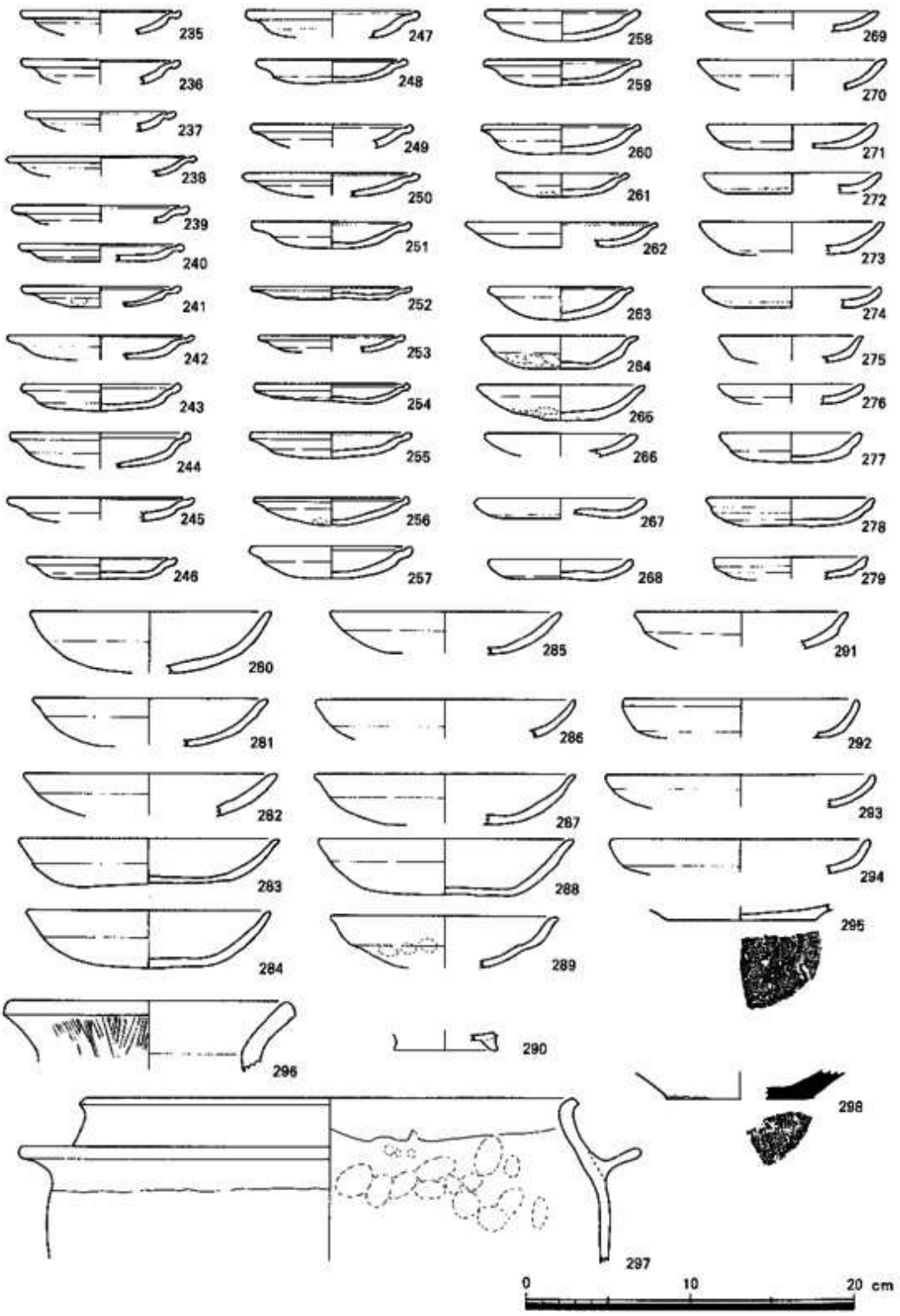
溝（SD）

SD−5

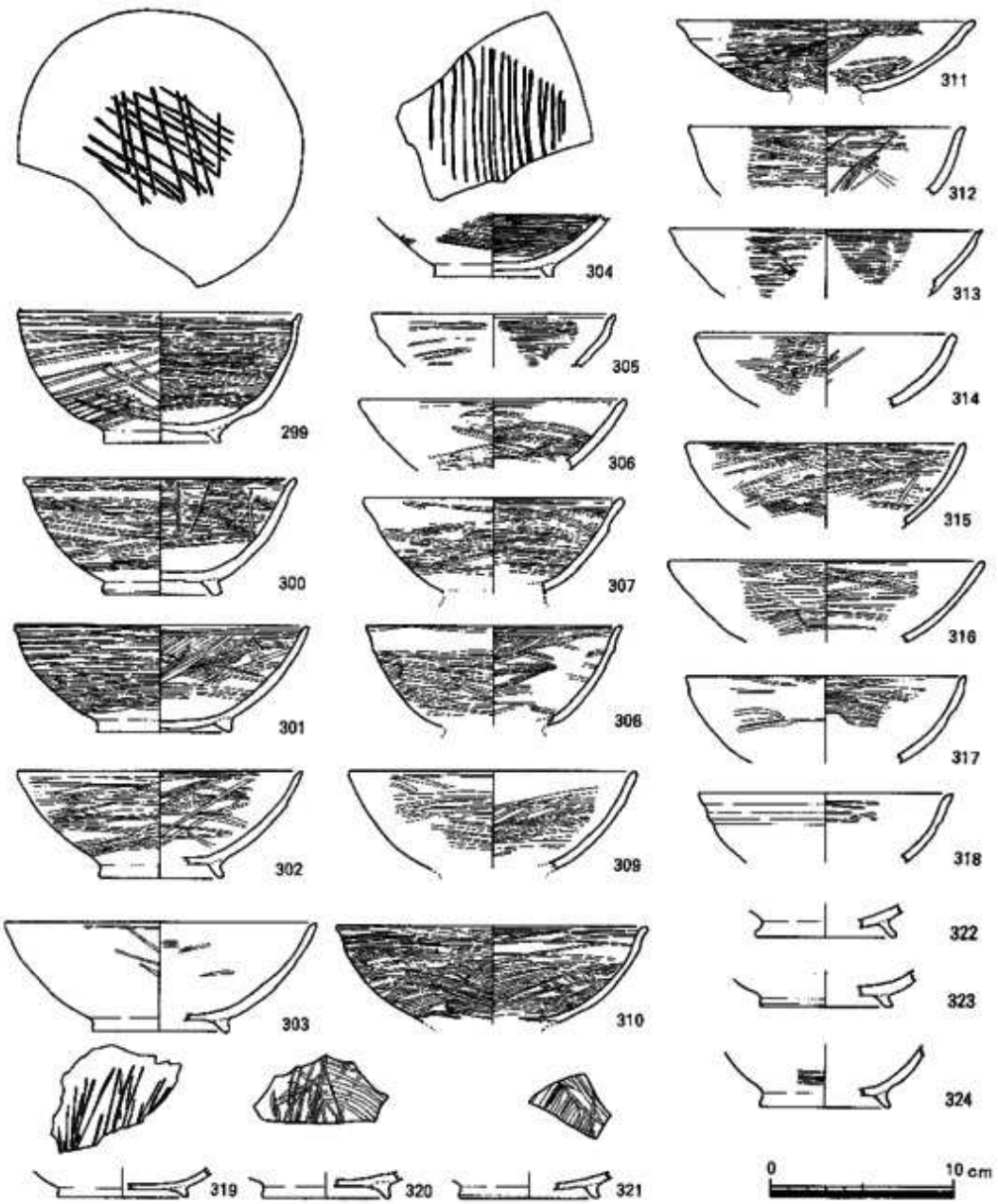
調査区の東部で検出した。東西方向に伸びる溝で、一部を溝SD−8に切られている。幅0.3〜0.6m・深さ0.04〜0.25m・検出長3.9mを測る。内部は灰色シルト1層で充填されている。遺物は出土しなかった。

SD−6

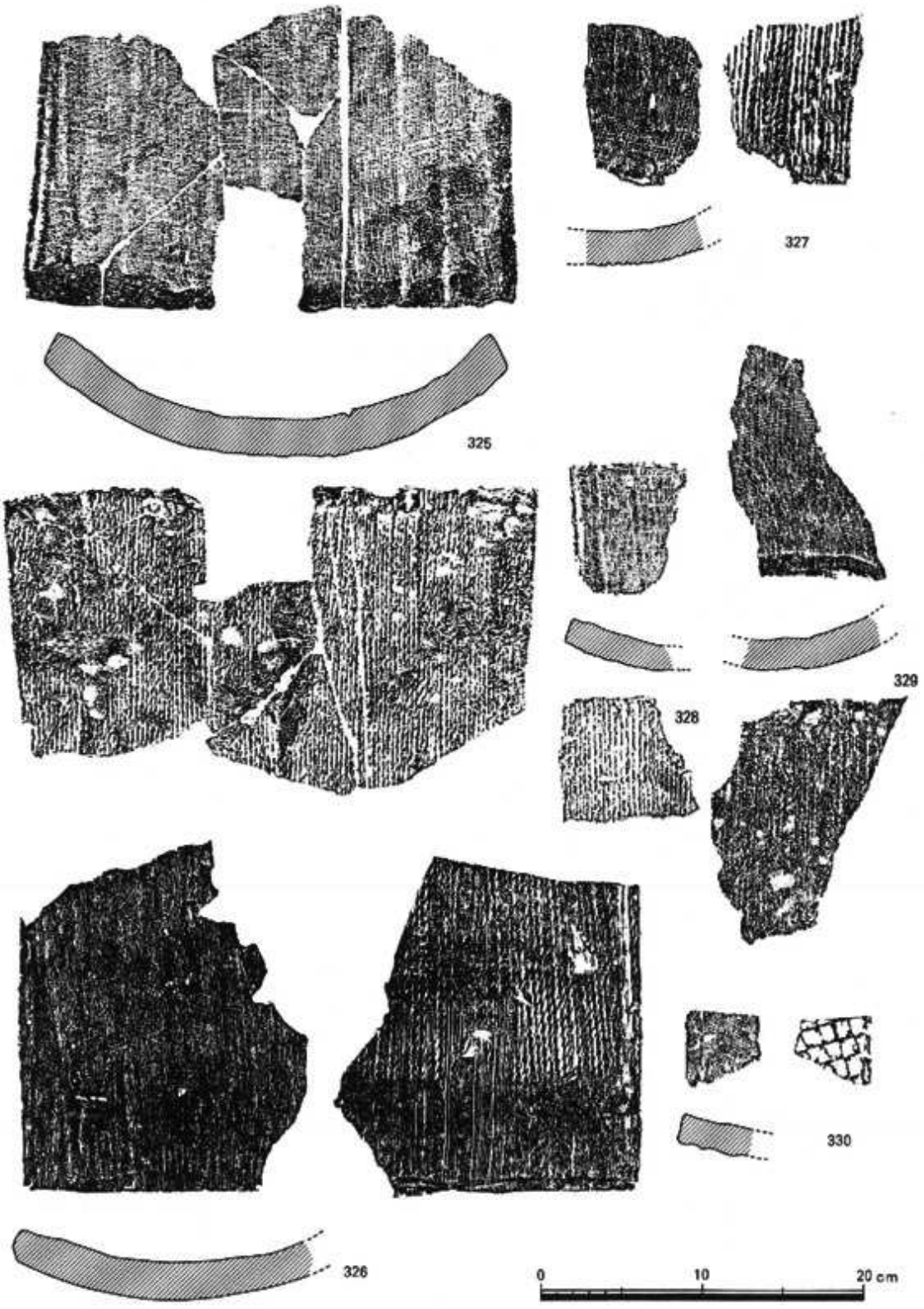
調査区の東部、SD−5の南で検出した。東西方向に伸びる溝で、西端は溝SD−8に合流している。幅0.6m・深さ0.25m・検出長1mを測る。内部は黄灰色砂質土1層で充填されている。遺物は出土しなかった。



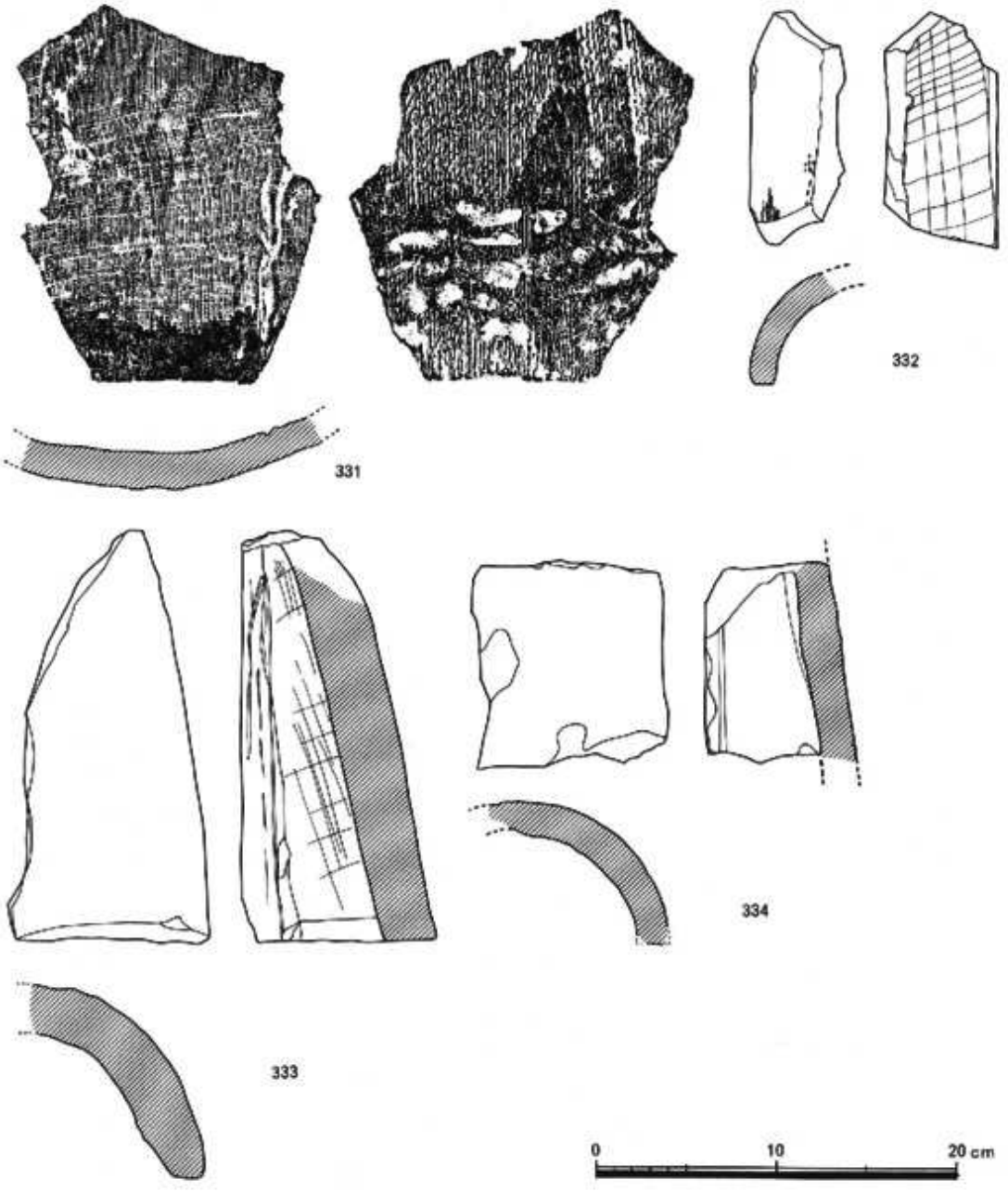
第41図　SK－10出土遺物実測図1



第42図　SK－10出土遺物実測図2



第43図　SK－10出土遺物実測図３



第44図　SK－10出土遺物実測図4

SD－7

溝SD－6の南に平行して伸びる溝で、西端は溝SD－8と合流している。幅0.2m・深さ0.12m・検出長1mを測る。内部はSD－6と同様、黄灰色砂質土1層で充填されている。遺物は出土しなかった。

SD－8

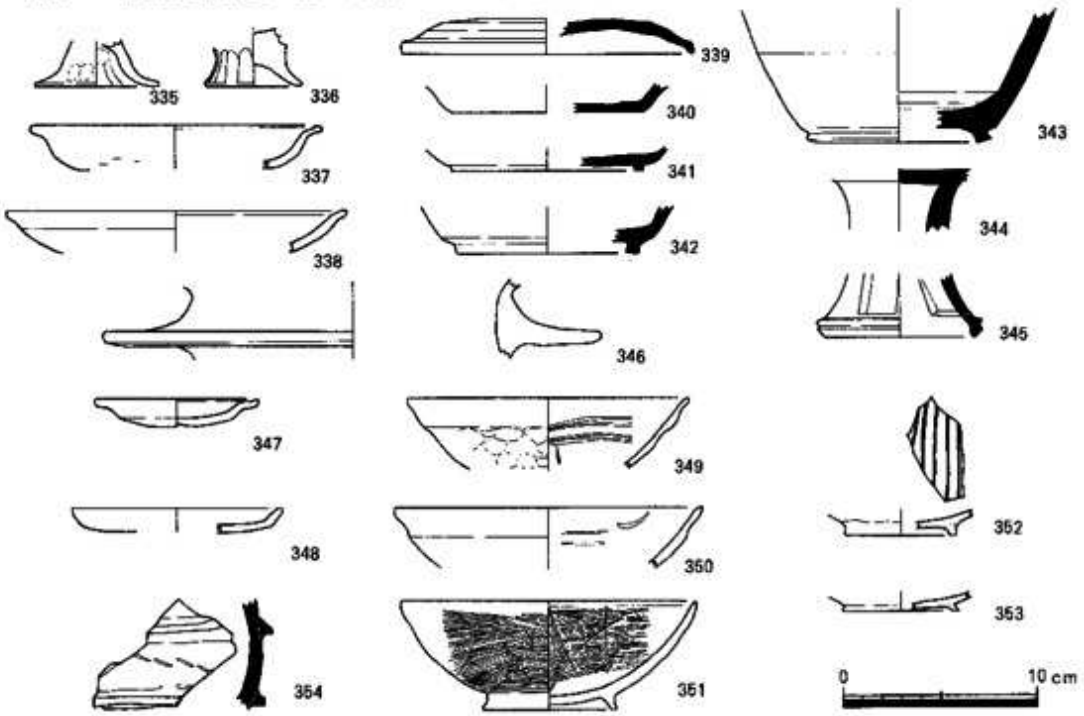
調査区東部で検出した。南北方向に伸びる溝で、幅0.7～1m・深さ0.15～0.5m・検出長8.9mを測る。断面はU字形を呈するが、一部に2段の掘形を有する部分が認められた。溝内には淡灰茶色砂質土と黄灰色砂質土の2層が堆積しており、層中から土師器杯（337・338）・高杯（335・336）・壷・甕・土釜（346）、須恵器杯蓋（339）・杯身（340～341）・高杯（344・345）・甕、瓦器椀、屋瓦等が出土している。

SD－9

溝SD－8の西に平行して伸びる溝で、幅0.18～0.44m・深さ0.15m・検出長3.7mを測る。内部には淡灰色砂質土1層が堆積しており、層中から土師器鉢・甕・土釜、須恵器杯身（342）・蓋（343）が出土している。

SD－10

溝SD－9の西に平行して伸びる溝で、幅0.18～0.28m・深さ0.16m・検出長4.3mを測る。内部には淡灰色砂質土1層が堆積していた。遺物は出土しなかった。



第45図　SD－8（325～341・344～346）・SD－9（342・343）・SD－11（351）・SD－12（345～350・352～354）出土遺物実測図

SD－11

調査区中央部で検出した。南北方向に伸びる溝で、幅0.6ｍ・深さ0.06ｍ・検出長3.05ｍを測る。内部には淡灰茶色砂質土１層が堆積しており、層中から須恵器、瓦器椀（351）、屋瓦等の細片が出土している。

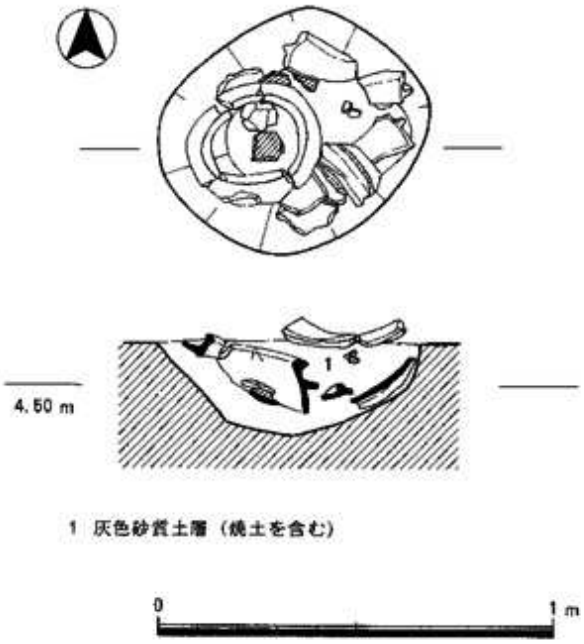
SD－12

調査区の南部で検出した。L字形を呈して伸びる溝で、東部の一部を溝SD－8に切られている。幅0.18～0.52ｍ・深さ0.04～0.1ｍ・検出長東西8.5ｍ・南北6.0ｍを測る。内部堆積土は淡灰茶色砂質土１層で、層中から土師器小皿（347・348）・土釜、須恵器壺（354）、瓦器椀（349・350・352・353）、屋瓦等が出土している。なお、この溝は掘立柱建物SB－1を囲繞する関係にあることから、住居に付属した施設の一つと考えられる。

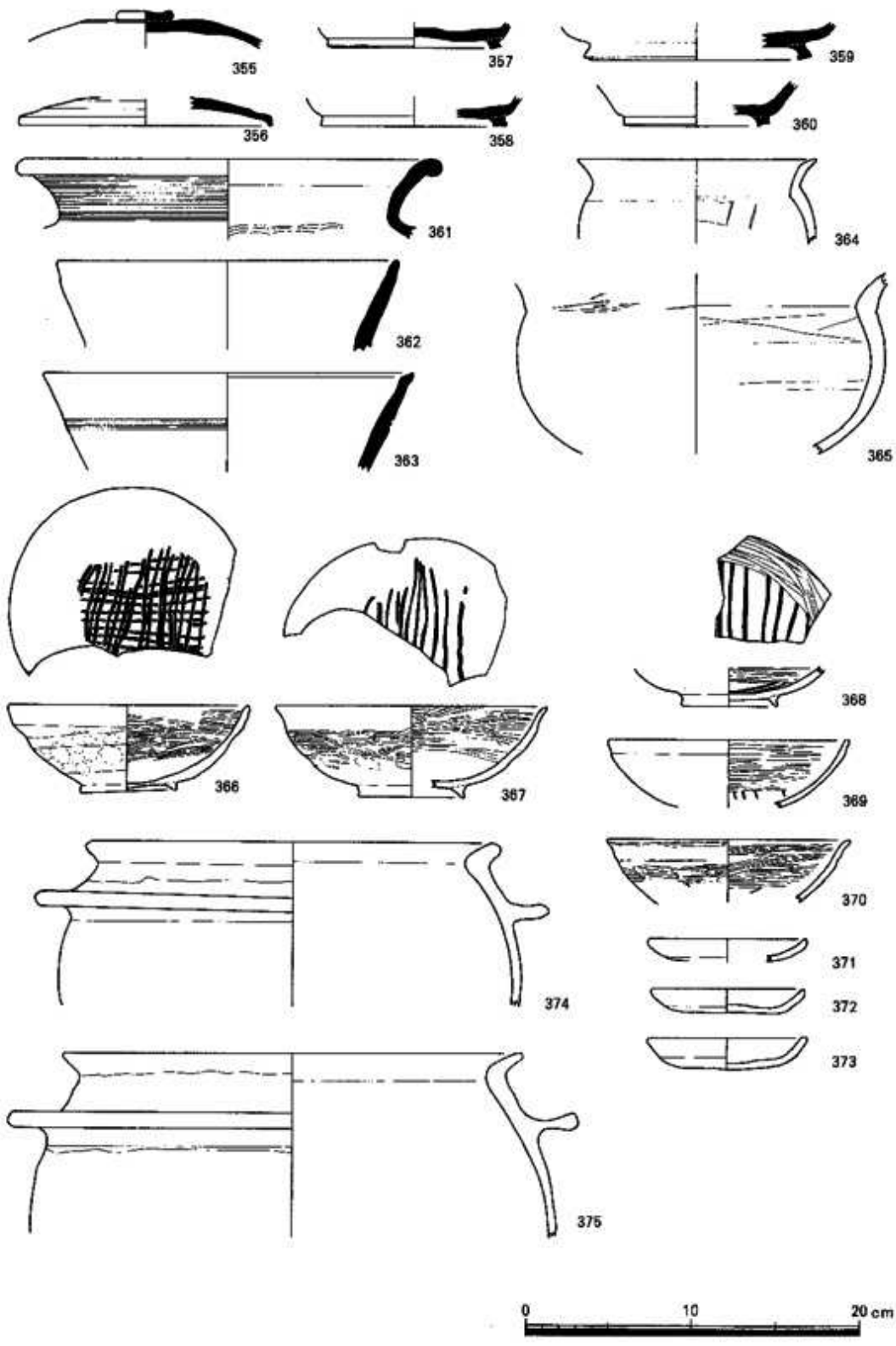
小穴（SP）

第３調査面では、51個の小穴（SP－48～SP－98）を検出した。これらのうち、SP－48・SP－67・SP－64・SP－72は掘立柱建物SB－1を構成する。また、その他の小穴に関しても、他の検出遺溝との関係から、調査区南部に位置するものは掘立柱建物を構成する柱穴と考えられ、北部のものは井戸遺溝に伴うものと考えられる。これらの上面の形状は円形ないし楕円形を呈し、上面径0.15～1.1ｍ・深さ0.05～0.97ｍを測る。

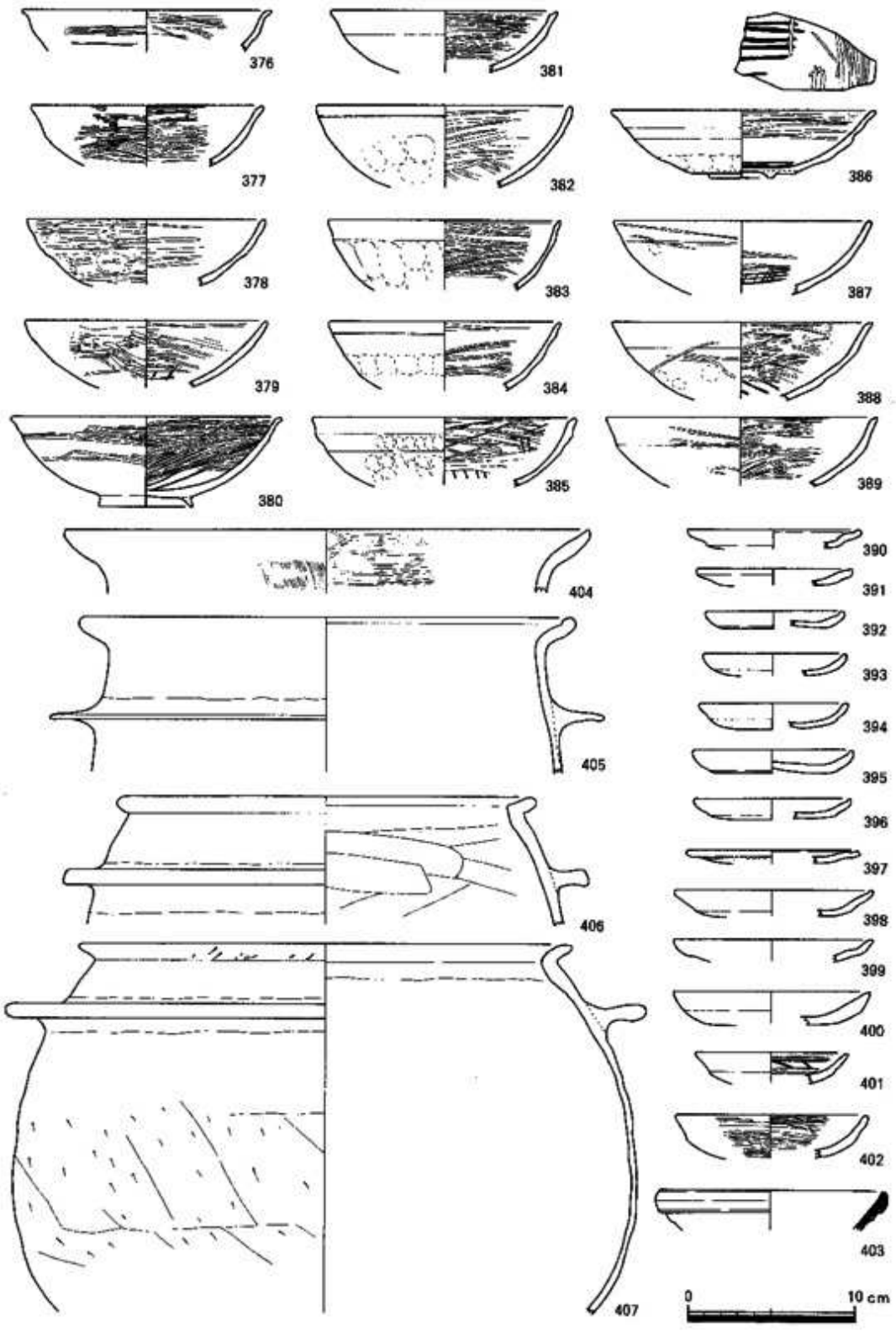
このうち遺物が出土した小穴は、SP－47・SP－48（402）・SP－49（390）・SP－51・SP－54（404）・SP－55（386・396～398・402・405）・SP－58・SP－59・SP－60・SP－62・SP－63・SP－64・SP－65・SP－66（378）・SP－67（376・377・380・394・400）・SP－68・SP－69・SP－70・SP－73（393・399・407）・SP－74・SP－76・SP－77・SP－79（383～385・392）・SP－82（355～375）・SP－83（379・381・382）・SP－84・SP－85・SP－86（387～389・409）・SP－87（403）・SP－88・SP－89・SP－90（406）・SP－93（391）・SP－94・SP－96・SP－97である。



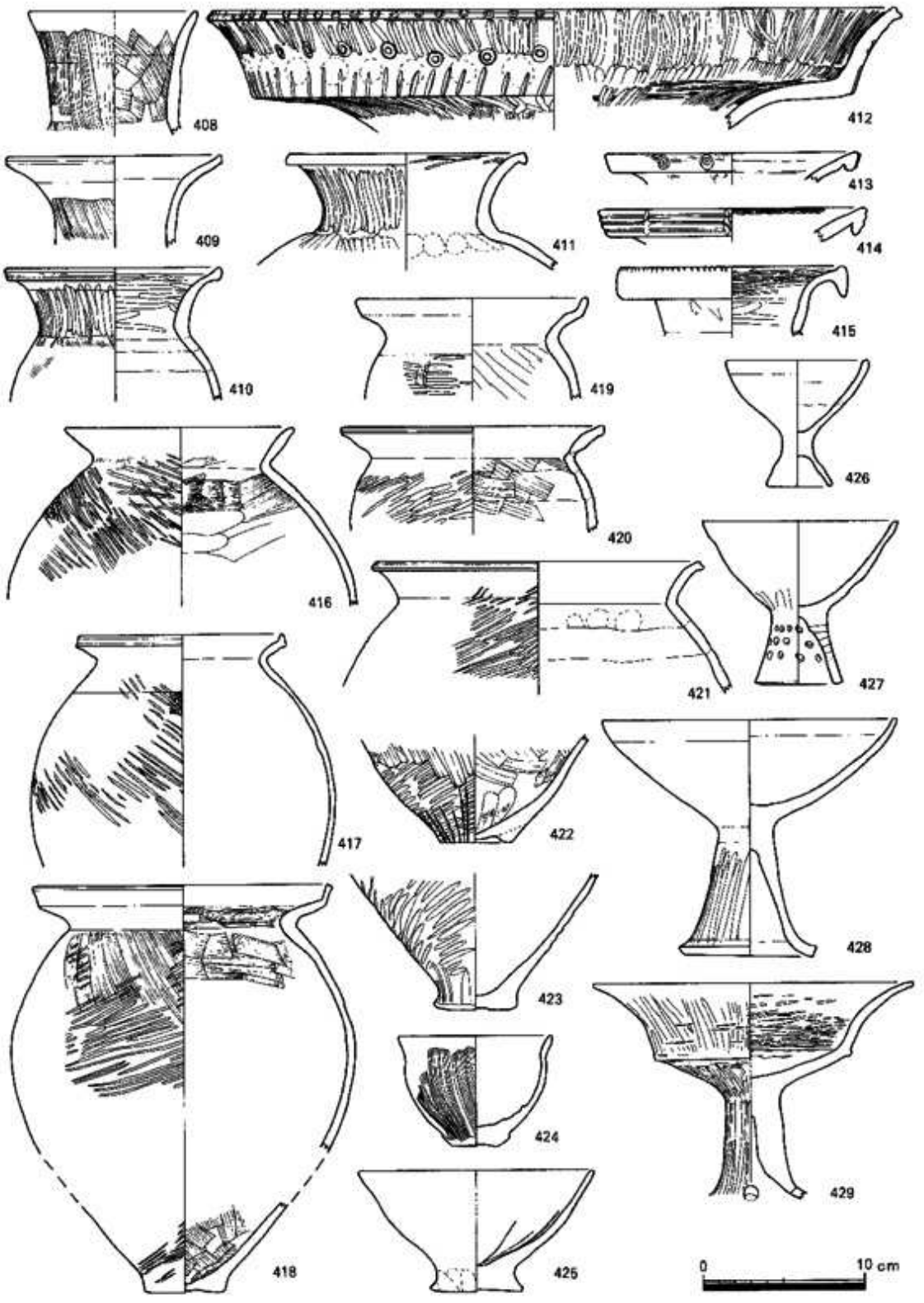
第46図　SP－82平断面図



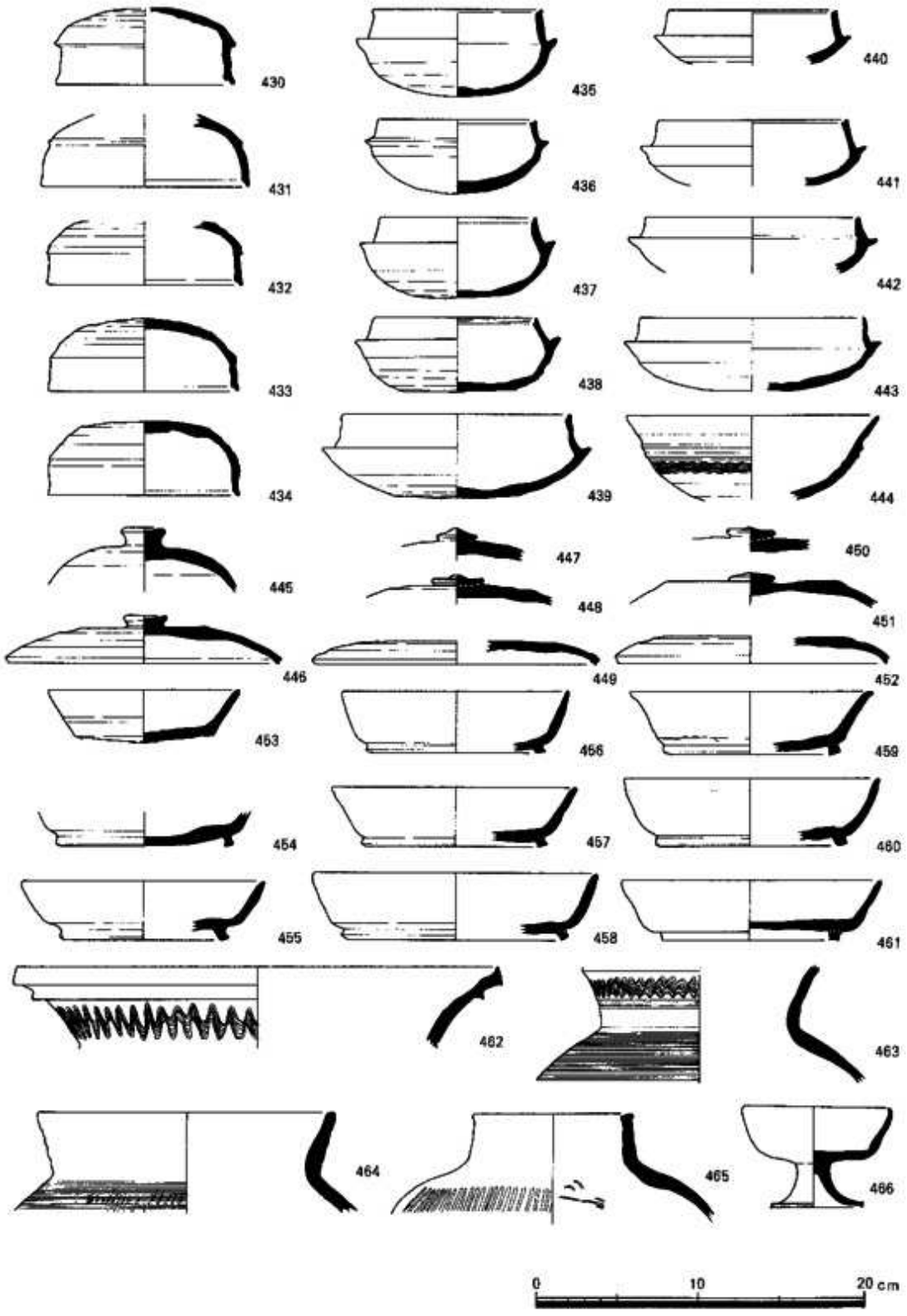
第47図　SP－82出土遺物実測図



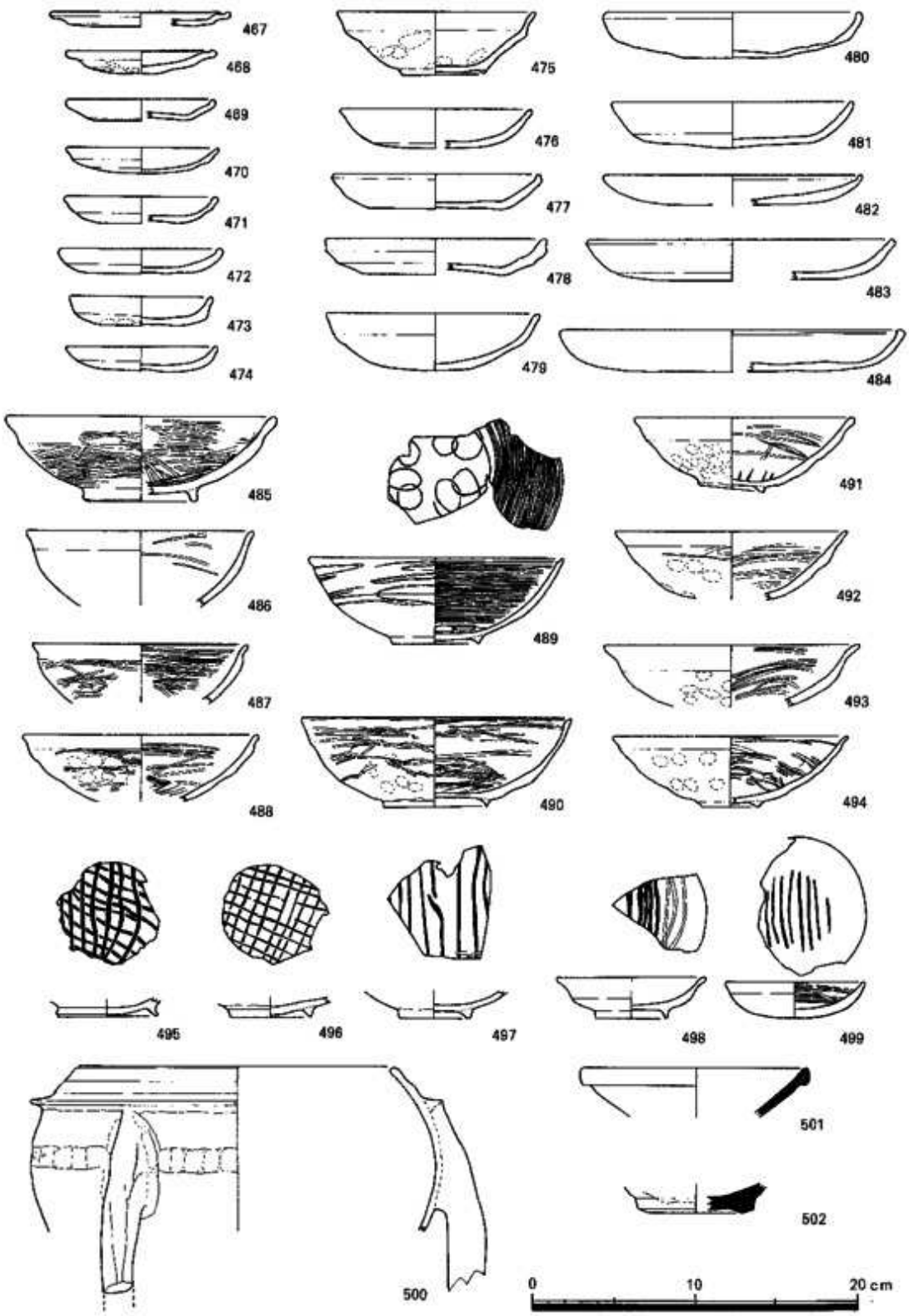
第48図　第３調査面ＳＰ出土遺物実測図



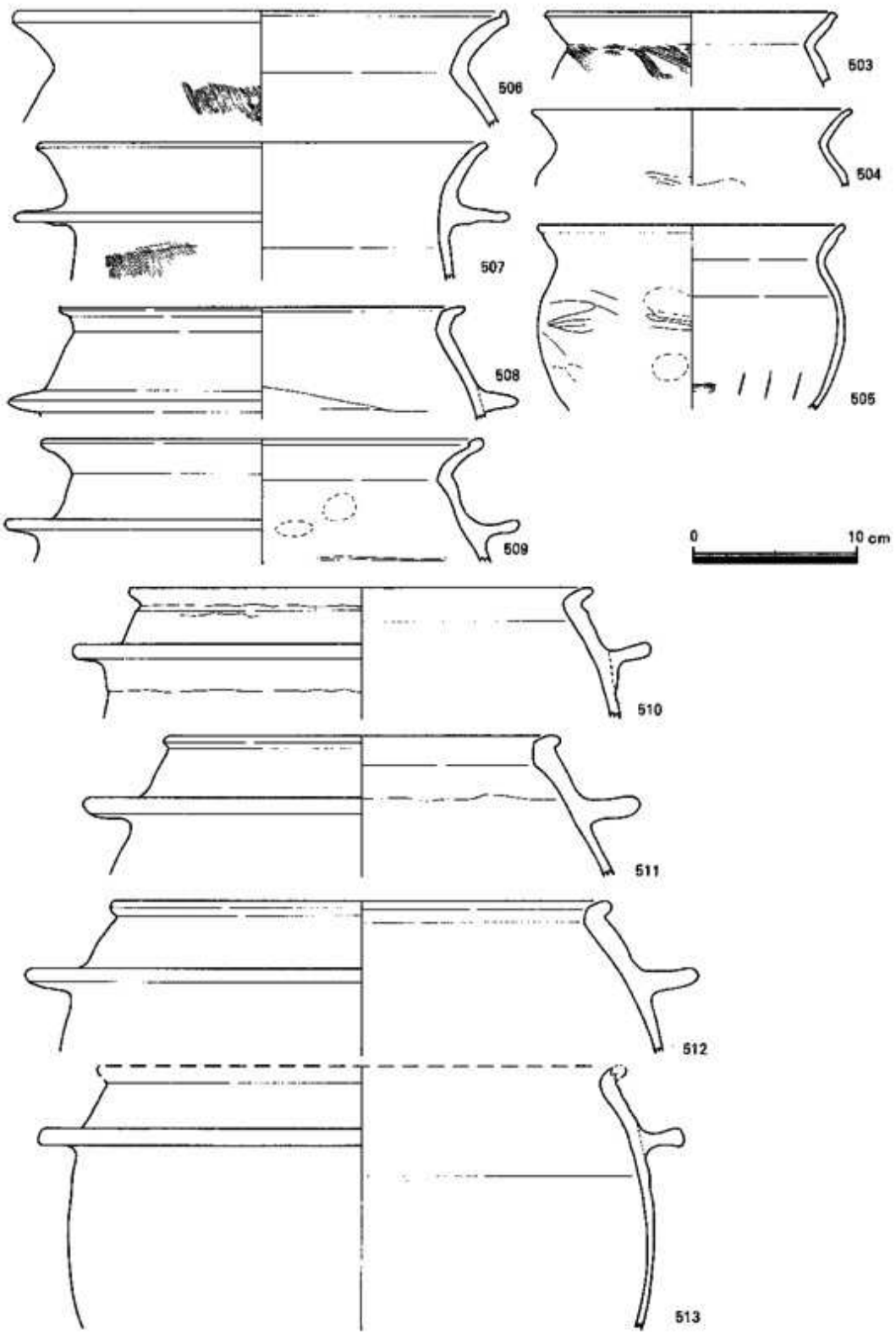
第49図　第Ⅳ層出土遺物実測図1



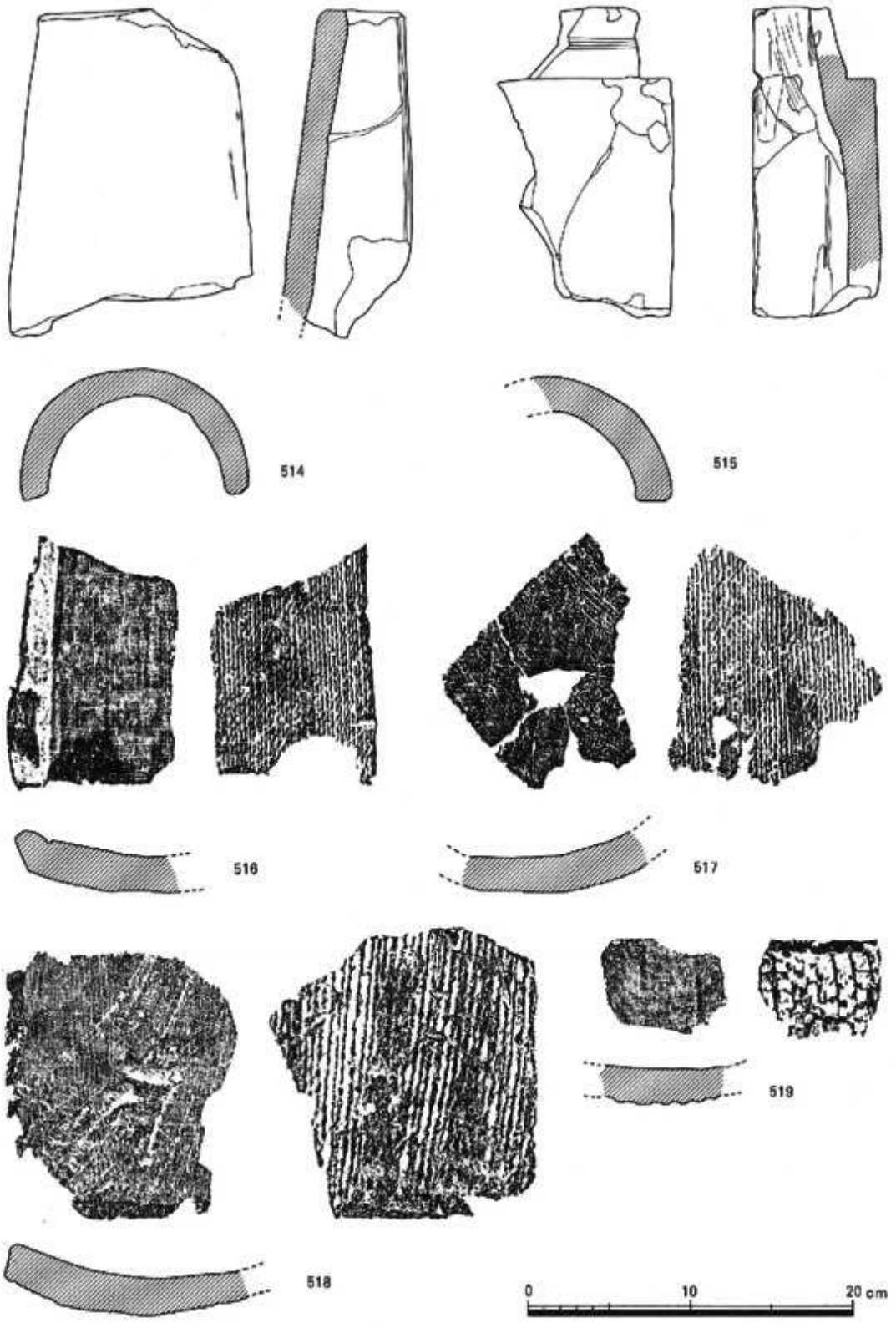
第50図　第IV層出土遺物実測図2



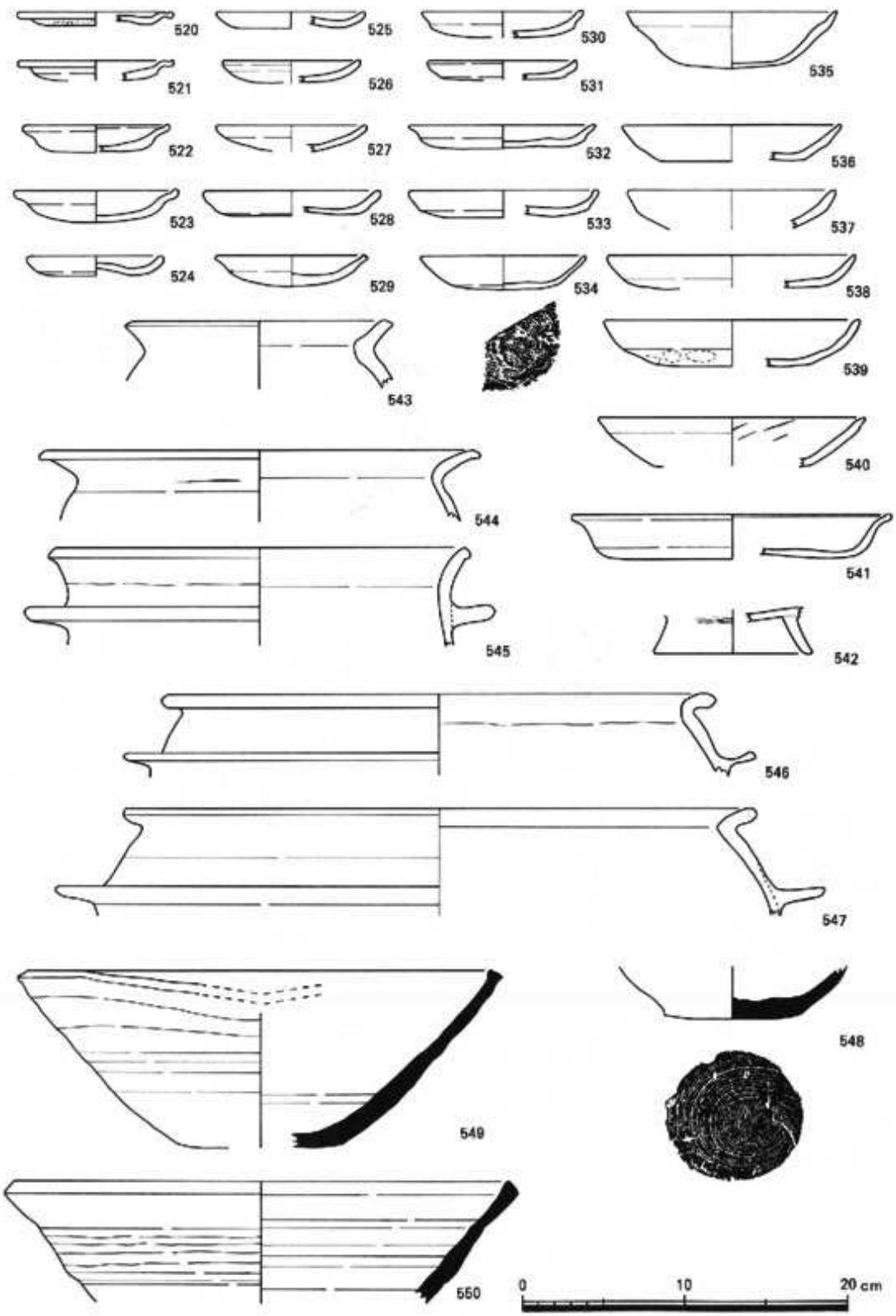
第51図　第Ⅳ層出土遺物実測図3



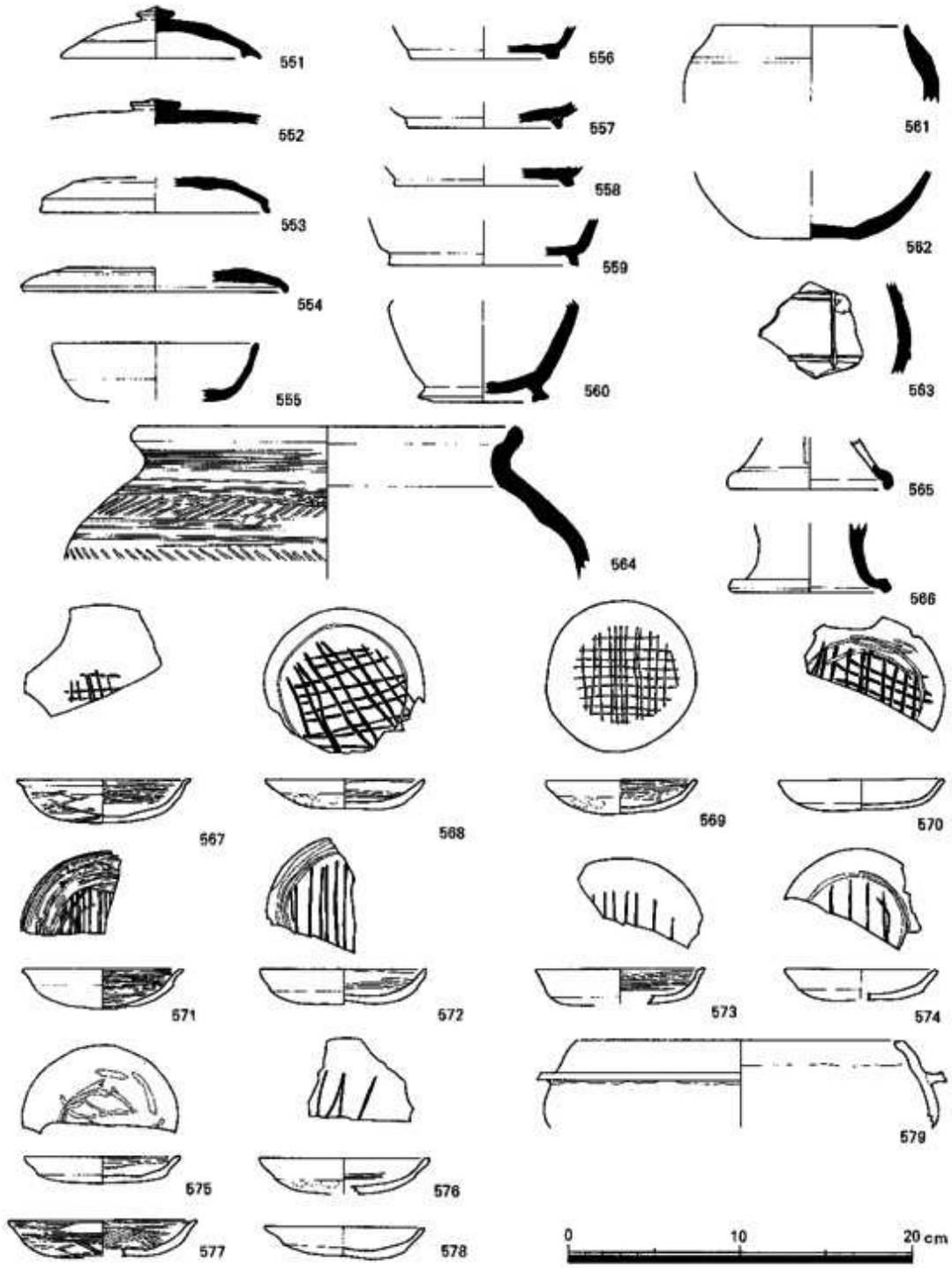
第52図　第Ⅳ層出土遺物実測図4



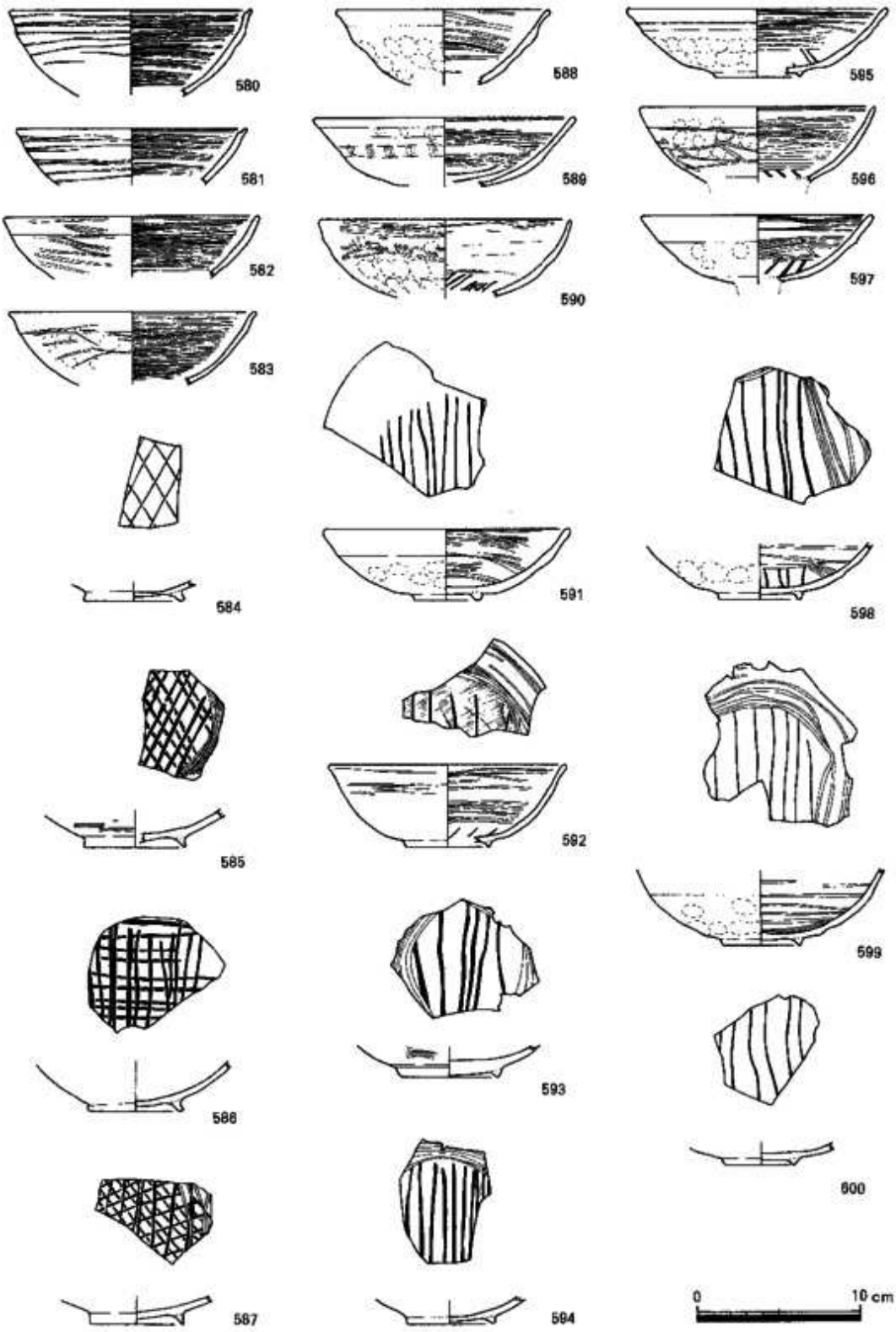
第53図　第Ⅳ層出土遺物実測図5



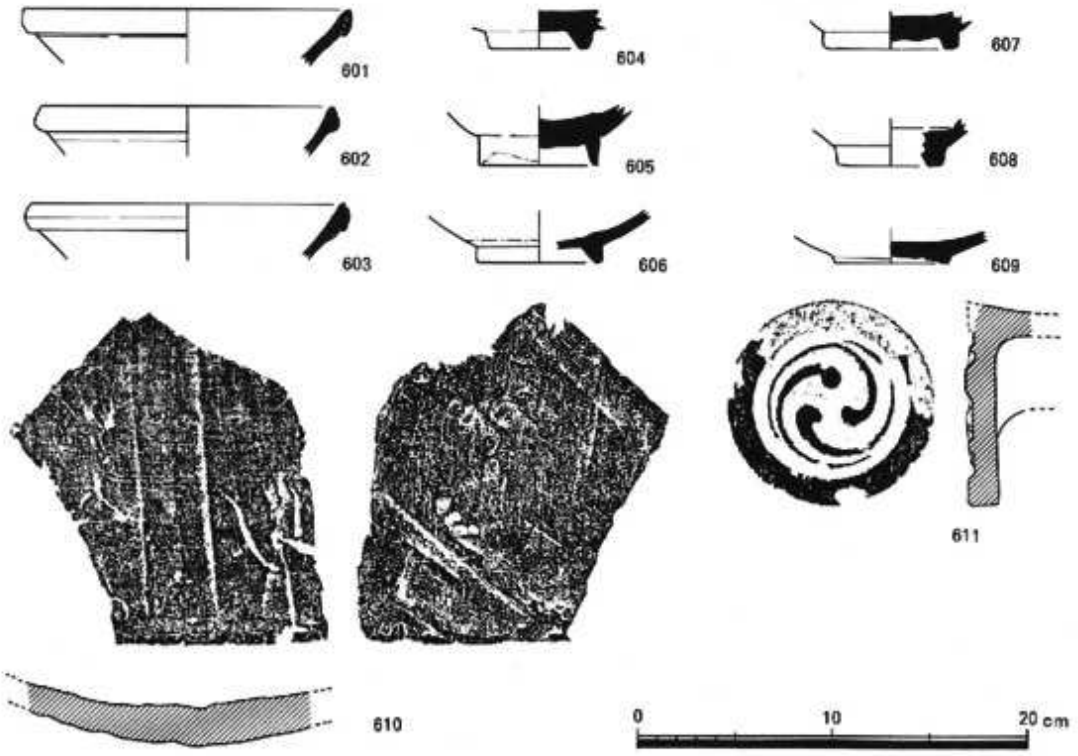
第54図　第Ⅲ層出土遺物実測図1



第55図　第Ⅲ層出土遺物実測図 2



第56図　第Ⅲ層出土遺物実測図3



第57図　第Ⅲ層出土遺物実測図4

2）出土遺物

出土遺物は、遺構内および包含層からコンテナ箱に40箱分が出土しており、226㎡の調査面積に比して量的には多いといえる。これは、検出した遺構の存続期間が弥生時代後期から鎌倉時代末期にわたる長期間であることが一番の成因と考えられる。

なお、これらの出土遺物を細分すれば、概ね以下の6時期（Ⅰ期～Ⅵ期）に区別することができる。Ⅰ期弥生時代後期・Ⅱ期古墳時代前期（庄内式期・布留式期）・Ⅲ期古墳時代中期・Ⅳ期古墳時代末期（飛鳥時代）・Ⅴ期平安時代末期・Ⅵ期鎌倉時代全般である。調査面との関係は、第1調査面がⅠ期・Ⅱ期、第2調査面がⅢ期・Ⅳ期・Ⅴ期、第3調査面がⅤ期・Ⅵ期に対応する。包含層である第Ⅲ層・第Ⅳ層と調査面との関係は、前者が第3調査面（Ⅴ期・Ⅵ期）に、後者が第2調査面（Ⅲ期・Ⅳ期・Ⅴ期）に対応する。遺物の時期別の比率では、Ⅵ期が最も多く約6割を占め、Ⅰ期・Ⅳ期・Ⅴ期が各1割、残りの1割をⅡ期・Ⅲ期で分けあっている。

以下、個々の遺物については第4章出土遺物観察表に委ねるが、一部の遺物については第5章遺構・遺物の検討で記述する。

第4章　出土遺物観察表

SE-1

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	弥生式土器 広口壺		14.3 —	直立する頸部にゆるやかに上外方へ外反する口縁帯。 外面口縁部はヨコナデ、頸部及び体部はハケの後やや粗く縦方向のヘラミガキ。内面口縁部から頸部はヨコナデの後口縁部は横方向のヘラミガキ頸部はナナメ方向ヘラミガキ。	茶褐色	やや粗	良好	体部内面に煤付着
2	弥生式土器 広口壺		13.85 —	やや丸味を帯びた体部から、短く直立する頸部に外反する口縁部が付く。端部はやや内湾して、内傾する面をもつ。 口縁部は内外面ともヨコナデ。頸部外面はハケ、内面は横方向のヘラミガキ。体部上位外面はナデ、内面はハケ。	外面及び口頸部明橙色 内面体部は黄灰色	密	良	
3	弥生式土器 壺	最大径23.95 底　径 4.8	— —	口頸部は欠損。体部上位に最大径部を有する肩の張った器形。底部は、突出した平底。 外面体部の上位⅓は、斜方向のヘラミガキ。中位下半以下は縦方向のヘラミガキ。底部側面にヘラ先による圧痕残存。内面体部上位に粘土紐接合痕顕著を残し、下半は、ヨコナデ。	茶褐色	やや粗	良好	黒斑有
4	弥生式土器 壺	底径 4.2	— —	平底の底部から斜上方へ伸びる。 外面縦方向のヘラミガキ。底面中央は窪む。内面に工具痕が認められるが磨耗著しく調整不明瞭。	淡茶色	やや粗	良好	
5	弥生式土器 甕		10.6 —	外反して口縁部に至る。端部は丸く終わる。内外面ともヨコナデ。外面に工具痕あり。	淡茶色	やや粗	良好	
6	弥生式土器 甕	底径 3.9	14.1 11.8	平底の底部から、上位に最大径のある体部に至る。口縁部は切り出しによりゆるやかに上外方に外折する。端部は未調整。 外面口縁部は、タタキの後ナデ、体部の中位に接合痕あり。これより上半は縦タタキの後ナデ。下半は右上りタタキ(4条2.5cm)。	赤茶色	やや粗	良好	
7	弥生式土器 甕		16.6 —	体部から「く」の字形に屈曲して口縁部に至る。端部は、つまみ上げる。端面は、凹面をなす。 口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面は右上りのタタキ。口縁部及び屈曲部内面ヨコナデ、以下ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	
8	弥生式土器 甕		16.6 —	張りの少ない体部から内に稜をもち外反した後内湾気味に伸びる。端部は丸味のある面をもち内につまみあげ気味に終わる。 外面口縁部はヨコナデ、頸部はハケ。体部上半は、水平及びゆるやかな右上りのタタキ下半は右上りのタタキ。				
9	弥生式土器 甕	底径 4.15	— —	突出する平底の底部から斜上方へ伸びる。 外面右上りのタタキ。内面左回りのハケ状ナデ。	赤茶色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
10	弥生式土器 甕	底径	— — 4.35	やや突出するドーナッツ状の底部から、外上方へ伸びる。 外面右上りのタタキ（4条／1.2cm）。内面板状工具によるナデ。	⑲黒灰色 ⑳淡赤茶色	粗 チャート含む	良好	
11 ——	弥生式土器 鉢	底径	14.4 7.5 4.8	突出するドーナッツ状の底部から斜上方へ直線的に伸びた後内湾する口縁部が付く。底面には焼成前に直径0.6cmの円孔を穿つ。 外面は、右上りのタタキ（5条／2.7cm）。内面左上りのハケ。内底面を中心に板状工具の痕跡が認められる。	赤茶色	やや粗	良好	
12 ——	弥生式土器 鉢		30.2 —	丸味を帯びた体部から斜上方へ外折したのち器厚を減じて立ち上がる口縁。 口縁部の立ち上がりは、内外面ともヨコナデ。外面口縁部は横方向のヘラミガキ。体部上半は縦方向の密なヘラミガキ。中位にハケ。内面口縁部及び体部は横方向のハケの後ナデ。	茶色	やや粗	良好	
13	弥生式土器 高林		17.6 —	椀状の杯部。口縁端部は器厚を減じながら丸く終わる。 外面口縁部は横方向のヘラミガキ。杯部は縦方向ヘラミガキ。内面口縁部は、左上りのヘラミガキ。杯部は、ヘラミガキも認められるが、摩耗著しく調整不明瞭。	淡茶色	粗	良好	
14 ——	弥生式土器 高林		23.6 —	外上方へ直線的に伸びる杯底部から角度をかえて上外方へ外反する口縁部が付く。端部は内傾する面をもっておわる。 外面口縁部は、ヨコナデ後横方向ヘラミガキ。内面口縁部は横方向のヘラミガキ、底部は放射状のヘラミガキ。	茶色	やや粗	良好	

SE-1 下層

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
15 ——	弥生式土器 壺	最大径 底径	10.9 20.7 17.0 4.0	突出するドーナッツ状の平底の底部から球形の体部を呈する。頸部は短く直立した後上外方へ立ち上がる口縁部が付く。 口縁部は内外面ともヨコナデ。外面口頸部から体部中位まで縦方向のハケ。体部中位のやや下までは横方向のハケを施す。	茶色	やや粗	良好	底部と体部上位から口頸部に黒斑有
16	弥生式土器 壺		21.1 —	大きく外反する口縁の端部の下方に粘土紐を張り付けて拡張し、施文帯とする。 施文帯には4条の櫛描き波状文と竹管押圧円形浮文。端部上端に刻み目。内面口縁部上位に3条の櫛描き波状文と4個一対のヘラ先刺突文を施す。	淡茶色	やや粗	良好	
17	弥生式土器 壺		19.0 —	短く直立する頸部から上外方へ口縁が伸びる。端部は丸味のある面をもち上端をつまみ上げ気味に終わる。 外面口縁部及び内面口頸部はヨコナデ。外面頸部は縦方向のナデ。	淡茶色	粗	良好	

SK-1

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
23	弥生式土器 甕		16.85 —	体部から「く」の字形に屈曲して斜上方へ外反して口縁部へ至る。屈曲部のやや上で接合痕残す。 口縁部は内外面ともヨコナデ。外面体部は右上りのタタキ。内面体部はナデ。	暗褐色	粗	良好	
29	弥生式土器 底	底径	— — 5.4	突出しない上げ底状の底部から上外方へ体部が伸びる。 内外面ともナデと思われるが磨耗著しく不明。	暗褐色	粗	良	
30	弥生式土器 底	底径	— — 2.5	やや不安定な突出した平底の底部から斜上方へ体部が伸びる。 内面は、放射状のヘラミガキや一部に工具痕が認められる。外面は縦方向のハケ。	淡褐色	粗	良好	
32	弥生式土器 高杯	縦径	— — 10.25	脚部が外下方へ伸びる。端部は外傾した面をもち、上端を上外方へつまみ上げている。 内面はナデ、外面は縦方向のヘラミガキ。	淡褐色	やや粗	良好	

SK-2

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
20	弥生式土器 壺		14.45 —	張りの少ない体部に短い直立する頸部から外反する口縁部が付く。端部は内傾した面をもつ。端面に2条の凹線が一周する。 口縁部は内外面ともナデ。内面体部はヘラケズリ。外面体部はナデ。	暗茶色	やや粗	良好	

SK-3

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
21	弥生式土器 甕	最大径	13.0 — 12.5	あまり張らない体部からほぼ水平に外折したのち上外方へつまみ上げる受口状口縁が付く。口縁部は内外面ともヨコナデ。内面体部上位は横方向のヘラミガキ、中位はナデ。外面体部は磨耗が著しく不明瞭であるが、上位はナデ、中位にはタタキメが認められる。	暗褐色	粗	良好	
31	弥生式土器 底	底径	— — 5.55	突出した平底と思われる底部から外上方へ丸味を帯びた体部が伸びる。 内面体部ナデ。底部側面に指頭圧痕。外面体部下位に斜方向のヘラナデが認められ、下位から中位に縦方向のヘラナデ。	黒褐色	やや粗	良好	

SK-5

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
24	弥生式土器 甕	底径	— — 4.15	底面中央を少し残させた突出する平底の底部から斜上方へ体部が伸びる。 内面はハケ。外面は右上りのタタキ。	外面淡茶色 内面灰黒色	密	良好	
26	弥生式土器 壺		25.1 —	外上方へ伸びる口縁部。端部は、上下に拡張して内傾した面をなして施文帯とする。 施文帯には竹管押圧円形浮文と櫛耗著しく不明瞭であるが、波状文を施す。内外面ともヨコナデ。	乳褐色	粗	良好	
33	弥生式土器 高杯	裾径	— — 15.1	外下方へ直線的に伸びる脚部。裾端部は、外傾した面をもって終わる。脚部中位に円孔を穿つ。	淡赤茶色	粗	良好	

SK-6

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
18	弥生式土器 壺		14.4 —	外反する口縁部。端部は、外面に面をもち、丸く終わる。 内外面ともヨコナデ。	暗茶色	やや粗	良好	
19	弥生式土器 壺		12.8 —	上外方へ外反する口縁部。端部は内傾する面をもたせ、下端へ少し拡がる。端面に凹線状の窪みが一周する。 内外面ともナデと思われるが、磨耗著しく調整不明瞭。	暗茶色	粗	良	
22	弥生式土器 壺		15.05 —	あまり張らない体部から外反する口縁部。端部は、斜上方へつまみ上げ気味に丸く終わる。口縁部は、内外面ともヨコナデ。外面体部は右上りのタタキ。内面体部に粘土紐接合痕を残し、指頭圧成形の後ナデ。	茶色	やや粗	良好	
25	弥生式土器 壺		21.7 —	口縁端部のみ遺存。口縁端部を拡張した施文帯とする。 内外面ともヨコナデの後、施文帯に4条の櫛描き波状文と竹管押圧円形浮文を施す。内面にも波状文が認められるが磨耗著しく詳細不明。	茶色	やや粗	良好	
27	弥生式土器 壺		27.0 —	口縁部のみ遺存。端部を下方へ拡張して施文帯とする。 内外面ともヨコナデの後施文帯には3条のヘラ描波状文と竹管押圧円形浮文を施す。	褐色	やや粗	良好	
28	弥生式土器 壺		— —	大きく張った体部。頸部との境に張り付け突帯をもつ。 外面はナデの後、突帯のすぐ下に4条と3条の櫛描き、波状文を施す。内面は指頭圧成形の後ナデ。	褐色	粗	良好	

SP-7

遺物図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
34	弥生式土器 甕		16.3 …	体部から「く」の字形に外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部内面ヨコナデ、外面ハケ状ナデ。体部内面ナデ、外面細筋で右上りのタタキ。	淡茶色	粗	良	
36	弥生式土器 高杯	裾径	— — 12.0	外下方へ外反気味に伸びる裾部。端部は外傾した面をもち上端、下端は丸い。 内外面ともハケ状ナデ。	赤茶色～淡褐色	粗	良好	

SP-8

遺物図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
35	弥生式土器 高杯		19.4 …	やや丸味のある杯底部から角度をかえて外上方へ外反し、直線的に伸びる口縁部が付く。端部は丸く終わる。屈曲部外面に稜をもつ。 内外面磨耗著しく調整不明瞭。				

SP-12

遺物図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
37	弥生式土器 壺	底径	— — 3.7	突出する平底の底部から上外方へ丸味を帯びて伸びる体部が付く。 外面体部に縦方向のハケ、底部側面はヨコナデ。内面は、板状工具によるハケ。	赤茶色	やや粗	良好	
38	弥生式土器 壺	底径	— — 3.6	突出したドーナッツ状の底部から外上方へ体部が伸びる。 内面はナデ。外面は縦方向のヘラミガキ。	茶色	やや粗	良好	

SE-2

遺物図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
39	土師器 小皿		11.75 —	平担な底部から丸味を持って外反し口縁部に至る。端部は内に丸く巻き込む。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ。底部外面指頭圧痕残存。	乳灰色	密	良好	
40	土師器 小皿		10.8 …	丸味のある体部から斜上方へ外反する口縁部。端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。	乳灰色	密	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
41 一二	土師器 小皿		9.25 1.85	やや丸味のある底部から外上方へそのまま口縁部が伸びる。端部上端はつまみ上げ気味で、内傾した端面に凹線状の窪みが一周する。 指頭圧成形後口縁部内外面ヨコナデ。内面全体ナデ。外面もナデ。	乳橙色	密	良好	
42	土師器 甕		31.2 —	体部から「く」の字形に外折する口縁部。端部は内傾した面をなし、上端は鈍い稜となる。 口縁部内面ヨコナデ、体部内面ナデ。口縁端部外面ヨコナデ。口縁部外面下半と体部外面は粗いハケの後ナデ。	乳茶色	粗	良好	外面全体に煤付着
43	瓦器 椀		14.6 — 高台径 — 高台高 —	半球形の体部。口縁部は器厚と減じながら上外方へ尖り気味に終わる。 口縁部外面はヨコナデの後端部にヘラミガキ。体部外面は密なヘラミガキ。内面は全体に密なヘラミガキ。	乳灰色 ～黒灰色	やや粗	良好	一部二次焼成受ける
44	瓦器 椀		13.4 5.1 高台径 3.8 高台高 0.4	半球形の体部。口縁端部でわずかに外反する。断面逆三角形の高台が垂直に付く。 口縁部外面やや強いヨコナデ。体部外面ナデ。高台部ヨコナデ。内面ナデの後、粗く細いヘラミガキ。見込み、平行線状の細いヘラミガキ。	黒灰色	密	良好	
45 一二	瓦器 小椀		9.4 1.9	平担な底部から斜上方へ伸びる口縁部。端部は丸く終わる。体部外面に強いヨコナデにより明瞭な稜をもつ。 口縁部内外面ともヨコナデ。底部外面指頭圧痕残存。内面はナデの後、見込み及び体部太いヘラミガキ。	灰色	密	良好	
46 一二	瓦質土器 足釜		17.6 — 鍔径 23.55	丸味のある体部から内湾する口縁部が付く。口縁端部は水平な面をもち内に尖り気味に終わる。幅1.2cmの鍔が水平方向に向いて付く。鍔の先端から直径2cmを測る足が取り付く。 口縁部外面から鍔直下までヨコナデ。体部外面はナデ及び指頭圧痕が残存。	灰色	やや粗	良好	体部外面に煤付着
47	白磁 碗		15.0 —	内湾気味に伸びた後、玉縁状の薄い口縁部に至る。	白色の 透明釉	緻密	堅緻	黒斑点あり

SE-4

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
48	土師器 小皿		9.0 1.3	丸味のある底部から外上方へ屈曲する口縁部。端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。	乳灰色	密	良好	
49	土師器 中皿		14.2 —	半球形と思われる体部から肥厚しながら斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部及び内面全体ヨコナデ。	暗灰色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
50	土師器 甕	28.1 — 脚径 34.7	内湾気味の体部から「く」の字形に外反する口縁部。端部は内傾する面を持つ。脚は全体に扁平で水平方向に付く。 口縁部内面から外面脚直下までヨコナデ。内面全体ナデ、体部外面板状工具によるナデ。	暗灰色	やや粗	良好	全体に煤付着
51 一二	瓦器 椀	11.0 4.5 高台径 5.1 高台高 0.5	平坦な底部から丸味を帯びて伸び、口縁部へ至る。高台は低く断面逆三角形を呈する。 口縁部外面はヨコナデ後ヘラミガキ、体部外面は指頭圧痕を残し粗いヘラミガキ。内面は緻密なヘラミガキ。見込みは、平行線状のヘラミガキ。	乳灰色 ～黒灰色	やや粗	良好	
52 一二	瓦器 椀	14.6 5.0 高台径4.25 高台高 0.6	やや浅めの半球形の体部。口縁部は上外方へ伸び端部は丸く終わる。断面逆三角形の低い高台がやや開き気味につく。 口縁部外面ヨコナデ、体部外面ナデの後粗いヘラミガキ。内面は密なヘラミガキ。見込みは平行線状のヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	完形

SK-7

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
53	土師器 杯	14.45 —	丸味のある底部から内湾して口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。内面に放射状の細いヘラミガキ。底部外面ナデ。	乳茶色	やや粗	良好	
54	土師器 杯	18.25 —	丸味のある体部にわずかに外反し、端部を内に巻込む口縁部が付く。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。内面に放射状のヘラミガキ。外面体部ヘラケズリ。	赤茶色	やや粗	良好	
55 一三	土師器 杯	19.4 —	平坦な底部から丸味を帯びて上外方へ伸び口縁部でわずかに外反し、端部を内に巻込む。 口縁部外面から体部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。内面の放射状のヘラミガキ。	赤茶色	やや粗	良好	
56	土師器 杯	19.35 —	平坦な底部から外上方へ丸味を帯びて口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。内面口縁部にナデによる鈍い稜をもつ。 口縁部内面ヨコナデ、底部内面ナデ。口縁部外面ヨコナデ、底部内面ナデ。	乳茶色	密	良好	
57	土師器 杯	22.5 —	内湾して上外方へ口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡褐色	やや粗	良好	
58	土師器 杯	21.65 —	平坦な底部から斜上方へ内湾する口縁部が伸びる。口縁部は丸く終わる。 口縁部内面ナデの後、放射状のヘラミガキ。底部は磨耗著しく調整不明。口縁部外面ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡茶色	密	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 底径	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
59	土師器 杯		23.0 —	平坦な底部から斜上方へ外反し、口縁端部を内に巻き込む。 内外面ともヨコナデ。	淡赤茶色	密	良好	
60	土師器 甕		35.5 —	やや丸味のある体部に屈曲部から肥厚して斜上方へ直線的に伸びる口縁部が付く。口縁端部は上端が丸い内傾した面となる。 口縁部内外面ヨコナデ。体部内面は横方向のハケのナデ。体部外面は、縦方向のハケの後ナデ及び指頭圧痕が残存。	淡茶色	やや粗	良好	
61	土師器 甕		40.6 —	丸味のある底部から斜上方へ外反する口縁部が伸びる。口縁端部は欠損。 内外面ともヨコナデ。	淡赤茶色	やや粗	良好	
62	土師器 土釜		26.8 —	垂直に伸びる体部から斜上方へ外反する口縁部が付く。口縁端部は丸く終わる。鍔は欠損。 口縁部外面ヨコナデ。鍔接合部はナデ。体部外面は縦方向のハケ。口縁部内面横方向のハケ状ナデ。体部内面ナデ。	茶色	やや粗	良好	
63	土師器 土釜	— — 鍔径 32.1	—	垂直に伸びる体部に上外方へ外反する口縁部が付く。口縁端部欠損。鍔はほぼ水平に伸び、端部は丸く終わる。 内外面ともヨコナデ。	赤茶色	粗	良好	
64	土師器 高杯	— — —	—	平坦な杯底部から外上方へ伸びる。脚柱部は中空。 杯部内面ナデ、外面ナデ。杯部と脚柱部は左上りの強いナデを施して接合。	淡赤茶色	やや粗	良好	
65	須恵器 不明		17.0	上外方へゆるやかに外反した後、ほぼ垂直に伸びる口縁部。端部は外傾した面となり内に明瞭な稜をもつ。 内外面とも回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	内外面に釉付着
66	須恵器 壺	— — 高台径 8.2 高台高 1.2	—	平坦な底部から内湾気味に斜上方へ伸びた後角度をかえて内湾して内上方へ伸びるソロバン玉形の体部。胴部部外面直上に凹線が巡する。高台は「L」字形で「ハ」の字形に開く。 内外面とも回転ナデ。	灰色	密	堅緻	
67	須恵器 壺	— — 高台径11.55 高台高 1.9	—	平坦な底部から外面に鈍い稜を持って上外方へ体部が伸びる。断面逆台形で「ハ」の字形に開いて外反する重厚な高台が付く。高台端部上端は、水平方向につまみ出し稜をなす。 体部外面ケズリの後ナデ。底部外面ナデ、体部内面回転ナデ。	青灰色	密	堅緻	底部裏面と体部に釉付着
68	須恵器 壺		38.25 —	ゆるやかに上外方へ外反し、口縁部外面直下に鋭い稜をもつ。口縁部上端は上方へつまみ上げ丸く終わる。 内面及び口縁部外面回転ナデ。体部外面カキ目。	灰色	密	堅緻	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
69 一三	須恵器 杯蓋	15.3 2.6 つまみ径 3.0 つまみ高 1.0	上面凹状で外下方へ伸び口縁部で垂直に短く下る。口縁端部は尖り気味に終わる。口縁部内面に断面逆二角形のかえりが付く。低く扁平な擬宝珠状のつまみが付く。 内外面とも回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	
70	須恵器 杯蓋	15.8 1.3	上面凹状でゆるやかに下外方へ内湾する。口縁端部は外傾した面で下端が尖り気味に下る。 外面回転ナデ。内面ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	外面天井部 自然釉付着
71	須恵器 杯蓋	17.65 —	平坦な天井部から外下方へ直線的伸びた後口縁部に至る。口縁端部は外傾した面となり下端がわずかに下る。 内外面とも回転ナデ。	灰色	粗	堅緻	天井部 灰かぶり
72	須恵器 杯蓋	19.5 1.6	つまみ欠損。平らな天井部から外下方へゆるやかに下り角度をかけて垂直に下る口縁部に至る。口縁端部は尖り気味に終わる。 外面回転ナデ。内面ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	
73	須恵器 杯蓋	19.7 —	上面平らな天井部から外下方へ直線的伸び口縁部で垂直に短く下る。口縁端部は断面逆二角形で鋭く終わる。 内外面とも回転ナデ。	青灰色	やや粗	堅緻	
74 一三	須恵器 杯身	12.95 4.1	平らに近い底部から上外方へ直線的に口縁部が伸びる。口縁端部は尖り気味に終わる。 内外面とも回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	
75	須恵器 杯身	— —	平坦な底部から丸味を帯びて斜上方へ立ち上がる。 内外面とも回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	
76	須恵器 杯身	— — 高台径 8.0 高台高 0.5	平坦な底部から丸味を帯びて斜上方へ体部が伸びる。断面逆台形の重厚な高台が「ハ」の字形に開いて付く。高台底面が少し窪む。 底部外面ナデ。その他回転ナデ。	青灰色	密	堅緻	
77	須恵器 杯身	— — 高台径 8.2 高台高 0.4	平坦な底部から器厚を減じて斜上方へ丸味を帯びて体部が伸びる。断面台形の薄い高台が付く。 底部外面ナデ。その他回転ナデ。	青灰色	やや粗	堅緻	

SK-8

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
78 一三	土師器 小皿		8.8 1.7	平担な底部から斜上方へ内湾する口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ、外面指頭圧痕残存。	淡灰色	やや粗	良好	
79 一三	土師器 小皿		9.0 1.15	平担な底部から斜上方へほぼ直線的に口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面ヨコナデ。	淡赤茶色	やや粗	良好	
80 一三	土師器 小皿		8.1 1.5	丸味のある底部からゆるやかに外上方へ内湾する口縁部が伸びる。口縁端部上方へつまみ上げ気味に丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。	淡赤茶色	やや粗	良好	
81 一三	土師器 小皿		9.6 1.7	平担な底部から斜上方へ内湾する口縁部が伸びる。口縁端部は上方へつまみ上げ、尖り気味に終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面強いヨコナデ、内面ヨコナデ。底部内面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	
82 一三	土師器 小皿		9.0 1.5	底面中央が少し窪む平担な底部から斜上方へ内湾する口縁部が伸びる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。	乳茶色	やや粗	良好	
83 一三	土師器 小皿		8.8 1.5	底面中央が少し窪んだ底部から丸味を帯びて斜上方へ口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。	淡茶色	やや粗	良好	
84 一三	土師器 小皿		8.6 1.65	平担な底部から斜上方へ立ち上がる口縁部が伸びる。口縁端部は上方へつまみ上げて丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ、外面指頭圧痕残存。	淡灰色	やや粗	良好	
85 一三	土師器 小皿		13.6 2.0	丸味のある底部から上外方へほぼ直線的な口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ。外面指頭圧痕残存。	淡灰色	やや粗	良好	
86 一三	瓦器 椀	高台径4.85 高台高0.45	14.8 5.45	平らに近い底部から内湾して斜上方へほぼ直線的な口縁部が伸びるやや深めの器形。口縁端部は丸く終わる。断面逆台形の高台。 内面は緻密なヘラミガキ。見込み格子状の細いヘラミガキ。体部外面は分割成形を意識した密なヘラミガキ。	黒灰色	やや粗	良好	
87 一三	瓦器 椀	高台径4.65 高台高 3.5	15.2 5.7	平らな底部から外上方へ内湾してやや直線的な口縁部が伸びるやや深めの器形。口縁端部は丸く終わる。断面逆二角形の高台が垂直に付く。 内面は密なヘラミガキ。見込みは格子状ヘラミガキ。外面は密なヘラミガキ。	暗灰色	密	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
88 一三	瓦器 椀	口径 15.0 器高 6.0 高台径 4.6 高台高 0.8	やや深めの半球形の体部。口縁端部は丸く終わる。断面逆三角形の高台が垂直に付く。 内面緻密なヘラミガキ。見込み平行線状のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面に指頭圧痕残存。	灰色	やや粗	良好	
89	瓦器 椀	口径 15.8 器高 —	上外方へ内湾して伸びる口縁部。口縁端部で外反し、内面に沈線状の段が一周する。 内面は密な細いヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面指頭圧成形後、粗く細いヘラミガキ。	黒灰色	密	良好	大和型?
90	瓦器 椀	口径 16.4 器高 —	外上方へ内湾して伸びるやや深めの器形。口縁端部は丸く終わる。 内面密なヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ後、やや密なヘラミガキ。体部外面指頭圧成形、一部ヘラミガキ。	暗灰色	やや粗	良好	
91	瓦器 椀	口径 16.15 器高 —	やや深めの半球形の器形。口縁端部は丸く終わる。 内面は緻密なヘラミガキ。体部外面にやや密で太いヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
92	瓦器 椀	口径 — 器高 — 高台径 5.4 高台高 0.5	やや丸味のある底部に断面逆台形の高台がやや開き気味に付く。 見込み、平行線状のヘラミガキ。	淡灰色 ～灰色	やや粗	良好	
93	瓦器 椀	口径 — 器高 — 高台径 4.7 高台高 0.6	平らな底部に断面逆台形の薄い高台が垂直に付く。 見込み、平行線状のヘラミガキ。	暗灰色	やや粗	良好	
94	瓦器 椀	口径 — 器高 — 高台径 5.7 高台高 0.5	やや丸味のある底部に断面逆三角形の高台が垂直に付く。 見込み、平行線状の太いヘラミガキ。	淡灰色 ～暗灰色	やや粗	良好	
95	瓦器 小皿	口径 7.8 器高 1.45	平坦な底部から角度をかえて上外方へ外反する口縁部が付く。口縁端部は外上方へつまみ上げ気味に終わる。 口縁部内面緻密なヘラミガキ。底部は平行線状のヘラミガキ。外面全体指頭圧成形後、口縁部ヨコナデ。	灰色	密	良好	
96	瓦器 小皿	口径 9.15 器高 1.95	丸味のある底部からゆるやかに外上方へ内湾する口縁部が伸びる。口縁端部はやや尖り気味で終わる。 内面緻密なヘラミガキ。見込みナデ。外面全体指頭圧成形後、口縁部ヨコナデ。	灰色 ～黒灰色	やや粗	良好	
97	瓦器 小皿	口径 8.4 器高 2.0	丸味を帯びた半球形の器形。口縁端部、やや尖り気味に終わる。 内面密なヘラミガキ。外面指頭圧成形後、口縁部ヨコナデ。	暗灰色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
98	土師器 土釜		― ―	ゆるやかに外反する体部に水平な鍔が付く。鍔端部は丸く終わる。 内外面ともヨコナデ。	赤茶色	粗	良好	
		鍔径	36.05					
99	土師器 土釜		25.5 ―	上内方へ直線的に伸びる体部から、やや肥厚してゆるやかに外上方へ外反した後、上方へつまみ上げる。口縁端部は丸く終わる。鍔は欠損。 内外面ともヨコナデ。	淡茶色	粗	良好	体部上半煤付着

SD-3

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
108	須恵器 杯蓋		― ―	丸味をもつ天井部外面に中央が少し凹む扁平なつまみが付く。 天井部外面回転ヘラ削り、内面ナデ。つまみナデ。	淡灰色 ～灰色	やや粗	堅緻	外面天井部灰かぶり
		つまみ径	3.3					
		つまみ高	0.8					
109 一三	須恵器 杯蓋		11.75 ―	平らに近い天井部から鈍い稜をもって口縁部がほぼ垂直に下る。口縁端部は、浅い凹面をなす。 内面全体及び外面稜直上まで回転ナデ。天井部外面回転ヘラ削り。	紫灰色 ～青灰色	やや粗	堅緻	外面天井部灰かぶり
		稜径	11.8					
110	須恵器 杯身		11.75 ―	ほぼ水平に伸びる断面三角形の受部が付く。立ち上がり部は、上内方へ直線的に伸び、口縁端部は、浅い凹面となる。 内外面とも回転ナデ。	青灰色	やや粗	堅緻	
		受部	13.9					
111	須恵器 杯身		11.4 ―	丸味のある体部にほぼ水平にのびる受部が付く。立ち上がり部は、上内方へ直線的に伸び口縁端部はごく浅い凹面となる。 内外面回転ナデ。外面受部端より2.0cm以下回転ヘラケズり。	乳灰色	やや粗	堅緻	外面体部上半に二条のヘラ記号有
		受部	13.7					
112 一三	須恵器 杯身		9.7 5.35	やや深く丸い底体部に扁平な受部が水平に付き、立ち上がりは上内方へ直線的に伸び口縁部に至る。口縁端部は浅い凹面となる。 内面全体及び外面上半回転ナデ。外面受部端より2.1cm以下逆時計回りの回転ヘラ削り。	灰色	密	堅緻	
		受部	12.4					
113 一三	須恵器 杯身		9.9 4.85	やや深く丸い底体部にほぼ水平に断面三角形の受部が付く。受部端は鋭い。立ち上がり部は内傾した後直立する。 内面全体及び外面受部直下まで回転ナデ。外面、受部端より0.6cm以下時計回りの回転ヘラ削り。	灰色	やや粗	堅緻	
		受部	12.0					
114	須恵器 壺		― ―	上外方へ外反する頸部。 外面8条一単位の波状紋を2段施し、その間に回線を2本施す。内面回転ナデ。	淡灰色 ～灰色	やや粗	堅緻	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
115	製塩土器	4.25 —		内湾した後、ほぼ垂直に伸びる口縁部。端部は尖って終わる。 指頭圧成形後、内外面ナデ。	淡褐色	やや粗	良好	
116	製塩土器	7.05 —		深い半球形を呈し、垂直に伸びる口縁部が付く。口縁端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、外面ナデ、内面横方向の貝ケズリ。	乳灰色 ～明橙色	密	良好	
117	製塩土器	9.2 —		半球形の浅い椀状を呈する器形。口縁端部は尖り気味に終わる。 指頭圧成形後、内外面ナデ。	乳灰色	密	良好	
118	製塩土器	9.1 —		半球形の浅い椀状を呈する器形。口縁端部は、尖り気味に終わる。 指頭圧成形後、外面ナデ、内面横方向の貝ケズリ。	明橙色	密	良好	
119	土師器 甕	19.3 —		長胴形の胴部に「く」の字形に外反する口縁部が付く。端部は丸く終わる。 口縁部は、内外面ともヨコナデ。体部外面は上位に左上りの細いハケ(25本/cm～10本/cm)を施し、中位以下は縦方向の太いハケ(4本/cm)。体部内面は横方向のハケを施した後、ナデ。	淡赤茶色	やや粗	良好	体部外面上位以下煤付着
120	土師器 鍋			体部の焚口側部から把手付近遺存。下外方へ拡がり一方を大きく開く焚口となる。底部は焚口下端に短い突出部が付く。体部側面にゆるやかに外下方へ伸びる把手が付く。 外面縦方向のハケ。内面ナデ。把手は貼付け痕を残し全面ナデ。	茶褐色	やや粗	良好	

SD-4

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
121	土師器 甕	15.0 —		体部から「く」の字形に外反する口縁部に至る。端部は、つまみ上げ気味に丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラ削り、外面ナデ。	茶色 ～褐色	やや粗	良好	
122	土師器 甕	15.8 —		体部から下外方へ外反した後、器厚を減じて外反気味に伸びる。端部は内傾した面となる。 内外面ともナデと思われる。	淡赤茶色	やや粗	良	
123	土師器 甕	18.0 —		体部から一担肥厚して斜下方へ外反する口縁部が付き、端部は器厚を減じ、丸く終わる。 口縁端部及び口縁部外面ヨコナデ。口縁部内面粗いハケ。	淡茶色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
124	須恵器 杯蓋		13.5 — 13.5	丸味のある天井部から稜は鈍く、下方に浅い凹線が一周し、口縁部は、内湾気味に下った後短く外反する。端部は丸く終わる。 外面、稜より1.2cm以上は回転ヘラ削り、これより下部及び内面は回転ナデ。	青灰色	密	堅緻	外面全体灰かぶり
125	須恵器 杯蓋		13.4 — 13.0	丸味のある天井部から外面に鈍い稜をもち、やや内湾気味に口縁部が下る。端部は内傾した浅い凹面となる。 天井部外面回転ヘラケズり、その他回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	
126	須恵器 杯身		9.2 3.8 11.4	平らな底部から斜上方へ丸味をもって立ち上がり、外面に斜上方へ伸びる受部が付く。受部端は丸く終わる。立ち上がり部は上外方へ直線的に伸び、口縁端部は外傾した凹面。 外面、受部端より1.0cm以下は回転ヘラケズり、これより上部及び内面回転ナデ。	青灰色	密	堅緻	
127	土師器 高杯		— —	下外方へ伸びる中空の脚柱部。 外面縦方向のヘラ削り。内面ナデ。上部にしぼり痕残存。	淡茶色	密	良好	

SP-26

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
128	瓦器 椀		15.1 5.4 高台径5.15 高台高 0.5	丸味のある底部から斜上方へ内湾する深めの器形。口縁端部は丸く終わる。断面「U」字形の高台が垂直に付く。 内面密なヘラミガキ。見込み、格子状のヘラミガキ。体部外面上半に数条のヘラミガキ、指頭圧痕残存。	淡灰色 ～灰色	やや粗	良好	
129	瓦器 椀		14.35 4.75 高台径 4.2 高台高 0.4	丸味のある底部から外上方へ内湾する浅めの器形。口縁端部は丸く終わる。断面逆三角形の低い高台がほぼ垂直に付く。 内面緻密なヘラミガキ。見込み平行線状のヘラミガキ。体部外面上半に数条のヘラミガキ、指頭圧痕残存。	灰色	やや粗	良好	

SE-5

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
130 —四	瓦器 椀		14.9 4.25 高台径 4.1 高台高 0.4	平担な底部からやや直線的な体部が伸び口縁部で斜上方へ外反する。口縁端部は丸く終わる。断面逆三角形の低い高台が付く。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面、指頭圧痕残存。内面粗いヘラミガキ。見込みは、平行線状のヘラミガキ。	白灰色 ～黒灰色	やや粗	良好	内面に油煙内外面に重ね焼痕
131	瓦器 椀		14.3 —	丸味のある体部からほぼ直線的に伸び、口縁端部でわずかに外反する。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面に指頭圧痕残存。内面やや密なヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
132	瓦器 椀	15.4 —		上外方へ内湾して伸びる体部。口縁端部は外傾した面となり、内と外に稜をもつ。 口縁部外面ヨコナデ後、数条の細いヘラミガキ。内面密なヘラミガキ。	黒灰色	やや粗	良好	
133	瓦器 椀	— — 高台径6.45 高台高 1.0		やや丸味のある底部に断面「U」の字形の高い高台が「ハ」の字形に開いて付く。 見込み、乱方向の密なヘラミガキ。	内面黒灰色 外面乳茶色	やや粗	良好	黒色土器 A類椀か
134	瓦器 椀	— — 高台径5.75 高台高 0.8		平担な底部に断面「U」の字形でやや先細りの高い高台が「ハ」の字形に付く。 見込みは、平行線状の細いヘラミガキ。	乳灰色 ～灰色	やや粗	良好	外面底部に×印のヘラ記号
135	瓦器 椀	— — 高台径5.75 高台高 0.3		平担な底部から外上方へ内湾した体部が伸びる。断面逆台形の高台が少し開いて付く。 内面ヘラミガキ。見込みは平行線状のヘラミガキ。体部外面指頭圧痕残存。	灰色	やや粗	良好	
136	土師器 小皿	7.8 1.3		丸味のある底部から斜上方へ内湾して口縁部が伸び、口縁端部は上端をつまみ上げ気味に終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	灰白色	やや粗	良好	
137	土師器 小皿	8.0 1.55		平担な底部から斜上方へ内湾気味に伸び、口縁部で上方へつまみ上げて終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	乳茶色	やや粗	良好	
138	土師器 小皿	8.4 1.3		丸味のある底部から斜上方へ内湾して、口縁部で上方へつまみ上げて、尖り気味に終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	赤茶色	やや粗	良好	
139	土師器 小皿	9.2 1.5		平担な底部から外上方へ内湾し器厚を減じながら口縁部で上外方へつまみ上げる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	
140	土師器 土釜	28.2 — 鍔径 38.1		上内方へほぼ直線的に伸びる体部に丸味をもって斜上方へ外折する短い口縁部が付く。端部は丸く終わる。鍔は水平に伸び端部は、垂直な面となる。 口縁部内面及び外面全体ヨコナデ。体部内面ナデ。	淡赤茶色	粗	良好	鍔裏面以下煤付着
141	土師器 土釜	28.2 — 鍔径 39.0		上内方へ内湾する丸い体部から斜上方へ外反する口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。鍔は、ほぼ水平に付き端部で斜上方へ伸びる。 口縁部内面及び口縁部外面から鍔直下までヨコナデ。体部ナデ。	淡茶色	粗	良好	鍔裏面以下煤付着

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
142	土師器 土釜	鍔径	26.6 -- 38.4	上内方へ内湾する体部に上外方へ外反する口縁部が付く。口縁端部は丸く終わる。外上方へ直線的に伸びる鍔が付く。 口縁部内面ヨコナデ、体部内面はナデ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面板状工具による縦方向のケズリ。鍔はヨコナデ。	淡茶色	粗	良好	鍔裏面以下煤付着
143	土師器 土釜	鍔径	28.7 — 37.2	わずかに内湾して上内方へ伸びる体部に、屈曲部から肥厚して斜上方へ外反する口縁部が付く。口縁端部は丸く終わる。鍔はほぼ水平に付き、端部で器肉を増す。 口縁部内面及び口縁部外面から鍔直下までヨコナデ。体部外面、板状工具によるナデ。	淡赤茶色	粗	良好	内外面ともに煤付着
144 一四	土師器 土釜	鍔径	30.3 37.4	内湾する丸い体部から屈曲部で肥厚して外上方へ口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。鍔は薄くほぼ水平に付く。 口縁部内外面ともヨコナデ。体部内面ナデ。鍔部分の内面に指頭圧痕残存。鍔はヨコナデ。体部外面、板状工具によるナデ。	淡茶色	粗	良好	鍔裏面以下煤付着
145 一四	土師器 土釜	鍔径	28.85 — 40.2	ゆるやかに内湾する体部から上外方へ短く外折する口縁部が付く。口縁端部は尖り気味で終わる。 口縁部内面ヨコナデ。口縁部外面から鍔直下までヨコナデ。口縁部直下に指頭圧痕残存。鍔以下の体部は板状工具による斜方向のナデ。	淡赤茶色	粗	良好	外面全体に煤付着 内面体部中位以下炭火物付着
146	土師器 土釜	鍔径	28.3 — 39.25	丸味のある体部から肥厚しながら内湾し、垂直に立ち上がる短い口縁部に至る。端部は丸く終わる。鍔は水平で、端部は丸く終わる。 口縁部内面及び口縁部外面から鍔直下までヨコナデ。体部外面板状工具によるナデ。体部内面ナデ。	乳茶色 ～赤茶色	粗	良好	鍔裏面以下煤付着

SE-6

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
147	土師器 小皿		8.6 1.5	丸味のある底部から斜上方へ直線的に口縁部が伸びる。端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ともヨコナデ。底部外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	
148	土師器 小皿		8.8 1.5	丸味のある底部から斜上方へ内湾して、上方へつまみ上げ気味に口縁部が伸びる。端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡茶色	密	良好	
149	土師器 小皿		8.6 1.45	丸味のある底部から斜上方へ内湾してつまみ上げる口縁部。端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	淡茶色	密	良好	
150	土師器 小皿		8.4 1.1	平坦な底部から外面に段をもって斜上方へ内湾気味に口縁部が伸びる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
151	土師器 小皿	12.4 —	丸味のある体部から上外方へ直線的に口縁部が伸びる。端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡茶色	密	良好	
152	瓦器 椀	14.35 4.2 高台径 4.5 高台高 0.6	底部がすこし丸味をもつ浅い半球形の体部。口縁部は、やや器厚を減じながら端部は丸く終わる。断面逆三角形の薄い高台が付く。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面、指頭圧痕残存。内面密なヘラミガキ。見込みは格子状の細いヘラミガキ。	灰色 ～黒灰色	やや粗	良好	
153	瓦器 椀	15.6 —	丸味のある体部から上外方へ直線的に口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面、指頭圧痕残存。内面やや粗いヘラミガキ。見込みは、平行線状の細いヘラミガキと思われる。	灰色	やや粗	良好	
154 一四	瓦器 椀	15.15 4.7 高台径 4.4 高台高 0.4	やや浅めの半球形の体部。口縁部は斜上方へわずかに外反する。口縁端部は丸く終わる。断面逆台形の高台が付く。 口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面指頭圧痕残存。内面やや粗く太いヘラミガキ。見込みは平行線状の細いヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
155 一四	瓦器 椀	14.75 4.45 高台径4.05 高台高 0.3	浅めの半球形の体部。口縁部はやや直線的に斜上方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。断面逆台形の高台が垂直に付く。 口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面、指頭圧痕残存。内面密なヘラミガキ。見込みは平行線状ヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
156	瓦器 椀	— — 高台径 4.6 高台高 0.6	平坦な底部から丸味のある底部が伸びる。断面「U」字形の高い高台、やや開き気味に付く。 体部外面、指頭圧成形後粗いヘラミガキ。見込みは、格子状の太いヘラミガキ。	淡灰色 ～灰色	密	良好	
157	瓦器 椀	— — 高台径 5.7 高台高 0.5	丸味のある底部に断面「U」字形の高い高台がやや開き気味に付く。 見込みは、格子状のヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
158	瓦器 椀	— — 高台径4.55 高台高 0.4	平坦な底部に断面「U」字形の重厚な高台が付く。 見込みは平行線状のヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
159	瓦器 小皿	8.3 1.7	平坦な底部から丸味をもって屈曲し、斜上方へ直線的に口縁部が伸びる。口縁部は器厚を減じながら端部は丸く終わる。 口縁部外面ヨコナデ。内面数条の太いヘラミガキ。見込みは平行線状ヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
160	瓦器 小皿	10.2 2.0	丸味のある底部から直線的な口縁部が伸びる。端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面、指頭圧痕残存。見込み、乱方向のヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
161	須恵器 鉢		22.5 —	外上方へ直線的に伸びる。端部は内傾した平坦な面をもつ。 内外面とも全体に回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	
162	須恵器 鉢		— —	平坦の底部から内湾気味に上外方へ体部が伸びる。 内外面全体に回転ナデ。底部外面ナデ。	灰青色	やや粗	堅緻	
164	土師器 土釜		34.75 —	内湾気味に器厚を増して、上内方へ伸びる体部から「く」の字形に外折する口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。胴欠損。 内外面全体にヨコナデ。	淡赤茶色	粗	良好	内面炭火物付着

師

SE-7

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
166 一六	土師器 小皿		7.75 1.45	やや歪んだ器形。底部から丸味を帯びて上方へつまみ上げる口縁部。口縁端部は、丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面右回りのヨコナデ。底部内面ナデ。	淡茶色	密	良好	完形 小さく黒い斑点有
167	土師器 小皿		8.2 1.6	丸味のある底部から上外方へやや直線的に口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。	乳茶色	やや粗	良好	
168 一六	土師器 小皿		8.0 1.8	やや歪んだ器形。底部から丸味を帯びて斜上方へ口縁部が伸びる。口縁端部は、つまみ上げ気味で外側は丸くなる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面、板状工具によるナデ。	淡褐色	やや粗	良好	完形
169	土師器 小皿		9.1 —	平坦な底部から外上方へわずかに外反する口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。	淡茶色	密	良好	内面灯心油痕あり
170	土師器 小皿		9.3 —	平坦な底部から丸味を帯びて斜上方へ伸びる口縁部。口縁端部は尖り気味に終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面ヨコナデ。内面全体ナデ。	乳茶色	やや粗	良好	
171 一六	土師器 小皿		10.35 1.15	平坦な底部から丸味を帯びて上内方へ大きく巻込む口縁部。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡茶色	密	良好	小さく黒い斑点あり

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
172	土師器 小皿		9.8 —	丸味のある底部から上外方へ直線的に伸びる口縁部。口縁端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、内面及び口縁部外面ヨコナデ。底部外面指頭圧痕残存。	淡茶色	密	良好	
173	土師器 小皿		10.8 2.2	平坦な底部から斜上方へ内湾気味に伸びる口縁部。口縁端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面ヨコナデ。底部ナデ。	淡赤茶色	やや粗	良好	
174	土師器 中皿		13.1 —	体部から口縁部は、外上方へ内湾して伸びる。口縁端部は、上方へつまみ上げ気味に終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。	乳茶色 ～淡褐色	やや粗	良好	
175	土師器 小皿		14.05 —	平坦な底部から丸味を帯びて斜上方へ伸びる口縁部。口縁端部は、つまみ上げて尖り気味に終わる。 口縁部内外面ともヨコナデ。底部内外面ナデ。	乳灰色	やや粗	良好	
176 一六	瓦器 椀		14.65 5.25 高台径5.25 高台高0.35	全体に歪んだ器形やや直線的な体部に斜上方へ伸びる口縁部。端部は丸く終わる。断面逆台形の低い高台が垂直に付く。 内面太い数条のヘラミガキ。見込み平行線状のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ、指頭圧痕残存。	乳灰色 ～黒灰色	やや粗	良好	
177	瓦器 椀		15.1 —	やや浅い半球形の体部。口縁部は斜上方へ直線的に伸びる。端部は丸く終わる。 口縁部外面はヨコナデ。体部外面ナデ内面やや密なヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
178	瓦器 椀		16.5 —	内湾気味に上外方へ伸びる体部。口縁部は器厚を減じながら丸く終わる。 口縁部外面強いナデの後ヘラミガキ。体部外面ナデ。内面密なヘラミガキ。	白灰色 ～灰青色	やや粗	良好	
179	瓦器 椀		15.85 —	半球形の体部。口縁部は、外反し端部は丸く終わる。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面やや粗いヘラミガキ。	淡灰色 ～灰青色	密	良好	
180 一六	瓦器 椀		14.55 4.9 高台径 4.8 高台高 0.4	やや浅めの半球形の体部。口縁部はやや器厚を減しながら端部は丸く終わる。高台はやや高く断面逆三角形で少し開き気味に付く。 内面粗めのヘラミガキ。見込み粗い斜格子状のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ。	灰青色	やや粗	良好	
181	瓦器 椀		14.3 —	内湾気味に斜上方へ伸びる体部。口縁端部は丸く終わる。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面、指頭圧痕残存。内面、数条の太いヘラミガキ。	淡灰色 ～灰色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
182	瓦器 椀	24.9 — 高台径 — 高台高 —		浅めの半球形の体部。口縁部は端部でやや開き、丸く終わる。 内面数条のヘラミガキ。見込み平行状ヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面指頭圧痕残存。	乳灰色 ～淡灰色	粗	良好	
183	瓦器 椀	19.55 —		斜上方へ内湾気味に伸びる。口縁端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面数条のヘラミガキ。	淡灰色 ～灰色	やや粗	良好	内面及び体部外面炭素付着不良部有
184 一六	瓦器 椀	14.95 4.8 高台径 4.0 高台高0.25		丸味のある底部から直線的に体部が伸び、口縁部でわずかに外反する。端部は丸く終わる。断面逆三角形の高台がほぼ垂直に付く。 内面やや密なヘラミガキ。見込みは連結輪状のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ。	灰青色	密	良好	
185	瓦器 椀	13.4 —		丸味のある体部から直線的に口縁部が伸びる。口縁端部は、丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面、指頭圧成形後ナデ。内面やや粗く太いヘラミガキ。	灰色	粗	良好	
186	瓦器 椀	15.85 —		内湾気味に斜上方へ伸びる。口縁部は、上外方へ尖り気味に終わる。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面、指頭圧痕残存。内面粗く太いヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
187	瓦器 椀	16.8 —		丸味のある体部から、直線的に伸びる口縁部が付く。端部は丸く終わる。 口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面ナデ。内面、数条のヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
188	瓦器 椀	17.6 —		浅い半球形の体部。口縁端部でわずかに開き、尖り気味に終わる。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面やや粗いヘラミガキ。見込みは平行線状のヘラミガキと思われる。	淡灰色 ～灰色	粗	良好	
189	瓦器 椀	— — 高台径5.15 高台高 0.7		丸味のある底部に断面逆台形で、外面が外反する高台が「ハ」の字形に開いて付く。 見込みは、格子状のヘラミガキ。	淡灰色 ～灰色	密	良好	
190	瓦器 椀	— — 高台径 5.9 高台高0.65		断面逆三角形の高台がやや開き気味に付く。 見込みは、密なヘラミガキ。	黒灰色	密	良好	
191	瓦器 椀	— — 高台径 4.2 高台高 0.4		断面逆三角形の低い高台が垂直に付く。 見込みは、平行線状のヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
192	瓦器 椀	— —		丸味のある底部。断面逆台形の低い高台が「ハ」の字形に付く。 見込みは、格子状ヘラミガキ。	灰色	密	良好	
		高台径4.65 高台高 0.3						
193 一六	瓦器 小皿	10.0 2.6		浅い半球形を呈する。口縁端部は丸く終わる。 口縁部内外面ともヨコナデ。底体部外面、掌文、指頭圧痕残存。内面密なヘラミガキ。見込みやや密な平行状ヘラミガキ。	灰色 ～黒灰色	やや粗	良好	
194	瓦器 小皿	9.1 —		台付瓦器小皿。丸味のある体部から器厚を減じて斜上方へ直線的に伸びる口縁部が付く。口縁端部は丸く終わる。 外面ヨコナデ。内面密なヘラミガキ。見込みは、平行線状の密なヘラミガキ。	淡灰色 ～灰色	密	良好	
195 一六	瓦器 小皿	8.85 2.2		浅い半球形を呈する。口縁部は上外方へ直線的に伸びる。口縁端部は丸く終わる。 口縁部は内外面ともヨコナデ。底体部外面指頭圧痕残存。内面ナデ。細く粗いヘラミガキ。	淡灰色	やや粗	良好	完形
196	須恵器 鉢	— —		平底の底部から斜上方へ直線的に体部が伸びる。 底面に回転糸切痕残存。内面回転ナデ外面ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	
197	白磁 碗	15.0 —		上外方へほぼ直線的に伸び、玉縁状の口縁部へ至る。	淡灰色の釉	緻密	堅緻	
198	白磁 皿	10.75 2.7		平坦な底部から角度をかえて直線的な体部が伸びた後、丸味を帯びた口縁部が伸びる。口縁部は先細で端部は尖り気味で終わる。	黄白色の釉	緻密	堅緻	貫入有
199 一七	土師器 小皿	8.55 1.4		平坦な底部から、外上方へ内湾して口縁部で上方へつまみ上げ、尖り気味で終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ、外面掌紋残存。	淡茶色	やや粗	良好	
200 一七	土師器 小皿	7.65 1.7		丸味のある底部から外上方へ内湾して伸び口縁部でつまみ上げ気味に終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ、外面掌紋残存。	淡茶色	やや粗	良好	内面灯心油痕あり
201 一七	土師器 小皿	8.0 1.3		底面中央が少し窪む平坦な底部から斜上方へ内湾気味に伸び、口縁部で上方へつまみ上げる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ底部内面ナデ、外面掌紋残存。	淡茶色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
202 一七	土師器 小皿	8.2 1.5	平担な底部から斜上方へ内湾して伸び、口縁部で上方へつまみ上げて終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ、外面掌紋残存。	淡茶色	やや粗	良好	
203 一七	土師器 小皿	8.1 1.4	平担な底部から斜上方へ内湾気味に立ち上り、口縁部で上方へつまみあげ気味に終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ、外面掌紋残存。	淡茶色	やや粗	良好	完形
204 一七	土師器 小皿	8.2 1.3	底面中央が少し窪む平担な底部から外上方へ内湾して口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ、外面掌紋残存。	淡茶色	やや粗	良好	
205 一七	土師器 小皿	8.5 1.6	やや丸味のある底部から、外上方へ内湾気味に伸び口縁部でつまみあげ気味に終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底面ナデ、外面掌紋残存。	淡茶色	やや粗	良好	
206	土師器 小皿	8.4 1.4	平担な底部から外上方へ内湾して伸び、口縁部でつまみ上げ気味に終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ、外面掌紋残存。	淡茶色	やや粗	良好	
207 一七	瓦器 椀	15.8 4.85 高台径 4.6 高台高 0.3	浅い半球形の底部に斜上方へ外反する口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。断面逆台形の低い高台が「ハ」の字形に開いて付く。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面、指頭圧成形後ナデ、内面やや密な太いヘラミガキ。見込みは細い平行線状のヘラミガキ。	乳灰色	やや粗	良好	
208	瓦器 椀	14.9 —	斜上方へ内湾気味に伸びる。口縁端部は、丸く終わる。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面、指頭圧成形後ナデ。内面やや密なヘラミガキ。見込みは平行線状の細いヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
209 一七	瓦器 椀	14.8 4.8 高台径 4.0 高台高 0.3	平担な底部から内湾して斜上方へ伸び、口縁部で外反する。口縁端部は丸く終わる。断面逆台形で低い高台が付く。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面、指頭圧成形後ナデ。内面やや粗く太いヘラミガキ。見込みは、平行線状の細いヘラミガキ。	灰色 ～黒灰色	やや粗	良好	完形
210	瓦器 椀	14.2 —	丸味をもって外上方へ伸び、口縁部でわずかに外反する。端部は丸く終わる。 口縁部外面ヨコナデ。内面粗いヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
211	瓦器 椀	15.8 —	浅い半球形の体部。口縁部は斜上方へ内湾する。口縁端部は丸く終わる。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面、指頭圧痕残存。内面密なヘラミガキ。見込みは平行線状ヘラミガキ。	淡灰色	粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
212	瓦器 椀		15.1 —	浅い半球形の体部。口縁部は上外方へ内湾する。口縁端部は丸く終わる。 口縁部外面ヨコナデ。内面密なヘラミガキ。見込みは、平行線状のヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
213 一七	瓦器 椀		15.6 4.45 高台径4.55 高台高 0.3	平担な底部から丸味をもって斜上方へ直線的に伸び、口縁端部でわずかに外反する。端部は丸く終わる。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面、指頭圧成形後ナデ。内面やや粗いヘラミガキ。見込みは平行線状の太いヘラミガキ。	乳灰色 ～黒灰色	やや粗	良好	

SE-8

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
214	瓦器 椀		15.0 5.3 高台径 5.5 高台高 0.4	丸味のある底部から上外方へ内湾する器形。口縁端部は丸く終わる。断面逆三角形の低い高台が「ハ」の字形に開いて付く。 内面密で太いヘラミガキ。見込みは斜格子状のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部中位やや粗いヘラミガキ。下位指頭圧痕残存。	淡灰色	やや粗	良好	
215	瓦器 椀		— — 高台径 5.8 高台高 0.6	丸味のある底部から外上方へゆるやかに内湾する底部が伸びる。断面逆三角形の高台が「ハ」の字形に開いて付く。 見込み、平行線状のヘラミガキ。	灰色	密	良好	
216	瓦器 椀		— — 高台径 5.4 高台高 0.5	丸味のある底部に断面逆台形の薄い高台がやや開いて付く。 見込み、ハケ及びナデの後平行線状の太いヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
217	瓦器 椀		— — 高台径 5.0 高台高 0.5	丸味のある底部に断面逆三角形の低い高台がやや開いて付く。 見込みに連結輪状のヘラミガキ。	淡灰色	やや粗	良好	

SE-9

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
218	土師器 小皿		7.85 1.1	平担な底部から外上方へゆるやかに立ち上がる口縁部が伸びる。口縁端部は尖り気味に終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	乳灰色	やや粗	良好	
219 一八	土師器 小皿		8.8 1.6	丸味のある底部から斜上方へ内湾する口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
220	土師器 小皿	9.2 1.45		平坦な底部から外上方へ内湾する口縁部が伸びる。口縁端部はつまみ上げ気味に終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ヨコナデ。	乳灰色	やや粗	良好	
221	瓦器 小皿	8.8 1.45		平坦な底部から外上方へ直線的に伸びる口縁部が付く。口縁端部は丸く終わる。外面にヨコナデによる段をもつ。 口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面、指頭圧痕残存。見込み乱方向のヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
222 一八	土師器 小皿	8.4 1.4		平坦な底部から外面に稜をもって斜上方へ直線的に口縁部が伸びる。口縁端部は、上方へつまみ上げ気味に終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	乳茶色	密	良好	完形
223	土師器 小皿	11.2 2.0		平坦な底部から上外方へ内湾する口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡赤茶色	密	良好	
224	土師器 小皿	12.2 —		丸味を帯びて斜上方へ伸び、口縁部で上方へつまみ上げ、尖り気味に終わる。 内外面ともヨコナデ。	淡茶色	密	良好	
225 一八	土師器 小皿	12.8 1.8		平坦な底部から上外方へ直線的に立ち上がる口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。 口縁部内外面ともヨコナデ。底部内面ナデ。	淡茶色	粗	良好	
226	土師器 小皿	13.0 2.2		丸味を帯びて外上方へ口縁部が伸びる。口縁端部は、つまみ上げて尖り気味に終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	淡茶色	密	良好	
227	瓦器 椀	16.5 —		丸味のある体部から屈曲を減じて斜上方へ直線的に伸びる口縁部が付く。口縁端部は丸く終わる。 口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面、指頭圧痕残存。内面数条のヘラミガキ。見込み平行線状の細いヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
228	瓦器 椀	17.1 3.85		平坦な底部から斜上方へ内湾気味に伸びる。口縁端部は丸く終わる。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面、指頭圧痕残存。内面やや密なヘラミガキ。見込み平行線状のヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
229	瓦器 椀	17.2 3.8		浅い半球形の体部で口縁部で少し外反する。口縁端部は丸く終わる。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面、指頭圧痕残存。内面密なヘラミガキ。見込み平行線状の細いヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
230	瓦器 椀	高台径 4.7 高台高 0.5	— —	平坦な底部に断面台形の高台が「ハ」の字形に開いて付く。 見込み、平行線状の太いヘラミガキ。	乳灰色 ～黒灰色	やや粗	良好	
231	瓦器 椀	高台径 3.0 高台高0.35	— —	平坦な底部に断面逆台形のごく低い高台が「ハ」の字形に開いて付く。 見込み、平行線状のヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
232 一八	瓦器 土釜	鍔径 23.3	18.0 — —	扁平な底部から丸味を帯びて上方へ立ち上がり、ゆるやかに内湾し、鍔部分でさらに上内方へ内湾する口縁部が伸びる。 口縁部内面に指頭圧痕残存。体部内面、水平方行のハケ。口縁部外面から鍔直下までヨコナデ。鍔以下は指頭圧成形後ナデ。	暗灰色	粗	良好	鍔以下煤付着
233	土師器 土釜	鍔径 39.5	29.2 — —	上内方へ直線的に伸びる体部から斜上方へ短く屈曲する口縁部が付く。口縁端部は丸く終わる。鍔は水平に付く。端部は丸い。 内外面ともヨコナデ。	淡茶色	粗	良好	
234	土師器 土釜	鍔径 40.8	29.8 — —	張り少い体部で鍔部分から肥厚して「く」の字形に短く外折する口縁部が付く。口縁端部は丸く終わる。鍔は、やや外上方へ伸びる。 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半から中位にかけて縦方向の板状工具によるケズリ、中位以下横方向のナデ。				

SK-10

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
235	土師器 小皿		9.8 —	丸味をもって外上方へ立ち上がり、外反する口縁部に至る。口縁端部は内に丸く巻込む。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	乳白色	密	良好	
236	土師器 小皿		9.65 —	底部から外反する口縁部に至る。口縁端部は、円に丸く巻込む。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡褐色	やや粗	良好	
237	土師器 小皿		9.15 —	底部から丸味をもって立ち上がり、外反する口縁部に至る。口縁端部は内にわずかに丸く巻込む。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	乳茶色	密	良好	
238	土師器 小皿		11.4 —	底部からわずかに立ち上がり、外反する口縁部に至る。口縁端部は、内にわずかに丸く巻込む。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面、指頭圧痕残存。	淡茶色	密	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
239	土師器 小皿		10.55 1.05	底部から外上方へわずかに立ち上がり、外反する口縁部に至る。口縁端部は、内に丸く巻込む。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡茶色	密	良好	
240	土師器 小皿		10.0 1.0	平担な底部から外上方へわずかに立ち上がり外反する口縁部に至る。口縁端部は内に丸く巻込む。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面、指頭圧痕、板状工具痕残存。	乳灰色	密	良好	内面灯心油痕有
241	土師器 小皿		9.6 1.2	丸味のある底部から外上方へ丸味を持って立ち上がり外反する口縁部に至る。口縁端部は、内に巻込む。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。内外面にヨコナデ後指頭圧痕残存。	乳灰色	密	良好	
242	土師器 小皿		11.4 —	丸味のある底部から外上方へ立ち上がり外反する口縁部に至る。口縁端部は内に丸く巻込む。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。	乳灰色	密	良好	
243	土師器 小皿		9.6 1.6	平担な底部から外上方へ立ち上がり外反する口縁部に至る。口縁端部は、内に丸く巻込む。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ。外面弱いナデ。	乳灰色 ～淡赤茶色	密	良好	
244	土師器 小皿		10.8 —	丸味のある底部から外上方へ立ち上がり、外反する口縁部に至る。口縁端部は内に丸く巻込む。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	
245	土師器 小皿		11.4 1.4	丸味のある底部から外上方へ立ち上がり、外反する口縁部に至る。口縁端部は、内に丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ、外面弱いナデ。	乳茶色	密	良好	
246 一八	土師器 小皿		9.1 1.3	平担な底部から丸味を持って立ち上がり外反して口縁部に至る。口縁端部は内に丸く巻込む。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ、底部内外面ナデ。	乳灰色	やや粗	良好	完形
247	土師器 小皿		10.4 —	底部から丸味をもって外上方へ立ち上がり外反する口縁部に至る。口縁端部は内に丸く巻込む。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	乳灰色	やや粗	良好	
248 一八	土師器 小皿		9.0 1.4	丸味のある底部から外上方へ立ち上がり外反する口縁部に至る。口縁端部は内に丸く巻込む。 口縁部内外面及び体部内面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	乳褐色 ～淡茶色	やや粗	良好	

遺物番号・図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
249	土師器 小皿	9.6 —	底部から外上方へ伸び外反する口縁部に至る。口縁端部は丸く巻込む。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ、底部外面弱いナデ。	乳灰色	密	良好	
250	土師器 小皿	10.2 —	ゆるやかに丸味をもって外上方へ立ち上がりわずかに外反する口縁部に至る。口縁端部は、内に巻込んだ状態で内傾した面をもつ。 口縁部、内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	乳灰色 ～淡赤茶色	密	良好	
251	土師器 小皿	9.6 1.6	平担な底部から外上方へ立ち上がった後外反する口縁部に至る。口縁端部は内に丸く巻込む。 口縁部内外面ヨコナデ、底部内外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	
252	土師器 小皿	9.7 0.8	平担な底部からわずかに立ち上がって外反する口縁部に至る。口縁端部は、丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面板状工具のナデ、指頭圧痕残存。	淡褐色	やや粗	良好	
253	土師器 小皿	8.8 1.0	平担な底部から外上方へ立ち上がり、外反する口縁部に至る。口縁端部は内に丸く巻込む。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面指頭圧痕残存。	淡赤茶色	密	良好	
254	土師器 小皿	9.4 1.2	平担な底部から外上方へ立ち上がり、少し外反する口縁部に至る。口縁端部は内に丸く巻込む。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ、外面指頭圧痕残存。	乳灰色	密	良好	
255 一八	土師器 小皿	9.6 1.6	丸味のある平担な底部から外反する口縁部に至る。口縁端部は内に丸く巻込む。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	乳褐色	やや粗	良好	完形
256	土師器 小皿	9.35 1.7	浅い半球形の器形。口縁部でわずかに外反する。口縁端部は内に丸く巻込む。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面、指頭圧痕残存。	乳茶色	密	良好	
257 一八	土師器 小皿	9.8 2.0	丸味のある底部から外反して口縁部に至る。口縁端部は内に丸く巻込む。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	乳褐色 ～淡茶色	やや粗	良好	完形
258 一八	土師器 小皿	9.3 1.85	丸味のある底部から外反して口縁部に至る。口縁端部は内に丸く巻込む。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	乳灰色	やや粗	良好	完形

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
259	土師器 小皿		9.2 1.6	平坦な底部から丸味を持って外上方へ立ち上がり、外反する口縁部に至る。口縁端部は内に丸く巻込む。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面ナデ。指頭圧痕残存。	乳白色	密	良好	
260 一八	土師器 小皿		9.45 1.85	丸味のある底部から外反して口縁部に至る。口縁端部は内に丸く巻込む。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	完形
261	土師器 小皿		7.8 1.4	平坦な底部からわずかに立ち上がって外反する口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面指頭圧痕残存。	乳茶色	密	良好	
262	土師器 小皿		11.6 1.5	丸味をもって外上方へ伸び外反する口縁部に至る。口縁端部は、内に丸く巻込む。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。	乳茶色	密	良好	
263 一八	土師器 小皿		8.6 2.0	浅い半球形の底部から外反して口縁部に至る。口縁端部は内に丸く巻込む。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	乳茶色 ～淡赤茶色	やや粗	良好	完形
264 一八	土師器 小皿		9.4 1.95	平坦な底部から外上方へ丸味をもって立ち上がり、外反する口縁部に至る。口縁端部は水平に尖り気味に終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面、指頭圧痕残存。	乳褐色	やや粗	良好	完形
265 一八	土師器 小皿		10.0 2.2	丸味のある底部から斜上方へ伸びほぼ直線的に口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底体部内面ナデ。体部外面ナデ、一部指頭圧痕残す。	淡赤茶色	密	良好	完形
266	土師器 小皿		9.1 —	浅い半球形の器形。口縁端部は丸く終わる。内外面ともヨコナデ。	淡茶色	やや粗	良好	
267	土師器 小皿		10.1 1.2	平坦な底部から丸味をもって斜上方へ立ち上がる口縁部に至る。口縁端部は上端をつまみ上げ気味に丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面弱いナデ。	淡茶色	やや粗	良好	
268	土師器 小皿		8.6 1.2	平坦な底部から丸味をもって斜上方へ立ち上がる口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面に板状工具痕残存。	淡茶色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
269	土師器 小皿	10.4 1.2	底部から丸味をもって立ち上がり、ほぼ直線的な口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	乳灰色	やや粗	良好	
270	土師器 小皿	11.4 —	底部から外上方へ内湾気味に伸びる口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面指頭圧痕残存。	乳白色	やや粗	良好	
271	土師器 小皿	10.4 1.5	平担な底部から斜上方へほぼ直線的に伸びる口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。外面磨いナデ。	淡茶色	密	良好	
272	土師器 小皿	10.8 1.25	底部から斜上方へほぼ直線的に伸びる口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	
273	土師器 小皿	11.2 1.95	平担な底部から丸味を持って斜上方へ立ち上がる口縁部に至る。口縁端部は、丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ、外面板状工具によるナデ。	淡赤茶色	やや粗	良好	
274	土師器 小皿	10.8 1.25	底部から丸味をもって外上方へ伸びる口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	
275	土師器 小皿	8.7 1.6	底部から斜上方へほぼ直線的に伸びる口縁部に至る。口縁端部は尖り気味に終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	乳灰色	密	良好	
276	土師器 小皿	8.8 1.2	底部から丸味をもって斜上方へ伸びる口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	
277	土師器 小皿	8.6 1.8	平担な底部から丸味を持って斜上方へ伸びる口縁部に至る。口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	
278	土師器 小皿	10.2 1.7	平担な底部から外上方へ内湾気味に立ち上がり口縁部へ至る。口縁端部は、尖り気味で丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	

一八

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
279	土師器 小皿	9.4 —		平担な底部から外上方へゆるやかに丸味をもって伸びる口縁部に至る。 口縁部外面、二段ヨコナデ。内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡茶色	密	良好	
280 一八	土師器 中皿	14.55 —		浅い半球形の器形。口縁端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底体部内外面ナデ。	乳灰色	密	良好	
281	土師器 中皿	14.1 2.9		平担な底部から外上方へ立ち上がり口縁部でわずかに外反する。口縁端部は尖り気味に終わる。 口縁部内外面ヨコナデ、底部内外面ナデ。	乳茶色 ～淡褐色	密	良好	
282	土師器 中皿	15.4 —		外上方へほぼ直線的に伸びる浅い半球形の器形。口縁端部は丸く終わる。 口縁部内外面及び体部内面ヨコナデ。底部内面及び底体部外面ナデ。	乳灰色	やや粗	良好	
283 一八	土師器 中皿	15.8 2.95		平担な底部からゆるやかに外上方へ丸味をもって立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底体部内外面ナデ。	淡茶色	粗	良好	
284 一八	土師器 中皿	14.8 3.55		丸味のある底部から斜上方へ丸味をもって立ち上がり、ほぼ直線的な口縁部が伸びる。端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ、底体部内面ナデ。	乳白色 ～乳褐色	やや粗	良好	
285	土師器 中皿	14.2 —		平担な底部から器厚と増して外上方へほぼ直線的に伸びる。浅い半球形の器形。口縁端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ。	明褐色	密	良好	
286	土師器 中皿	15.8 —		浅い半球形の器形。口縁端部は、上方へつまみ上げて丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面及び底部内面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	
287	土師器 中皿	15.8 3.05		平担な底部から丸味を帯びて外上方へ伸びる器形。口縁端部は尖り気味に終わる。 口縁部内外面ヨコナデ、底体部内外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	
288 一八	土師器 中皿	15.4 3.5		平担な底部から外上方へ立ち上がり、外反気味直線的に伸びる口縁部へ至る。口縁端部は内に丸く終わる。 口縁部外面ヨコナデ。底体部外面弱いナデ。内面全体ナデ。	乳白色	密	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
289	土師器 中皿		13.9 —	丸味のある底部から外上方へ少し開いた後ほぼ直線的に伸び、口縁部で少し外反する。口縁端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。体部外面、指頭圧痕残存。	淡赤茶色	密	良好	
290	土師器 椀		— — 高台径 6.3 高台高 1.0	断面「U」字形の高い高台が「ハ」の字形に開いて付く。 底部内面ナデ。高台部内外面ヨコナデ。	淡茶色	やや粗	良好	
291	土師器 中皿		12.9 —	浅い半球形の器形。口縁部は斜上方へ直線的に伸びる。端部は先細りで丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。	乳灰色	やや粗	良好	
292	土師器 中皿		14.25 —	丸味のある底部から上外方へほぼ直線的に伸び上方へつまみ上げ、丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	淡茶色	密	良好	
293	土師器 中皿		16.35 —	浅い半球形の器形。口縁端部は上外方へつまみ上げ、尖り気味に終わる。 口縁部内外面及び体部内面ヨコナデ。底部内面及び底体部外面ナデ。				
294	土師器 中皿		15.7 —	外上方へ伸びる体部から丸味を持って角度をかえて上外方へほぼ直線的な口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	淡茶色	密	良好	
295	土師器 椀？		— —	平らな底部から外上方へ体部が伸びる。 内面ナデ。体部外面ナデ。底部外面回転糸切痕残存。	乳茶色	やや粗	良好	
296	土師器 鍋		16.55 —	体部から斜上方へ直線的に伸びる口縁部。口縁端部は、ほぼ垂直な面と内傾する面の二面をもつ。 内面ヨコナデ、外面縦方向の粗いハケ。	淡赤茶色	粗	良好	
297 —九	土師器 土釜		29.8 — 鍔径 38.15	上内方へ内湾する体部から斜上方へ外反する口縁部に至る。口縁端部は内傾する面をもつ。鍔は薄く外上方へ直線的に伸びる。 口縁部外面から鍔直下まで及び口縁部内面ヨコナデ、鍔以下の体部外面ナデ。体部内面顕著な指頭圧痕残存。	茶色	粗	良好	鍔裏面以下煤付着
298	須恵器 皿		— —	平坦な底部から斜上方へ体部が伸びる。 内外面ナデ。底部外面、板状工具痕残存。	淡灰色	やや粗	堅緻	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
299 一九	瓦器 椀	15.4 7.05 高台径 6.3 高台高 0.6		平坦な底部から上外方へ内湾する深い器形。口縁部でわずかに外反し、端部内面にヘラ描きの凹線が一周する。 見込みに格子状のヘラミガキを施した後、内面全体に緻密なヘラミガキ。外面三方向に分割したやや密なヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	大和型？
300 一九	瓦器 椀	14.7 6.3 高台径 6.2 高台高 0.7		平坦な底部から上外方へ内湾する深い器形を呈する。口縁端部は丸く終わる。断面「U」字形の高い高台が「ハ」の字形に開いて付く。 内面全体緻密なヘラミガキ。口縁部外面から高台まで緻密なヘラミガキ。	灰色	粗	良好	
301 一九	瓦器 椀	15.9 5.7 高台径 7.2 高台高 0.6		丸味のある底部から外上方へゆるやかに内湾する深い半球形を呈する。口縁端部は斜上方へやや尖り気味に終わる。断面逆三角形で端部の丸い高台が「ハ」の字形に開いて付く。 内面緻密なヘラミガキ。外面密なヘラミガキ。	黒色	やや粗	良好	二次焼成を受ける
302	瓦器 椀	15.4 5.8 高台径 6.6 高台高 0.7		丸味のある底部から斜上方へ内湾する。半球形のやや深めの器形。口縁端部丸く終わる。断面「U」字形の高台で「ハ」の字形に開いて付く。 内面全体、緻密なヘラミガキ。口縁部外面から高台まで緻密なヘラミガキ。	乳灰色 ～灰色	やや粗	良好	
303	瓦器 椀	16.8 5.95 高台径 7.4 高台高 0.6		斜上方へ内湾する深めの器形。口縁端部は丸く終わる。断面「U」字形の高い高台が、「ハ」の字形に開いて付く。 内外面に緻密なヘラミガキ。	乳灰色 ～明赤茶色	やや粗	良好	全く炭素付着不良？
304 一九	瓦器 椀	－ － 高台径 6.6 高台高 0.7		やや丸味のある底部から斜上方へ体部が伸びる。断面逆台形の重厚な高台が「ハ」の字形にやや開いて付く。 見込み平行状のヘラミガキの後、体部内面密なヘラミガキ。分割成形。	暗灰色	密	良好	大和型？ 底部外面油痕あり
305	瓦器 椀	13.15 —		ゆるやかに内湾し口縁部でほぼ直線的に伸びる器形。口縁端部は丸く終わり、端部内面に凹線状の窪みが一周する。 内面密で細いヘラミガキ。外面数条の細いヘラミガキ。	淡灰色	やや粗	良好	大和型？
306	瓦器 椀	14.4 —		上外方へやや直線的伸びる器形。口縁端部は丸く終わり、端部内面に浅い凹線状の窪みが一周する。 内面密なヘラミガキ。外面密なヘラミガキ。	淡褐色 ～暗灰色	やや粗	良好	二次焼成を受ける。
307	瓦器 椀	14.0 —		上外方へ内湾し、直線的に口縁部が伸びるやや深めの器形。口縁端部は丸く終わる。 内面緻密なヘラミガキ。外面密なヘラミガキ。	暗灰色	粗	良好	内外面に油痕あり
308	瓦器 椀	13.8 —		斜上方へ内湾する体部にわずかに外反する口縁部が伸びる深めの器形。 内面密なヘラミガキ。口縁端部外面及び体部外面に緻密なヘラミガキ。分割成形を意識している。	乳灰色 ～暗灰色	粗	良好	炭素付着不良

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・製塑等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
309	瓦器 椀	15.4 —	斜上方へ内湾する深めの半球形の器形。口縁端部は丸く終わる。 内面密なヘラミガキ。外面やや密な太いヘラミガキ。	淡灰色 ～暗灰色	粗	良好	
310	瓦器 椀	16.9 --	斜上方へ内湾する体部にわずかに外反する口縁部が伸びる。口縁端部は丸く終わる。 内面、密なヘラミガキ。見込みと未分化。外面、分割調整を意識している緻密なヘラミガキ。	暗灰色	やや粗	良好	
311	瓦器 椀	16.2 --	斜上方へ内湾する体部にわずかに外反する口縁部が伸びる深めの器形。口縁端部はやや尖り気味で終わる。 内面全体、緻密なヘラミガキ。外面緻密なヘラミガキ。体部下半で分割成形を意識している箇所が認められる。	暗灰色	やや粗	良好	
312	瓦器 椀	15.0 —	上外方へゆるやかに内湾し口縁部でわずかに外反するやや深めの器形。口縁端部は丸く終わる。 内面やや密なヘラミガキ。外面密なヘラミガキ。	乳茶色	やや粗	良好	炭素付着不良
313	瓦器 椀	16.9	上外方へやや直線的に伸びる器形。口縁端部は斜上方へ尖り、端部内面に凹線状の窪みが一周する。 内面密で細いヘラミガキ。外面やや粗く細いヘラミガキ。	淡灰色 ～灰色	やや粗	良好	大和型?
314	瓦器 椀	13.6 —	斜上方へ内湾する（やや浅め）の器形。口縁部でわずかに外反し、端部は内傾した面をもち、上端、下端は鋭となる。 内面ナデ。外面密なヘラミガキ。	乳褐色	やや粗	良好	炭素付着不良
315	瓦器 椀	15.0 —	上外方へ内湾して伸びるやや深めの器形。口縁端部は丸く終わる。 内面、密なヘラミガキ。外面密なヘラミガキ。	明乳茶色	やや粗	良好	炭素付着不良
316	瓦器 椀	17.0 —	斜上方へゆるやかに内湾する器形。口縁端部は丸く終わる。 内面やや粗く太いヘラミガキ。外面密なヘラミガキ。	乳褐色	粗	良好	炭素付着不良
317	瓦器 椀	15.1 —	上外方へ内湾する器形。口縁端部は丸く終わる。 内面緻密なヘラミガキ。外面数条のヘラミガキ。	白灰色 ～淡灰色	粗	良好	
318	瓦器 椀	13.7 —	上外方へ内湾するやや浅めの器形。口縁端部は、やや尖り気味に終わる。 内面密なヘラミガキ。口縁部外面に強いヨコナデ。	暗灰色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
319	瓦器 椀	— — 高台径 7.0 高台高 0.5		平坦な底部に断面「U」字形の高台が「ハ」の字形に開いて付く。 見込み平行線状のやや密なヘラミガキの後、体部内面密なヘラミガキ。体部外面ナデ。	淡褐色 ～暗褐色	やや粗	良好	
320	瓦器 椀	— — 高台径 6.8 高台高 0.7		平坦な底部に断面「U」字形の高台が「ハ」の字形にわずかに開いて付く。 見込み、乱方向の密なヘラミガキ。	淡灰色 ～暗灰色	粗	良好	
321	瓦器 椀	— — 高台径 7.3 高台高 0.7		丸味のある体部に断面「U」字形の高い高台が「ハ」の字形に開いて付く。 内面密なヘラミガキ。見込み、平行線状の密なヘラミガキ。	黒灰色	粗	良好	
322	瓦器 椀	— — 高台径 7.5 高台高 1.0		丸味のある底部に断面「U」字形の高い高台が「ハ」の字形に開いて付く。 見込み、乱方向の緻密なヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	
323	瓦器 椀	— — 高台径 7.0 高台高 0.5		丸味のある底部に断面「U」字形の重厚な高台が「ハ」の字形に開いて付く。 見込み、太いヘラミガキ。	淡灰色	粗	良好	
324	瓦器 椀	— — 高台径 6.8 高台高 1.0		丸味のある底部に断面逆三角形の高い高台が「ハ」の字形に開いて付く。 内面密なヘラミガキ。体部外面緻密なヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	

SD-8

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
335	土師器 高杯	— — 裾径 6.4		中空の脚柱部。裾部で大きく外反し、ほぼ水平に伸びる。端部は丸く終わる。 指頭圧成形、脚柱部内面ナデ。内外面に指頭圧痕残存。	乳灰色	密	良好	
336	土師器 高杯？	— — 裾径 4.9		中空で斜下方へ伸びる短い脚部。端部は丸く終わる。 外面縦方向のナデ。内面指頭圧成形杯底部内面に工具痕残存。	乳白色	やや粗	良好	
337	土師器 小皿		14.75 2.2	底部から斜上方へ内湾して立ち上がり、外上方へ角度をかえて外折する口縁部に至る。端部は内に丸く巻込む。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。	乳灰色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
338	土師器 小皿		17.4 —	外上方へゆるやかに内湾して伸びる体部からわずかに外折する口縁部に至る。 口縁部外面及び内面ヨコナデ、底部外面ナデ。	淡赤茶色	やや粗	良好	
339	須恵器 杯蓋		14.9 —	上面四状の低い天井部がゆるやかに外下方へ伸び、端部で角度をかえて垂直に下り、丸く終わる。上面につまみが付いた痕跡を残す。 内外面、回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	
340	須恵器 杯身		— —	平担な底部から丸味をもって上外方へ直線的に体部が伸びる。 底部外面ナデ。その他回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	
341	須恵器 杯身	高台径 9.9 高台高 0.3	— —	平担な底部に断面長方形の低い高台が垂直に付く。体部は斜上方へ伸びる。 底部内外面ナデ、その他回転ナデ。	緑灰色	密	堅緻	
344	須恵器 高杯		— —	平担な杯底部から下方へ外反する中空の脚柱部が伸びる。 杯底部内面ナデ、外面回転ナデ。脚部内外面回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	
345	須恵器 高杯	据径 7.7	— —	下外方へ外反気味に下った後、外面に断面三角形で外上方へ向く鍔をもち、そこから垂直に下る。端部は先細で丸く終わる。鍔直上までの四角形の透しを入れる。 内外面回転ナデ。	灰色 ～黒灰色	密	堅緻	裏面灰かぶり
346	土師器 土釜	鍔径 25.6	— —	やや内傾する体部に水平にのびる鍔が付く。鍔端部は丸く終わる。 内外面ヨコナデ。	茶色	粗	良好	

SD-9

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
342	須恵器 杯身	高台径 9.2 高台高 0.5	— —	平担な底部から丸味をもって上外方へ立ち上がり直線的に体部が伸びる。底部に断面正方形の高台が垂直に付く。 底部内面ナデ、その他回転ナデ。	淡灰青色	密	堅緻	
343	須恵器 盤	高台径 8.5 高台高 0.5	— —	平担な底部から上外方へ肥厚して屈曲し直線的な体部が伸びる。底部に断面四角形の重厚な高台が「ハ」の字形に開いて付く。 全体に回転ナデ。	暗灰色	やや粗	堅緻	

SD-11

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
351 一九	瓦器 椀	15.2 5.55 高台径 6.8 高台高 0.8		丸味のある底部から斜上方へ内湾して伸びる、やや深めの半球形の器形。口縁端部内面に浅い凹線が一周する。 内面緻密なヘラミガキ。外面分割成形を意識した緻密な横方向のヘラミガキ。高台部はヨコナデ。	淡褐色	やや粗	良好	二次焼成を受ける

SD-12

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
347	土師器 小皿	8.4 1.35		浅い半球形の底体部に外反する口縁部が付く。端部は丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面開いナデ。	淡茶色	密	良好	
348	土師器 小皿	10.7 —		平坦な底部から斜上方へ立ち上がり口縁部が伸びる。端部は丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	茶色	やや粗	良好	
349	瓦器 椀	14.4 —		斜上方へ直線的に伸びるやや浅めの器形。口縁端部は丸く終わる。 内面ヨコナデ後数条のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ、指頭圧痕残存。	灰色	やや粗	良好	
350	瓦器 椀	15.8 —		斜上方へほぼ直線的に伸びる浅めの器形。口縁端部はやや尖り気味に終わる。 内面磨耗著しい。口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ。数条のヘラミガキ残存。	淡灰色	密	良好	
352	瓦器 椀	— — 高台径 5.7 高台高 0.7		丸味のある底部に断面逆台形の高台がやや開いて付く 外面ヨコナデ。内面平行線状のヘラミガキ。	乳灰色 ～灰色	やや粗	良好	
353	瓦器 椀	— — 高台径 5.9 高台高 0.3		丸味のある底部に断面逆台形の低い高台が「ハ」の字形に開いて付く。 外面ヨコナデ。見込み平行線状の暗文。	黒灰色	密	良好	
354	須恵器 不明			内湾する体部に断面台形を呈する突帯が二条付く。 内面回転ナデ、外面ナデ。	灰色	密	堅緻	

SP-82

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
355	須恵器 杯蓋	— — つまみ径 3.5 つまみ高 0.65		上面平らな天井部に扁平で低いツマミが付く。 天井部外面回転ヘラケズリ。その他回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	つまみ及び天井部外面自然釉付着
356	須恵器 杯蓋	15.2 —		平担な天井部から外下方へ直線に伸び口縁部に至る。口縁端部は断面「U」字形で垂直に下る。 天井部外面回転ヘラケズリ。その他回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	
357	須恵器 杯身	— — 高台径 9.4 高台高 0.7		平らに近い底部に「ハ」の字形に開く低い高台が付く。高台より直ちに斜上方へ体部が伸びる。高台下端は面をなす。 底部内面中央ナデ、外面中央弱いナデ。その他回転ナデ。内底面中央ナデ。外底面中央弱いナデ。その他全体に回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	
358	須恵器 杯身	— — 高台径10.9 高台高 0.7		平担な底部に「ハ」の字形に開く低い高台が付く。高台より直ちに内湾する底部が伸びる。高台下端は凹面をなす。 底面外面ナデ。その他回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	
359	須恵器 杯身	— 高台径12.6 高台高 1.0		平担な底部に「ハ」の字形に開く高い高台が付き、高台より横に張った後斜上方へ体部が伸びる。高台下端は面をなす。 全体に回転ナデ。	淡灰色	密	堅緻	
360	須恵器 杯身	— — 高台径 7.5 高台高 0.6		平担な底部に「ハ」の字形に開く低い高台が付く。高台より直ちに斜上方へ体部が伸びる。高台下端は凹面をなす。 底部外面ナデ。その他回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	
361	須恵器 壺？	24.0 —		体部から上外方へ大きく外反する口縁部に至る。口縁端部は外に丸く巻込む。 口縁部内外面回転ナデ。体部内面横方向の青海波のタタキ。	淡灰色	やや粗	堅緻	口縁端部外面直下から体部外面及び体部内面自然釉付着
362	須恵器 不明	20.35 —		上外方へほぼ直線的に伸びる口縁部。端部は丸く終わる。 内外面とも回転ナデ。	淡灰色 ～青灰色	密	堅緻	
363	須恵器 壺？	22.1 —		上外方へ直線的に伸びる口縁部。端部は外傾した面となる。外面に2条の沈線が一周する。 内外面回転ナデ。	灰色	密	堅緻	
364	土師器 甕	14.2 —		張りの少ない体部から丸味をもって上外方へ外反する口縁部に至る。端部は、ほぼ水平な面となり外へ水平につまみ出し尖り気味に終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。体部内面板状工具によるナデ。体部外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
365	土師器 鉢？	-- —	内湾する球形の体部から丸味をもって、上外方へ外反する口縁部に至る。 頸部外面に工具痕残存。口頸部は、板状工具によるナデと思われる。体部剥離著しく調整不明。口縁部内面ヨコナデ。体部内面板状工具によるナデ。	赤茶色	粗	良好	
366	瓦器 椀	14.35 5.2 高台径 5.8 高台高 0.4	丸味のある底部から外上方へ内湾する器形。口縁端部は丸く終わる。断面逆三角形の高台が「ハ」の字形に開いて付く。 内面密なヘラミガキ。見込み、細かい格子状のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕残存。	淡灰色 ～暗灰色	やや粗	良好	炭素付着不良
367	瓦器 椀	16.2 5.5 高台径 6.4 高台高 0.7	平坦な底部から外上方へ内湾し、口縁部でわずかに外反する。端部は丸く終わる。断面逆二角形のやや高い高台が「ハ」の字形に開いて付く。 内面緻密なヘラミガキ。見込み、平行線状のヘラミガキ。外面やや粗いヘラミガキ。	淡灰色	やや粗	良好	
368	瓦器 椀	— — 高台径5.65 高台高 0.7	平坦な底部から外上方へ内湾する体部。断面「U」字形のやや高い高台が「ハ」の字形に開いて付く。 内面緻密で太いヘラミガキ、見込み、平行線状のヘラミガキ。外面ナデ。	青灰色	やや粗	良好	
369	瓦器 椀	14.15 --	外上方へ内湾する浅め器形。口縁端部は丸く終わる。 内面緻密なヘラミガキ。見込み平行線状のヘラミガキ。体部外面上半に粗いヘラミガキ。	黒灰色	やや粗	良好	
370	瓦器 椀	14.5 —	斜上方へ内湾気味に伸びた後、外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 内面は密なヘラミガキ。体部外面上半やや粗いヘラミガキ。	青灰色	やや粗	良好	
371	土師器 小皿	9.4 —	底部から丸味をもって外上方へ立ち上がり内湾気味の口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ、底部外面ナデ。	乳茶色	密	良好	
372	土師器 小皿	8.95 1.4	平坦な底部から丸味をもって斜上方へ立ち上がりほぼ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ、外面弱いナデ。	乳茶色	密	良好	
373	土師器 小皿	9.35 1.85	平坦な底部から斜上方と立ち上がり直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	淡茶色	密	良好	
374	土師器 土釜	24.2 — 鍔径 30.9	上内方へ内湾する体部に「く」の字形に外折する口縁部が付く。口縁端部は丸く終わる。鍔は、ほぼ水平に付き、鍔端は丸く終わる。 口縁部内外面及び体部外面ヨコナデ。体部内面、板状工具によるナデ。	淡赤茶色	粗	良好	鍔表面以下煤付着

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
375	土師器 土釜		27.3 — 鍔径 34.25	上内方へ内湾する体部に丸味をもって斜上方へ外折する口縁部が付く。口縁端部は先細で丸く終わる。鍔は上方へわずかに反り、端部で肥厚し、やや外傾した面となる。 口縁部内面及び口縁部外面から鍔直下までヨコナデ。体部外面ナデ。内面ナデ。	赤茶色	粗	良好	鍔裏面以下煤付着

SP-48～93

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
376	瓦器 椀		15.05 —	上外方へ内湾気味に伸びる器形。口縁部で外反する。端部は丸く終わる。 内面密なヘラミガキ。外面口縁端部以下1cmより下に粗いヘラミガキ。	暗灰色	やや粗	良好	
377	瓦器 椀		14.0 —	斜上方へ内湾気味に伸びた後、直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 内面密なヘラミガキ。外面密なヘラミガキ。体部下半で分割成形を意識した箇所が認められる。	灰色	やや粗	良好	
378	瓦器 椀		14.5 —	斜上方へ内湾して伸びる浅い器形。口縁端部は丸く終わる。 内面密なヘラケズリ。外面密なヘラケズリ。	乳灰色 ～灰色	やや粗	良好	
379	瓦器 椀		14.7 —	外上方へ内湾するやや浅めの器形。口縁端部は丸く終わる。 内面緻密なヘラミガキ。見込み、格子状のヘラミガキ。外面やや粗いヘラミガキ。	暗灰色	やや粗	良好	
380	瓦器 椀		16.4 5.5 高台径 5.6 高台高 0.6	丸味のある底部から外上方へ内湾する器形。口縁部で少し外反する。端部は丸く終わる。断面「U」字形のやや高く薄めの高台が付く。 内面密なヘラミガキ。見込み、格子状の細いヘラミガキ。外面、体部上半にやや粗いヘラミガキ。	乳灰色 ～暗灰色	やや粗	良好	
381	瓦器 椀		13.6 —	外上方へ内湾する浅い器形。口縁端部は、外傾した丸味のある面となり、浅い凹線が一周する。 内面密なヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部ナデ。	白灰色 ～灰色	密	良好	
382	瓦器 椀		15.25 —	斜上方へ内湾する深めの器形。口縁端部は丸く終わる。 内面密なヘラミガキ。見込みはやや粗いヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ、体部ナデ、指頭圧痕残存。	灰色	密	良好	
383	瓦器 椀		14.0 —	上外方へ内湾する深い器形。口縁端部は丸く終わる。口縁部内面に沈線が一周する。 内面緻密なヘラミガキ。口縁部外面、ヨコナデ、体部指頭圧痕残存。	暗灰色	密	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(口)口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
384	瓦器 椀	13.95 —	上外方へ内湾する深めの器形。口縁端部は尖り気味に終わる。 内面やや密なヘラミガキ。外面粗いヘラミガキ。指頭圧痕残存。	内灰色 ～灰色	やや粗	良好	
385	瓦器 椀	15.75 —	外上方へ内湾する器形。口縁端部は外傾する面をもつ。 内面密なヘラミガキ。見込み、平行線状のヘラミガキ。外面粗いヘラミガキ。指頭圧痕残存。	淡灰色 ～暗灰色	やや粗	良好	
386	瓦器 椀	15.7 4.1 高台径 3.9 高台高 0.3	平坦な底部から外上方へ内湾気味に伸びる浅い器形。口縁端部は丸く終わる。断面逆台形の高台が貼付に付く。 内面粗く太いヘラミガキ。見込み、平行線状のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部ナデ、指頭圧痕残存。	淡灰色 ～灰色	やや粗	良好	
387	瓦器 椀	15.5 —	外上方へ内湾する器形。口縁端部は、丸く終わる。 内面密なヘラミガキ。見込み、格子状の細いヘラミガキ。体部外面上半に数条のヘラミガキ。指頭圧痕残存	淡灰色	やや粗	良好	
388	瓦器 椀	15.7 —	外上方へ内湾するやや深めの器形。口縁端部は丸く終わる。 内面密で太いヘラミガキ。見込み、平行線状の太いヘラミガキ。外面数条のヘラミガキ。指頭圧痕残存。	黒灰色	密	良好	内面油煙
389	瓦器 椀	16.2 —	斜上方へ内湾する体部に直線的に伸びる口縁部でやや深めの器形。口縁端部は丸く終わる。 内面密なヘラミガキ。外面粗いヘラミガキ。	灰色	密	良好	
390	土師器 小皿	10.35 —	底部から斜上方へ立ち上がりほぼ水平に伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げて丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	乳橙色	密	良好	
391	土師器 小皿	9.25 —	平坦な底部から外上方へ立ち上がり口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	乳茶色	やや粗	良好	
392	土師器 小皿	8.2 1.0	平坦な底部から斜上方へ内湾する口縁部に至る。端部は上方へつまみ上げ丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面弱いナデ。	乳茶色	やや粗	良好	
393	土師器 小皿	8.45 —	平坦な底部から斜上方へ内湾する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡茶色	密	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
394	土師器 小皿	8.8 1.55	丸味のある底部から斜上方へ内湾するL1縁部が伸びる。端部は丸く終わる。 L1縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	乳茶色	やや粗	良好	
395	土師器 小皿	9.4 1.45	底面中央が窪む平らに近い底部から斜上方へ内湾して立ち上がるL1縁部に至る。端部はつまみ上げ気味で丸く終わる。 底部内面中央ナデ、外面粗いナデ。L1縁部内外面ヨコナデ。	暗灰色	密	良好	
396	土師器 小皿	9.3 1.2	平坦な底部から外上方へ立ち上がり、つまみ上げて尖り気味に終わるL1縁部に至る。 指頭圧成形後、L1縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良	
397	土師器 小皿	10.2 —	平坦な底部からL1縁部でわずかに立ち上がって外反する平らな器形。端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、L1縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面、指頭圧痕残存。	淡赤茶色	密	良好	
398	土師器 小皿	11.75 1.6	平坦な底部から外上方へほぼ直線的に伸びるL1縁部に至る。端部は丸く終わる。 L1縁部内外面ヨコナデ。底体部内外面ナデ。	茶色	やや粗	良好	
399	土師器 小皿	11.8 —	丸味のある底部から外上方へ直線的に伸びるL1縁部に至る。端部は丸く終わる。 L1縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡茶色	密	良好	
400	土師器 小皿	11.8 2.0	平坦な底部から外上方へ内湾気味に立ち上がりL1縁部に至る。端部は丸く終わる。 L1縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡茶色	密	良好	
401	瓦器 小皿	9.0 —	丸味のある底部から器厚を減じてほぼ直線的なL1縁部に至る。端部は丸く終わる。 内面粗いヘラミガキ。L1縁部外面ヨコナデ。底部ナデ。	灰色	密	良好	
402	瓦器 小皿	11.4 —	丸味のある底部から、器厚を減じて上外方へ伸びるL1縁部に至る。L1縁端部は丸く終わる。 内面、緻密な横方向のヘラミガキ。外面密なヘラミガキ。	灰白色	やや粗	良好	
403	白磁 碗	13.4 —	斜上方へほぼ直線的に伸び、外に大きく折返す。玉縁状のL1縁部。	乳茶色の釉	密	緻緻	貿入有

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
404	土師器 土釜		31.7 —	斜上方へ外反する口縁部。端部はやや平坦な面をもって終わる。 内面横及び右上りのハケ（7本／cm）。外面、上半ヨコナデ、下半縦及び左上りのハケ（7本／cm）。	茶色	粗	良好	
405	土師器 土釜	鍔径	29.75 — 33.6	上内方へ直線的に伸びる体部から肥厚して外上方へ丸味をもって外折する口縁部に至る。端部は内に丸く巻込む。鍔は薄く水平に付く。鍔端部は丸く終わる。 口縁部内面及び外面全体ヨコナデ。体部内面ナデ。	乳灰色	粗	良好	
406	土師器 土釜	鍔径	24.55 — 31.9	内湾気味に上内方へ伸びる体部に外上方へ外折する口縁部が付く。端部は丸く終わる。鍔は短く水平に付き、鍔端は丸味のある垂直な面をもつ。 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。鍔ヨコナデ。体部内面ナデ。	赤茶色	粗	良好	鍔裏面以下煤付着 内面炭火物付着
407	土師器 七釜	鍔径	29.6 — 39.0	ゆるやかに内湾し、鍔直上から肥厚する体部から丸味をもって外上方へ外反する口縁部に至る。鍔は水平に付き端部は丸く終わる。 体部内面ナデ。口縁部内面及び口縁部外面から鍔直下までヨコナデ。体部外面板状工具によるケズリ。	淡赤茶色	粗	良好	鍔裏面以下煤付着

第4層　出土遺物

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
408 二〇	弥生式上器 壺		10.25 —	直立する頸部から少し外反する口縁部が伸びる。端部は、上外方へ尖り気味に終わる。 口縁部は内外面ともヨコナデ。頸部外面は縦方向の粗いハケ、内面は、左上りの粗いハケ（5本／cm）。	淡褐色	やや粗	良好	2D区
409 二〇	弥生式土器 壺		13.2 —	直立した頸部から斜上方へ外反する口縁部が伸びる。端部は垂直な面をなし、浅い沈線が一条めぐる。 口縁部ろ内外面ともヨコナデ、頸部外面は斜方向の板状工具によるナデ、内面はナデ。	茶色	やや粗	良好	1C区
410 二〇	弥生式土器 壺		13.0 —	張りの少ない体部に短い直立する頸部が付き大きく外反する口縁部が伸びる。端部は外傾する面をもち、端面に二条の沈線がめぐる。 口縁部は横方向のヘラミガキ。体部はナデで粘土紐接合痕が残存。外面端部はヨコナデ。口頸部は縦方向のヘラミガキ。	淡茶色	粗	良好	外面に煤付着 2D区
411 二〇	弥生式土器 壺		14.4 —	張りのある体部に直立する頸部から大きく外反する口縁部が付く。端部は、ほぼ垂直な面をもつ。 内面口縁部は横方向のヘラミガキ。頸部はナデ。体部は、指頭圧痕が残存外面口縁部はヨコナデ。頸部及び体部は縦位のヘラミガキ。	乳褐色	粗	良	2D区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
412 二〇	弥生式土器 壺	41.8 —	頸部から大きく外反してほぼ水平になったのち上外方へ角度をかえて外反する口縁部が伸びる。屈曲部には外面に稜をもつ。口縁端部は内傾した面をもち、上端、下端は稜をもつ。 口縁端面に竹管押圧文（直径0.5cm）外面口縁部上位にも竹管押圧文（直径0.9cm）その直下に刻み目を施したのち円形浮文を貼付けた痕跡が残る。内面口縁部上位は横方向のヘラミガキ。下位はハケの後横方向のヘラミガキ及び縦方向のヘラミガキ。外面口縁部上位ヨコナデの後縦方向のヘラミガキ。下位は縦方向のハケの後縦方向のヘラミガキ。	淡褐色	やや粗	良好	2D区
413	弥生式土器 壺	15.5 —	外上方へ外反する口縁部。端部は下方へ拡張して外傾する面をなして、施文帯とする。 施文帯には竹管押圧円形浮文を施す。内面はナデ、外面はナデの後、縦方向のハケ。	茶色	やや粗	良好	1D区
414	弥生式土器 壺	16.4 —	外上方へ伸びる口縁部。端部は下方へ拡張して外傾する面をなして施文帯とする。 施文帯には、ヘラ描き沈線三条が一周したのち、棒状浮文を張り付けている。刻めの刻み目がある。上面上位にヘラ描きの波状文をつける。内外面ともナデ。	乳灰色	密	良好	2D区
415	弥生式土器 壺	13.8 —	上外方へ伸びる頸頭から水平方向へ外折する口縁部が付き、端部は上下に拡張し、垂直な面をもつ。 内面口縁部は横方向ヘラミガキ。口縁端部上端に刻み目。口縁端部及び外面口頸部はヨコナデ。	乳灰色	やや粗	良好	2D区
416 二〇	弥生式土器 甕	13.9 — 最大径 —	最大径が中位にある丸味を帯びた体部から「く」の字形に外折した口縁部が付く。端部は丸く終わる。 口縁部は内外面ともナデ。屈曲部外面は斜方向のハケ。体部は左上りのタタ(5条22cm)。内面体部は板状工具によるナデ。	乳灰色	やや粗	良好	非生駒西麓産 2D区
417	弥生式土器 甕	12.5 — 最大径18.8	体部中位に最大径部をもち、丸味のある体部から「く」の字形に外折する口縁部が付く。 端部は内傾した面をもつ。 内面、口縁部はヨコナデ、体部はナデ。外面肩部は左上りの細筋のタタキ(5本/1.8cm)を施し、体部上位及び口縁部はヨコナデ。	乳灰色	密	良好	非生駒西麓産 1D区
418 二〇	弥生式土器 甕	18.0 25.3 最大径21.3 底径 5.05	突出した平底の底部から斜上方へ体部が伸びる。体部中位のやや上に最大径部をもつ。体部から大きく外上方へ外反したのち角度をかえて上外方へ立ち上る口縁部が付く。屈曲部の外面には鋭い稜をなす。端部は内傾した面をなし、一条の沈線をめぐらす。 内面口縁部上位はヨコナデ。下位には左上りのハケ。内面体部は、横方向のハケ、底部は左上りの左回りのハケ。外面口縁部はヨコナデ。外面体部は右上りのタタキ(5条/1.6cm)の後体部上位に縦方向のハケ。	赤茶色	やや粗	良好	外面体部中位に煤付着 2D区
419 二〇	弥生式土器 甕	14.0 —	張りの少ない体部から丸味を帯びて斜上方へ外反した後、上外方へ立ち上る口縁部が付く。端部は上端に水平な面をもつ。 口縁部内外面ともヨコナデ。内面体部は斜方向のナデ。外面体部は水平にタタキ。	淡茶色	やや粗	良好	2D区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
420 二〇	弥生式土器 甕		15.8 —	あまり張らない体部に斜上方へ伸びる口縁部が付く。端部は垂直な面をなし、上端、下端に鈍い稜をもつ。 口縁部は内外面ともヨコナデ仕上に粘土紐接合痕を残す。内面体部は、ハケ状工具によるナデ。外面体部は右上りのタタキ。	褐色	やや粗	良好	外面体部に炭化物付着 2D区
421	弥生式土器 甕		19.85 —	体部から「く」の字形に外反する口縁部が伸びる。端部は下端を水平に少しつまみ出し内傾した面に一条の凹線をめぐらす。 内面口縁部はヨコナデ。体部はナデ。外面口縁部上位はヨコナデ仕上位はタタキの後ナデ。体部右上りのタタキ。	茶色	粗	良好	2D区
422 二〇	弥生式土器 甕	— — 底径	— — 4.2	ドーナッツ状の平底の底部から斜上方へ体部が内湾気味に伸びる。 体部中位に残る接合痕を境として上部は粗いハケ状工具によるナデ。下半は右上りのタタキの後、一部に縦方向の工具痕を残す。内面体部中位は粗い。下位は放射状のハケ。	淡褐色	粗	良好	1A区
423 二〇	弥生式土器 甕	— — 底径	— — 5.1	突出した平底の底部から上外方へ直線的に伸びる。底面中央がやや窪む。 内面底部にヘラ状工具によるナデ、体部はナデ。外面は右上りのタタキの後、底部側面に縦方向のヘラミガキ。	褐色	やや粗	良好	2D区
424	弥生式土器 鉢		9.3 6.9 底径 2.75	突出気味の平底の底部であるが押圧による粘土のはみ出がある。体部が上外方へ丸味を帯びて伸び、上位でやや内湾し、口縁部はわずかに外反する。端部は尖り気味に丸く終わる。口縁部内外面及び体部内面はナデ。体部外面は縦方向のハケ状工具によるナデ。	淡茶色	粗	良	体部に黒斑有 1A区
425 二一	弥生式土器 鉢		14.4 7.55 底径 5.6	台形状に突出した平底の底部から斜上方へやや丸味を帯びて体部が伸びる。口縁部は器厚を減じて尖り気味に終わる。 底部側面に指頭圧痕。体部内面、板状工具の圧痕とナデ。外面はナデ。	茶色	粗	良好	1A区
426 二一	弥生式土器 高杯		8.6 7.85 裾径 3.8	上外方へ伸びる杯部。口縁端部は丸く終わる。短い中実の脚柱部から短い脚部が直線的に伸びる。裾端部は丸く終わる。 口縁部の内外面にヨコナデ。その他の部分もナデ。	乳赤茶色	粗	良好	ミニュチア土器 1D区
427 二一	弥生式土器 高杯		11.9 10.2 裾径 5.35	上外方へ内湾して伸びる杯部。脚部が下外方へ直線的に伸びる。脚部には上段(14個)、中段(14個)、下段(12個)の三段に円孔を穿つ。裾端部は、ほぼ水平な面をなして終わる。 杯底部外面に工具痕が認められるが全体に磨耗著しく調整不明瞭。	淡赤茶色	密	良	1C区
428 二一	弥生式土器 高杯		17.9 14.75 裾径 7.85	斜上方へ内湾気味に伸びる椀状の杯部。口縁端部は器厚を減じて尖り気味に終わる。ラッパ状に開く中空の脚柱部。裾部で大きく開き端部は外面に外傾した面をもつ。 口縁部は内外面ヨコナデ。杯部は内外面ナデ。外面脚部は縦位のヘラミガキの後ナデ。	淡褐色	精	良好	2D区
429 二一	弥生式土器 高杯		19.6 —	中空の脚柱部。脚部から裾部へ角度をかえる部分に円孔を穿つ。外上方へのびる杯底部から角度をかえて斜上方へ外反する口縁部。 内面口縁部に横方向のヘラミガキ。杯底部外面の屈曲部にヨコナデ。杯底部から脚部に縦方向のヘラミガキ。	淡茶色	やや粗	良好	1B区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
430	須恵器 杯蓋	口径 器高 稜径	10.8 4.7 11.1	丸味のある天井部から内湾して断面三角形の稜に至る。口縁部は垂直に下り、口縁端部は明瞭な段をもつ。 外面稜端より1.1cm以上回転ヘラケズリ。天井部内面ナデ。その他回転ナデ。	淡灰色 ～灰色	やや粗	堅緻	天井部外面全体灰かぶり 1A区
431	須恵器 杯蓋	口径 器高 稜径	12.7 — 11.9	丸味のある天井部が外下方へ下って外面に鈍い稜をもち、下外方へ内湾する口縁部に至る。端部は内傾した浅い凹面をもつ。 全体に回転ナデ。	淡灰色	密	堅緻	天井部の一部に灰かぶり 1A区
432	須恵器 杯蓋	口径 器高 稜径	11.85 — 12.0	天井部から内湾して下り、外面に回線が一周し、直下に断面三角形の稜をもつ。口縁部は垂直に下り、端部は内傾した面に段をもって丸く終わる。 外面稜より0.4cm以上回転ヘラケズリ。その他回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	2D区
433 二一	須恵器 杯蓋	口径 器高 稜径	11.65 4.5 11.4	丸い天井部から下外方へ下り、稜の痕跡を残してほぼ垂直に下る口縁部に至る。端部は内傾した浅い凹面となる。 稜より0.8cm以上回転ヘラ削り。その他回転ナデ。	灰色 ～青灰色	やや粗	堅緻	1A区
434	須恵器 杯蓋	口径 器高	11.7 4.5	平らに近い天井部から内湾して下り、外面に稜の痕跡を残し直下に回線が一周する。口縁部は垂直に下り、内傾した面となる。 外面稜より1.5cm以上回転ヘラケズリ。その他回転ナデ。	灰色	密	堅緻	天井部全体灰かぶり 1D区
435 二二	須恵器 杯身	口径 器高 受部	10.2 5.3 12.15	丸い底部から内湾して受部に至る。受部は斜上方へ伸び、丸く終わる。立ち上がり部は上内方へ直線的に伸び、口縁端部は明瞭な段をもつ。 外面受部端より1.4cm以下回転ヘラケズリ。その他回転ナデ。	灰色 ～青灰色	やや粗	堅緻	外面底部全体に自然釉 1A区
436 二一	須恵器 杯身	口径 器高 受部	9.5 4.55 11.1	丸い底部から内湾して水平に尖る受部に至る。立ち上がり部は、上内方へ直線的に伸び口縁端部は外傾した凹面となる。 外面受部端より1.0cm以下回転ヘラケズリ。その他回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	外面底部に「へ」の形をしたヘラ記号 1A区
437	須恵器 杯身	口径 器高 受部	9.45 4.9 11.8	平らに近い底部から斜上方へ内湾して受部に至る。受部は外上方へ伸び尖り気味に終わる。立ち上がり部は上内方へ外反して伸び、口縁端部は明瞭な段をもつ。 外面受部端より1.7cm以下回転ヘラケズリ。その他回転ナデ。	灰色 ～青灰色	やや粗	堅緻	完形 1A区
438 二一	須恵器 杯身	口径 器高 受部	9.8 4.6 12.45	平坦な底部から丸味をもって上外方へ立ち上がり斜下方へ尖がる受部に至る。立ち上がり部は、上内方へ直線的に伸び、口縁端部は外傾した深い凹面となる。 外面受部端より1.7cm以下回転ヘラケズリ。その他回転ナデ。	淡灰色 ～青灰色	やや粗	堅緻	1A区
439	須恵器 杯身	口径 器高 受部	13.8 5.15 16.4	丸い底部から外上方へ内湾し受部に至る。受部端は、外上方へ尖り気味に終わる。立ち上がり部は上内方へ外反した後、わずかに内湾する。口縁端部は、先細で丸く終わる。 外面受部端より1.7cm以下回転ヘラケズリ。その他回転ナデ。	灰色 ～青灰色	やや粗	堅緻	1A区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
440	須恵器 杯身	10.25 — 受部 11.9	底部から内湾して受部に至る。受部は水平に伸び、端部は丸く終わる。立ち上がり部は上内方へ直線的に伸び、口縁端部は外傾した面となる。 外面受部端より1.3cm以下回転ヘラケズリ。その他回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	2D区
441	須恵器 杯身	11.4 — 受部 13.6	底部から外上方へ内湾し斜上方へ伸びる受部に至る。受部は尖り気味に丸く終わる。立ち上がり部は、上内方へ直線的に伸び口縁端部は外傾した浅い凹面となる。 外面受部端より1.2cm以下回転ヘラケズリ。その他回転ナデ。	青灰色	やや粗	堅緻	1C区
442	須恵器 杯身	12.85 — 受部 15.1	底部から上外方へ内湾してほぼ水平に付く受部に至る。受部端は上反し丸く終わる。立ち上がり部は、上内方へ外反気味に伸び口縁端部は丸く終わる。内面口縁端部より1.2cmに凹線状の窪みが一周する。 全体に回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	1C区
443	須恵器 杯身	13.5 4.5 受部 15.6	丸味のある底部から外上方へ内湾し、斜上方へ伸びる受部に至る。受部端は丸く終わる。立ち上がり部は、先細りで丸く終わる。 外面受部端より2.0cm以下回転ヘラケズリ。その他回転ナデ。	淡青灰色	密	堅緻	外面底部灰かぶり 1A区
444	須恵器 高杯	15.15 —	杯底部から外上方へ内湾して、外面に2段の稜をもち、わずかに外反した後、直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 外面稜直下に10～14条の波状文施す。外面波状文以下は回転ヘラ削り。その他回転ナデ。	赤褐色	やや粗	緊緻	一次焼成？ 1A区
445	須恵器 杯蓋	— — つまみ径 2.65 つまみ高 0.95	丸い天井部外面に上面中央の扁みつまみが付く。 つまみ及び内面中央ナデ。つまみから天井部中位まで回転ヘラケズリ、その他回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	天井部灰かぶり 2B区
446	須恵器 杯蓋	16.55 2.8 つまみ径 2.6 つまみ高 0.5	中央部が薄む扁平なつまみの付く平担な天井部からゆるやかに内湾して、口縁部に至る。端部は、下端が少し垂直に下り外傾した凹面。 口縁部外面上端から0.7cm以上つまみ付根まで、回転ヘラケズリ。つまみ及び内面中央ナデ。その他回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	2D区
447	須恵器 杯蓋	— — つまみ径 2.5 つまみ高 0.8	丸味のある天井部外面に扁平な算盤珠状のつまみが付く。 つまみ及び内面中央ナデ。その他回転ナデ。	灰色 ～暗灰色	やや粗	堅緻	1B区
448	須恵器 杯蓋	— — つまみ径 3.1 つまみ高 0.55	丸味をもつ天井部外面に扁平で低い算盤珠状のつまみが付く。 内面中央部及びつまみナデ。その他回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	天井部灰かぶり 2B区
449	須恵器 杯蓋	17.0 —	平担な天井部からゆるやかに内湾して外下方へ下り口縁部に至る。口縁端部下端が、断面逆三角形に拡がり端部は、外傾した凹面となる。 全体に回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	天井部の一部に灰かぶり 2C区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 器高 法量	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
450	須恵器 杯蓋	1.45 つまみ径 2.95 つまみ高 0.55	平坦な天井部に低い擬宝珠状のつまみが付く。 つまみ及び内面ナデ。外面回転ヘラケズリ。	灰色	やや粗	堅緻	外面灰かぶり 1C区
451	須恵器 杯蓋	— — つまみ径 2.8 つまみ高 0.55	凹面状の天井部から下外方へ伸びる。外面中央に扁平で低い擬宝珠状のつまみが付く。 つまみ端から3.0~3.3cmまで回転ヘラ削り。その他回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	天井部灰かぶり 1A区
452	須恵器 杯蓋	16.4 1.45	平らな天井部からゆるやかに内湾して外下方へ下り口縁部に至る。口縁端部下端が断面逆二角形に拡がり、端部は外傾した凹面となる。 全体に回転ナデ。	青灰色	やや粗	堅緻	1B区
453	須恵器 杯身	11.6 3.2	平らに近い底部から角度をかえて上外方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 底部内面ナデ。底部外面回転ヘラケズリの後弱いナデ、その他回転ナデ。	灰色 ~青灰色	密	堅緻	1B区
454	須恵器 杯身	— — 高台径 9.8 高台高 0.6	底面中央が少し窪んだ底部に断面台形の高台が少し開いて付き、高台より上外方へ体部が伸びる。 底部内面中央ナデ。その他回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	2C区
455	須恵器 杯身	14.8 3.6 高台径 9.6 高台高 0.6	底部に断面台形の高台が「ハ」の字形に開いて付き、高台より少し横に張った後、丸味をもって立ち上がり上外方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 底部内面ナデ。その他回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	2B区
456	須恵器 杯身	13.8 3.75 高台径 9.8 高台高0.45	底部から断面台形の高台が「ハ」の字形に開いて付き、高台から丸味をもって立ち上がり、上外方へ直線的に伸び、端部は尖り気味に終わる。 全体に回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	2D区
457	須恵器 杯身	14.85 3.65 高台径10.4 高台高 0.5	平坦な底部に、断面台形の低い高台が「ハ」の字形に開いて付く。高台から丸味をもって上外方へ直線的に伸びる口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。高台下端は外傾した面となる。 底部内外面ナデ。その他回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	1A区
458	須恵器 杯身	17.2 4.1 高台径13.0 高台高0.65	平坦な底部に断面正方形の高台が「ハ」の字形に開いて付き、高台より少し横に張りながら丸味をもって立ち上がり直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。高台下端は外傾した面となる。 底部内外面ナデ。その他回転ナデ。	灰色 ~青灰色	やや粗	堅緻	2B区
459	須恵器 杯身	14.6 3.85 高台径 9.7 高台高0.65	平坦な底部に断面台形の高台が「ハ」の字形に付き、高台から丸味をもって上外方へ立ち上がり外反気味に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 底部内面中央ナデ。その他回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	2C区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
460	須恵器 杯身		15.4 4.2 高台径10.7 高台高0.55	平坦な底部に断面正方形の高台が「ハ」の字形に開いて付き、高台より丸味をもって上外方へ内湾する口縁部に至る。端部は先細りで尖り気味に終わる。高台下端は外傾した凹面となる。 底部外面ナデ、その他回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	1B区
461	須恵器 杯身		15.7 3.7 高台径10.8 高台高0.55	平坦な底部に断面正方形の高台が垂直に付く。高台から丸味をもって角度をかえ上外方へ直線的に伸びる口縁部に至る。口縁端部はやや尖り気味で終わる。高台下端は凹面。 底部内面ナデ。外面中央ナデ、高台より内へ2.5cmまで回転ヘラ削り。その他回転ナデ。	淡灰色	密	堅緻	1A区
462	須恵器 甕		29.4 —	斜上方へ外反して口縁部に至る。端部は、上端をつまみ上げ、内傾した面となる。外面口縁部直下に断面三角形の突帯が斜下方へ向いて付く。突帯の下に12条を一単位とする波状文を施す。 全体に回転ナデ。	青灰色 ～青灰色	やや粗	堅緻	2D区
463	須恵器 壺		— —	内上方へ内湾する体部上位から丸味をもって上外方へ外反する口頸部に至る。口縁端部は欠損。 口頸部外面10～11条の波状文を施し、直下に凹線状の窪みが一周する。体部かき目、内面回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	1A区
464	須恵器 甕		18.2 —	体部から丸味をもって上外方へ外折する口縁部が付く。端部は丸く終わる。 体部外面縦方向のタタキの後ハケ状の回転ナデ。その他回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	2D区
465	須恵器 壺		9.75 —	斜上方へ内湾する体部上位から丸味をもって垂直に立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は、外傾した面となる。 全体に回転ナデ。体部外面に縦方向のタタキ、内面に青海波のタタキの痕跡を残す。	黒灰色	密	堅緻	外面暗緑灰色の自然釉外面に窯壁付着 1A区
466	須恵器 高杯	裾径	8.75 6.15 5.45	平坦な杯底部から角度をかえて上外方へ直線的に伸び口縁部で内傾する。脚柱部は中空で斜下方へ外反して端部で水平になり下端が小さい断面逆三角形を呈して外面に垂直な面となる。 杯底部内面ナデ。その他回転ナデ。	暗灰色	密	堅緻	2D区
467	土師器 小皿	裾径	8.75 6.15 5.45	平らに近い底部から斜上方へ立ち上がって外反し、ほぼ水平に伸びる口縁部に至る。端部は内に丸く巻込む。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	乳茶色	密	良好	1B区
468	土師器 小皿		8.75 1.4	丸味のある底部から外上方へ立ち上って水平方向に伸びる口縁部に至る。端部は内に丸く巻込む。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面指頭圧痕残存。	乳茶色	密	良好	1C区
469	土師器 小皿		8.85 1.3	平坦な底部から外上方へ立ち上がり直線的に伸び、口縁部で垂直に立つ。端部はつまみ上げて丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面摩耗残存。	乳灰色	やや粗	良好	1D区

遺物番号 / 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
470	土師器 小皿	9.15 1.6	丸味のある底部から上外方へ立ち上がり、内湾する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部外面は2段のヨコナデ。底部内外面ナデ。	淡茶色	密	良好	2C区
471	土師器 小皿	9.1 1.65	平担な底部から外上方へ内湾し、口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	乳茶色	密	良好	2D区
472 二二	土師器 小皿	9.8 1.5	平担な底部から外上方へ丸味をもって立ち上がり、斜上方へ内湾する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	乳茶色	密	良好	1A区
473	土師器 小皿	8.55 1.8	平担な底部から上外方へ直線的に立ち上がる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ、外面ナデ、指頭圧痕残存。	赤茶色	やや粗	良好	完形 1A区
474 二二	土師器 小皿	9.15 1.6	平担な底部から丸味をもって立ち上がり外上方へ内湾する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	乳茶色	密	良好	完形 1C区
475 二二	土師器 椀	12.0 3.85 高台径 5.0 高台高 0.2	平担な底部から丸味をもって立ち上がり斜上方へわずかに外反しながら伸び、角度をかえて上外方へ外反する口縁部に至る。 指頭圧成形後、口縁部内外面をヨコナデ。体部内面ナデ、外面指頭圧痕顕著に残存。	淡赤茶色	やや粗	良好	完形 1C区
476 二二	土師器 中皿	11.5 2.4	平担な底部から外上方へ丸味をもって立ち上がり、斜上方へほぼ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	1A区
477 二二	土師器 中皿	12.4 2.15	平担な底部から斜上方へ立ち上がり、ほぼ直線的に伸びる。口縁端部は上端をつまみ上げ内傾した浅い凹面となる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	乳茶色	密	良好	1A区
478	土師器 中皿	13.25 2.25	平担な底部から外上方へ肥厚しながらほぼ直線的に伸びた後、先細に垂直に立ち上がる。口縁端部は、つまみ上げ気味で丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	乳茶色	密	良好	1A区
479	土師器 中皿	12.9 3.55	丸い底部から内湾して口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡赤茶色	やや粗	良好	2D区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
480 二二	土師器 中皿		15.5 2.85	平坦な底部から外上方へ立ち上がり内湾して垂直に立つ口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ、指頭圧痕残存。	明赤茶色	密	良好	1C区
481	土師器 中皿		14.6 2.8	平坦な底部から丸味をもって立ち上がり、上外方へ内湾気味に口縁部に至る。端部は尖り気味に終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	赤茶色	密	良好	1A区
482	土師器 中皿		15.8 —	丸味のある底部からゆるやかに内湾して口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部内面ヨコナデ。その他磨耗著しく調整不明瞭。	淡褐色	やや粗	良	1B区
483	土師器 中皿		18.65 —	平坦な底部から丸味をもって外上方へ立ち上がり口縁部に至る。端部は内傾した面をもち丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	1B区
484	土師器 大皿		20.45 2.55	平坦な底部から丸味をもって外上方へ立ち上がり口縁部に至る。端部は内に丸く終わる。 口縁部内面ヨコナデ。外面剥離著しく調整不明瞭。底部内面ナデ、外面ナデ。	乳茶色	やや粗	良好	1B区
485	瓦器 椀	高台径 高台高	16.3 5.2 6.7 1.0	丸味のある底部から外上方へ内湾し、口縁部で直線的に伸びる。端部は丸く終わる。断面「U」字形の重厚な高台が「ハ」の字形に開いて付く。比較的器厚が厚い。 内面緻密なヘラミガキ。見込み緻密な乱方向のヘラミガキ。外面緻密なヘラミガキ。	白灰色 ～淡灰色	やや粗	良好	1C区
486	瓦器 椀		13.8 —	底部から上外方へ内湾し、口縁部でわずかに外反する深い器形。口縁端部は丸く終わる。 内面ヘラミガキ認められるが磨耗しており不明瞭。口縁部外面ヨコナデ、体部外面ヘラミガキ、但し、器表面が平滑でないため単位的でない。	暗灰色	やや粗	良好	1D区
487	瓦器 椀		13.1 —	底部からゆるやかに内湾し、口縁部で器厚を減じて外反する。口縁端部は、尖り気味に終わる。 内面密なヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面ヘラミガキ。	灰色	密	良好	1D区
488	瓦器 椀		14.3 —	底部から斜上方へゆるやかに内湾し口縁部に至る浅い器形。口縁端部は丸く終わる。 内面密なヘラミガキ。見込み、格子状のヘラミガキ。外面指頭圧痕を残してヘラミガキ。	白灰色 ～黒灰色	やや粗	良好	1D区
489 二二	瓦器 椀	高台径 高台高	15.4 5.3 5.3 0.5	丸味のある底部から斜上方へ内湾する器形。口縁端部は丸く終わり、内面に凹線が一周する。高台は断面逆三角形で垂直に付く。 内面密で細いヘラミガキ。見込み、連結輪状のヘラミガキ。外面細いヘラミガキを粗く施す。	灰色	やや粗	良好	大和型？ 1A区

遺物番号（図版番号）	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
490	瓦器 椀	16.4 5.45 高台径 6.3 高台高 0.4	平坦な底部から斜上方へ内湾する深い器形。口縁端部は丸く終わる。高台は、断面逆三角形で垂直に付く。 内面粗いヘラミガキ。見込み、平行線状のヘラミガキ。外面粗いヘラミガキ。指頭圧痕残存。	暗灰色	密	良好	2C区
491 二二	瓦器 椀	13.4 4.6 高台径 3.9 高台高 0.2	平坦な底部から外上方へゆるやかに内湾する浅め器形。口縁部は丸く終わる。高台は断面逆台形で垂直に付く。 内面粗く太いヘラミガキ。見込み、平行線状のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕残存。	淡灰色 ～暗灰色	やや粗	良好	2C区
492	瓦器 椀	14.2 —	底部から斜上方へゆるやかに内湾するやや深めの器形。口縁端部は丸く終わる。 内面やや密な太いヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ、指頭圧痕顕著。	暗灰色	やや粗	良好	1D区
493	瓦器 椀	15.6 —	底部から内湾して口縁部で外反する浅い器形。口縁端部は丸く終わる。 内面数条の太いヘラミガキ。見込み、平行線状の粗いヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面指頭圧痕残存。	暗灰色	密	良好	1D区
494	瓦器 椀	14.4 4.35 高台径3.45 高台高 0.3	丸い底部から外上方へ内湾する浅い器形。口縁端部は丸く終わる。断面逆二角形の低い高台が垂直に付く。 内面全体に、粗いヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ、体部外面ナデ、指頭圧痕残存。	淡灰色	密	良好	2D区
495	瓦器 椀	— — 高台径5.85 高台高 0.6	丸い底部に断面「U」字形の高台が「ハ」の字形に開いて付く。 見込み、格子状の太いヘラミガキ。	淡灰色 ～灰色	密	良好	2D区
496	瓦器 椀	— — 高台径4.85 高台高 0.6	丸い底部に断面逆三角形の高台が垂直に付く。見込み格子状のヘラミガキ。	暗灰色	密	良好	1D区
497	瓦器 椀	— — 高台径4.25 高台高 0.5	平坦な底部に断面台形の高台が垂直に付く。 見込み、平行線状のヘラミガキ。	白灰色 ～灰色	やや粗	良好	2D区
498	瓦器 小皿	9.2 2.55 高台径 4.4 高台高0.55	平坦な底部に断面「U」字形の高台が垂直に付き、高台より外上方へ内湾し器厚を減じ斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 内面密なヘラミガキ。見込み、平行線状の太いヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。	淡灰色	密	良好	2D区
499	瓦器 小皿	8.4 2.2	丸い底部から外上方へ内湾して口縁部に至る。端部は先細で丸く終わる。 内面密なヘラミガキ。見込み、平行線状のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ、底部外面ナデ。	灰色	やや粗	良好	2C区

遺物番号 / 図版番号	器種	(cm) 法量 口径 / 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
500 二二	瓦器 足釜	19.3 — 鍔径 25.2	丸味のある体部に内湾する口縁部が付く。口縁端部は、内傾した面をもち丸く終わる。鍔は短く水平に付き、鍔の先端から足が付く。 口縁部外面から鍔直下までヨコナデ、体部はナデ及び指頭圧痕が残存。口縁部内面はヨコナデ、体部内面ナデ。足はナデ。	灰色	やや粗	良好	鍔裏面以下煤付着 1A区
501	白磁 碗	13.9 —	斜上方へ直線的に伸び、玉縁状の口縁部に至る。	白灰色の釉	緻密	堅緻	2D区
502	白磁 碗	— — 高台径 5.8 高台高 0.9	丸味のある底部に断面逆台形の低い削出し高台が「ハ」の字形に付く。 高台部回転カンナケズリ。	白色の釉	緻密	堅緻	1B区
503	土師器 甕	17.2 —	体部から「く」の字形に外折する口縁部に至る。端部は内傾した面となる。 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケの後ヨコナデ。体部外面左上りのハケ、内面ナデ。	暗褐色	粗	良好	1D区
504	土師器 甕	19.2 —	体部から「く」の字形に外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 内外面ともヨコナデ。	明赤茶色	やや粗	良好	1D区
505	土師器 椀	18.3 —	あまり肩の張らない丸味のある体部から丸味をもって上外方へ外折する口縁部に至る。端部は、わずかに外反して丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面指頭圧成形後ナデ、指頭圧痕残存。内面ナデ。	淡赤茶色	やや粗	良好	体部外面黒斑有 1D区
506	土師器 甕	29.5 —	体部から「く」の字形に外反する口縁部に至る。端部は上内方へつまみ上げ丸く終わる。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面左上りのハケ。口縁部内面ヨコナデ。体部内面板状工具によるナデ。	淡赤茶色	やや粗	良好	1B区
507	土師器 土釜	26.85 — 鍔径 30.0	体部から上外方へ外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。鍔は水平に付き、端部は丸く終わる。 口縁端部内面から体部上位まで及び口縁端部外面から鍔直下までヨコナデ。体部内面指頭圧成形の後ナデ。体部外面縦方向のハケ。	淡褐色	やや粗	良好	1B区
508	土師器 土釜	24.4 — 鍔径 30.9	上内方へ内湾気味に伸びる体部から丸味をもって水平に外折する口縁部に至る。端部は尖り気味に丸く終わる。鍔は水平に付き、先細りで丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。口縁部外面から鍔までナデ。鍔ヨコナデ。	明茶色 ～淡褐色	やや粗	良好	2D区
509	土師器 土釜	26.2 — 鍔径 31.2	上内方へ直線的に伸びる体部に「く」の字形に外反する口縁部が付く。端部は内に巻込みナデつけないで段をもって終わる。鍔はほぼ水平に付き端部は丸く終わる。 口縁部内面及び外面全体ヨコナデ。体部内面、指頭圧痕が残るナデ。	乳灰色	やや粗	良好	1B区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
510	土師器 土釜	27.85 — 鍔径 35.05		上内方へ内湾気味に伸びる体部に斜上方へ外折する口縁部が付く。端部は丸く終わる。鍔は上外方へ直線的に伸び、端部は丸く終わる。 口縁部内面及び外面全体ヨコナデ、体部内面ナデ。	赤茶色	粗	良好	1C区
511	土師器 土釜	23.2 — 鍔径 33.8		上内方へ直線的に伸びる体部に丸味をもって水平方向に短かく外折する口縁部が付く。端部は丸く終わる。鍔は水平に付き、端部は丸く終わる。 口縁部内面及び外面全体ヨコナデ。体部内面ナデ。	乳茶色	やや粗	良好	鍔裏面以下煤付着 1B区
512	土師器 土釜	30.0 — 鍔径 40.8		上内方へ内湾する体部に丸味をもって外上方へ短かく外折する口縁部が付く。端部は丸く終わる。鍔は水平に付き端部は丸く終わる。 口縁部内面及び外面全体ヨコナデ。体部内面ナデ。	乳灰色	粗	良好	鍔裏面以下煤付着 1B区
513	土師器 土釜	— — 鍔径 39.25		上内方へ内湾する体部に斜上方へ外折する口縁部が付く。口縁端部は欠損。鍔はほぼ水平に付く。	乳茶色 ～赤茶色	粗	良好	1A区

第3層　出土遺物

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
520	土師器 小皿	9.4 0.8		少し窪む底部から外上方へ立ち上がり、外反する口縁部に至る。端部は内に丸く巻込む。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	明乳茶色	密	良好	1～2D区
521	土師器 小皿	9.4 1.2		丸味のある底部から斜上方へ立ち上がった後、水平方向に伸びる口縁部に至る。端部は内に少し巻込み丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	乳茶色	密	良好	1～2B区
522	土師器 小皿	9.0 1.2		丸味のある底部から斜上方へ立ち上がり外上方へ外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 内外面ヨコナデ。	乳灰色	密	良好	1～2C区
523	土師器 小皿	9.8 1.95		丸味のある底部から外上方へ立ち上がり外反する口縁部に至る。端部は内に丸く巻込む。 口縁部内外面ヨコナデ、底部内外面ナデ。	乳灰色	やや粗	良好	2A・2B区
524	土師器 小皿	8.2 1.15		底部中央で窪み、丸味をもって斜上方へ伸び口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	淡赤茶色	密	良好	1～2C区

遺物番号 遺構番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
525	土師器 小皿	9.1 1.0	底部中央が少し窪み、丸味をもって外上方へ内湾する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	1～2C区
526 二三	土師器 小皿	8.4 —	平坦な底部から外上方へ内湾し、口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	1～2A区
527	土師器 小皿	9.2 —	丸い底部から外上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	淡褐色	やや粗	良好	内面に灯芯油痕有 1～2A区
528	土師器 小皿	10.8 1.5	平らな底部から丸味をもって斜上方へ直線的に立ち上がり口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	乳赤茶色	やや粗	良好	1～2C区
529	土師器 小皿	9.05 1.9	丸い底部から外上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は、内傾した浅い凹面をもつ。 口縁部内外面ヨコナデ、底部内外面ナデ。	明橙色	やや粗	良好	1～2B区
530	土師器 小皿	9.8 1.6	平担な底部から丸味をもって立ち上がり器厚を減じて斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ、外面弱いナデ。	淡茶色	やや粗	良好	1～2A区
531	土師器 小皿	9.8 1.6	平担な底部から外上方へ立ち上がり口縁部に至る。端部はつまみ上げ気味に丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	淡茶色	やや粗	良好	1～2C区
532	土師器 中皿	11.4 1.45	平担な底部から丸味をもって立ち上がり、斜上方へ外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面、指頭圧痕残存。	乳茶色	密	良好	1～2A区
533	土師器 小皿	11.5 1.65	平らに近い底部から丸味をもって立ち上がり、器厚を減じて斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。外面指頭圧痕残存。	乳茶色 ～淡褐色	密	良好	1～2B区
534	土師器 小皿	10.15 2.1	平担な底部から丸味をもって立ち上がり斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面、回転糸切り痕残存。	淡赤茶色	密	良好	1～2B区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 器高 底径	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
535 二三	土師器 小皿	12.9 3.5	平らに近い底部から斜上方へ丸味をもって立ち上がり、少し開いた後わずかに内湾する口縁部に至る。端部は尖り気味に終わる。 口縁部内外面ヨコナデ。底体部内外面ナデ。	淡赤茶色	やや粗	良	2A・2B区
536	土師器 小皿	13.2 2.2	平坦な底部から外上方へ立ち上がりほぼ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面ナデ。	乳茶色	密	良好	1～2B区
537	土師器 小皿	12.6 —	底部から外上方へ伸び斜上方へ向く直線的な口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部外面及び内面全体ヨコナデ。底部外面指頭圧成形後ナデ。	乳茶色	密	良好	1～2C区
538	土師器 中皿	15.2 2.0	平坦な底部から丸味をもって立ち上がり斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	乳茶色	密	良好	1～2A区
539	土師器 中皿	15.6 2.9	平坦な底部から外上方へ内湾し、口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面指頭圧痕残存。	乳褐色	密	良好	1～2A区
540	土師器 中皿	16.35 —	底部から斜上方へ直線的に伸び、口縁部に至る。口縁端部は尖り気味に終わる。 内外面ヨコナデ、内面に工具痕残る。	乳茶色	密	良好	1～2C区
541 二三	土師器 中皿	19.5 2.7	平坦な底部から丸味をもって上外方へ立ち上がった後、斜上方へ外反する口縁部に至る。端部は内に丸く巻込む。内面口縁端部に沈線状の段が一周する。 口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面ヘラ。	赤茶色	密	良好	1～2A区
542	土師器 台付小皿	— — 裾径 9.6	平坦な底部に「ハ」の字形に開く台部が付く。台部下端は、外反気味に丸く終わる。 底部内外面ナデ。その他ヨコナデ。	淡赤茶色	密	良好	1～2A区
543	土師器 土釜	15.25 —	体部から丸味をもって斜上方へ外折する口縁部に至る。端部は内傾した面となる。 口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	乳茶色	粗	良好	2A区
544	土師器 甕	26.3 —	体部から「く」の字形に外反する口縁部に至る。口縁部下端がわずかに水平方向に伸び丸く終わる。 体部外面上半ナデ。その他ヨコナデ。	明赤茶色	やや粗	良好	1～2A区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
545	土師器 上釜		25.1 — 脚径 28.95	ほぼ垂直に伸びる体部に斜上方へ外反する口縁部が付く。端部は丸く終わる。脚はわずかに外上へ直線的に伸び丸く終わる。 内外面ヨコナデ。	赤茶色	粗	良好	1～2B区
546	土師器 土釜		33.2 — 脚径 38.9	上内方へ内湾気味に伸びる体部に外折して水平方向に向く口縁部が付く。端部は丸く終わる。脚は、外上方へ直線的に伸び脚端は内傾した面となる。 口縁部内面及び外面全体ヨコナデ。体部内面ナデ。	乳茶色	やや粗	良好	脚裏面以下煤付着 1～2A区
547	土師器 上釜		38.6 — 脚径 47.4	上内方へ内湾する体部から外上方へ外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。脚はほぼ水平に伸びる。端部は丸い。 全体にヨコナデ。	乳灰色 ～淡褐色	粗	良好	2A・2B区
548	須恵器 鉢		— —	平坦な底部から角度をかえて斜上方へ体部が伸びる。 体部外面及び内面全体回転ナデ。底部外面回転糸切痕残存。	淡褐色	密	堅緻	1～2A区
549 二三	須恵器 鉢		29.0 10.8	平坦な底部から内湾気味に斜上方へ立ち上がり、口縁部に至る。端部は内傾した面をもつ。片口が付く。 脚部内外面ナデ。その他回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	1～2A区
550	須恵器 鉢		30.4 —	斜上方へ直線的に伸びて口縁部に至る。端部は内傾した面となる。 全体に回転ナデ。	灰色	粗	堅緻	口縁部に重ね焼痕残存 1～2D区
551 二三	須恵器 杯蓋		11.4 3.0 つまみ径 2.15 つまみ高 0.8	丸い天井部から器形を減じながら内湾して下り口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。内面に断面三角形のかえりをもつ。天井部外面に擬宝珠状のつまみが付く。 天井部外面回転ヘラケズリ、つまみナデ、その他回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	外面自然釉付着 1～2A区
552	須恵器 杯蓋		— — つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	平坦な天井部に扁平な擬宝珠状のつまみが付く。 内面中央及びつまみナデ、その他回転ナデ。	青灰色	やや粗	堅緻	1～2A区
553	須恵器 杯蓋		13.1 2.0	平坦な天井部から外下方へゆるやかに下り、角度をかえて垂直に下り外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。屈曲部外面に稜をもつ。 内外面回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	1～2B区
554	須恵器 杯蓋		15.2 — — —	凹面状の天井部からゆるやかに外下方へ下り、口縁部に至る。端部下端が断面逆三角形を呈して垂直に至る。 全体に回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	1～2A区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
555	須恵器 杯蓋		11.9 3.3	平坦な底部から丸味をもって立ち上がり、直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 内外面回転ナデ。	灰色	やや粗	堅緻	1～2 B区
556	須恵器 杯身	高台径 8.5 高台高 0.5	— —	平坦な底部に断面逆台形の低い高台が垂直に付く。高台下端は凹面をなす。 底部外面ナデ。その他回転ナデ。	淡灰色	密	堅緻	1～2 D区
557	須恵器 杯身	高台径 8.9 高台高 0.6	— —	平坦な底部に断面逆台形の高台がほぼ垂直に付き、高台より内湾する体部が伸びる。 全体に回転ナデ。	青灰色	やや粗	堅緻	1～2 A区
558	須恵器 杯身	高台径10.2 高台高0.35	— —	平坦な底部に断面「U」字形の高台が「ハ」字形に開いて付く。 底部外面ナデ、その他回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	1～2 D区
559	須恵器 杯身	高台径11.05 高台高 0.7	— —	平坦な底部に断面長方形の高台が垂直に付き、高台より丸味をもって上外方へ体部が立ち上がる。 全体に回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	2A・2B区
560	須恵器 壺	高台径 5.8 高台高 1.4	— —	丸味のある底部に断面台形の高台が「ハ」の字形に開いて付き、高台より角度をかえて上外方へ直線的に伸び、再び上内方へ角度をかえて伸びる。 全体に回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	底部内面自然釉付着 1 B区
561	須恵器 壺		11.2 —	内湾気味の体部に器厚を減じながら上内方へわずかに外反する口縁部が付く。端部は先細で丸く終わる。 全体に回転ナデ。	青灰色 ～黒灰色	やや粗	堅緻	1～2 A区
562	須恵器 壺？		— —	平坦な底部から器厚を減じて外上方へ内湾する体部が伸びる。 全体に回転ナデ。底部外面同転ヘラケズリ。	淡灰色	粗	堅緻	1～2 B区
563	須恵器 不明		— —	内湾する体部外面に横方向に二条の張付け凸帯を施し、凸帯を結ぶように縦方向に櫛状浮紋が付く。 体部内外面回転ナデ。	淡灰色	密	堅緻	外面に灰色の釉 1～2 D区
564	須恵器 甕		21.9 —	体部上半では上内方へ直線的に伸び内面に段をもち上外方へ外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面上位右上りのタタキの後ハケ状のナデ、体部外面中位左上りのタタキ。内面剥離著しく調整不明。	乳灰色	粗	良	1～2 B区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
565	須恵器 高杯	脚径	— — 9.1	斜下方へ直線的に下った後、端部で外面に段をもって内湾して垂直に向く。下端は丸く終わる。方形の透し有。 全体に回転ナデ。	灰色	密	堅緻	1～2A区
566	須恵器 高杯		8.8 —	垂直に下る脚部の基で大きく外反し、端部で外面に鈍い稜をもち直線的に斜下方へ向く。下端は外傾した面となる。 全体に回転ナデ。	淡灰色	やや粗	堅緻	1～2A区
567	瓦器 小皿		10.0 2.55	丸い底部から内湾して口縁部で外上方へ外折する。端部は尖り気味に終わり、内面に凹線状の窪みが一周する。 内面密なヘラミガキ。見込み、格子状のヘラミガキ。外面三方向の分割調整を意識した粗いヘラミガキ。	黒灰色	密	良好	大和型？ 2A・2B区
568 二三	瓦器 小皿		9.2 1.75	平坦な底部から丸味をもって斜上方へ立ち上がり口縁部に至る。端部は丸く終わる。内面体部と見込みの間に沈線が一周する。 内面ヨコナデ後、見込みに格子状のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕残存。	淡灰色	密	良好	1～2C区
569 二三	瓦器 小皿		8.7 1.9	丸い底部から内湾して口縁部に至る。端部は丸く終わる。 内面密なヘラミガキ。見込み格子状のヘラミガキ。外面口縁部ヨコナデ、底部指頭圧痕掌紋残存。	淡灰色 ～青灰色	やや粗	良好	完形 2A・2B区
570 二三	瓦器 小皿		9.5 1.75	平坦な底部から丸味をもって立ち上がりほぼ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 内面数条のヘラミガキ。見込み、格子状のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ、底部外面弱いナデ。	淡灰色	やや粗	良好	1～2A区
571	瓦器 小皿		9.2 2.3	丸い底部から斜上方へ立ち上がり、外反する口縁部に至る。端部は尖り気味に終わる。 内面密な細いヘラミガキ。見込み、平行線状のヘラミガキ。ヘラミガキの際の工具のあたりが体部内面に遺存、口縁部外面ヨコナデ。底部掌紋残存。	灰色	密	良好	1～2B区
572	瓦器 小皿		9.6 2.0	平坦な底部から斜上方へ内湾する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 内面太いヘラミガキ。見込み、平行線状のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。底部外面ナデ。	灰色	やや粗	良好	1～2C区
573	瓦器 小皿		9.75 —	平坦な底部から丸味をもって立ち上がり斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は外傾した面をもつ。 内面密なヘラミガキ。見込み、平行線状のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ、底部外面ナデ、指頭圧痕残存。	灰色	やや粗	良好	1～2A区
574	瓦器 小皿		8.75 1.75	丸味のある底部から斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 内面数条のヘラミガキ。見込み、平行線状のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ、底部外面ナデ。	淡灰色	やや粗	良好	1～2D区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
575	瓦器 小皿	9.0 1.5		平担な底部から外上方へ立ち上がり斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指頭圧成形後、口縁部外面ヨコナデ。見込み乱方向の粗いヘラミガキ。底部外面、指頭圧痕残存。	灰色	やや粗	良好	1～2C区
576	瓦器 小皿	9.8 —		丸味のある底部から斜上方へ立ち上がりほぼ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 内面数条のヘラミガキ。見込み、平行線状のヘラミガキ、口縁部外面ヨコナデ。体部外面指頭圧痕残存。	乳灰色	やや粗	良好	2A・2B区
577	瓦器 小皿	10.9 2.1		丸味のある底部から外上方へ立ち上がり直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 内面緻密なヘラミガキ。外面密なヘラミガキ。	淡灰色	密	良好	1～2D区
578	瓦器 小皿	9.25 1.85		底面中央が少し窪む丸味のある底部から斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 内面ナデ。口縁部外面ヨコナデ。底部掌紋残存。	淡灰色	密	良好	1～2D区
579	瓦器 足釜	19.05 — 脚径 23.75		丸味のある体部に上内方へ内湾気味に伸びる口縁部が付く。端部は丸く終わる。脚は短く水平に付く。脚端部は内傾した面となる。 内外面ヨコナデ。	暗灰色	やや粗	良	1～2C区
580	瓦器 椀	14.7 —		上外方へ内湾する深い器形。口縁端部は内に外傾する面をもち外上方へ伸びて丸く終わる。面には凹線状の窪みが一周する。外面口縁部下位にナデによる鈍い段を呈する。 内面密なヘラミガキ。体部外面七半に数条のヘラミガキ	淡灰色	密	良好	大和型？ 1～2D区
581	瓦器 椀	14.0 —		上外方へ内湾する深い器形。口縁端部は外傾した面をもち外上方へ伸びて丸く終わる。面には凹線状の窪みが一周する。 内面密で細いヘラミガキ。外面細いヘラミガキを粗く施す。	灰色	やや粗	良好	大和型？ 1～2D区
582	瓦器 椀	15.25 —		斜上方へ内湾するやや浅めの器形。口縁部は丸く終わる。口縁端部内面に凹線が一周する。 内面密なヘラミガキ。外面粗いヘラミガキ。	淡灰色	やや粗	良好	1～2A区
583	瓦器 椀	14.8 —		斜上方へ内湾する深めの器形。口縁端部は丸く終わる。端部内面にヘラ描き沈線が一周する。 内面密なヘラミガキ。外面粗いヘラミガキ。指頭圧痕残存。	灰色 ～青灰色	密	良好	2A・2B区
584	瓦器 椀	— — 高台径 5.6 高台高 0.6		丸味のある底部に断面逆台形の高台が「ハ」の字形に開いて付く。高台下端は外傾した面となる。 見込み、格子状の細いヘラミガキ。	淡灰色 ～灰色	やや粗	良好	1～2A区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量 口径・ 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
585	瓦器 椀	— — 高台径 6.0 高台高 0.7	丸味のある底部に断面「U」字形のやや高い高台が「ハ」の字形に開いて付く。 見込み、格子状のヘラミガキ。体部外面下位にヘラミガキ。	白灰色 ～灰色	やや粗	良好	外面炭素付着不良 1～2A区
586	瓦器 椀	— — 高台径 5.6 高台高 0.6	丸味のある底部から外上方へ体部が伸びる。断面「U」字形の高台が「ハ」の字形に開いて付く。 見込み、平行線状のヘラミガキ。体部外面下半ナデ。	淡灰色	密	良好	1～2B区
587	瓦器 椀	— — 高台径 5.7 高台高 0.7	丸味のある底部に断面逆三角形のやや高い高台が少し開いて付く。 見込み、格子状のヘラミガキの上に平行状のヘラミガキを重ねる。	灰色	密	良好	1～2B区
588	瓦器 椀	12.8 —	外上方へ内湾気味に伸び直線的な口縁部に至る。端部は丸く終わる。 内面やや粗いヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面、指頭圧痕残存。	灰色	やや粗	良好	1～2B区
589	瓦器 椀	15.8 4.1	外上方へ内湾し直線的に伸び口縁部に至る浅い器形。端部は丸く終わる。 内面やや密なヘラミガキ。見込みは平行線状のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面指頭圧痕残存。	灰色	やや粗	良好	1～2A区
590	瓦器 椀	15.2 —	斜上方へ内湾する浅めの器形。端部は尖り気味に終わる。 内面緻密なヘラミガキ。見込み、平行線状のヘラミガキ。体部外面上半にやや粗いヘラミガキ。体部外面下半、指頭圧痕残存。	淡灰色 ～灰色	やや粗	良好	1～2B区
591	瓦器 椀	14.9 4.3 高台径3.95 高台高0.35	平担な底部から外上方へ内湾する浅い器形。口縁端部は丸く終わる。断面逆台形の高台が垂直に付く。 内面やや密なヘラミガキ。見込み、平行線状のヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕残存。	淡灰色	やや粗	良好	1～2C区
592	瓦器 椀	14.4 5.0 高台径5.15 高台高 0.4	平担な底部から斜上方へ内湾し、直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。断面逆二角形の低い高台が垂直に付く。 内面粗いヘラミガキ。見込み、平行線状のヘラミガキ。体部外面ナデ、上半に数条のヘラミガキ。	乳灰色 ～暗灰色	密	良好	1～2B区
593	瓦器 椀	— — 高台径 5.9 高台高 0.6	肥厚した丸味のある底部に断面逆三角形の高台が垂直に付く。 見込み、平行線状のヘラミガキ。体部外面下位ヘラミガキ。	乳灰色	やや粗	良好	炭素付着無 1～2A区
594	瓦器 椀	— — 高台径5.15 高台高 0.5	丸味のある底部に断面逆三角形の高台がやや開き気味に付く。 内面緻細なヘラミガキ。見込み、平行線状ヘラミガキ。	灰色	やや粗	良好	1～2A区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
595	瓦器 椀		15.7 4.2 高台径 5.3 高台高 0.3	底部から外上方へ内湾する浅い器形。口縁端部は丸く終わる。断面逆二角形の低い高台が付く。 内面やや粗いヘラミガキ。見込み、平行線状の細いヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ、体部指頭圧成形後ナデ。	淡灰色 ～青灰色	やや粗	良好	外面体部重ね焼痕有 1～2D区
596	瓦器 椀		14.2 —	斜上方へ内湾する深めの器形。口縁端部は丸く終わる。 内面緻密なヘラミガキ、見込みは平行線状のヘラミガキ　外面粗いヘラミガキ、指頭圧痕残存。	灰色	密	良好	2A・2B区
597	瓦器 椀		13.9 —	外上方へ内湾し、直線的に伸び口縁部に至る浅い器形。端部は丸く終わる。 内面やや粗いヘラミガキ。見込み 平行線状の太いヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面、指頭圧痕残存。	淡灰色	やや粗	良好	1～2A区
598	瓦器 椀	— — 高台径4.95 高台高 0.4		平担な底部から外上方へ内湾する体部が伸びる。 見込み、平行線状のヘラミガキ。体部外面ナデ。指頭圧痕残存。	淡灰色	やや粗	良好	1～2D区
599	瓦器 椀	— — 高台径 4.7 高台高 0.4		平担な底部から外上方へ内湾する器形。断面逆三角形の高台が垂直に付く。 内面数条のヘラミガキ。見込み、平行線状の細いヘラミガキ。体部外面上位ヨコナデ、下半指頭圧痕残存。	淡灰色	やや粗	良好	1～2D区
600	瓦器 椀	— — 高台径 4.2 高台高 0.5		平担な底部に断面逆三角形の低い高台が垂直に付く。高台は楕円形を呈する。 見込み、平行線状のヘラミガキ。	青灰色	やや粗	良好	1～2D区
601	白磁 椀		16.6 —	斜上方へ内湾気味に伸び口縁部に至る。口縁部は外へ大きく折返し玉縁状の口縁を呈する。	乳灰色の釉	緻密	堅緻	1～2A区
602	白磁 椀		14.8 —	上外方へ伸び外に折返す玉縁状口縁部。	白灰色の釉	緻密	堅緻	2A・2B区
603	白磁 椀		15.9 —	上外方へ伸び外に折返す玉縁状口縁部。	乳白色の釉	緻密	堅緻	細かい貫入有 2A・2B区
604	白磁 椀	— — 高台径 5.0 高台高0.95		平担な底部に断面逆台形の重厚な高台が垂直に付く。	淡灰緑色の釉	密	堅緻	1～2B区

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
605 二三	白磁 碗	— — 高台径 6.2 高台高 1.5	平坦な底部に断面逆台形の高い高台が垂直に付く。高台直上に段をもって斜上方へ体部が伸びる。内面見込みに沈線が一周する。	白青色の釉	緻密	堅緻	高台裏面露胎 1～2 A区
606	白磁 碗	— — 高台径 5.7 高台高 0.9	丸味のある底部から外上方へ内湾する体部が伸びる。断面逆台形の高い高台が垂直に付く。	白灰色の釉	緻密	堅緻	1～2 D区
607	白磁 碗	— — 高台径 5.6 高台高 0.9	平坦な底部に断面逆台形の重厚な高台がほぼ垂直に付く。	白灰色の釉	緻密	堅緻	1～2 D区
608	白磁 碗	— — 高台径 4.0 高台高 1.0	平坦な底部に断面逆台形の高台が垂直に付く。高台より斜上方へ体部が伸びる。	灰白色の釉	緻密	堅緻	内面見込みに重ね焼痕遺存 1～2 A区
609 二三	陶磁器 碗	— — 高台径 5.8 高台高0.35	平坦な底部に高台内面が大きく内傾する断面逆三角形の高台が付く。高台より器厚を減じながら外上方へ内湾する体部が伸びる。見込み浅い沈線が一周する。	黄緑色の釉	密	堅緻	高台裏面露胎 1～2 A区

第5章　遺構・遺物の検討

1．瓦器椀について

1）序文

今回の調査では、小面積にもかかわらず比較的良好な形で、弥生時代後期から鎌倉時代末期に比定される遺構・遺物を検出することができた。なかでも、平安時代後期から鎌倉時代末期に比定される遺構・遺物が多く、この期間を通じて当調査地一帯が居住地として利用されていたことが確認できた。したがって、この期間に該当する8基の井戸遺構の時期を明確にすることで、居住地の推移を復元することが可能である。幸いにも、これらの井戸遺構からは比較的良好な資料が出土しており、今日までに試みられてきた中南河内の中世土器編年をもとに時期を明晰にすることができよう。ここでは、遺物のなかでも普遍的に出土をみた瓦器椀に注目し、当調査地出土資料と既往編年とを比較検討する過程で、八尾市域出土瓦器椀の編年の可能性を予察してみたい。

2）中南河内における既往瓦器椀編年の比較と問題点

八尾市域で出土する瓦器椀は他地域からの搬入品を除けば、橋本久和氏が付称された楠葉型・大和型・和泉型・丹波型・紀伊型の5種類のうちの和泉型に該当する。[註1] 中南河内地域出土の瓦器椀については、尾上実氏が1978年藤井寺市挟山遺跡の報文中でX期に細分されたものが編年作業の嚆矢である〔**以下挟山遺跡編年**〕。[註2] 1982年には鈴木秀典氏が大阪市長原遺跡出土の瓦器椀を大きくV期に分け、I期とV期を1小期、II～IV期を3小期に区別した〔**以下長原遺跡編年**〕。[註3] 1983年には勝田邦夫氏が東大阪市若江遺跡出土の瓦器椀をa～mの13型式に型式分類されている〔**以下若江遺跡編年**〕。[註4] 同年7月、尾上実氏は「**南河内の瓦器椀**」と題する論文中で既往の挟山遺跡編年に新たな資料を加え、全体をIV期に分けI期～III期を各3小期に、IV期を5小期に細分されている〔**以下南河内編年**〕。[註5] 一方、1985年三宅正浩氏は八尾市佐堂遺跡出土の瓦器椀の形態をA～J類の10タイプに分類されている〔**以下佐堂遺跡編年**〕。[註6] これらの5編年案は、〔**南河内編年**〕を除けば1遺跡内の出土遺物を中心に型式分類を行ったものである。

以上のように、中南河内地区においては4氏が5つの編年案を提示されている。このような和泉型瓦器椀の編年案が示されている一方、和泉型瓦器椀が中河内・南河内・泉北・泉南・西摂程度には細分が可能であるとの意見がある。ただ、『巨摩・若江北（その2）』[註7]の報文中で試みられた瓦器椀の胎土分析の結果からは、生産地が時期ごとに広い範囲[註8]を移動したことを示唆し得る結果が得られていることから、和泉型瓦器椀の概念を巨視的な立場から捉える必要があろう。ここでは、中河内の瓦器椀を広義の「和泉型」と捉えたうえで、上記の編年案を比較

して整理してみたい。

〔**挟山遺跡編年**〕は、井戸遺構を中心とした一括資料をもとにX期に細分されており、瓦器椀の漸移的な矮小化および調整の出自・消長を明確にするとともに、瓦器椀以外の遺物についても一部共存関係を明確にされた。特に、瓦器椀の消滅期については、永楽通宝（初鋳1408年）の出土により15世紀前半に実年代を求めることが可能であるとされた。これらの型式分類はやや大雑把であった観をまぬがれ得ないが、中南河内の瓦器椀の変遷・実年代等がまったく不明瞭であったこの時期に、型式分類の可能性を予察されたことは、以後発行された報告書の和泉型瓦器椀の記述内容の変化からも、大きな影響を与えたことが窺える。

〔**長原遺跡編年**〕は、長原遺跡周辺出土の瓦器椀を大きくⅠ～Ⅴ期に分け、さらにⅠ期とⅤ期は1小期、Ⅱ～Ⅳ期をそれぞれ3小期に細分されたものである。この中で、形態・調整の推移を概念的に捉え、Ⅰ期は内底面のヘラミガキが文様として分化する以前。Ⅱ期は内底面のヘラミガキが文様化して分化する。Ⅲ期は外面にヘラミガキを施さないものの出現・器高の減少・高台の退化。Ⅳ期は器高の減少・内面ヘラミガキの省略化・体底部のヘラミガキの一体化・高台の退化から消滅。Ⅴ期は椀形から皿形へと区別された。さらに、他地域の瓦器椀との共存関係からⅡ・Ⅲ・Ⅳ期の実年代を12・13・14世紀とし、終末期については15世紀前葉とする〔**挟山遺跡編年**〕に同調する意見を示された。ただ、Ⅲ－3期においては長原遺跡ＳＥ316・ＳＥ015の出土資料から、見込みのヘラミガキは半数あるいはそれ以上を連結輪状で占めることがこの期の特徴であるとされているが、中河内地区においてはこの資料以外では、記述されているような比率で出土した例は現時点では見い出せない。[註9][註10]

〔**若江遺跡編年**〕は、若江遺跡出土の瓦器椀を形態別にａ～ｍの13型式に区分されたものである。特に〔**長原遺跡編年**〕との対比ではⅡ期の3小期に対応してｃ～ｈの6型式を12世紀中葉に比定されており、この時期の瓦器椀の形態の多様性を指摘されているが、編年に使用されたＳＥ－3の出土遺物についてはやや時期幅があるものと考えざるを得ない。実年代においては、〔**長原遺跡編年**〕で14世紀代とされているⅣ－1期に対応するＪ型式を13世紀前葉から中葉に比定されており、〔**長原遺跡編年**〕とは半世紀以上の時期差が認められる。

〔**南河内編年**〕は、羽曳野市・藤井寺市両市域を中心とした石川下流域における瓦器椀の変遷を目的としたもので、基本的には〔**挟山遺跡編年**〕をベースとして、新たに資料を加えて再編されたものである。全体をⅠ～Ⅳ期に区別し、さらにⅠ期～Ⅲ期は各3小期・Ⅳ期は5小期に細分された。その中で、検討を加える必要があろうとしながらもⅠ－1期を設定し、羽曳野市西琳寺跡井戸出土の瓦器椀を和泉型の最古の瓦器椀に位置付けられた。さらに、Ⅲ－2期の資料として、東大阪市神並遺跡で白石編年のⅢ段階－2型式に比定される大和型瓦器椀と共伴した和泉型瓦器椀と同形体の南河内郡太子町伽山遺跡井戸出土例、Ⅳ－3期の資料として羽曳[註11][註12][註13]

野市古市遺跡井戸2の出土例を加えられた。Ⅰ～Ⅳ期の概念については、Ⅰ期は深い椀形を呈し、外面を3～5方向に分割してヘラミガキを施す。Ⅱ期はⅠ期とほぼ変らない法量と器形とを保ちながらも外面ヘラミガキの粗略化が始まる。Ⅲ期は器形の低平化と調整の省略。Ⅳ期は外面のヘラミガキの消滅と、内面も周縁部と見込み部の区別が失なわれて一本の螺旋状（本稿では渦巻状と付称）のヘラミガキが施されているものとされている。一方、実年代については、Ⅰ－1期に比定される瓦器椀と同様のものが、平安京押小路跡の井戸から11世紀中葉に位置付けられる土師器と共伴して出土していることから、和泉型瓦器椀の成立も11世紀中葉にあるものとされた。Ⅱ－2期については、藤井寺市国府遺跡[註15]より出土した承安二年（1172）または同四年（1174）と墨書された木簡からその年代の一点を1170年代に置かれた。Ⅲ－2期の時期を示すものとして、和泉型瓦器椀と大和型瓦器椀が共伴した神並遺跡土壙1（SK22）[註16]の資料を指摘された。この型式の大和型瓦器椀は、白石氏によれば当麻寺曼荼羅堂の寛元元年（1243）の仏壇製作時に埋納されたものと考えられていることから、Ⅲ－2期についても同時期のものであろうとされた。瓦器椀の下限については、最終型式の一段階前のⅣ－4期の瓦器椀に共伴して永楽通宝（初鋳1408年）が出土していることから、15世紀中葉には瓦器椀が消滅したものであるという考え方を示された。

〔佐堂遺跡編年〕は、佐堂遺跡出土の瓦器椀をA～Jの10型式に分類されたものである。基本的には、〔長原遺跡編年〕・〔南河内編年〕の考え方を踏襲している。

3）八尾市域出土瓦器椀の編年試案

前記では5編年を順に概観した。それらの編年案を基に作成したものが第1表である。型式的な変遷の推移では、各編年ごとにほぼ一致した見解を示されているようであるが、細分においては一部で差異が認められる。ここでは、これらの編年案をもとに和泉型瓦器椀の型式変遷の概念を再度明確にしたうえで、八尾市域出土の和泉型瓦器椀の細分を試みることにする。

まず、大区分については、瓦器椀の形態および調整の変遷推移からみて〔長原遺跡編年〕の5区分が妥当であると考えられる。小区分については、Ⅰ期は2小区分、Ⅱ期は4小区分、Ⅲ期・Ⅳ期については3小区分とした。Ⅴ期は高台が消滅した後の一群で、2小区分した。

Ⅰ期

形態的には深い椀形を呈する。高台は高く「ハ」の字形に開き重厚感がある。内面のヘラミガキは全体に密で、見込みのヘラミガキは文様化していない。外面の体部は、1次調整でヘラケズリを行った後、2次調整として波状のヘラミガキを3～5分割に施している。この期については、沈線のあるタイプがやや古い様相を呈する可能性がある以外は、形態や調整から差異を区別することは困難である。各部位の数値においても口径・器高は近似値を示すが、高台径においては違いが認められた。そこで、高台径が口径に占める割合を示すため高台径指数（高

台径÷口径×100）で、小阪合遺跡ＳＥ－２と木の本遺跡ＳＥ－３の資料を比較してみた。その結果、前者は52.6～50.0、後者は45.5～36.3の数値が得られた。他遺跡出土の資料と比較した結果においても、51～45（Ａグループ）と42～37の（Ｂグループ）、さらにＡグループとＢグループが共伴するＣグループの存在が認められた。以上のことから、これらの高台径指数の変化と時間差が一元的なものなのかを確認するため、層位的に新旧が明らかな資料で比較してみた。例えば、東大阪市巨摩廃寺遺跡井戸18の資料は下層（曲物掘形埋土）中層（曲物内）上層（曲物埋没後）に区別でき、井戸構築から廃絶に至る時間の経過が読み取れる。遺物は、下層でＡグループ、中層でＢグループ、上層でＣグループに比定できる瓦器椀が出土している。下層と中層においては、井戸構築時と使用時で明らかに時間差が認められ、上層については、井戸廃絶後の資料であり、前者より新相に位置付けることが可能である。また、高石市大園遺跡ＳＥ801の資料についても、下層の３層からはＡグループ、上層の２層からはＢグループが出土しており、この資料においても、両タイプを区別することが可能である。さらに、このように区別した場合、Ａグループのものと黒色土器（Ｂ類）が共伴する例が多いことが指摘できる。したがって、Ⅰ期においては、高台径指数の変化が時期差を示す蓋然性が高いものと考えられるため、高台径指数の差によってⅠ期を２分した。

Ⅰ－１期：高台径指数が51～45程度のものを指す。口縁部内面に沈線状の浅い凹みが廻るものと凹みが無いものの２種がある。内面のヘラミガキは、分化せずに見込みから体部に向かって放射状ないしは乱方向に施されるものと、分化し見込みには空白部分を残さない程密な平行ヘラミガキ、体部にはヘラミガキを密に施すものがある。なお、一部には内面体部にヘラミガキを密に施した後、連結輪状文を装飾的に施すものもある。外面体部には、ヘラケズリの後３～５分割のヘラミガキが波状に施されている。小阪合遺跡ＳＥ－２の出土資料を指標とする。市域外では、巨摩廃寺遺跡井戸18下層、長原遺跡ＳＫ022、挟山遺跡３Ｆ－323－５区Ｌ－７井戸、松原市大和川今池遺跡２区ＳＥ04・Ａトレンチ ＳＫ04、大園遺跡ＳＥ801第３層の出土資料がこの期に比定できよう。

Ⅰ－２期：高台径指数が44～37程度のものを指す。形態的にはⅠ－１期に似るが、高台径が減少する。口縁部に沈線状の凹みを有する例が少なくなる。外面に１次調査のヘラケズリを実施していないものが出現する。内面のヘラミガキはⅠ－１期と同様、分化・未分化の２タイプが存在する。分化するタイプの見込みには、平行ヘラミガキを行うものと平行ヘラミガキの後さらに平行ヘラミガキを重ね格子状を呈するものがあるが、Ⅱ期以降の文様化した格子状ヘラミガキとは趣を異にする。外面のヘラミガキは分割性が崩れ始める段階。木の本遺跡第６調査区ＳＥ－３出土の資料を指標とする。市域外では、巨摩廃寺遺跡井戸18中層・上層・井戸19・井戸20、長原遺跡ＳＤ3342ｂ層、西琳寺跡井戸、柏原市安堂遺跡81－４・５次調査第４調査

第1表　瓦器椀編年対比表

地方	中南河内								大和			
地域 / 遺跡	八尾市域		狭山遺跡	長原遺跡	若江遺跡	南河内地域		佐堂遺跡	一部和泉地方を含む		大和全域	
年代	原田'87		尾上'78	鈴木'82	勝田'83. 3	尾上'83. 7		三宅'85	白石'77		川越'83	
1100	I	1		I		I	1	A	I	2	I	C
		2	I		a b		2	B C		3		D
	II	1	II	II－1	c d e		3	D	II	1	II	A
		2	III	II－2		II	1	E		2		B
		3	IV	II－3	f		2	F				
		4	V	III－1	g h		3	G		3	III	A
1200	III	1		III－2		III	1	H	III	1		B
		2		III－3	i		2			2		C
		3	VI				3	I				
1300	IV	1	VII	IV－1	j	IV	1					D
		2	VIII	IV－2	k		2	J		3		E
				IV－3			3					
1400	V	1	IX		l		4			4	IV	A
		2	X	V	m		5					B

区溝Ⅰａ類～Ⅰｃ類、堺市南花田遺跡第１工区土坑161[註31]、大園遺跡ＳＥ801第２層[註32]の出土資料がこの型式に比定できよう。なかでも、巨摩廃寺遺跡井戸18中層・上層・井戸19・井戸20[註30]、長原遺跡ＳＤ3342ｂ層の出土資料には高台径指数45以上のものが共存しており、Ⅰ－１期とⅠ－２期の中間的な様相を示すものと考えられる。

Ⅱ類

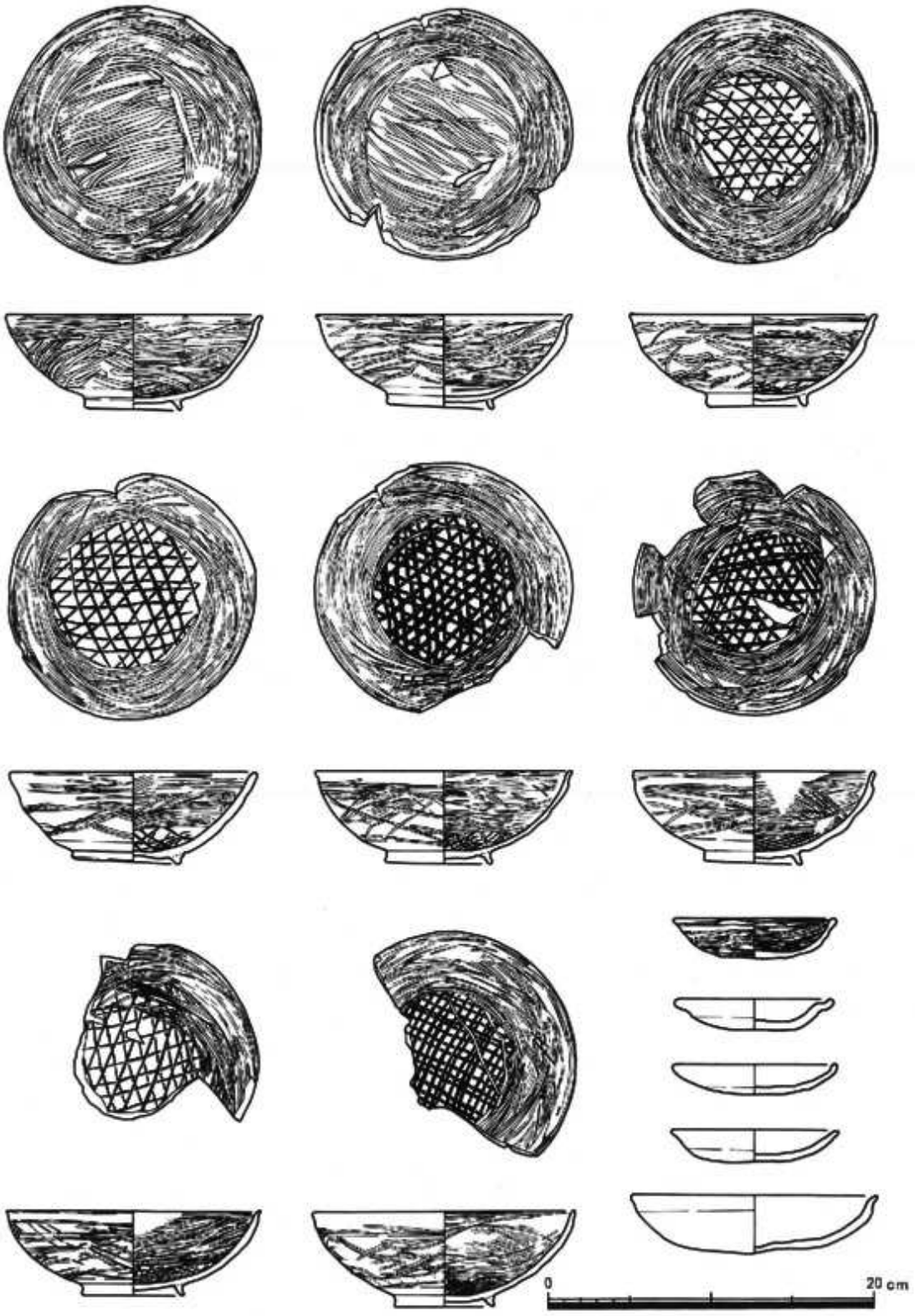
形態的にはほぼⅠ期に似るが、Ⅱ－２期以降、器壁がやや薄くなり高台径の減少が進む。見込みのヘラミガキは完全に文様化する（格子状・格子状＋平行線状）。Ⅱ－３期には平行線状ヘラミガキが出現する。外面のヘラミガキは、意識的な分割から全体を密なヘラミガキ（Ⅱ－１期）から分割の崩壊と粗略化（Ⅱ－２期）へと進む。外面に１次調整のヘラケズリが残るのはⅡ－１期まで。高台は、Ⅱ…２期までは高台径は大きく、「ハ」の字形に立ち上がるが、以後は垂直に立ち上がるものが多くなる。

Ⅱ－１期：形態的にはⅠ…２期と変わらないが、やや器壁の薄い物が出現する。見込みのヘラミガキは、Ⅰ－２期で認められた２種と文様化した格子状・格子状＋平行線状が共存している。特に格子状ヘラミガキは、Ⅱ－２期に比して施文の単位が細いものが多い。外面のヘラミガキは分割が簡略化したものと、分割を意識せずに全体にヘラミガキを密に施すものに二分される。外面の１次調整であるヘラケズリは、この段階まで一部に遺存している。この期以後、高台の断面形状が逆三角形を呈するものが出現する。八尾南遺跡ＳＫ…10[註33]・跡部遺跡ＳＷ10[註34]の出土資料が指標となる。市域外では、巨摩廃寺遺跡土壙33[註35]、長原遺跡ＳＤ3342ａ層[註36]の出土遺物がこの期に比定できよう。

Ⅱ－２期：形態的にはⅡ…１期と同様、深い器形を呈する。外面ヘラミガキの分割性の形骸化と粗略化が進む。内面は体部のヘラミガキの粗略化が始まる。見込みのヘラミガキは格子状・格子状＋平行線状があり、比較的丁寧に施文されているが、Ⅱ－１期に比して施文の間隔が粗くなる傾向を示す。津堂遺跡18トレンチＳＥ01[註37]の出土資料を指標とする。市域外では、挟山遺跡77－４区ＳＥ7746・ＳＥ7751[註38]・82－20区ＳＥ01[註39]、長原遺跡ＳＥ－307[註40]の出土資料がこの期に比定できよう。

Ⅱ－３期：器形の矮小化が始まる段階、外面のヘラミガキの分割性が完全に崩壊し、全体に粗く施される。見込みのヘラミガキは、格子状の他に新たに平行線状が加わる。佐堂遺跡ＳＫ415[註41]の出土資料を指標とする。市域外では、長原遺跡ＳＥ113[註42]、挟山遺跡ＳＥ7552[註43]・国府遺跡七九　第４調査区井戸・大和川今池遺跡３区ＳＥ02[註44]・南花田遺跡第１工区井戸138[註45]の出土資料がこの期に比定できよう。

Ⅱ－４期：形態的にはⅡ－３期に似る。外面の指頭圧痕が顕著で、ヘラミガキは口縁部付近および体部の一部のみに粗く施されるようになる。内面体部のヘラミガキはこの段階を境に粗[註46]



第58図　八尾南遺跡ＳＫ－10出土遺物実測図

略化が急激に進む。老原遺跡ＳＥ－２井戸側内出土遺物（23）を指標とする。ただ、後出のⅢ－１期と共伴する例が多く、長期間存続した型式とは言い難い。[註47] 市域外では、東大阪市弥刀遺跡井戸６、[註48] 挟山遺跡ＳＥ7732、[註49] 大和川今池遺跡３区ＳＥ06・[註50] 松原市観音寺遺跡Ｂ地区井戸１下層[註51]の出土資料がこの期に比定できよう。

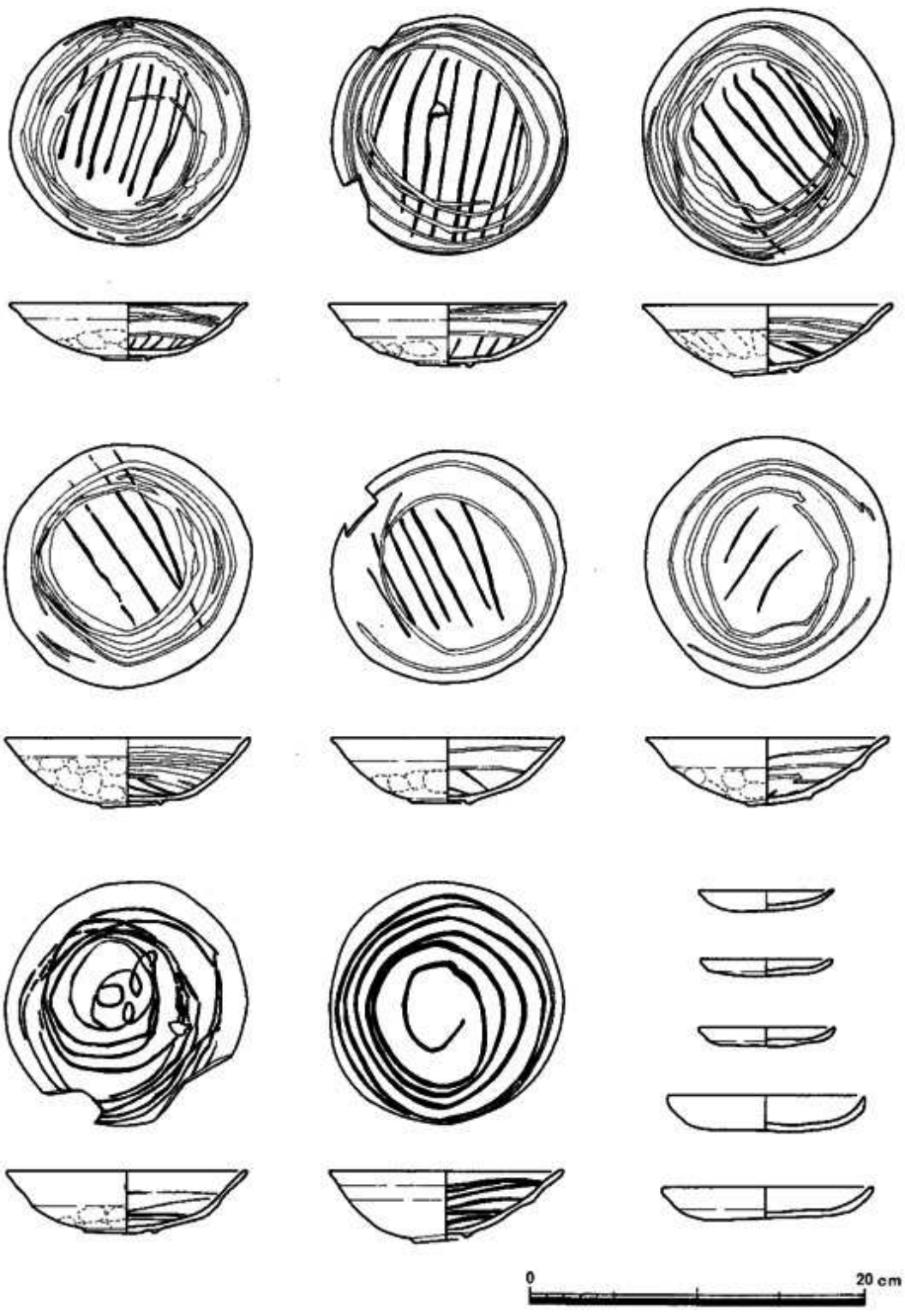
Ⅲ期

外面のヘラミガキが行われなくなり、器高の低下が進む。この期以降、内面体部のヘラミガキは簡略化が進む。見込みのヘラミガキはⅢ－１期では格子状と平行線状があるが、Ⅲ－２期以降は平行線状が多くなる。さらにⅢ－３期には連結輪状[註52]が出現し、さらに見込みと体部が一体化し渦巻状に施文する段階へと移行する。体部外面の口縁部付近には、強いヨコナデ調整が行なわれており、ナデの境に明瞭な段を有するものが出現する。高台はⅡ期のものに比して扁平で高台径も小さく、全体に雑な作りが目立つ。

Ⅲ－１期：形態はⅡ－４期と同様であるが、外面のヘラミガキが消滅したものを指標とする。外面体部に指頭圧成形の凹凸が目立ち、口縁部付近は強いヨコナデを行なうためか、外反気味になるものが多い。内面体部のヘラミガキの粗略化が進行する。見込みに格子状ヘラミガキを施すものがこの段階を境として激減する。老原遺跡ＳＥ－２井戸側内の出土資料（24～27）[註53]を指標とする。市域外では、挟山遺跡ＳＥ7730・ＳＤ7780上層、[註54] 羽曳野市東阪田７９－１区石組、[註55] 堺市菱木下遺跡ＳＥ３中層下部・[註56] 同市鞍田遺跡ＳＤ05[註57]の出土資料がこの期に比定できよう。

Ⅲ－２期：器高の低下が急激に進む。口縁部付近は強いヨコナデ調整で、明瞭な段を有するものや、段を境として口縁部の器肉を減じるものが多くなる。見込みのヘラミガキは、粗い平行線状を呈するものが大半を占めるようになる。美園遺跡ＦＳＫ501[註58]および佐堂遺跡ＳＥ408・ＳＥ415[註59]の出土資料を指標とする。市域外では神並遺跡ＳＫ22、[註60] 挟山遺跡ＳＥ7749、ＳＥ7750、[註61] 長原遺跡ＳＥ316、[註62] 伽山遺跡土壙11・[註63] 同井戸内、河内長野市三日市遺跡井戸３－２、[註64] 菱木下遺跡ＳＥ－３中層上部・[註65] 堺市船尾西遺跡１[註66]の出土資料がこの期に比定できよう。なお、菱木下遺跡ＳＥ－３中層上部および三日市遺跡井戸３－２の資料には、見込みに連結輪状ヘラミガキを施すものがこの期に出現している。中河内地域においても長原遺跡ＳＥ316等[註67]の出土例があるが、連結輪状に施すタイプは泉州北部を中心とした分布圏をもつものと考えられることから、中河内地区で出土するこのタイプの瓦器椀は、和泉型瓦器椀流通範囲内の南部で生産された可能性が高い。

Ⅲ－３期：Ⅲ－２期に比定した美園遺跡ＦＳＫ501の出土資料に比して、さらに低平化と高台の簡略化が進む。口径14cm前後・器高４cm前後のものが多い。見込みのヘラミガキには、平行線状・連結輪状・渦巻状（見込み部から口縁部に向って一本線のヘラミガキで渦巻状文様を



第59図　矢作遺跡ＳＤ－14出土遺物実測図

描く）がある。渦巻状ヘラミガキには、密なものと数周のみ施すものの２タイプがある。この期を境として、平行線状ヘラミガキを施すものは激減する。矢作遺跡ＳＤ－14の出土資料を指標とする。[註68] 市域外では、若江遺跡井戸９・神並遺跡ＳＥ－５（199～203）・[註69]三日市遺跡井戸３－１、[註70]菱木下遺跡ＳＥ－１の出土資料がこの期に比定できよう。[註71][註72]

Ⅳ期

器高の低下と小型化が進む。内面のヘラミガキは大半が渦巻状を呈する。高台は退化が著しく、Ⅳ－２期においては粘土紐が一周しないものや、粘土紐貼り付け後未調整のままのものが出現する。

Ⅳ－１期：器高の低下が進む。口径13～13.5cm・器高3.5cm前後のものを中心とする。内面のヘラミガキは一本線による渦巻状のものが大半を占める。福万寺遺跡ＳＥ－11出土資料を指標とする。[註73] 市域外では神並遺跡ＳＥ－５（204～210）、[註74]挟山遺跡ＳＥ7742・ＳＥ7739・[註75]同82－３区ＳＤ02の出土資料がこの期に比定できよう。[註76]

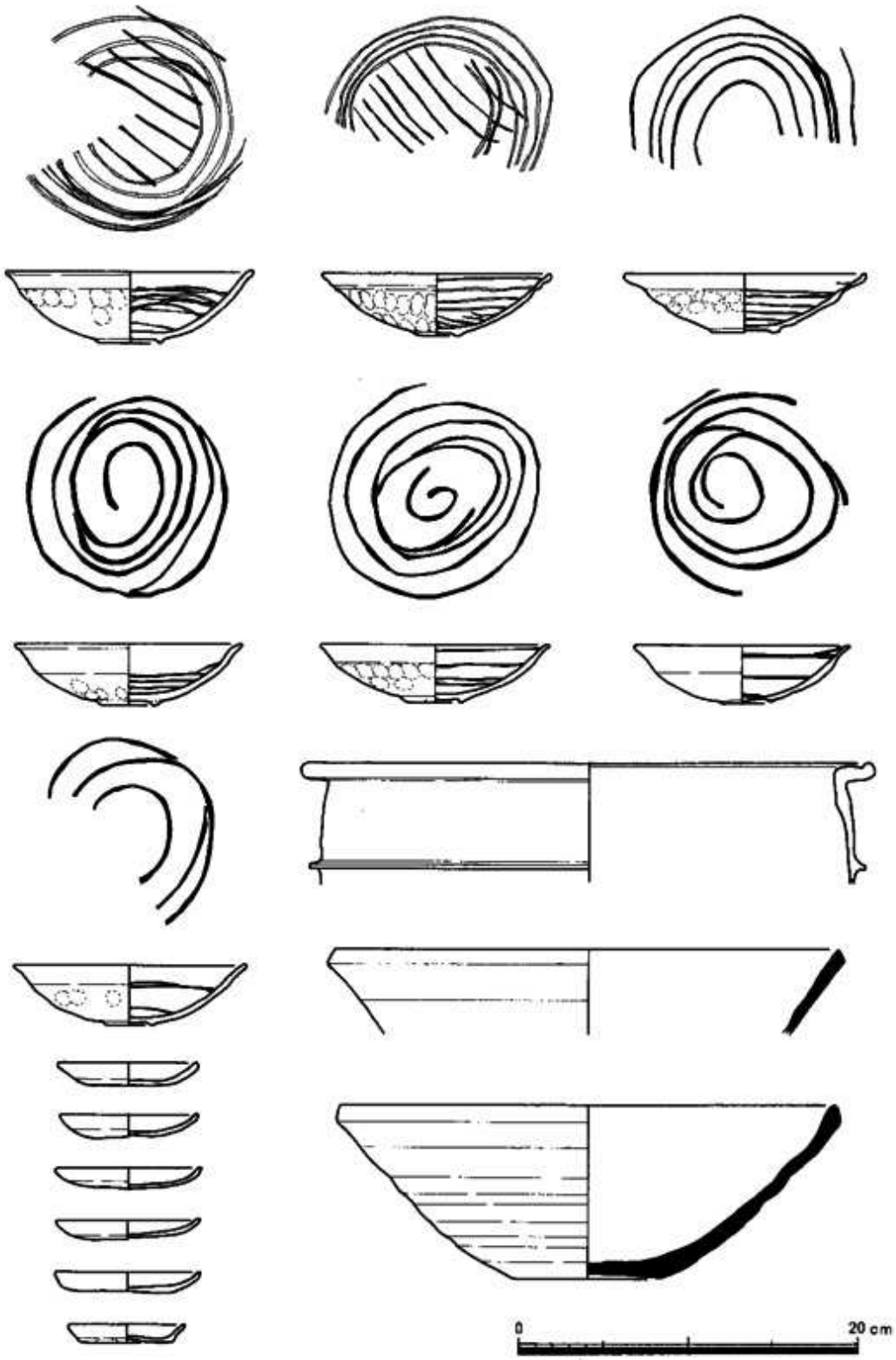
Ⅳ－２期：Ⅳ－１期に比してさらに器高の低下と口径の小型化が進む。口径12.5～13cm・器高3.0～3.5cmのものが中心となる。内面のヘラミガキは数周する程度の渦巻状のものが大半を占める。高台はさらに形骸化して、高台の機能を果さないものも出現する。後出のＶ－１期のものと共伴する例が多い。福万寺遺跡ＳＥ－13・ＳＫ－９の出土資料を指標とする。[註77] 市域外では大阪市亀井北遺跡ＳＫ8215、[註78]挟山遺跡82－３区ＳＫ01、[註79]羽曳野市茶山遺跡42調査区ＳＥ－01中層・[註80]古市遺跡井戸２、[註81]三日市遺跡井戸４－307（116～124）[註82]の出土資料がこの期に比定できよう。

Ⅴ期

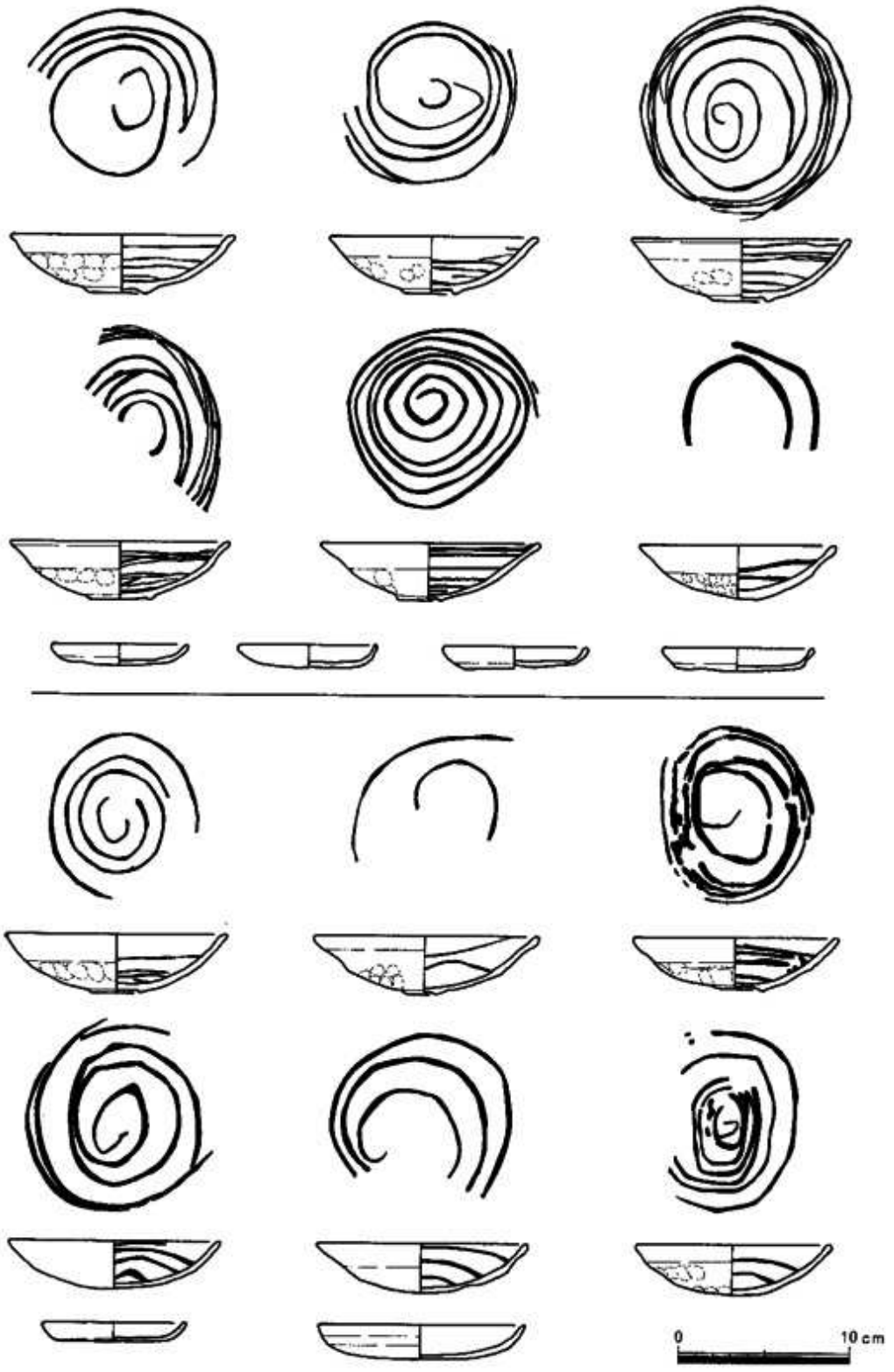
高台が消滅し、丸底の浅い椀形から皿形へ変化する。Ⅴ－２期以降、内面のヘラミガキが消滅する。

Ⅴ－１期：内面に数周する渦巻状ヘラミガキが遺存する。口径12.2～13cm・器高３cm前後のものと、口径11cm前後・器高３cm前後の２タイプが存在する。福万寺遺跡ＳＫ－９出土資料を指標とする。[註83] 市域外では若江遺跡井戸13、[註84]挟山遺跡ＳＥ7731・ＳＥ7735、茶山遺跡42調査区ＳＥ－01上層、[註85]富田林市龍泉寺西方院跡、[註86]三日市遺跡井戸４－307（110～114）[註87]の出土資料がこの期に比定できよう。

Ⅴ－２期：内面のヘラミガキが消滅したもの。口径10～11cm・器高2.8cm前後のものが中心となる。八尾市域においては、この期の指標になる資料の出土はない。市域外では若江遺跡落ち込み１（278）、[註88]挟山遺跡ＳＥ7738、[註89]三日市遺跡袋状土壙出土資料[註90]がこの期に比定できよう。なお、挟山遺跡ＳＥ7738の出土資料には、尖り底を呈する瓦器椀の存在が認められる。[註90]



第60図　福万寺遺跡ＳＥ－11出土遺物実測図



第61図　福万寺遺跡ＳＥ－13（上段）・ＳＫ－９（下段）出土遺物実測図

4）瓦器椀の実年代について

近年、各地での発掘調査の増加に伴って、各地域の瓦器椀編年案や他地域出土の瓦器椀との比較研究が進展してきた。瓦器椀以外の器種についても、中世における消費物資の流通範囲を明晰にする過程で、瓦器椀を中心として編年案が示されている。これらの編年案に付与されている実年代については、紀年を有する木簡・造営時期の明らかな建物に関係する資料・存続時期の明確な移入品等から推定されている。和泉型瓦器椀の実年代を示す資料についても、紀年銘を有する木簡との共伴関係により瓦器椀の存続時期が一部明らかになってきた。一方、大和地方出土の瓦器椀については、実年代を示す資料が既編年において明確にされており、各地域の中では比較的実年代が明らかである。中河内地域は、東部が大和地方と接している関係から、生駒西麓部に位置する遺跡を中心として大和型瓦器椀の出土が認められ、和泉型瓦器椀との共伴関係も明確になりつつある。ここでは、これらの資料をもとに、編年試案で示した各期の実年代を考えていきたい。

Ⅰ－1期の実年代を示すものとしては、巨摩廃寺遺跡井戸18下層（曲物掘形埋土）出土の大和型瓦器椀（36）がある。川越俊一氏の大和地方の瓦器椀編年によれば[註91]Ⅰ－C型式に比定されるものに該当する。このタイプの瓦器椀は、井戸側に使用された曲物に「延久參年(1071)」銘を持つ平城京右京七条一坊十五坪のＳＥ11から出土しており[註92]、存続時期を11世紀後半の一時期に求めることが可能である。一方、**Ⅰ－2期**については、巨摩廃寺遺跡井戸18上層（曲物埋没後）から出土した楠葉型の瓦器椀（51）がある。橋本久和氏の楠葉型瓦器椀編年によれば[註93]、第1期第2小期に比定されるもので、このタイプの瓦器椀が平安京左京四条一坊ＳＥ－8から寛治5年（1091）の墨書銘のある須恵器鉢と共伴して出土していることが指摘されている[註94]。したがって、**Ⅰ－2期**の存続時期の一点を11世紀末に置くことができよう。なお、川越氏は、平安京左京四条一坊ＳＥ－8掘形の資料がⅠ段階Ｄ型式と併行関係にあるとされている。

Ⅱ期の実年代を示すものとしては、康和四年（1102）の墨書年号のある曲物を井戸側に使用した津堂遺跡第18トレンチＳＥ01の出土遺物がある[註95]。井戸側内の出土遺物については、**Ⅱ－2期**に比定できる瓦器椀・小皿・土師器小皿・台付皿・土釜の他、12世紀中頃～後半に比定されている東播系須恵器鉢が出土しており、墨書年号とは約半世紀の開きがあることが指摘されている。ただ、掘形出土の瓦器椀については明らかに**Ⅱ－2期**に先行するもので、墨書年号にほぼ近いものと考えられる。したがって、**Ⅱ－1期**の存続時期を12世紀前葉から中葉に比定することが可能である。**Ⅱ－2期**については、挟山遺跡77－4区ＳＥ7751で瓦器椀と共伴した須恵器鉢が兵庫県魚住古窯跡中津川29号出土の資料と類似しており[註96]、考古地磁気による年代推定によれば1150年±25年を示すことから[註97]**Ⅱ－2期**を12世紀中葉前後の一時期に比定することができる。**Ⅱ－3期**については、国府遺跡79年度Ａ調査区池1から承安二年（1172）または同四年（1174）[註98]

と墨書された木簡に共伴して瓦器椀が出土している。ただ、池遺構から出土したものであるため資料としては限界があるが、一応の目安として1170年代前後の時期が推定できよう。

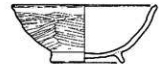
Ⅲ－1期の実年代を示す資料としては、神並遺跡ＳＥ02の出土遺物がある。この資料には、[註99]川越編年第3段階Ａ型式に比定される大和型瓦器椀が共伴している。この型式の実年代を知る資料としては、興福寺菩提院大御堂の第Ⅲ基壇建物の鎮壇具埋納品がある。この鎮壇具は、治承四年（1180）に平重衡の南都焼打ちにより焼失した建物を再建した際のもので、[註100]焼失後から再建まではさほど時期を隔てなかったものと推定されている。なお、焼失した建物に関連したと考えられる溝からも、川越編年第Ⅲ段階Ａ型式に比定される瓦器椀が出土している。したがって、Ⅲ－1期の存続時期は12世紀後半から13世紀前半に比定できる。Ⅲ－2期についても、大和型瓦器椀と共伴する例が神並遺跡ＳＫ22で確認されている。[註101]共伴した大和型瓦器椀は、川越編年のⅢ段階Ｂ型式に当る。この型式の実年代を示す資料としては、当麻寺曼荼羅堂の仏壇製作時の埋納品があり、[註102]仏壇製作時の年代は寛元元年（1243）とされている。

Ⅳ－1期については、神並遺跡ＳＥ－5出土資料中にⅣ－1期に比定した瓦器椀と川越編年のⅢ段階Ｄ型式にあたる大和型瓦器椀が共伴している。[註103]この大和型瓦器椀は北葛城郡当麻町首子遺跡の中世墳墓から13世紀末～14世紀前半の青磁碗・白磁碗等と共伴していることが指摘されている。[註104]このことから、Ⅳ－1期をおよそ13世紀末～14世紀前半の一時期に想定できよう。

Ⅴ－1期については、挟山遺跡ＳＤ7781で当該期に比定される瓦器椀に伴って永楽通宝（初鋳1408年）が出土しており、[註105]15世紀前葉の時期が考えられる。Ⅴ－2期に比定した資料については、内面のヘラミガキ消滅後の一群としたが、当該期とした3遺跡の資料はすべてⅤ－1期に比定される瓦器椀と共伴していることから、Ⅴ－2期の存続時期もⅤ－1期と同時期か、さほど時間差のないものと考えられる。したがって、和泉型瓦器椀の下限は、一部祭祀用具として継続するものを別にすれば、15世紀前半と考えられよう。

なお、八尾南遺跡（ＳＫ－10）・矢作遺跡（ＳＤ－14）・福万寺遺跡（ＳＥ－11・ＳＥ－13・ＳＫ－９）の資料については、未報告の資料のため調査担当者から快諾を得て記載した。なお、本稿の内容と正報告書の内容が異った場合は後者が正しいものとする。また、八尾市域出土瓦器椀編年試案表の内で、使用させていただいた資料の一部には、筆者自身が再度製図したものが含まれている。著者の意図に反する場合は筆者の責任である。

第2表　八尾市域出土瓦器椀編年試案1

期式		該当資料No.	八尾市域 該当遺跡 〃　遺構	外面体部の調整 ヘラミガキ ヘラケズリ	外面体部の調整 ヘラミガキ 二～五分割	外面体部の調整 ヘラミガキ 分割意識	外面体部の調整 ヘラミガキ 全体密	外面体部の調整 ヘラミガキ 全体粗	外面体部の調整 ヘラミガキ 上半のみ	外面体部の調整 ヘラミガキ 口縁部のみ	外面体部の調整 ヘラミガキ ナシ	内面体部の調整 ヘラミガキ や密	内面体部の調整 ヘラミガキ や粗	内面体部の調整 ヘラミガキ 見込みと一体	内面体部の調整 ヘラミガキ ナシ	見込みの調整 ヘラミガキ 乱方向	見込みの調整 ヘラミガキ 放射状	見込みの調整 ヘラミガキ 平行（一方向）	見込みの調整 ヘラミガキ 格子状	見込みの調整 ヘラミガキ 格子状＋平行線状	見込みの調整 ヘラミガキ 平行線状	見込みの調整 ヘラミガキ 連結輪状	見込みの調整 ヘラミガキ 渦巻状	見込みの調整 ヘラミガキ ナシ	中南河内地区 （一部泉州地区を含む） 該当遺構
I	1		小阪合遺跡 SE－2																					巨摩廃寺遺跡　井戸18下層 長原遺跡　SK022 検山遺跡　3F　323～5区　L－7井戸 大和川今池遺跡　2区SE04　Aトレンチ SK04 大園遺跡　SE801第3層
	2		木の本遺跡 SE　3																					巨摩廃寺遺跡　井戸18中層・上層・井戸19・20 長原遺跡　SD334　2b層 安堂遺跡　第4調査区溝1a～1c類 西琳寺井戸 南花田遺跡　第1工区土坑161 大園遺跡　SE801第2層
II	1		八尾南遺跡 SK－10 跡部遺跡 SW　10																					巨摩廃寺遺跡　上壙33 長原遺跡　SD334　2a層
	2		津堂遺跡 SE－1																					長原遺跡　SE－307 検山遺跡　77　4区SE7746 〃　SE7751 〃　82－20区SE01
	3		佐堂遺跡 SK415																					長原遺跡　SE113 検山遺跡　SE7752 国府遺跡　七九第4調査区井戸 大和川今池遺跡　3区SE02 南花田遺跡　第1工区井戸138
	4		老原遺跡 SE－2																					弥刀遺跡　井戸6 検山遺跡　SE7732 観音寺遺跡　B地区井戸1下層 大和川今池　3ESE06

第3表　八尾市域出土瓦器統編年試案Ⅱ

型式		該当資料 1/4	八尾市域 該当遺跡 〃 遺構	ヘラケズリ	外面体部の調整 ヘラミガキ 三～五分割	分割意識	全体密	全体粗	上半のみ	口縁部のみ	ナシ	内面体部の調整 ヘラミガキ やや密	やや粗	見込みと一体	ナシ	見込みの調整 ヘラミガキ 乱方向	放射状	平行（一方向）	格子状	格子状－平行線状	平行線状	連結輪状	渦巻状	ナシ	中南河内地区 （一部泉州地区を含む） 該当遺構
Ⅲ	1		老原遺跡 SE－2																						挟山遺跡　SE7730 〃　SD7780土層 東阪田遺跡　79　1区石組 菱木下遺跡　SE－3中層下部 壺田遺跡　SD05
	2		美園遺跡 TSK501 佐堂遺跡 SE408・415																						神並遺跡　SK22 長原遺跡　SE316 挟山遺跡　SE7749・SE7750 伽山遺跡　上壙11・井戸 三日市遺跡　井戸3－2 船尾西遺跡　溝1 菱木下遺跡　SE－3中層上部
	3		矢作遺跡 SD－14																						神並遺跡　SE　5（199～203） 若江遺跡　井戸9 三日市遺跡　井戸3－1 菱木下遺跡　SE　1
Ⅳ	1		福万寺遺跡 SE－11																						神並遺跡　SE－5（204～210） 挟山遺跡　SE7742 〃　SE7739 〃　82－3区SD－2
	2		福万寺遺跡 SE－13 SK－9																						亀井北　SK8215 挟山遺跡　82－3区SK01 茶山遺跡　42調査区SE01（中層） 古市遺跡　井戸2 三日市遺跡　井戸4－307(116～124)
Ⅴ	1		福万寺 SK－9																						若江遺跡　井戸13 挟山遺跡　SE7731・SE7735 茶山遺跡　42調査区SE－01土層 龍泉寺　西方院跡 三日市遺跡　井戸4－307(110～114)
	2		ナシ																						若江遺跡　落ち込み1（278） 挟山遺跡　SE7738 三日市遺跡　袋状上壙

註1　橋本久和　『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第13冊　1980
註2　尾上実　『狭山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会　1978
註3　鈴木秀典　『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』大阪市高速電気軌道第2号線延長工事に伴う発掘調査報告書（財）大阪市文化財協会　1982
註4　勝田邦夫　『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ遺物編』（財）東大阪市文化財協会　1983
註5　尾上実　「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念論集　古文化論集』1983
註6　三宅正浩　『佐堂その1』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書（財）大阪文化財センター　1984
註7　橋本久和　「中世土器の地域色と流通－淀川流域を中心として－」『考古学研究』第26巻第4号考古学研究会　1980
註8　三辻利一　「大阪府下の中世遺跡出土瓦器の胎土分析」『巨摩・若江北』（その2）近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書（財）大阪文化財センター　1984
註9　前掲註3
註10　（財）大阪文化財センター　『長原』1978
註11　東大阪市教育委員会・（財）東大阪市文化財協会　『神並遺跡Ⅰ』1986
註12　白石太一郎　「鞆智氏居館出土の瓦器・瓦器の終末年代に関連して－」『古代学研究』第85号　1977
註13　大阪府教育委員会　『伽山遺跡発掘調査概要』1981
註14　羽曳野市教育委員会　『古市遺跡発掘調査報告書1979』；羽曳野市埋蔵文化財調査報告3　1980
註15　大阪府教育委員会『国府遺跡発掘調査概要・X』1980
註16　前掲註11
註17　（財）大阪文化財センター　『巨摩・若江北』（その2）近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1984
註18　大阪府教育委員会　『大園遺跡発掘調査概要・Ⅵ』－第2阪和国道建設に伴う発掘調査－　1981
註19　（財）八尾市文化財調査研究会　『小阪合遺跡調査概要』－流域下水道等整備に伴う発掘調査－；（財）八尾市文化財調査研究会報告8　1986
註20　前掲註17
註21　前掲註10
註22　前掲註2
註23　大阪府教育委員会　『大和川今池遺跡発掘調査概要・Ⅱ』1985
註24　大阪府教育委員会　『大和川今池遺跡発掘調査概要』1983
註25　前掲註18
註26　（財）八尾市文化財調査研究会　『木の本遺跡』－八尾空港整備事業に伴う発掘調査－；（財）八尾市文化財調査研究会報告4　1984
註27　前掲註17
註28　前掲註3
註29　羽曳野市教育委員会　『古市遺跡群発掘調査報告書』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書2　1979
尾上実氏は、11世紀中葉に比定される平安京押小路跡井戸内出土の瓦器椀と西琳寺井戸出土資料との共通性を指摘されている。前者の瓦器椀は口径15.9cm・高台径7.5cm・器高6.0cmで、高台径指数は47.2を測る。後者は、口径15.8cm・高台径6.4cm、器高6.5cmで、高台径指数は40.5cmを測る。Ⅰ期を区別する目安とした高台径指数の変化に従えば、前者はⅠ－1期後者はⅠ－2期に区別できる。
註30　柏原市教育委員会　『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1982年度』柏原市文化財報告1982Ⅱ　1983
註31　大阪府教育委員会　『南花田遺跡調査概要Ⅰ』1986
註32　前掲註18
註33　（財）八尾市文化財調査研究会　「八尾南遺跡」『昭和58年度事業概報告』（財）八尾市文化財

調査研究会報告5　1984

ＳＫ－10から出土した瓦器椀のうち実測可能なものは45点で、そのうち見込みのヘラミガキを区別すれば乱方向13点・平行18点と文様化した格子状＋平行線状６点・格子状９点があり、Ⅰ－２期に比定した瓦器椀と共伴して出土している。

註34　八尾市教育委員会　『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告』：八尾市文化財調査報告11　1985

註35　前掲註17

註36　前掲註３

註37　大阪府教育委員会　『津堂遺跡発掘調査概要』1984

なお、津堂遺跡は大半が藤井寺市に属するが、18トレンチＳＥ01の検出位置は、八尾市太田９丁目に当る。

註38　前掲註２

註39　大阪府教育委員会　『昭和57年度はさみ山遺跡発掘調査概要』1983

註40　前掲註３

註41　前掲註６

註42　前掲註10

註43　前掲註２

註44　前掲註15

註45　前掲註23

註46　前掲註31

註47　（財）八尾市文化財調査研究会　『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』：（財）八尾市文化財調査研究会報告２　1983

註48　東大阪市遺跡保護調査会　『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集』1981

註49　前掲註２

註50　前掲註23

註51　大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター　『松原市観音寺遺跡第２次発掘調査概要』近畿自動車道和歌山線建設に伴う埋蔵文化財概要報告書　1986

註52　連結輪状ヘラミガキの段階については、泉州北部を中心とした地域で発達したものと考えられており、すでにⅢ－２期には出現していたようである。中河内地区においてはⅢ－３期の段階に移入品として入ってきたようで、平行線状を施文するものに比べて胎土も粗いことが指摘できる。

註53　前掲註47

註54　前掲註２

註55　大阪府教育委員会　『東阪田遺跡』－1979年度第１区の調査－　1980

註56　（財）大阪文化財センター　「菱木下遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1984

註57　大阪府教育委員会　「豊田遺跡」『泉北丘陵内遺跡発掘調査概要』1982

註58　（財）大阪文化財センター　『美園』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1985

註59　前掲註６

註60　前掲註11

註61　前掲註２

註62　前掲註３

註63　大阪府教育委員会　『御山遺跡発掘調査概要』1981

註64　三日市遺跡調査会　『三日市遺跡調査概要Ⅱ』1986

註65　前掲註56

註66　堺市教育委員会　「船尾西遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告第６集』1980

註67　前掲註３

註68　八尾市高美町３丁目46－１で、(財) 八尾市文化財調査研究会が昭和61年12月20～昭和62年３月20日にかけて調査を実施した。現在内業整理中
ＳＤ－14から出土した瓦器椀のうち実測可能なものは91点を数える。見込みのヘラミガキを暗文で区別すれば、平行線状文61点（67%）・連結輪状文12点（13%）・渦巻状文14点（15.5%）・ジグザグ文４点（4.5%）である。数値でも明らかなように、平行線状文が約７割を占めている他、本稿で後出（Ⅳ－１期）に位置付けた渦巻状文が共伴しており、Ⅲ期からⅣ期への過渡期的な様相が読み取れる。
なお、ジグザグ文を施すものが４点認められた。管見では、河内長野市三日市遺跡井戸３－１・八尾市老原遺跡ＳＫ－２から同様の文様を施す瓦器椀が出土している。本稿では、このヘラミガキの出自が明確でないため一覧表には明示していない。

註69　(財) 東大阪市文化財協会　『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ遺物編』1983

註70　前掲註11

註71　前掲註63

註72　前掲註56

註73　八尾市教育委員会　「上之島・福万寺遺跡：市立仮称第３山本小学校校舎建設に伴なう発掘調査概要」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査－その成果と概要－』1983
なお、昭和59年４月に遺跡名が福万寺遺跡と改正されている。現在内業整理中。

註74　前掲註11

註75　前掲註２

註76　大阪府教育委員会　『昭和57年度はさみ山遺跡発掘調査概要』1983

註77　前掲註73

註78　(財) 大阪文化財センター　『亀井北』(その３) 1986

註79　前掲註76

註80　羽曳野市教育委員会　『古市遺跡群Ⅲ』：羽曳野市埋蔵文化財調査報告書５　1980

註81　羽曳野市教育委員会　『古市遺跡発掘調査報告書1979』：羽曳野市埋蔵文化財調査報告書３　1980

註82　前掲註64

註83　前掲註73

註84　前掲註69

註85　前掲註80

註86　宗教法人龍泉寺　『龍泉寺』一坊院跡および瓦窯跡群の発掘調査報告書－　1981

註87　前掲註64

註88　前掲註69

註89　前掲註２

註90　前掲註64

註91　川越俊一　「大和地方の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』同朋舎出版　1983

註92　奈良市教育委員会　「平城京右京七条一坊十五坪の調査　第97次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告昭和60年度』1987

註93　前掲註７

註94　平安京調査会　『平安京発掘調査報告－左京四条一坊－』1975

註95　前掲註37

註96　前掲註２

註97　明石市教育委員会・平安博物館　『魚住古窯跡群発掘調査報告書』－中尾土地区画整理事業に伴う－　1985

註98　前掲註15

註99　前掲註11

註100　藤本仙治郎・森郁夫　「地下調査」『興福寺菩提院大御堂復興工事報告書』1970

註101　前掲註11

註102　小島俊次他　『国宝当麻寺本堂修理工事報告書』1960

註103　前掲註11

註104　奈良県立橿原考古学研究所　「当麻町首子遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1977年度』1978

註105　前掲註2

2．西郡廃寺について

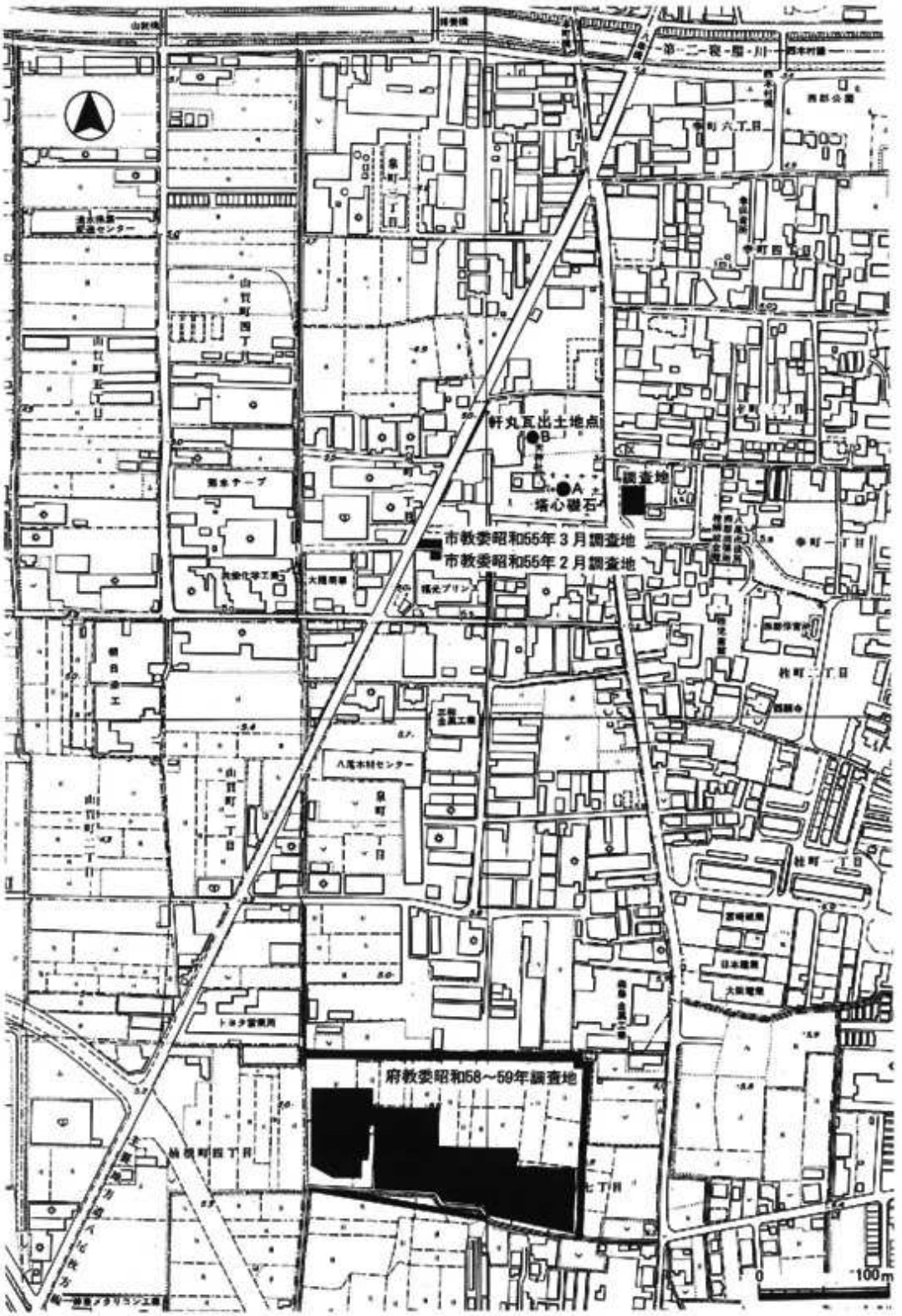
1）はじめに

今回の発掘調査地点は、西郡廃寺推定地の東側にあたるため、調査当初から同廃寺に関連する遺構・遺物が検出されることを想定したが[註1]、同廃寺に関連すると思われる若干の遺物が得られた他は、寺院跡と積極的に捉えられる遺構は検出されなかった。なお、これまでに知られている西郡廃寺関係の遺物は、当調査地西側の天神社境内にある塔心礎石があげられよう[註2]。これは、現在置かれている地点（第62図A）より100m程北方で掘出されたものである。また天神社付近から北方一帯に「八間堂」という小字名が残っていたため、この付近に西郡廃寺の寺域が想定されている。これらの資料と付近一帯で実施された発掘調査の資料等を検討し、さらに西郡廃寺の檀越氏族と目される錦織（部）氏の史料等を含め[註3]、西郡廃寺をめぐる問題の所在を明確にしていきたい[註4]。

2）西郡廃寺およびその周辺の発掘調査

これまで西郡廃寺推定範囲内では、八尾市教育委員会が天神社南西方の泉町2丁目43を昭和55年2月（**市教委昭和55年2月調査**）に、泉町2丁目16－1を同年3月（**市教委昭和55年3月調査**）に調査している（第62図）。**市教委昭和55年2月調査**では、若干の瓦片等も出土したが、主に中世に比定される遺構・遺物を検出している[註5]。**市教委昭和55年3月調査**では前述の調査と同様に中世に比定される遺構を検出したが、この時期の整地層からは西郡廃寺に関連する瓦片が出土した。その中には、瓦等面の一部が遺存する軒丸瓦の細片が一点あったが、瓦当文様が明確に知れなかったため、その時点では西郡廃寺をめぐる子細の検討を加えるに至らなかった。しかし、天神社北側の農業用井戸（第62図B）を掘削していた時に瓦当面が遺存する軒丸瓦が出土していたことが、今回の調査中に確認された。これを既往調査の出土遺物と照合した結果、**市教委昭和55年3月調査**で出土していた瓦当面の一部が遺存する軒丸瓦と同意匠の瓦当文様であることが判明した。さらに、当調査で西郡廃寺と何らかの関係を示すものとしては、瓦当面の一部が遺存する軒平瓦やSE－6に使用されていた曲物の墨書が掲げられる。

上述のほか、萱振A遺跡内では大阪府教育委員会が、当調査と前後する昭和58年6月から昭和59年11月にかけて萱振7丁目で府立八尾北高校建設に先立って発掘調査（**府教委昭和58～59年調査**）を実施している[註6]。この調査地は、当調査地の南方約200mに位置し（第62図）、縄文時代から鎌倉・室町時代に至る遺構・遺物が検出されている。そのうち、西郡廃寺に符合する時期のものとしては奈良時代の集落が注目され、その中心部では6棟以上の掘立柱建物・刳船を転用した井戸等が検出されている他、七位相当の官人のものといわれる銅製帯金具（丸鞆）が出土している。そのほか、鎌倉時代末期に比定される井戸のうち、奈良時代から鎌倉時代の瓦片を積み上げた瓦積井戸が検出されている[註7]。その中には、**市教委昭和55年3月調査**・天神社北



第62図　調査地および既往調査地位置図

側農業用井戸・当調査それぞれで出土した軒丸瓦・軒平瓦の瓦当文様と同意匠のものが含まれていた。また、瓦積井戸が鎌倉時代に構築されていることから、西郡廃寺の廃絶時期を示唆するものといえよう。以上のように、従来西郡廃寺に関する資料は、塔心礎石のみであったといっても過言でなかったが、西郡廃寺推定地および周辺の調査成果によって、その実態の一部が窺える資料が得られてきたと考えられる。

3）出土瓦から見た西郡廃寺

今回の調査に際して多数の瓦片が出土した。そのうち瓦当面が遺存しているものは2点であった。1点は、先述の天神社北側の農業用井戸掘削の際に出土していた細素十二葉蓮華文軒丸瓦（第5図）である。これは、直径15.9cmを測る。中房は、直径3.5cmを測り、小粒で隆起の大きい蓮子を1＋6に配するが、蓮子の形状はやや不揃いである。内区の花弁はやや細く、弁端部に向かって反っている。弁端は、やや尖り気味のものや丸味のあるものである。子葉は、花弁中央を弁端へ向かって直線的に伸びる。間弁は、中房を画する圏線に接せず、弁端付近で楔形に表現されている。外区は、2本の圏線間に小粒の珠文を配している。もう一点は、当調査のＳＥ－6で出土した扁行唐草文軒平瓦（第34図）である。これは、瓦当面に対して右端部が遺存するもので、外区に線鋸歯文がみられる。このほか、先述の**府教委昭和58～59年調査**の際に検出された鎌倉時代末期に比定される瓦積井戸に使用された屋瓦片がある。これには、飛鳥時代から鎌倉時代に比定されるものが含まれている。そのうち、飛鳥時代後期のものとされている軒丸瓦は瓦当面の半分以上が遺存し、奈良時代に比定されている軒平瓦は瓦当面に対して左半分が遺存しており、当調査に際して得られた屋瓦と同意匠のものが含まれていた。また、**市教委昭和55年3月調査**の際に出土した軒丸瓦の細片も今回の調査の結果、上述の軒丸瓦と同意匠であることが判明した。

以上の結果から、細素弁十二葉蓮華文軒丸瓦（**蓮華文軒丸瓦**）と扁行唐草文軒平瓦（**唐草文軒平瓦**）が、ある時期西郡廃寺の屋瓦として使用されていた可能性が強いといえよう。以下、この**蓮華文軒丸瓦**と**唐草文軒平瓦**について検討していくことにする。これらの類例としては、河内寺跡（東大阪市河内町所在）出土の屋瓦が掲げられる。**蓮華文軒丸瓦**は、同寺跡出土の飛鳥時代後期後半に比定される[註8]端瓦第Ⅱ形式に、また**唐草文軒平瓦**は、奈良時代に比定される端瓦第Ⅲ形式に類似するものである。このように、西郡廃寺で、ある時期に河内寺の屋瓦に類似した屋瓦を使用した背景のひとつとしては、西郡廃寺の檀越氏族である錦織氏と河内寺の檀越氏族である河内連が、いずれも百済国出自の渡来系氏族であることが想起される。さらに、西郡廃寺と河内寺の建立に際して、同一もしくは同系統の造瓦集団が関与した可能性が考えられよう[註9]。ただ、河内寺跡出土屋瓦の型式分類では、**蓮華文軒丸瓦**と**唐草文軒平瓦**が組合される関係になっていない[註10]。この組合せの是非如何によっては、西郡廃寺の屋瓦型式の組合せとその

比定される時期、さらに西郡廃寺の創建年代の問題を左右する要素を有している。したがって、現段階ではこれらの問題に言及する状況ではないと考えられる。なお、推察が許されるならば、**蓮華文軒丸瓦**も**唐草文軒平瓦**も、河内寺跡出土の屋瓦型式と全く同意匠でなく一部改変されたものであることが窺えるため、端瓦第Ⅱ形式より後出の端瓦第Ⅲ形式の時期にこれらの屋瓦が製作されたものと思われる。[註11] したがって、これらの組合せの屋瓦は西郡廃寺の最古型式と考えれば、西郡廃寺は、端瓦第Ⅲ形式の時期である奈良時代に創建されたものと推察できよう。

4）史料に見られる錦織氏

西郡廃寺の檀越氏族は、錦織（部）氏とされている。以下は、錦織氏に関する史料を整理して、錦織氏と西郡廃寺の関係について検討していくことにする。

錦織氏の初見は、『日本書紀』（以下、「書紀」と略称する。）仁徳天皇四十一年（史料1）である。これに見える石川錦織首呂斯は、百済系渡来人であって、同様の酒君との関係が窺える。これ以後の史料では、錦部定安那錦（史料2）が、陶部高貴らとともに「新漢」と見えるように漢氏に掌握されていた渡来系工人である。「書紀」では、これらの渡来人を「今来の才伎」と呼んでおり、「書紀」の紀年からすれば5世紀後半の時期にあたる。これに対して、「古渡」と呼ばれるものがいる。これは、おそらく許呂斯の時代である2世紀から3世紀頃の渡来人に対する呼称である。したがって、「書紀」編纂時の伝承にかなり早い時期から渡来した人々の中に錦織氏を含むという認識があったといえる。このことは、弘仁六（815）年に撰述されている『新撰姓氏録』河内国諸蕃（以下、「姓氏録」と略称する。）の錦織連の記述（史料32）へ連なるのであろう。このほか、錦織首大石（史料3）・錦織首久僧（史料5）は、それぞれ高麗からの使節の守護・任那からの使節の共食者という役職に付き、総じて対外関係の職域に従事している。錦織首赤猪（史料6）は、蘇我蝦夷の側近者と考えられる。このように、大化前代の錦織氏一族は、史料的制約から推察の域を出ないが蘇我氏が掌握していた渡来系氏族の一員として面目躍如たる位置を保っていたようである。なお、「書紀」舒明紀（7世紀中頃）まで錦織氏は、首姓であるが、これ以後造姓に改姓されていることから、6世紀代から7世紀前半までに錦織氏は、氏姓制度社会において着実にその勢力進展を計り、伴造階層として政治的・社会的地位を保持していったと思われる。しかし「書紀」大化二年春正月条（史料7）では、臣連伴造国造の部民が解放され、豪族層は私地私民の収公という打撃を受けたと考えられている。そして、大化二年秋八月条（史料8）では、部民を解放するかわりに豪族層を新しい官僚に採用することを明らかにしている。これら一連の政治改革であるいわゆる大化改新の後、錦織氏一族はどのような状況に至ったのであろうか。

「書紀」天武天皇十年四月条（史料9）で錦織造小分が、造姓から連姓へ改められ、同十二年九月条（史料10）には、錦織造が連を賜姓している。これに相前後する天武九年から十二年

までの間に多数の氏族が改姓されている。そして、天武十三年にはいわゆる八姓の制定に至り、この一連の政治状況の中で錦織氏も改姓されたといえよう。錦織連の一族が、この間の政治状況でどのように位置付けられるかはともかく、7世紀後半以後の律令体制に入る時期においても、その政治的地位は失墜していないといえる。これ以後、8世紀代に入って律令体制の展開期においては、『続日本紀』（以下、「続紀」と略称する。）大宝元年正月条に見られる錦部連道麻呂（史料12）を初めとして多数の人々が掲げられる。（史料13～28）。官位は、従五位上まで昇進した者もおり、遣唐大録（史料12）、越後国掾（史料17）、写経師（史料19）、画師（史料20）、織部正（史料26）等の役職に付いている。そのうち、「続紀」延暦九年三月条にみえる織部正錦部家守（史料26）は、この時代には大化前代からの伝統的職業と官職とは関係が薄いといわれているが、その実態はともかく非常に特異な例といえる。[註12] また、これら律令体制の展開期にみられる錦織連一族は、8世紀代を通じて連綿と登場し、その後9世紀代に入っても、錦部連清刀自・安宗・三宗麻呂（史料29～31）が見える。このうち、『三代実録』貞観九年四月条では、錦部連三宗麻呂・安宗が、惟良宿禰に改姓される。

以上、大化前代から律令体制展開期の錦織氏一族の動向を列記してみた。さらに、職業部の伴造階層の中で錦織氏一族の消長を検討してみる。第4表は、阿部武彦氏が、天武十二年に連姓へ改姓された氏族を抽出したものである。[註13] 氏はこれらの伴造は大化前代それぞれ職業を以て朝廷に奉仕した中央の総領的伴造であったと考えられている。これによると、21氏中「続紀」に見えるのは門部連・錦織連等6氏で官位は従五位程度まで昇っている。「姓氏録」にみえるものは21氏中7氏であると指摘され、鏡作連や日奉連の人名が、その他の当時の文献にみえているが、あまり活躍していたように思われず、ただ名代・子代の伴造に比して平安時代まで残った氏も多いといわれている。しかし、総体的には7世紀後半の天武朝に錦織氏と同様の中央の総領的伴造であった諸氏は、「続紀」や「姓氏録」が撰述された延暦年間から弘仁年間に至る

	続紀	姓氏録	備考
門部連	○	○	美濃少掾、筑前掾
錦織連	○	○	従五位下
縵連	○	○	外従五位下
鳥取連	○	○	外従五位下
黄文連	○	○	従五位下
倭馬飼連	○	×	対馬目正八位上
水取連	×	○	主水令史正七位下
采女連	×	○	
鏡作連	×	×	大養徳添上郡黒田郷戸主
日奉連	×	×	散位寮大属正八位上
殿服部連	×	×	
席集連	×	×	
勾筥作連	×	×	
堅部連	×	×	
羽東連	×	×	
語連	×	×	
川内馬飼連	×	×	
娑羅々馬飼連	×	×	
菟野馬飼連	×	×	
紀酒人連	×	×	
内蔵衣縫連	×	×	

第4表　天武十二年に連姓に改姓された伴造の一覧
（註13より引用）

9世紀初頭までには史上に跡づけられることなく没落していったようである。このような状況下であっても、錦織連一族は前述のように9世紀後半に至っても宿禰姓に改められており、依然として政治的地位の存続・伸長を図っているといえよう。

5）錦織氏の仏教信奉と西郡廃寺

前節では錦織氏の政治的動向を軸にその社会的位置も含めて史料をみてきたが、以下は錦織氏と西郡廃寺の関係、特に古代社会における渡来系氏族錦織氏にみられる仏教信奉の問題から検討していくことにする。

「書紀」敏達天皇十三年是歳条に錦織壺之女石女の名が見えるが（史料4）、つとに津田左右吉博士は、この条のうち、「以舎利置鐵質中。振鐵鎚打。其質與鎚悉被摧壊。而舎利不可摧毀。」の箇所は、「梁高僧伝」康僧会条の「置舎利於鐵砧礎上。使刀者撃之。於是砧礎俱陥。舎利無損。」を改変したものであると指摘されている。さらに、井上薫氏は欽明天皇十三年十月条とこの敏達天皇十三年是歳条・同十四年二月条・三月条六月条・用明天皇二年四月条は、同一の特色をもち、かつ密接な脈絡をもつ記載であり、欽明天皇十三年十月条については、最勝王経大般若経・楞厳経・梁高僧伝などそれぞれ大部な仏教の典籍から文章の材料をとって、これを自家薬籠のものとしてきわめて功妙に改作している点に注意すると仏家以外の人ならではこの記載の筆録はとうてい不可能であるといわねばならないといわれ、これら「書紀」仏教伝来に関わる筆録者は、道慈であると指摘されている。[註14] したがって、敏達十三年是歳条を含むこれらの記載は多分に潤色されており、歴史的事実を示すものとは考えられないことになる。[註15] ただし、「元興寺伽藍縁起并流記資財帳」（以下、「元興寺縁起」と略称する。）にも錦師都瓶善女伊志売の名がみえる（史料11）。この「元興寺縁起」にも「書紀」の仏教受容に関わる記載と同様にその成立事情など問題が多々ある。ただ、いずれの史料にも石女（伊志売）の名がみられ、このことは「元興寺縁起」や「書紀」の筆録時に、司馬氏・漢氏とともに錦織氏の仏教信奉者の存在が確固たる伝承として認識されていたといえよう。したがって、司馬止達の仏教信奉に関する説話にみられるような、いわゆる仏教公伝以前から錦織氏一族にも仏教信奉の伝統があったということが推察できよう。これ以後「正倉院文書」でみられる錦織連足国・吉足・乙万呂（史料18・20）は、錦織氏関係資料のうちで、錦部連安宗・三宗麻呂らと共に史料からその本貫地が知れる人々である。前者は河内国若江郡錦部里（八尾市北西部）であり、後者は河内国錦部郡（大阪府富田林市）を本貫地としている。さて、「正倉院文書」　貢　知識優婆塞貢進事、西南角領解に見える足国は戸主であり、吉足・乙万呂はその戸口である。籍帳研究の領域では、戸主・戸口等の記載をどのように解釈するかについては定かでなく、いわゆる戸実態説と戸擬制説の見解がある。[註16] 前者は家族のほぼ実態を反映しているとみられている。後者は実態に近い状態を示しているが、8世紀代の史料にみえる足国・吉足・乙万呂の関係について

は特に後者の可能性を内包すると考えられる。ただ、足国については管見のおよぶ限りでは（史料18・20）以外でみられないために断定的な解釈を加えることはできないが、この時期、足国が錦部里の中心的存在であったと思われ、西郡廃寺の造営に何らかの形で関与していたかもしれない。吉足の名がみえる「貢　知識優婆塞事」（史料18）は、奈良時代になると宮寺で多くの僧尼が必要となり、経典を読む力があり修行を積んで僧尼となるに堪える者を民間から推薦させたその推薦書である。「正倉院文書」にみられる同様の文書には、推薦された人（優婆塞・優婆夷）の氏名・本貫地・年齢・読誦できる経典・推薦者（師主）・修行年数を記されるのが一般的である。しかし、吉足の推薦書には師主・修業年数、さらに、史料では記された年号が省略されているが、「正倉院文書」では天平年間から天平勝宝年間のものと分類されている。これについては、天平十五年に盧舎那仏造発願詔（いわゆる東大寺大仏建立詔）が発布され、「大仏造営の労働力を得るため、仏典の修行によらなくとも造仏事業に奉仕した功で得度を許したから」記載内容が省略されたと考えられる。したがって、「正倉院文書」にみられる同様の文書は、天平十七年から記載が著しく簡単になっていることからも首肯できよう。[註17] ただし、吉足が造仏事業に直接関与したかどうかは不明であるが、何らかの功績があったことが推察できよう。それは、河内国大鳥郡（のちには和泉国）を本貫地とした僧行基が、豪族層との関わりを背景とした大仏勧進に代表される事業を遂行した例にみられるように、国家的事業はさることながら地方の造寺事業などには、豪族層の経済的支援のみならず彼らの精神的欲求から関与して、その功績が評価されたと考えられる。

以上のように、錦織氏の仏教信奉に関わる史料を検討したが、西郡廃寺と直接結びつく史料は見出せなかった。しかし、錦織連吉足の名がみえる「貢　知識優婆塞事」からは、錦織氏の仏教信奉の一側面が窺えた。この資料に前後する７世紀後半以降になると地方でも多数の寺院が造営される。いわゆる白鳳期の寺院といわれるものは、北は陸奥の伏見廃寺・出羽の横浜山廃寺から、南は肥後の興善廃寺まで及んでいる。このような地方寺院造営の盛行は、地方豪族の仏教帰依の一側面を示している。この風潮は、推古朝以来の中央の仏教政策、特に天武朝のそれが大きく影響し、やがて８世紀になると国家仏教の展開とともに隆盛を極める。ただ、７世紀後半からの地方寺院造営の盛行の背景には、地方豪族の主体的な仏教信奉があったと考えられる。[註18] この点について守本順一郎氏は、「もともと地方豪族をとりまく精神的環境は村落を基盤とするものであって、村の社への信仰、ないしはウジとしての祖先への信仰とがその宗教であったと思われる。しかし、かかる宗教は、村落社会の共同体的諸関係を前提にしてなりたっており、その共同体的な秩序が後退するにしたがって、社の信仰も現世的呪術としての限界性を露出するようになった。六、七世紀の段階は、このような意味で共同体的社への信仰が一つの危機を示すようになったものと思われる。」といわれており、鬼頭清明氏は、「このような[註19]

危機をよりいっそうはっきりさせたものとしては、7世紀後半における対外戦争と内戦とであったに違いない。」として、白江村の戦（663年）と壬申の乱（672年）を掲げられ、「六～七世紀の日本における信仰形態は、在来の社を中心とする神祇信仰と、外来の道教・中国の俗信と仏教信仰が併存しており、それは一般民衆にとっても、支配層にとっても主として現世利益的な呪術として存在した。」といわれている。[註20] [註21]以上のような状況を踏まえて、錦織氏の主体的な信仰形態を考えてみることにする。それは、石女の説話にみられるように、彼ら渡来系氏族の信仰の主体は、日本固有の社を中心とした神祇信仰ではなく、中国の俗信や道教、さらに朝鮮の民族宗教と仏教が融合した信仰であり、それと日本固有の神祇信仰が併存し日本における彼らの主体的信仰形態が形成されていったと考えられる。その後、日本在来の信仰形態に包括され、吉足の名がみえる「貞　知識優婆塞事」に表出しているように、中央の仏教政策に迎合していき、彼ら渡来系氏族も中央貴族とともに8世紀に盛行する国家仏教の重要な担い手となっていったといえよう。このように、錦織氏の仏教信奉は古代社会の宗教状況を逸脱したものではなく、西郡廃寺の造営もこの状況下で実施されたものといえよう。したがって、7世紀後半から精神的環境の危機が明確となった地方豪族の主体的信仰に基づいた造寺活動の中に、西郡廃寺の造営が位置づけられよう。しかも、錦織氏の主体的信仰の中心は、神祇信仰ではなく仏教信仰であったから、7世紀末頃までには造寺活動への気運は高潮期に達し、一早く造寺活動の潮流に乗ったと考えられよう。

6）まとめ

以上のように、発掘調査の成果と関係史料をもとにこれまで全く未知といっても過言ではなかった西郡廃寺について若干の考察を試みた。それは、発掘調査の成果から創建時頃の屋瓦形式が判明したこと、周辺地域では有機的関係を持つ集落が検出されていること、また廃絶時期を示唆する資料も得られたことなどが掲げられよう。さらに、関係史料から檜越氏族といわれている錦織氏の動向と西郡廃寺造営へ至る宗教状況を明らかにし、古代社会における西郡廃寺造営の位置付けを試みた。ただ、これらの考察は推論の域を出ず今後の調査研究に委ねなければ明らかに出来ない問題を含んでいる。これを踏まえたうえで敢えて推論を展開することが許されるならば、西郡廃寺は、7世紀末の持統朝から8世紀初頭の平城京遷都後の聖武朝までには創建され、8世紀代には伽藍が整備されていったものと考えられる。9世紀以後も史料にみられる錦織氏の動向やＳＥ－6の出物に記された墨書の紀年保元三（1185）年からみても、少なくとも平安時代末期までは寺院の存在が窺われる。しかし、錦織氏の衰亡もさることながら律令体制崩壊という社会的要因によって西郡廃寺は衰退の一途を辿り、鎌倉時代に法燈を継ぎ得ず廃絶に追い込まれたと考えられる。

註1　西郡廃寺の表記については、この寺跡が錦織氏関係の遺跡であると推定されるが、山号寺号を今に伝える資料がない寺跡に檀越氏族と考えられる氏族名をそのまま用いることは適確ではないと思う。寺号が判明している場合は「○○寺跡」とすればよいが、寺号が判然としない場合は小字名等の地名を冠して「○○廃寺」と付称すべきであると考えている。したがって、本稿では『八尾市史』文化財編などで用いられている旧錦織寺などの呼称は用いず、この寺跡が旧中河内郡西郡村に所在するため、「西郡廃寺」（ニシゴオリハイジ）という呼称を用いる。

註2　この塔心礎石は、縦160cm・横120cm・高さ60cm以上（埋込まれているため全高不明）。上面中央に径67cm・深さ37cmの円孔があり、その底面中央に径21cm・深さ18cmの舎利孔がある。田中重久氏の形式分類（「塔婆心礎の研究」『聖徳太子御聖誕の研究』1944年所収）によると「二段式円形無蓋舎利孔凹座心礎」である。同氏によるとこの形式の特徴である「凹座の心礎は推古朝から平安朝以後まで行はれた、言はば通相といふべき心礎であることが分る。実際上心礎は凹座のあることを最も必要とするから、最も早くから考へつかれ、最も長く廃らなかった」と言われている。したがって、この塔心礎石の時期は、『八尾市史』本文編で「白鳳時代のものと思われる貴重な遺物」と言われているが、一概に白鳳時代と断じ得ず、この礎石だけで時期を推定することは難しい。

註3　西郡廃寺の寺域は、『八尾市史』本文編で「天神社の辺から少し北の方にあった。この辺を小字八間堂とよんでいる」といわれている。小字「八間堂」は、天神社を含みそれから北西方の泉町二丁目から三丁目までのかなり広範な区域である。

註4　錦織の表記については、出典史料の表記に準拠し、基本的には錦織とする。日本古典文学大系本『日本書紀』によると、錦部（西部・ニシゴオリ）ニシゴリともニシコリとも訓読され、ニシキオリ（錦織）の約とされている。

註5　（財）八尾市文化財調査研究会　『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』：（財）八尾市文化財調査研究会報告2　1983

註6　広瀬雅信　「萱振遺跡調査速報」『八尾市文化財紀要Ⅰ』八尾市教育委員会　1985

註7　野田晃世　「萱振遺跡出土の中世井戸調査の概要」『八尾市文化財紀要Ⅰ』八尾市教育委員会　1985　および註6参照

註8　大阪府教育委員会　「河内寺跡調査概報―東大阪市河内町―」『大阪府文化財調査概要1967年度』（財）大阪文化財センター　1975、東大阪市教育委員会『河内寺跡』：東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報11　1973、同『河内寺跡Ⅱ』：東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報13　1974

註9　佐伯有清　『新撰姓氏録の研究』考証篇第五　吉川弘文館　1983

註10　註8によると、端瓦第Ⅱ形式の軒丸瓦には六重弧文押印指圧痕軒平瓦が組合せられ、端瓦第Ⅲ形式の軒平瓦には外区に鋸歯文と密珠文を配した複弁四葉蓮華文軒丸瓦が組合されている。

註11　註8によると、端瓦第Ⅱ形式の軒丸瓦は十三葉蓮華文である。

註12　職業部の伴造とその宮司との関係において伝統的職業と官職と関係のあるものは、他に黄文連乙麻呂の画工司令史、水取連猴人の主水令史があげられるだけである。

註13　阿部武彦　「伴造・伴部考」『日本古代の氏族と祭祀』　吉川弘文館　1984
この表のうち倭馬飼造・川内馬飼造・菟野馬飼造等は総領的伴造ではなく、それぞれの地域の首長で中央の宮司に属したと言われている。

註14　津田左右吉　『日本上代史研究』　岩波書店　1947

註15　井上薫　「日本書紀仏教伝来記載考」『日本古代の政治と宗教』　吉川弘文館　1961

註16　関口裕子　「古代家族と婚姻形態」『講座日本歴史』2古代2　歴史学研究会・日本史研究会編　東京大学出版会　1984

註17　井上薫　『行基』　吉井弘文館　1959

註18　『日本書紀』天武天皇十四年三月条に「諸国毎家作仏舎乃儲仏像及経以礼拝供養」とある。この「毎家作仏舎」については、辻善之助氏の「国府の官舎」説（『日本仏教史』上世篇）、家永三郎氏の「国民私宅」説（『上代仏教思想史研究』）、田村圓澄氏（『飛鳥仏教史研究』）二葉憲香

氏（『古代仏教思想史研究』）の「氏寺」説があるが、いずれにしても当時の造寺活動の様相を反映し、中央の仏教政策の一端を示していると考えられる。

註19　守本順一郎『日本思想史の課題と方法』　新日本出版社　1974

註20　鬼頭清明「古代国家と仏教思想」『講座日本歴史』2古代2　歴史学研究会・日本史研究会編　東京大学出版会　1984

註21　註21参照

史　料

1、『日本書紀』　仁徳天皇四十一年春三月

遣紀角宿禰於百済、始分国郡堺場、具録郷土所出。是時、百済王之族酒君无礼。由是、紀角宿禰詞責百済王。時百済王懼之、以鉄鎖縛酒君附襲津彦而進上。爰酒君来之、則逃匿于石川錦織首許呂斯之家。則期之日、天皇既赦臣罪。故寄汝而活焉。久之天皇遂赦其罪。

2、『同』　雄略天皇七年是歳

（上略）由是、天皇詔大伴連室屋、命東漢直掬、以新漢陶部高貴・鞍部堅貴・畫部因斯羅我・錦部定安那錦・譯語卯安那等、遷居于上桃原・下桃原・真神原三所。

3、『同』　欽明天皇三十一年七月

秋七月壬子朔、高麗使到于近江。是月、遣許勢臣猿與吉士赤鳩、発自難波津、控引船於狭狭波山、而装飾船、乃往迎於近江北山。遂引入山背高槻館、則遣東漢坂上直子麻呂・錦部首大石、以為守護。更饗高麗使者於相楽館。

4、『同』　敏達天皇十三年足歳。

蘇我馬子宿禰、請其佛像二軀、乃遣鞍部村主司馬達等・池辺直氷田、使於四方、訪覓修行者。於是、唯於播磨国、得僧還俗者。名高麗恵便。大臣乃以為師。令度司馬達等女嶋。日善信尼。年十二歳又度善信尼弟子二人。其一、漢人夜菩之女豊女、名日禅蔵尼。其二、錦織壺之女石女、名曰恵善尼。壷此云都符。（以下略）

5、『同』　推古天皇十八年十月乙巳

饗使人等於朝。以河内漢直贄為新羅共食者、錦織首久僧為任那共食者。

6、『同』　舒明天皇即位前紀

（上略）適是時、蘇我氏諸等悉集、為嶋大臣造墓、而次于墓所。爰摩理勢臣壊墓所之廬退蘇我田家而不仕。時大臣慍之、遣身狭君勝牛・錦織首赤猪而誨曰。（以下略）

7、『同』　大化二年春正月

（上略）罷昔在天皇等所立子代之民、処々屯倉及別臣連伴造国造村首所有部曲之民処々田庄。（以下略）

8、『同』　大化二年秋八月

（上略）今以汝等使仕状者、改去舊職新設百官及著位階以官位叙。（以下略）

9、『同』　天武天皇十年四月庚戌

錦織造小分・田井直吉摩呂・（中略）并十四人、賜姓日連。

10、『同』　天武天皇十二年九月丁未

倭直・（中略）錦織造・（中略）凡三十八氏、賜姓日連。

11、「元興寺伽藍縁起并流記資財帳」

（上略）時大臣恐懼而願弘佛法。既求可出家人、都无應者、但是時針間國有脱衣高麗老比丘名恵便與老比丘尼名法明、時按師首達等女斯末賣年十七在、阿野師保斯女等己賣、錦師都賀善女伊志賣合三女等、（以下略）

12、『続日本紀』　大宝元年正月丁酉

（上略）進大参錦部連道麻呂為大録。

13、『同』　和銅六年正月丁亥

授、（中略）正六位上大蔵忌寸老、錦部連道麻呂、伊吉連古麻呂並従五位下。

14、『同』　神亀四年正月庚子

授、（中略）正六位上柿本朝臣建石、阿曇宿禰刀、錦部連吉美並従五位下。

15、「正倉院文書」　天平八年八月廿六日付「内侍司牒」（『大日本古文書』2－8）

内侍司　牒主殿寮

天平八年八月廿六日錦部連川内（以下略）

16、「同」　周防国正税帳（『大日本古文書』2－131）

周防国天平十年正税帳史生大初位上秦連国麻呂

同日下船傳防人部領使　大宰少判事従七位下錦部定麻呂、将従二人合三人　四日食稲五束二把酒四升塩二合四勺

17、『続日本紀』　天平十三年五月丙子

讃岐国介正六位上村国連子老、越後国掾正七位下錦部連男笠等、与官長失礼不相和順。仍解却見任。

18、「正倉院文書」　貢　知識優婆塞貢進事（『大日本古文書』25－83）

錦織連吉足　年十九　河内国若江郡錦織郷戸主錦織連足国戸口

讀　最勝王経　二巻

法華経　二巻

理趣経　一巻

誦　心経

19、「同」　経師上日帳（『大日本古文書』3）

（上略）錦部連人成（日数略）。

（註、宝亀二年三月二十五日付奉写一切経所解にも同一人物の名がある。）

20、『同』　西南角領解　　申画師等歴名事（『大日本古文書』4－227）

（上略）錦部連乙万呂 年二十二 河内国若江郡錦部里戸主錦部連足国口（中略）天平勝宝九歳四月七日

21、『続日本紀』　天平神護元年正月己亥

授、（中略）従五位下錦部連河内（中略）並従五位上。

22、『同』　天平神護元年十二月乙巳

河内国錦部郡人従八位上錦部毗登石次、正八位下錦部毗登大嶋、大初位下錦部毗登真公、錦部毗登高麻呂等廿六人、賜姓錦部連。

23、『同』　宝亀二年二月庚寅

復錦部連河内宿本位従五位上。

24、『同』　宝亀五年十一月乙巳

授大市姿无位錦部連針魚女外従五位下。

25、『同』　延暦五年正月乙巳

授、（中略）无位錦部連姉継並従五位下。

26、『同』　延暦九年三月壬戌

外従五位下錦部連家守為織部正。

27、『日本書紀』　延暦十五年十一月丁酉

（上略）錦部連真奴等授従五位上。

28、『同』　延暦十六年正月甲午

宴五位已上。賜束帛有差（中略）正六位上錦部連春人（以下略）。

29、『三代実録』　貞観三年二月七日

授、外従五位下錦部連清刀自従五位下。

30、『同』　貞観五年九月五日

河内国錦部郡人木工権少属従七位上錦部連安宗、式部位子正七位上錦部連三宗麻呂等改本居貫附左京職。

31、『同』　貞観九年四月廿五日

主税少允従六位上錦部連三宗麻呂、木工少允正六位上錦部連安宗、賜姓惟良宿禰。

32、『新撰姓氏録』河内国諸蕃

三善宿禰同祖百済国速古大王之後也。

第6章　ま　と　め

今回の発掘調査では、小面積にもかかわらず弥生時代後期から鎌倉時代末期に至る遺構・遺物を検出し、当調査地付近での新たな知見を得ることができた。なお、本調査地より南西約500m地点では、大阪府教育委員会が府立八尾北高校建設に伴う発掘調査を昭和58年6月から昭和59年11月にかけて実施されており、多大な成果が得られている。したがって、ここでは今回の調査で検出した遺構・遺物の内容を整理したうえで、さらに府教委調査の成果を踏まえて萱振A遺跡内の時期ごとの推移を考えてみたい。

Ⅰ　弥生時代後期

弥生時代の遺構としては、井戸1基（ＳＥ－1）・土坑6基（ＳＫ　1～ＳＫ－6）・溝1条（ＳＤ－1）がある。これらの遺構は、埋没した自然河道上面に堆積している灰色粗砂層を構築面としている。一方、府教委の調査では10棟以上の掘立柱建物で構成される集落が存在しており、本調査地との有機的な関係が指摘できよう。

Ⅱ　古墳時代前期〔庄内式期～布留式期〕

古墳時代前期〔庄内式期・布留式期〕に関連したものとしては、遺物を検出したにすぎないが、包含層からは比較的良好な資料を伴出していることから、付近にこの時期に比定される集落の存在が推定されよう。府教委の調査では、〔庄内式期〕の方形周溝墓が4基検出されている他、一辺約27mで幅約5mを測る周濠を伴う古墳（萱振1号墳）が1基検出されており、この時期の集落の中心が遺跡推定範囲の南部にあったことが推定される。

Ⅲ　古墳時代中期

この時期の遺構としては、溝1条（ＳＤ－3）を検出したのみであるが、包含層中にはこの時期に比定される土器が多量に出土しており、付近一帯に居住地が存在した可能性が高い。府教委の調査地では、この時期の遺構・遺物が希薄であることが指摘されており、この時期に集落が北側へ移動したことが推定できる。

Ⅳ　古墳時代末期（飛鳥時代）

この時代の遺構としては、土坑1基（ＳＫ－7）を検出した。これらの資料は7世紀後半に比定されるもので、調査区の西側に寺域が推定されている西郡廃寺の創建時期を推定するうえで貴重な資料と言えよう。一方、府教委の調査ではこの時期に比定される遺構は皆無であるが、続く奈良時代には掘立柱建物を中核とする居住区が出現しており、この時期に集落の移動があったことが窺える。

V　平安時代後期

この時期に再び、この地で集落が営まれている。この時期に比定される遺構としては、井戸3基（SE－3・SE－4・SE－8）、土坑2基（SK－8・SK－10）、溝2条（SD－2・SD－4）、柱穴がある。また、SE－6の最下段の井戸側には「行勝房□（斎カ）也保元三年十二月四日儲也」の墨書があり、この曲物容器が他から移入された可能性を除けば、この地点付近に1158年の時点で行勝という名を持つ僧侶が存在していたことになる。このことは、西郡廃寺の存続時期を推定するうえで貴重な資料の一つとなろう。

VI　鎌倉時代初頭～末期

前代に引き続き居住域として利用されている。この時期に比定される遺構は井戸6基（SE－2（新）・SE－5・SE－6・SE－7・SE－9）、土坑1基（SK－9）、溝8条（SD－5～SD－12）、掘立柱建物1棟（SB－1）、柱穴がある。

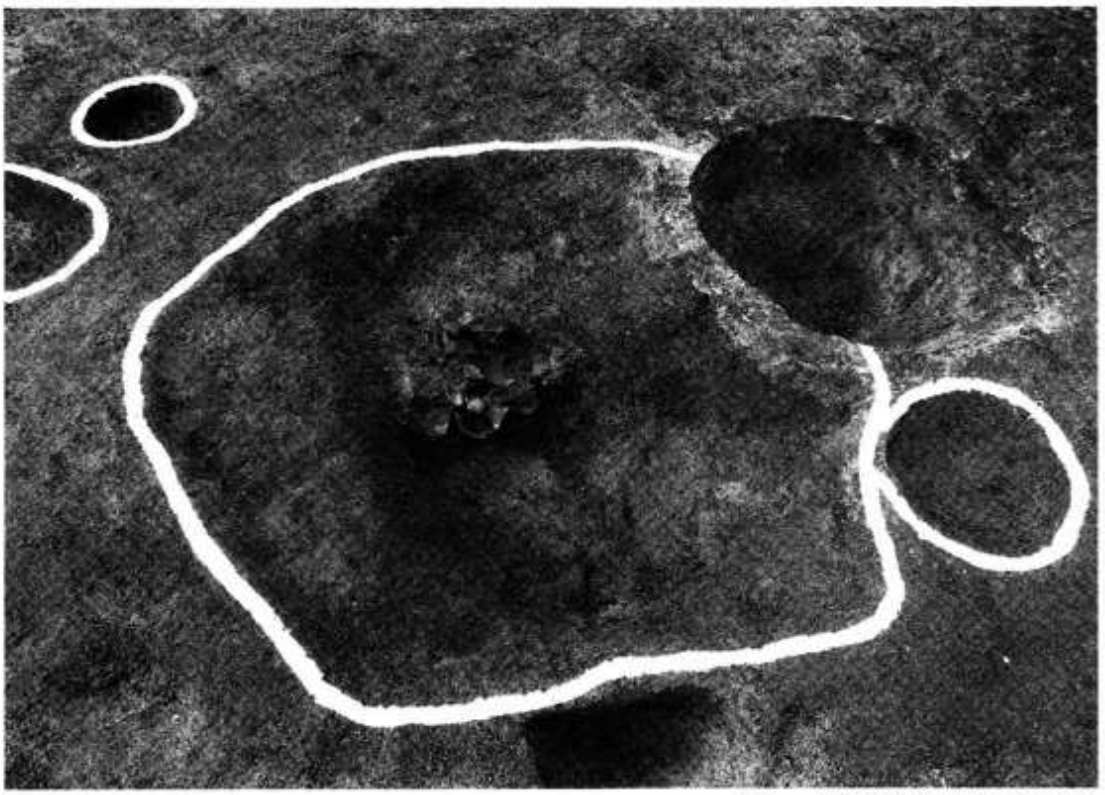
一方、府教委の調査においても、この時期大規模な集落が営まれていたことが確認されている。検出された井戸のなかには、今回の調査で確認した西郡廃寺の屋瓦を積み上げたものがあり、西郡廃寺の推移を考えるうえで貴重な資料である。なお、両調査で検出した集落の廃絶時期は13世紀末～14世紀初頭と共通しており、この時期以降にこの付近に集落が営まれなかった事実は、南北朝から中世末期に至る期間の萱振城・若江城の動向に左右された結果と考えざるを得ない。

第5表　瓦器椀から見た各遺構の存続時期

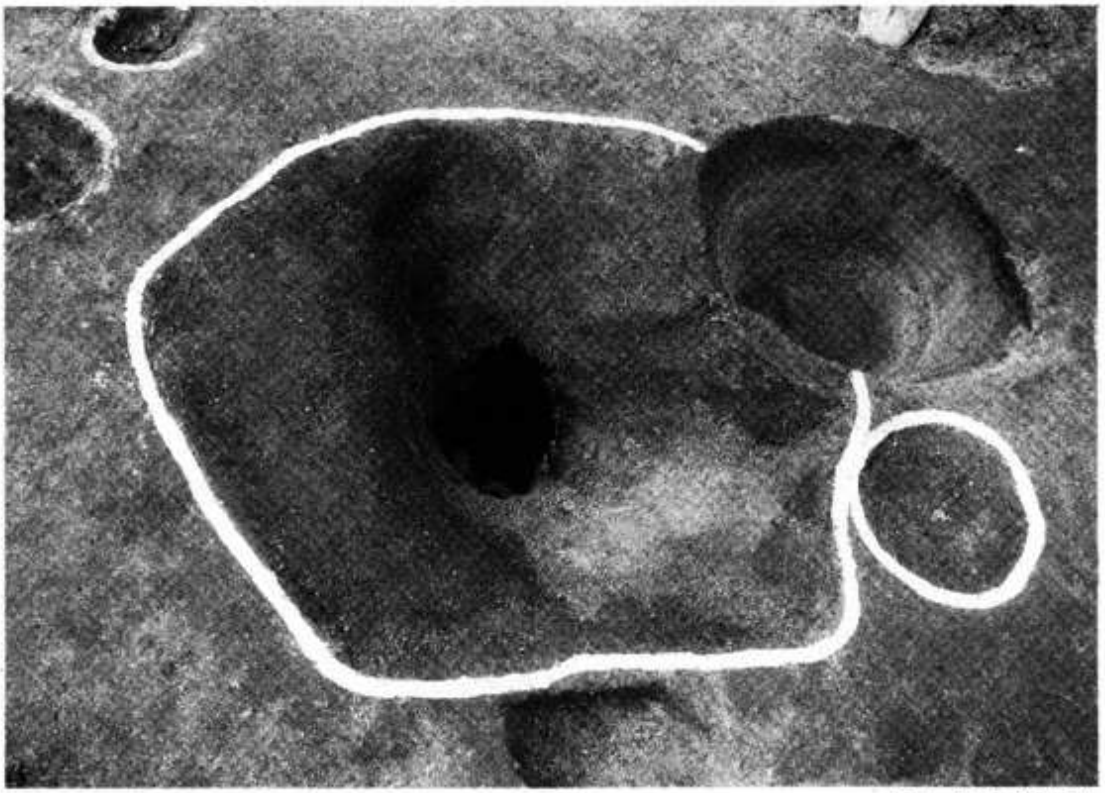
瓦器椀分類 ＼ 検出遺構	I		II				III			IV		V	
	1	2	1	2	3	4	1	2	3	1	2	1	2
SE－2													
SE－4													
SE－5													
SE－6													
SE－7下層													
SE－7上層													
SE－8													
SE－9													
SK－8													
SK－10													

第１調査面全景（北から）

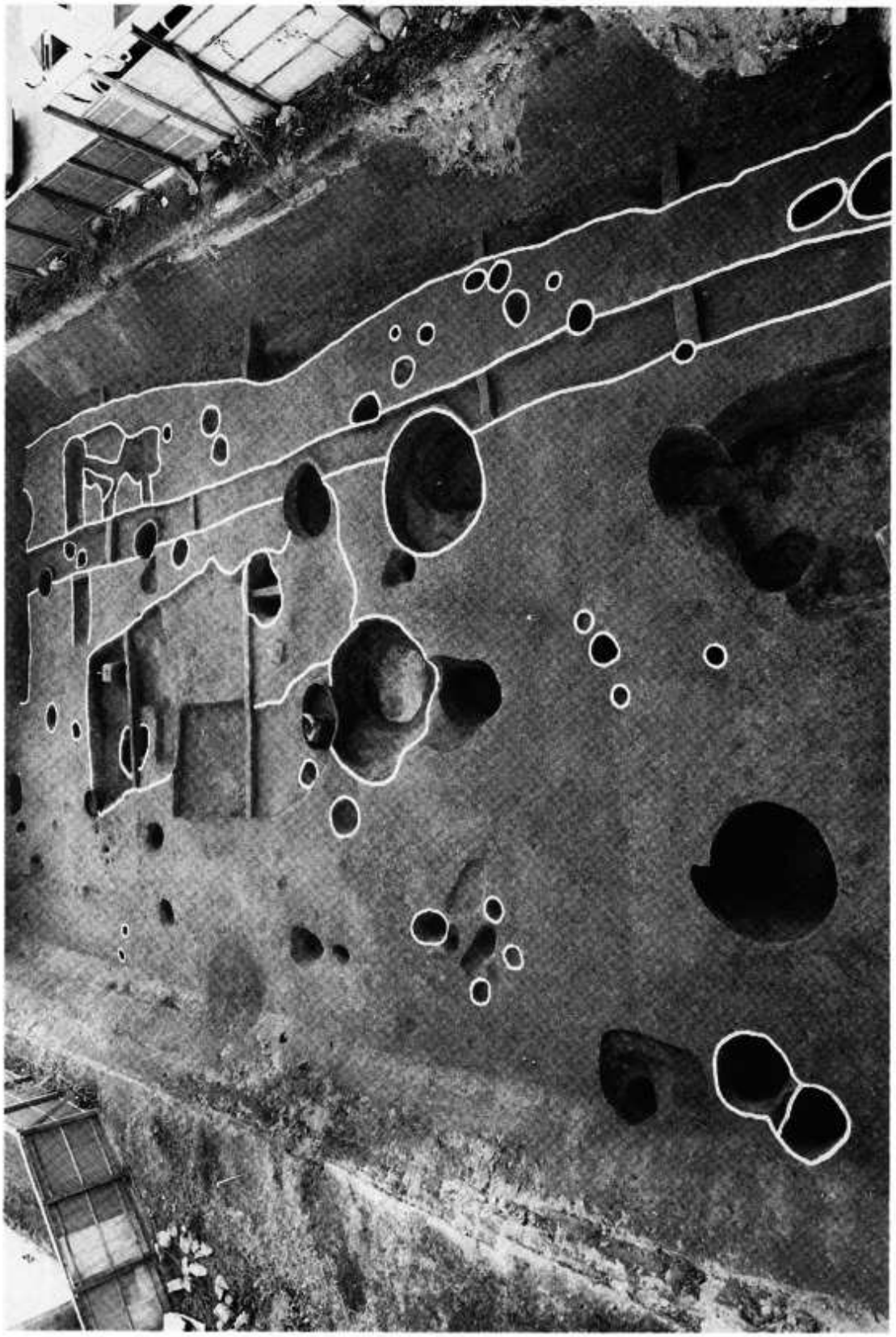
図版二



ＳＥ－１上層遺物出土状況（東から）



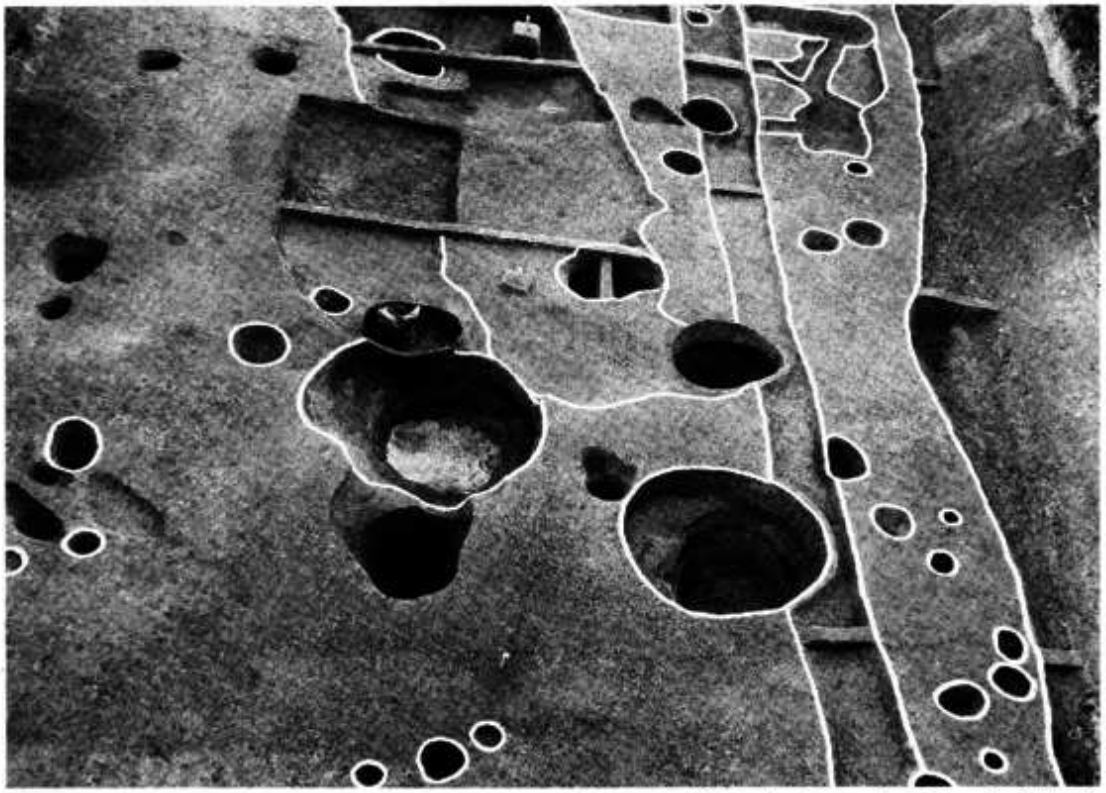
同上　完掘（東から）



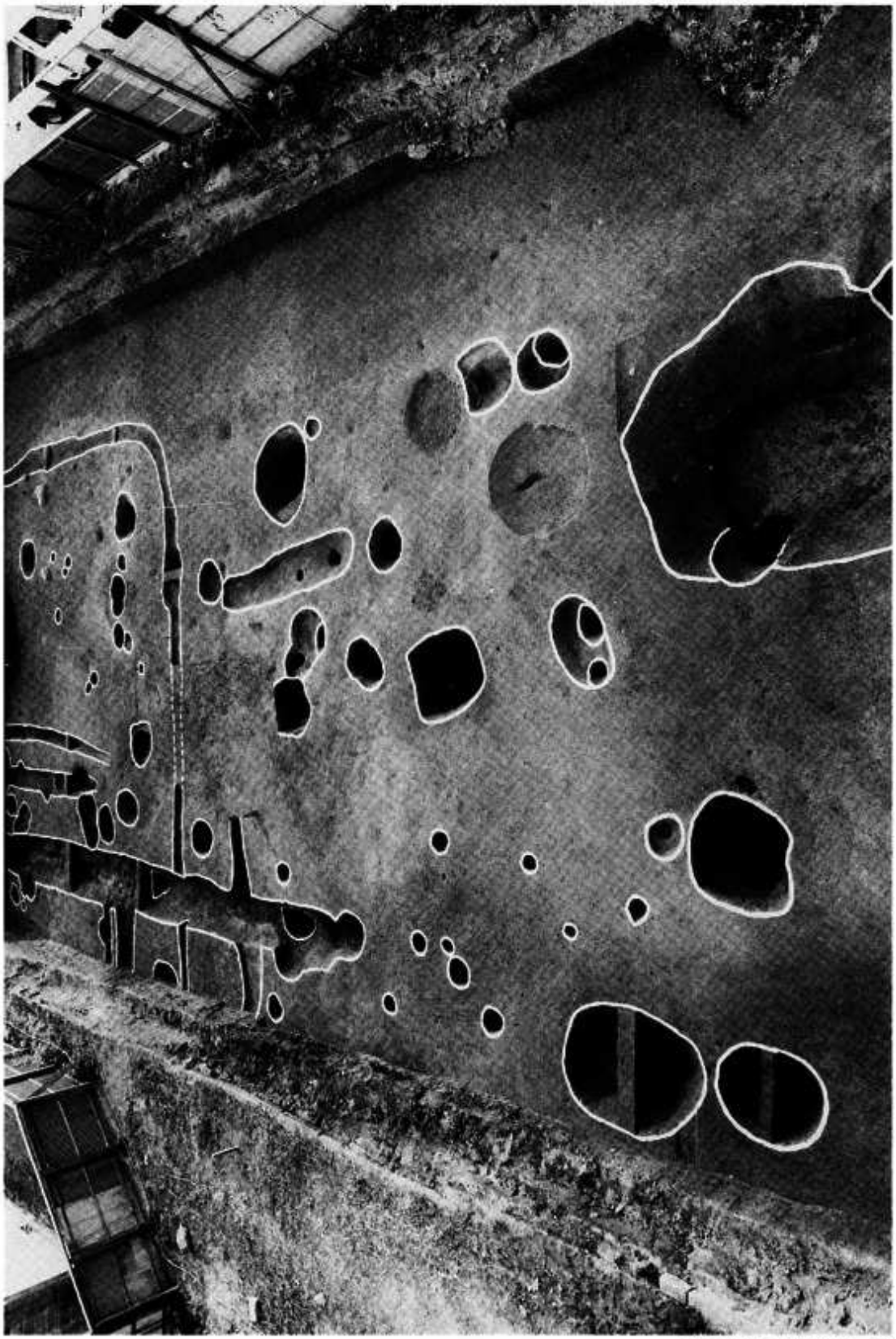
第2調査面全景（北から）

図版四

SE－3・SE－4（西から）



SE－2・SK－7・SK－8（北から）

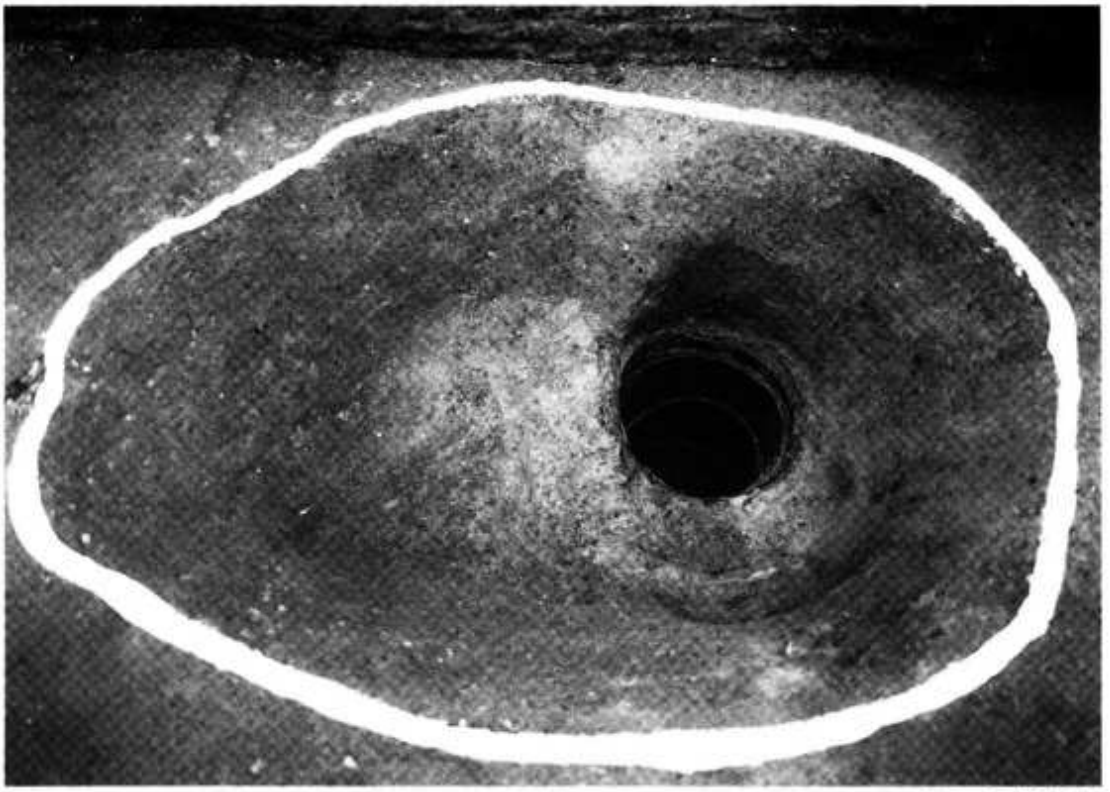


第3調査面全景（北から）

図版六

SE－5（南から）

同上　断面（南から）



ＳＥ－６（西から）

同上　断面（西から）

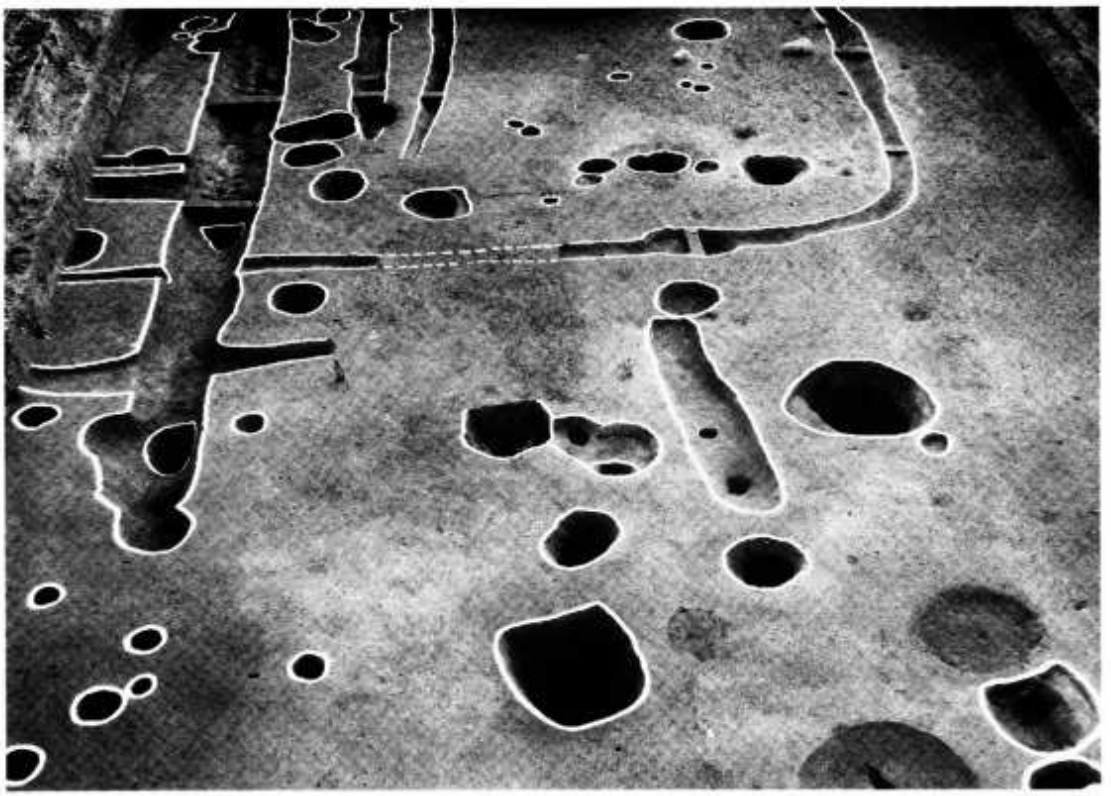
図版八

SE－7（南から）

SE－8（東から）

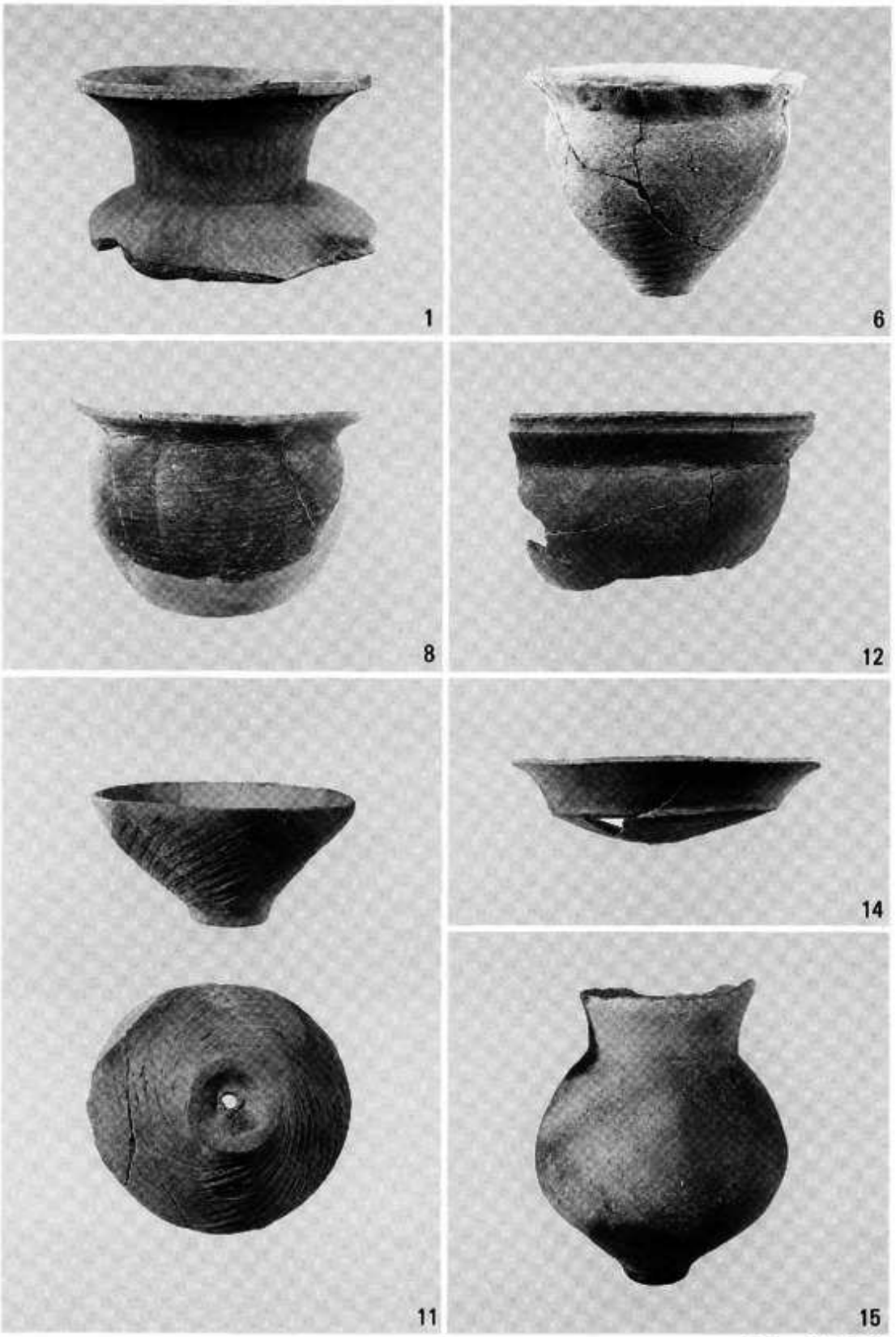
SE－9（北から）

SK－10（北から）

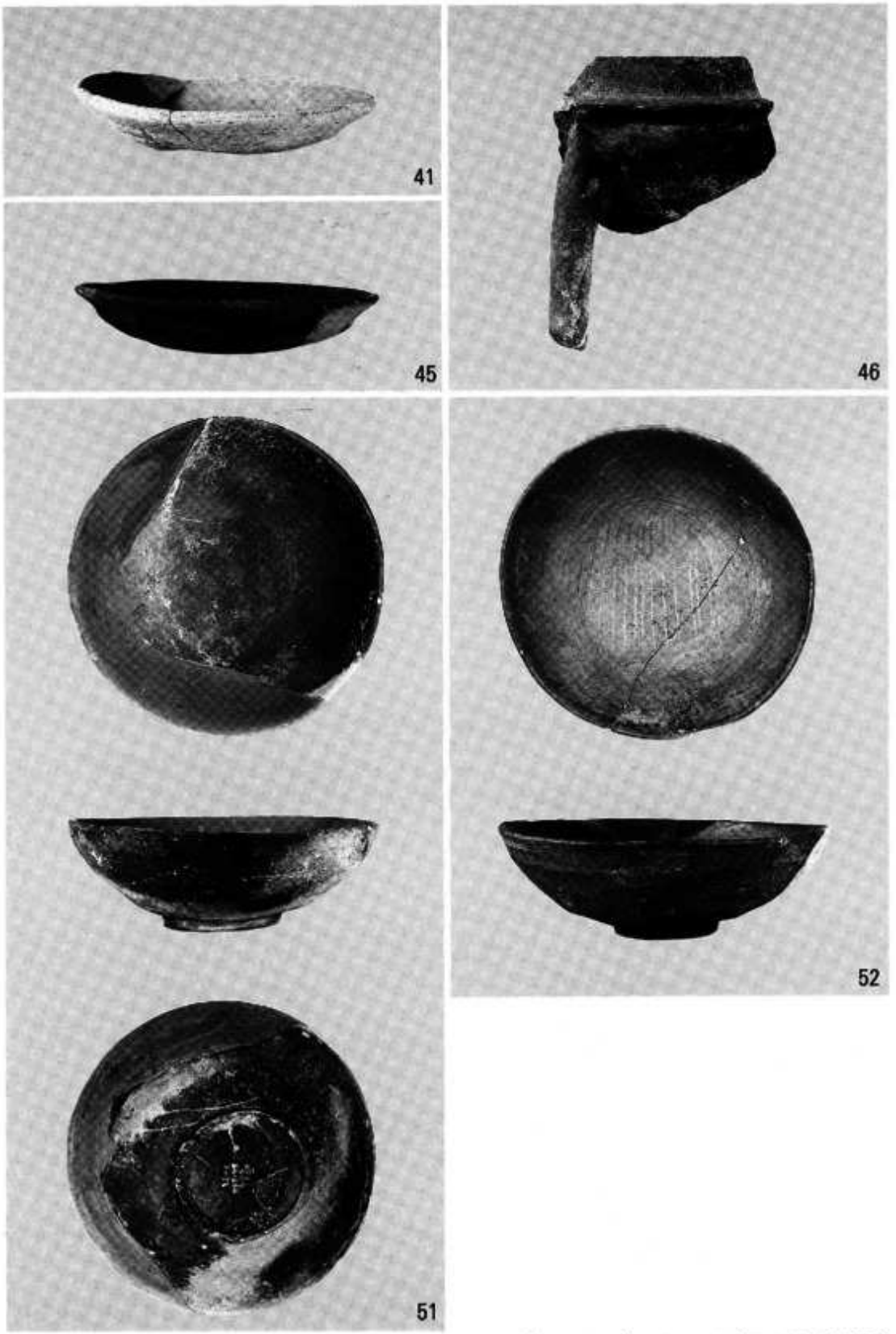


ＳＢ－１（北から）

ＳＰ－82（東から）



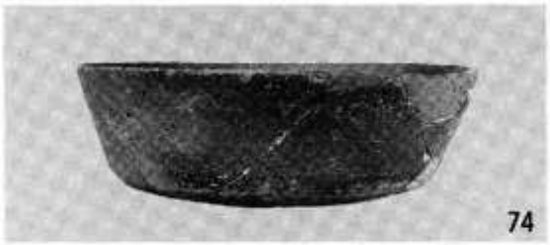
SE－1出土遺物



SE－2（41・45・46）・SE－4（51・52）出土遺物

55

69


74

86

88

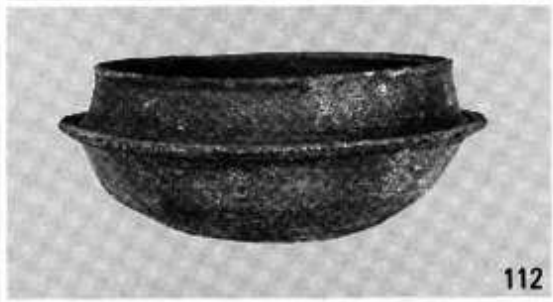
78

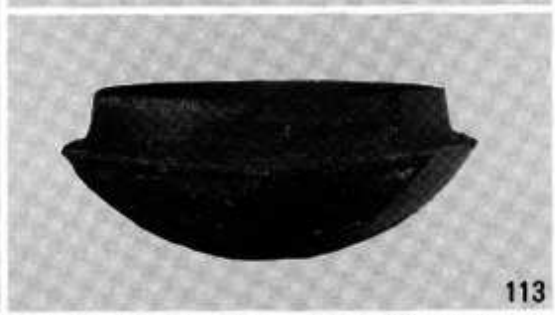
82

84

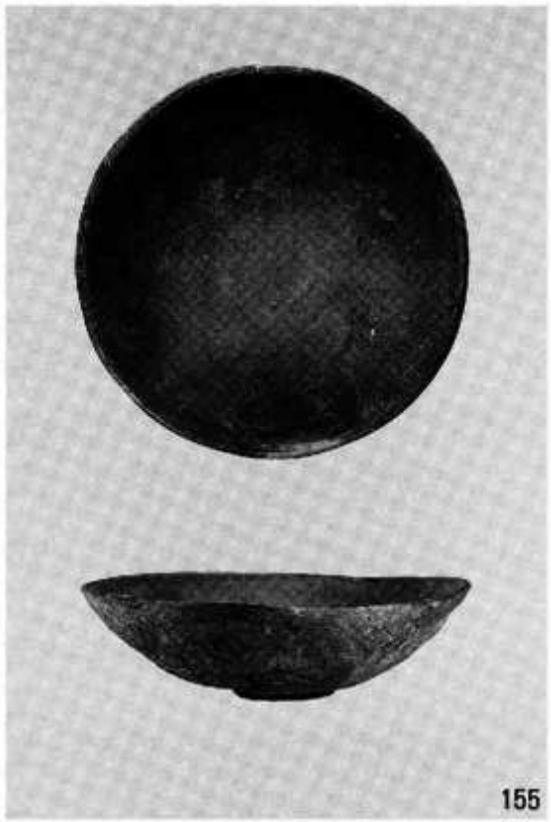
87

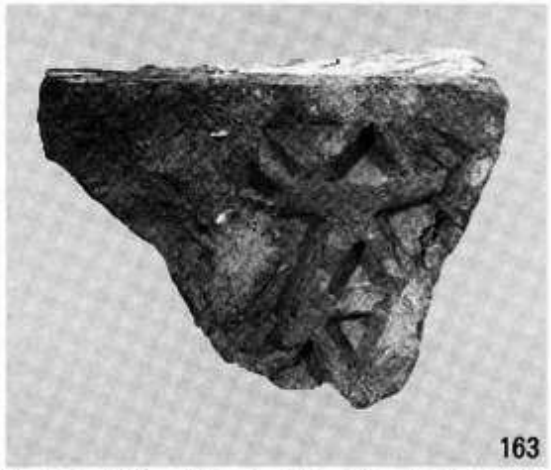
109


112

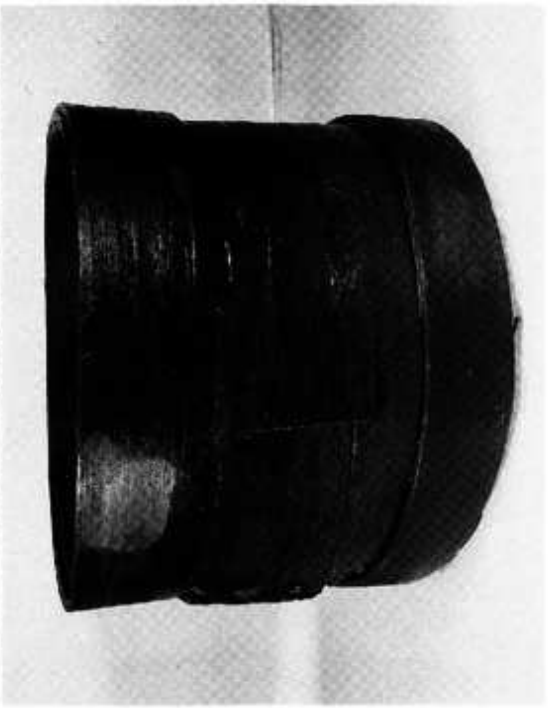

113

SK－7（55・69・74）・SK－8（78・82・84・86～88）
SD－3（109・112・113）出土遺物



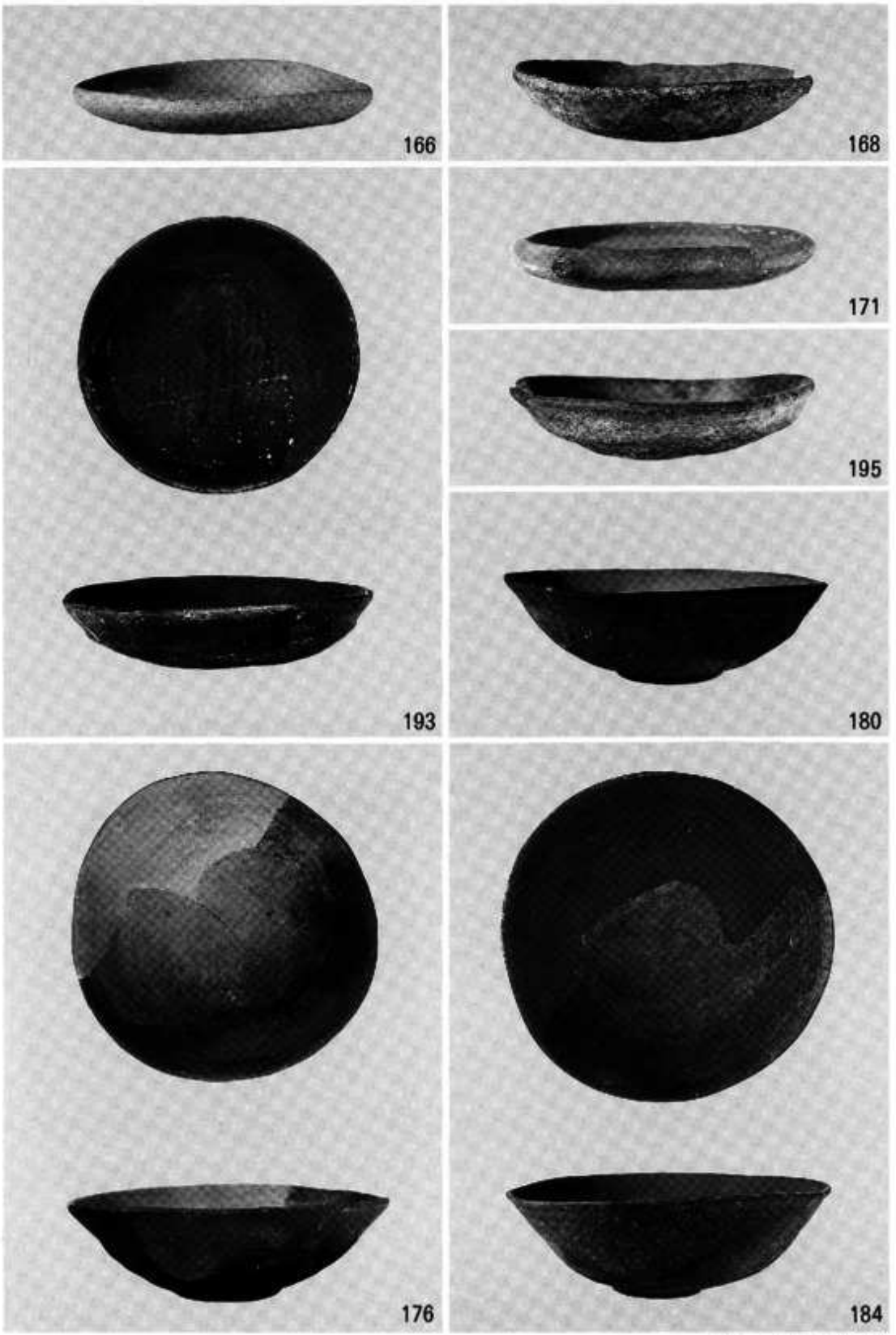


SE－5（130・144・145）・SE－6（154・155・163）出土遺物

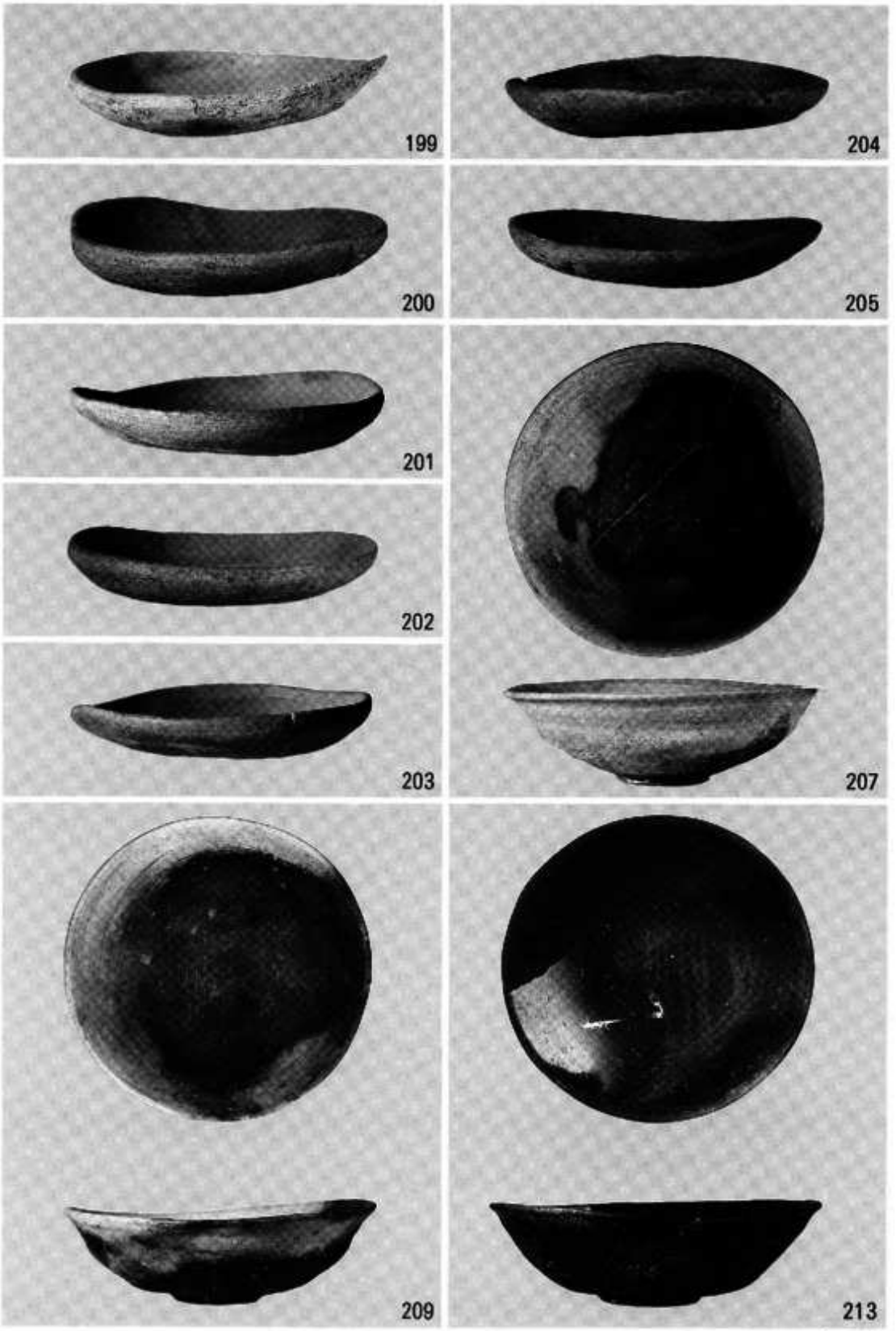


SE－6 曲物・同墨書

図版一六



ＳＥ－７上層出土遺物



SE－7下層出土遺物